

平安山又上集落跡

下勢頭集落跡

—嘉手納(31)・(2)・(3) 保安施設文化財発掘調査—

2022年(令和4年)3月

沖縄県 北谷町教育委員会

平安山又上集落跡

下勢頭集落跡

—嘉手納(31)・(2)・(3) 保安施設文化財発掘調査—

2022年(令和4年)3月

沖縄県 北谷町教育委員会

序

本書は嘉手納飛行場保安施設整備に伴う平成29年度の埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査によって発見され、令和元（平成31）年度に沖縄防衛施設局の業務委託を受け実施した「平安山ヌ上集落跡、下勢頭集落跡」の文化財発掘調査成果を取りまとめたものです。

平安山ヌ上集落跡、下勢頭集落跡は、いわゆる屋取集落跡です。屋取集落とは、18世紀初頭（1725年）に首里王府が「諸間切公事帳」を出し転職を奨励したことから、土地を払い受けた首里・那覇の官職につけない貧乏士族が農業に従事し形成された集落です。

平安山ヌ上屋取は、1902（明治35）年に北谷尋常高等小学校が開校し、1911（明治44）年に字北谷から役場が移転したことから、行政と教育の中心地となった集落です。下勢頭屋取は、名称が「佐久川屋取」から「下勢頭屋取」となる変遷があり、北谷の屋取集落のなかで最も早く行政字として1921（大正10）年に独立・成立し「字下勢頭」となった集落であります。

本町は、アジア・太平洋戦争時の1945年4月に米軍の沖縄本島上陸地となり、その後の米軍基地建設・整備によって農村の景観が大きく変貌し、旧集落は、造成工事によって埋もれています。一方で、現在、基地内に所在する文化財として米軍により保存されている拝所や井戸等は、同じ集落出身の人々によって組織された郷友会の活動の場として、そこで暮らした世代や子孫によって祈願行事等が行われています。

今回の発掘調査では、旧集落の屋敷跡、学校校舎の基礎と想定される建物跡、井戸、沖縄特有の便所と豚の飼育機能を併せ持つ「フル（ウワーフル）」、水肥を生産する肥溜めである「シーリ」、平安山ヌ上集落のほぼ中央を通る道（県道）跡が発見され、地下室と思われる特異な遺構とともに位牌などの通常残らないような遺物が出土しております。さらに、グスク時代以前の土器や石器が出土する遺物包含層が確認されたことから、周辺に未確認の遺跡が存在する可能性も生じております。

今回の調査により、旧集落内の屋敷の配置や道跡などの様相が垣間見え、これまでの民俗調査や地籍図、写真記録等と調査結果が符合することが判明し、本町のみならず、沖縄県の近世・近代の集落についての検討に資する成果が得られております。

本報告書が、町民はもとより多くの方々に本町の歴史を伝え、歴史的・文化的資産の保護・活用に供する資料として広く活用できる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、多くの関係機関の方々よりご助言・ご指導を賜り厚く御礼申し上げますとともに、調査及び資料整理作業にご協力いただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

2022（令和4）年3月

北谷町教育委員会

教育長 津嘉山 信行

例 言

1. 本報告書は、北谷町教育委員会が在沖米軍基地嘉手納飛行場第1ゲート移転計画に伴い、平成31年度に実施した「平安山ヌ上集落跡、下勢頭集落跡」の発掘調査成果をまとめたものである。
2. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/2,500地形図（昭和54年測量）を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。
3. 本報告で使用している座標は、世界測地系の第XV系を用い、方位は座標北を用いた。
4. 土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版 標準土色帖」を使用した。
5. 本書の編集は、山城安生（北谷町教育委員会）の指導の下、天久朝海（株式会社アーキジオパシフィック支店）が行った。執筆分担は下記の通りである。

第I章、第II章、第V章…山城安生

第III章第1節、第2節、第3節…天久朝海

第III章第4節…比嘉優子

沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、陶質土器、瓦質土器、銭貨、簪、指輪・指貫、煙管、硯、円盤状製品、基石、歯ブラシ、ガラス製品、貝製品、石製品、瓦、鍛冶関連遺物、土器、外国産陶磁器、石器

第III章第4節 本土産磁器、本土産陶器…比嘉尚樹

第III章第5節 脊椎動物遺体…菅原広史（浦添市教育委員会）

第III章第5節 貝類遺体…宮里牧

第IV章第1節 自然科学分析…パリノサーヴェイ株式会社

第IV章第2節 木製品保存処理・分析…安座間奈緒（なおラボ）

6. 菅原広史氏には玉稿を賜った。記して謝意を表す。
7. 本書に掲載された写真は、現地調査を天久朝海、井伊浩一郎、ガリグ・アレックサンドラが撮影した。遺物写真等は天久朝海、小泉壘が撮影した。
8. 層序の表記は、基本層序は「I層」「II層」などローマ数字で表記し、ピット・土坑などの遺構埋土の層序は「1層」「2層」など算用数字で表記した。
9. 出土遺物の注記は、「発掘調査年度・遺跡名・地区・グリッド・層序（或いは遺構、遺構層序）、取上げ袋番号」の順で記しており、本報告書内では発掘調査年度、遺跡名、取上げ袋番号は省略している。注記「発掘調査年度ー遺跡名ー地区ーグリッドー出土層位（或いは遺構、遺構層序）ー取上げ袋番号」
例「H31 平山・下 B II3層 0599」（基本層序からの出土の場合）
「H31 平山・下 B SK114 2層 1046」（遺構内出土の場合）
10. 今回の調査で得られた遺物、実測図及び写真等の記録は、全て北谷町教育委員会にて保管している。



巻首図版 1 調査区遠景 (A・B・C地区を東側より)



巻首図版 2 調査区遠景 (B・C・D地区を西側より)※シー(ジー): 岩山



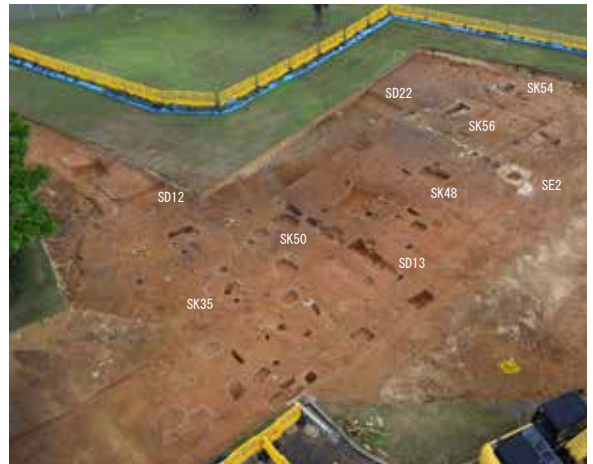
巻首図版3 A地区：遺構調査状況（南南東より）



巻首図版4 B地区（西側：区画7・8）遺構調査状況（南南西側より）



巻首図版5 B地区(東): 道1(県道跡)、区画3・4遺構検出状況



巻首図版6 B地区(東): 区画3~6遺構完掘状況



巻首図版7 B地区(南): 区画7遺構検出・完掘状況



巻首図版8 B地区(東): 道1(県道跡)、区画3・4(SE2と周辺)遺構完掘状況



巻首図版9 B地区(西): 区画7・8遺構調査状況(北より)



巻首図版10 B地区(東): 道1、区画1・2遺構調査状況(南より)



卷首図版 11 C地区（建物跡：北谷尋常小学校 校舎跡、西側より）



卷首図版 12 C地区 建物3（Ⅱ1a層）、建物4（Ⅱ1b層）：北谷尋常小学校 校舎跡



卷首図版 13 C地区 建物3 (Ⅱ1a層)、建物4 (Ⅱ1b層) : 北谷尋常小学校 校舍跡



卷首図版 14 C地区 : 第4・5遺構面調査状況



巻首図版 15 D地区遠景（南南東側より）



巻首図版 16 D地区調査状況（南南西側より）



巻首図版 17 D地区：フール、シーリ調査状況（西側より）



巻首図版 18 D地区：フール、シーリと屋敷内溝（SD35）



巻首図版 19 D地区屋敷に伴う溝（SD41・34・8）



巻首図版 20 A地区⑦西壁、⑥南西壁



巻首図版 21 A地区⑥南西壁 2



巻首図版 22 B地区③⑤南壁：SD23・25 検出時の状況



巻首図版 23 B地区③南壁：SD23



卷首図版 24 B地区西検出状況：焼け跡 SK114 周辺、SK63 周辺（赤色ライン内は攪乱部）



卷首図版 25 B地区③南壁 3：焼け跡（SK114 周辺）



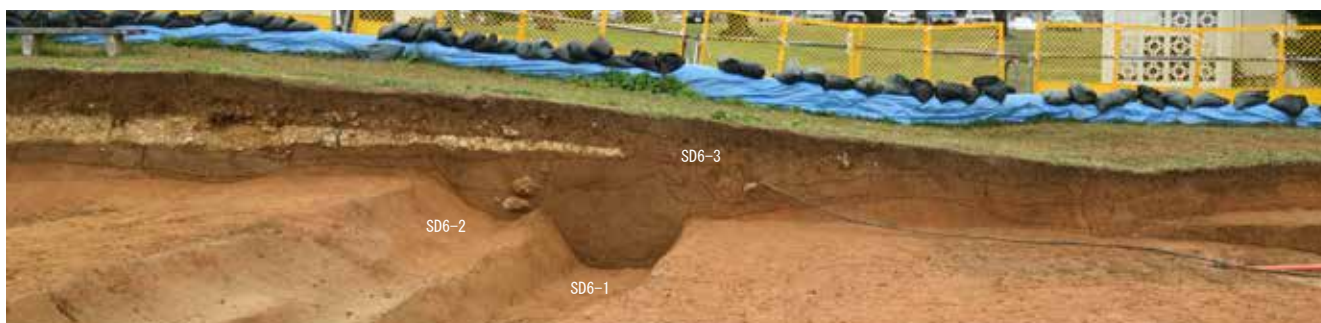
卷首図版 26 B地区③南壁 3：SK114



卷首図版 27 B地区③南壁 3：SK63



卷首図版 28 B地区③南壁 3：SK63



卷首図版 29 B地区③南壁 3：SD6（6-1、6-2、6-3）



卷首図版 30 C地区南壁（西側1）：D3・4地区、SQ10周辺



卷首図版 31 C地区南壁（西側1）：SD18・19



卷首図版 32 D地区②Bライン西壁



卷首図版 33 D地区③南東壁

本文目次

序	
例言	
巻首図版	
第Ⅰ章 調査の経緯・経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査経過	3
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 自然的環境	5
第3節 歴史的環境	6
第Ⅲ章 調査の方法と成果	15
第1節 調査の方法	15
第2節 層序	16
第3節 遺構	35
第4節 遺物	81
沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、陶質土器、瓦質土器、本土産磁器、本土産陶器、 銭貨、簪、指輪・指貫、煙管、硯、円盤状製品、基石、歯ブラシ、ガラス製品、貝製品、 石製品、瓦、鍛冶関連遺物、土器、外国産陶磁器、石器	
第5節 自然遺物	142
平安山ヌ上集落跡・下勢頭集落跡出土の脊椎動物遺体、貝類遺体	
第Ⅳ章 理化学分析	159
第1節 平安山ヌ上集落跡・下勢頭集落跡の自然科学分析	159
第2節 出土位牌の保存処理報告	169
第Ⅴ章 総括	179
参考文献	187
報告書抄録	
奥付	

目 次

第1図	試掘調査〔左：TP4遺構検出（A地区） 中央：TP24 遺構検出（C地区） 右：ウワフル（D地区）〕 … 3	第37図	区画8の遺構1（B地区） ……55
第2図	試掘調査位置図と遺跡範囲〔嘉手納（29）保安施設 （1314）等文化財試掘調査〕 …… 4	第38図	区画8の遺構2（B地区） ……56
第3図	発掘調査範囲〔調査区A・B・C・D〕 …… 4	第39図	区画8の遺構3（B地区） ……57
第4図	発掘調査〔左：発掘調査（現場）、中央：資料整理 （遺物実測）、右：資料整理（原稿執筆）〕 …… 4	第40図	道1の遺構1（B地区） ……58
第5図	遺跡の位置 …… 5	第41図	道1の遺構2（B地区） ……59
第6図	表層地質 …… 5	第42図	C地区の遺構配置図（近代） ……61
第7図	平安山ヌ上屋取と下勢頭屋取 …… 8	第43図	C地区の遺構（近代）1 ……64
第8図	①平安山ヌ上・下勢頭屋取（1945年） ②平安山 ヌ上屋取（1945年8月18日） ③平安山ヌ上屋取 〔2021年（令和3年） ……10	第44図	C地区の遺構（近代）2 ……65
第9図	平安山ヌ上屋取と爆煙があがる浜川ウガン（1945年 4月1日） ……11	第45図	C地区の遺構（近代）3 ……66
第10図	米軍上陸時の平安山ヌ上屋取や砂辺・砂辺ヌ前（写 真右中央：平安山ヌ上屋取、左上：中飛行場、中 央：砂辺） ……11	第46図	C地区の遺構（近代）4 ……67
第11図	北谷町の位置と遺跡分布 ……13	第47図	C地区の遺構配置図（近世） ……68
第12図	調査区及びグリッド設定図 ……16	第48図	C地区の遺構（近世） ……70
第13図	A地区の層序 ……21	第49図	D地区の遺構配置図 ……72
第14図	B地区の層序1 ……23	第50図	D地区の遺構1 ……73
第15図	B地区の層序2 ……25	第51図	D地区の遺構2 ……78
第16図	C地区の層序 ……27	第52図	D地区の遺構3 ……79
第17図	D地区の層序1 ……29	第53図	D地区の遺構4 ……80
第18図	D地区の層序2 ……31	第54図	沖縄産施釉陶器1 ……85
第19図	D地区の層序3 ……33	第55図	沖縄産施釉陶器2 ……86
第20図	A地区の遺構配置図 ……36	第56図	沖縄産無釉陶器1 ……91
第21図	A地区の遺構1 ……37	第57図	沖縄産無釉陶器2 ……92
第22図	A地区の遺構2 ……38	第58図	陶質土器 ……96
第23図	A地区の遺構3 ……39	第59図	瓦質土器 ……99
第24図	B地区の区画配置図 ……40	第60図	本土産磁器1 …… 103
第25図	B地区の遺構配置図 ……41	第61図	本土産磁器2 …… 104
第26図	区画3の遺構（B地区）44「第27図 区画4の遺構 1（B地区） ……44	第62図	本土産陶器 …… 106
第27図	区画4の遺構1（B地区） ……46	第63図	銭貨 …… 109
第28図	区画4の遺構2（B地区） ……47	第64図	金属製品（簪・指輪） …… 112
第29図	区画4の遺構3（B地区） ……48	第65図	煙管・硯 …… 115
第30図	区画5の遺構1（B地区） ……49	第66図	円盤状製品・基石・歯ブラシ・ガラス製品 …… 119
第31図	区画5の遺構2（B地区） ……50	第67図	貝製品 …… 122
第32図	区画6の遺構1（B地区） ……50	第68図	石製品 …… 124
第33図	区画6の遺構2（B地区） ……33	第69図	瓦 …… 126
第34図	区画7の遺構1（B地区） ……52	第70図	鍛冶関連遺物 …… 127
第35図	区画7の遺構2（B地区） ……53	第71図	土器 …… 129
第36図	区画7の遺構3（B地区） ……54	第72図	外国産陶磁器1 …… 132
		第73図	外国産陶磁器2 …… 134
		第74図	石器1 …… 138
		第75図	石器2 …… 140
		第76図	暦年較正結果 …… 163
		第77図	FT-IRスペクトル …… 175

図 版 目 次

巻首図版1	調査区遠景（A・B・C地区を東側より）	巻首図版33	D地区③南東壁
巻首図版2	調査区遠景（B・C・D地区を西側より）	図版1	B地区の各区画遺構確認状況……………43
巻首図版3	A地区：遺構調査状況（南南東より）	図版2	区画4の遺構（B地区）……………45
巻首図版4	B地区（西側：区画7・8）遺構調査状況（南南西側より）	図版3	C地区の遺構1（第1・2・3遺構面）……………62
巻首図版5	B調査区（東）：道1（県道跡）、区画3・4遺構調査状況	図版4	C地区の遺構2（第1・2・3遺構面）……………64
巻首図版6	B地区（東）：区画3～6遺構調査状況	図版5	C地区の遺構（第4・5遺構面）……………69
巻首図版7	B地区（南）：区画7遺構調査状況	図版6	D地区の遺構1……………75
巻首図版8	B調査区（東）：道1（県道跡）、区画3・4（SE2と周辺）遺構調査状況	図版7	D地区の遺構2……………76
巻首図版9	B地区（西）：区画7・8遺構調査状況（北より）	図版8	沖縄産施釉陶器1……………87
巻首図版10	B地区（東）：道1、区画1・2遺構調査状況（南より）	図版9	沖縄産施釉陶器2……………88
巻首図版11	C地区（建物跡：北谷尋常小学校 校舎跡、西側より）	図版10	沖縄産無釉陶器1……………93
巻首図版12	C地区 建物3（Ⅱ1a層）、建物4（Ⅱ1b層）：北谷尋常小学校 校舎跡	図版11	沖縄産無釉陶器2……………94
巻首図版13	C地区 建物3（Ⅱ1a層）、建物4（Ⅱ1b層）：北谷尋常小学校 校舎跡	図版12	陶質土器……………97
巻首図版14	C地区：第4・5遺構面調査状況	図版13	瓦質土器……………100
巻首図版15	D地区遠景（南南東側より）	図版14	本土産陶器……………107
巻首図版16	D地区調査状況（南南西側より）	図版15	銭貨……………110
巻首図版17	D地区：フル、シーリ調査状況（西側より）	図版16	金属製品（簪・指輪）……………113
巻首図版18	D地区：フル、シーリと屋敷内溝（SD35）	図版17	煙管・硯……………116
巻首図版19	D地区：D地区屋敷に伴う溝（SD41・34・8）	図版18	円盤状製品・基石・歯ブラシ・ガラス製品……………120
巻首図版20	A地区⑦西壁、⑥南西壁	図版19	貝製品……………122
巻首図版21	A地区⑥南西壁2	図版20	石製品……………125
巻首図版22	B地区③⑤南壁：SD23・25検出時の状況	図版21	瓦……………126
巻首図版23	B地区③南壁：SD23	図版22	鍛冶関連遺物……………126
巻首図版24	B地区西検出状況：焼け跡SK114周辺、SK63周辺（赤色ライン内は攪乱部）	図版23	土器……………129
巻首図版25	B地区③南壁3：焼け跡（SK114周辺）	図版24	外国産陶磁器1……………133
巻首図版26	B地区③南壁3：SK114	図版25	外国産陶磁器2……………135
巻首図版27	B地区③南壁3：SK63	図版26	石器1……………139
巻首図版28	B地区③南壁3：SK63	図版27	石器2……………141
巻首図版29	B地区③南壁3：SD6（6-1、6-2、6-3）	図版28	脊椎動物遺体（SK72出土ブタ）……………153
巻首図版30	C地区南壁（西側1）：D3・4地区、SQ10周辺	図版29	種実遺体……………168
巻首図版31	C地区南壁（西側1）：SD18・19	図版30	木材・漆薄片……………176
巻首図版32	D地区②Bライン西壁	図版31	位牌出土状況……………176
		図版32	保存処理後の位牌……………177
		図版33	保存処理作業工程……………178
		図版34	平安山ヌ上屋取集落（1945年）と調査区（A・B・C地区）の比較……………185
		図版35	下勢頭屋取集落の西端から平安山ヌ屋取集落と調査区D地区の比較……………185
		図版36	屋敷（屋号）分布と1945年8月の基地整備状況……………186

表 目 次

第1表	北谷町遺跡一覧	14
第2表	遺構記号凡例	16
第3表	基本土層注記表	20
第4表	各地区層序分類表	20
第5表	出土遺物集計表	81
第6表	沖繩産施釉陶器観察一覧	84
第7表	沖繩産無釉陶器観察一覧	90
第8表	陶質土器観察一覧	95
第9表	瓦質土器観察一覧	98
第10表	本土産磁器観察一覧	102
第11表	本土産陶器観察一覧	105
第12表	錢貨観察一覧	108
第13表	簪観察一覧	111
第14表	指輪・指貫観察一覧	111
第15表	煙管観察一覧	114
第16表	硯観察一覧	114
第17表	円盤状製品観察一覧	117
第18表	基石観察一覧	117
第19表	歯ブラシ観察一覧	118
第20表	ガラス製品観察一覧	118
第21表	貝製品観察一覧	121
第22表	石製品観察一覧	123
第23表	瓦観察一覧	126
第24表	鍛冶関連遺物観察一覧	127
第25表	土器観察一覧	128
第26表	外国産陶磁器観察一覧	131
第27表	石器観察一覧	137
第28表	平安山ヌ上集落、下勢頭集落跡 脊椎動物遺体の分類群一覧	146
第29表	平安山ヌ上集落、下勢頭集落跡出土の脊椎動物遺体一覧	146
第30表	平安山ヌ上集落、下勢頭集落跡出土脊椎動物遺体集計表	150
第31表	哺乳類の顎骨及び遊離歯の詳細	152
第32表	分類群別出土状況	153
第33表	貝類算出個体数集計一覧	154
第34表	貝類遺体の分類学的位置と生態場所類型	155
第35表	貝類遺体生息場所別出土集計表	156
第36表	貝類遺体生息場所別出土集計表（詳細）	157
第37表	貝類遺体地区別出土集計表	158
第38表	放射性炭素年代測定結果	161
第39表	微生物分析結果	164
第40表	位牌札一覧	174

第 I 章 調査の経緯・経過

第 1 節 調査に至る経緯

概要 平安山ヌ上集落跡、下勢頭集落跡は、平成29年の嘉手納第1ゲート移転に伴う埋蔵文化財の確認調査によって発見された遺跡である。嘉手納飛行場保安施設整備に伴って平成31年度（令和元年）に記録保存を目的として実施した。

提供施設の整備と埋蔵文化財の有無照会と調整

米空軍嘉手納飛行場（Kadena Air Base）は北谷町、嘉手納町、沖縄市にまたがる極東最大の米空軍基地である。米軍基地内における埋蔵文化財については、米軍独自の工事計画に伴うものと防衛局による提供施設の工事計画があり、前者は嘉手納空軍基地 第18航空団 第18施設群 第718施設中隊 施設管理部 環境保全課との調整を行い、ユーティリティー施設（各種埋設物など）等の工事計画に関連する試掘調査等を実施している。

嘉手納第1ゲートと称される基地出入口は、北谷町域の行政区域砂辺にあり、国道58号に接続し基地内立入りに関連する施設等が設けられている。

同ゲートが国道58号に接続している位置は、町道砂辺浜川境界線が国道58号に接続している位置と交差しておらず互い違いとなっており、平成24年5月に北谷町議会議員等から沖縄防衛局に対して嘉手納飛行場第1ゲート周辺における交通渋滞解消の具体策を講じるよう要請が行われ、平成27年度に交通量調査によって渋滞確認等が行われ計画されている。

平成29年度に「嘉手納飛行場における埋蔵文化財の有無について（照会）」（6月29日付沖防企第3603号）を受けた調整により、平成29年10月27日から平成30年3月31日（57箇所）の試掘調査〔嘉手納（29）保安施設（1314）等文化財試掘調査を行った。町教委は、「嘉手納飛行場における埋蔵文化財の有無について（回答）」（平成30年3月28日付北教社29第1307号）により、埋蔵文化財新規発見届（文化財保護法第99条第1項）及び遺失物発見届（遺失物法第4条第1項）に基づき手続きと遺跡の保存措置について協議が必要である旨回答し、下記に示す文化財保護法に関する手続きを行い、協議を重ね、記録保存とすることで発掘調査範囲を確定し、発掘調査（平成31年度）、資料整理・報告書（平成32年度以降）とする協定書を締結（平成30年12月13日）した。

沖縄防衛局より文化財保護法第99条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知について」を沖縄県教育委員会へ進達、県教委より文化財保護法第184条第1項第6号に基づく工事着手前に発掘調査を実施するよう回答（教文第4679号）を町教委は沖縄防衛局へ伝達。

発掘調査〔本発掘調査、資料整理・報告書作成〕

平成31年度（令和元年度）に嘉手納（31）保安施設文化財発掘調査業務委託を受託し本発掘調査を実施、同調査の成果を基に令和2年度実施予定の資料整理・報告書作成について事業調整を行い、令和2年度の嘉手納（2）保安施設文化財発掘調査業務委託として、前年度の本発掘調査における一次整理作業である出土品遺物洗浄作業以降の出土品選別、注記、実測、復元、分析・検討について整理作業を実施した。令和3年度の嘉手納（3）保安施設文化財発掘調査業務委託で実施した資料整理は、土壌洗浄・分析、保存処理を含む、報告書作成を実施した。

本遺跡の発掘調査は入札による民間発注を行い、本発掘調査〔平成31年度（令和元年度）〕、資料整理（令和2年度）、資料整理（報告書作成）（令和3年度）は株式会社アーキジオ パシフィック支店が受託し業務を実施した。

第2節 調査体制

本発掘（現地調査）は平成31年度（令和元年度）に、資料整理及び報告書作成は令和2・3年度に実施した。各年度の調査体制を年度別に示す。

平成31年度（令和元年度）本発掘調査（遺物洗浄含む）

事業受託者	北谷町長	野国 昌春
調査主体	北谷町教育委員会	
調査責任者	〃 教育長	津嘉山 信行
〃	〃 教育次長	玉那覇 修
総括監督員	〃 社会教育課長	仲地 桃子
主任監督員	〃 文化係長	與那覇 武
監督員	〃 主任主事	山城 安生

委託業務	嘉手納（31）保安施設文化財発掘調査業務委託
受託者	株式会社アーキジオ パシフィック支店 支店長 西井 敏夫
現場代理人	與儀 亮太
主任調査員	天久 朝海
測量技術員	山城 武範
調査員	翁長 圭乃子、井伊 浩一郎
調査補助員	大城 俊、新川 睦、ガリグ・アレックサンドラ
発掘作業員	赤嶺文三、伊礼喜健、内間進、大川隆、嘉手苺暢子、神谷ミツエ、仮屋敏弘 儀間盛健、儀間守男、呉我フジ子、佐渡山安重、佐渡山正子、島仲恵子、砂川秀市 砂辺理恵、平良善明、高嶺愛菜、高宮城純、棚原盛寿、玉城初美、玉城政英 玉城安雄、知花智子、嘉敷金松、渡口良弘、富川香澄、富川真由美、中塚末子 饒波政信、畠山りつ子、比嘉徹、比嘉恒次、比嘉正徳、比嘉正行、比嘉義治 福地佐枝子、前村亮、真玉橋朝申、宮城常正、宮國恵子、宮里正行、安村由美子 山城常雄、山城義雄

令和2年度 資料整理（出土品選別、注記、実測、復元、分析・検討）

事業受託者	北谷町長	野国 昌春
調査主体	北谷町教育委員会	
調査責任者	〃 教育長	津嘉山 信行
〃	〃 教育部長	玉那覇 修
総括調査員	〃 文化課長兼文化財係長	古謝 哲郎
主任調査員	〃 博物館・史跡担当技幹兼博物館係長	勢理客 一之
調査員	〃 主任主事	山城 安生

委託業務	嘉手納（2）保安施設文化財発掘調査業務委託
受託者	株式会社アーキジオ パシフィック支店 支店長 西井 敏夫
管理技術者	宮平 千春
資料整理作業員	泉谷壘、大城俊、呉我フジ子、佐渡山正子、島仲恵子、島袋なぎさ、砂辺理恵、 玉城初美、千葉滋、仲宗根涼子、比嘉優子、福地佐枝子、宮國恵子、中塚末子、

令和3年度 資料整理（トレース、写真撮影、土壌洗浄・自然化学分析、保存処理、原稿執筆・報告書作成）

事業受託者	北谷町長	野国 昌春
調査主体	北谷町教育委員会	
調査責任者	〃 教育長	津嘉山 信行
〃	〃 教育部長	玉那覇 修
総括調査員	〃 文化課長兼文化財係長	古謝 哲郎
主任調査員	〃 博物館・史跡担当技幹兼博物館係長	勢理客 一之
調査員	〃 主任主事	山城 安生

委託業務	嘉手納（3）保安施設文化財発掘調査業務委託		
受託者	株式会社アーキジオ パシフィック支店 支店長 西井 敏夫		
管理技術者	天久 朝海		
業務一部再委託	土壌洗浄・自然化学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社沖縄支店	上田 圭一
	保存処理（木製品）	なおラボ	安座間 奈緒
資料整理作業員	新川睦、泉谷壘、大城俊、奥浜美知代、ステファニー・メンドーザ、知念沙希、仲宗根涼子、		

調査協力者	久高 夏紀（嘉手納空軍基地 第718施設中隊 技術部 日本政府関連設計工事課）		
	小嶺 常次（嘉手納空軍基地 第718施設中隊 施設管理部 環境保全課）		
	新垣 力（沖縄県教育庁文化課）		
	安座間 充（金武町総務課）		
	宮城 弘樹（沖縄国際大学総合文化部社会学科准教授）		

第3節 調査の経過

試掘調査

同調査は、平成29年10月27日から平成30年3月31日の試掘調査〔嘉手納（29）保安施設（1314）等文化財試掘調査：発注者 沖縄防衛局 受注者 株式会社パスコ沖縄支店〕として57箇所について実施し、11箇所にて遺構遺物を検出、森地の踏査にてウワーフル（豚小屋兼便所）と屋敷囲いを確認した。第2図に示す平安山原ヌ上集落跡、下勢頭集落跡が発見された。



第1図 試掘調査〔左：TP 4遺構検出(A地区) 中央：TP24遺構検出(C地区) 右：ウワーフル(D地区)〕



第 2 図 試掘調査位置図と遺跡範囲〔嘉手納 (29) 保安施設 (1314) 等文化財試掘調査 (試掘調査位置図に加筆)〕

本発掘調査 平成31年（令和元年）4月27日から令和2年3月31日で実施した。調査の事前準備では嘉手納空軍基地第718施設中隊の関連部署との調整（基地立入、残土置場、測量・掘削・撮影許可、埋設ユーティリティーの確認等）等を行い、試掘調査の成果と工事計画範囲を基に第3図の4調査区（A～D地区）を第Ⅲ章第1節で述べる調査の方法により実施した。

調査は、A地区の調査を先行し、ほか3地区を並行して行った。基地内道路沿いであるC地区では、調査範囲が道路沿いにあることから安全管理のため道路側一部について先行調査・復旧を行った。B地区については、最も調査面積が広いことから、東・西側に分けて調査を実施し基地内道路の復旧を含む東側を先行して行った。復旧作業は緑地、道路、遊歩道について行った。



第 3 図 発掘調査範囲（調査区A・B・C・D）

資料整理 令和2年度は8月3日から令和3年2月26日（約7ヶ月）、令和3年度は7月1日から令和4年5月31日（約11ヶ月）で実施した。



第 4 図 発掘調査〔左：発掘調査（現場）、中央：資料整理（遺物実測）、右：資料整理（原稿執筆）〕

第 II 章 遺跡の位置と環境

第 1 節 地理的環境

遺跡は、在沖米空軍の嘉手納飛行場内にあり、「平安山ヌ上集落跡」は国道58号に接続する第1ゲート
 一帯の沖縄県中頭郡北谷町字浜川小字平安山ノ上原338番地及びその周辺、「下勢頭集落跡」は同ゲートか
 ら約500m東側、字下勢頭田名嘉地原147及び周辺、基地内道路沿いに所在する（第5図）。

北谷町は、沖縄島中部の西海岸、県庁所在地である那覇市から北に直線距離で約16kmに位置している。
 町総面積は13.91km²、町域は南北約6km、東西約4.3km、北は嘉手納町、東に沖縄市、南東側に北中城村、
 南側に宜野湾市が隣接する（第11図）。

町の人口は29,016人（令和3年9月末）、町面積の51.6%は米軍基地となっており、町域北側に在沖米
 空軍基地の嘉手納飛行場、南側には在沖米海兵隊の中核機能を有するキャンプ瑞慶覧があり、その間の低
 地と丘陵台地の一部を占有する陸軍貯油施設、返還が予定されているキャンプ桑江（南側）によって東西
 に分断されている。

キャンプ桑江北側返還跡地に1998年（平成10）に役
 場が現在の場所に移転し、その周辺は桑江伊平土地区
 画整理事業により国道沿いに商業地、中央部や東側は
 住宅地として新たな市街地が形成されている。

本町の町づくりは、駐留軍用地跡地利用、公有水
 面の埋め立てにより住居地域、商業集積や観光リ
 ゴート産業を中心とした産業拠点が形成され、ハン
 ビー飛行場跡地である北前地区には約600mの砂浜
 が続く安良波公園、美浜地区のサンセットビーチ周
 辺にはエンターテインメントスポットのアメリカンビ
 レッジ、浜川漁港に隣接するフィッシャリーナやダイ
 ビングやサーフポイントの宮城海岸などに多くの
 県民や観光客が訪れる。東シナ海に沿った海岸や丘
 陵・台地からなる東部地域からは、慶良間諸島が眺
 望でき、町西部地域の海岸低地に国道58号が縦断し、
 島の北部や南部へのアクセスが便利な地理的特徴を
 有している。



第 5 図 遺跡の位置（株）パスコのパスカルウェブの画像に加筆）

第 2 節 自然的環境

本町の海岸低地を構成する沖積層、沖縄島中南部に
 広く分布する島尻層群、同時異層の琉球石灰岩と国頭
 礫層から構成される琉球層群が分布する（第6図）。

台地・丘陵部をつくるのは、サンゴ礁堆積物が地殻
 変動によって隆起した琉球石灰岩と砂礫層の割合が多
 く国頭マージと呼ばれる赤褐色の酸性土壌が形成する
 国頭礫層で、その分布の南限となっている。この国頭
 マージには、イジュ・ヤマモモが生育し、島の中南部
 に広がるアルカリ化した土壌（島尻マージ）にはアカギ
 オオバギ・ヤブニッケイ等が混生する。



第 6 図 表層地質（『土地分類基本調査沖縄南・中北部』を抜粋し加筆）

本町の気候は亜熱帯海洋性気候に属し、6月下旬から9月中旬にかけては、日最高気温が30℃以上の真夏日と日最低気温が25℃以上の熱帯夜がつづくが、年平均気温は22℃である。年降水量は2,000～3,000mm、年平均湿度は75～77%で、5月中旬から6月下旬の梅雨期と集中豪雨をもたらす台風期に集中する。8月から10月頃は亜熱帯特有のスコールが降ることが多い。

第3節 歴史的環境

本町で確認（令和3年12月時点）されている遺跡は、現在57カ所である（第11図、第1表）。旧石器時代に比定される遺跡は確認されていない。遺跡の多くは、沖積低地や小起伏丘陵やその麓等にあり、町東部の丘陵・台地には少なく、23カ所の遺跡は異なる時代が重複する。

縄文時代に相当する遺跡は10カ所あり、クマヤー洞穴遺跡では貝塚時代前期（前5期）の墓域や14世紀後半～15世紀頃の祭祀場所、1945年の沖縄戦においては避難壕として利用され、戦後の米軍使用時の痕跡などが残る。出土土器には前1期に比定される南島爪形文土器より古く押引文土器よりも古いと考えられている波状文土器の類例資料の出土が確認され調査・研究によっては町内最古の遺跡となる可能性がある。

国指定史跡『伊礼原遺跡』は、沖縄島北部と中南部の地質の境目という海・山両方の自然の幸に恵まれた河口近くの湧水と低湿地、拡大する陸地の環境変化に寄り添った生活の様子が豊富な地下水により良好な状態が保たれていた。南島爪形文土器に始まる暮らしの痕跡には“いわゆるドングリ”の利用や木製品、往時の植生を示す植物遺体等が出土し、九州との交流を示す曾畑式土器、黒曜石や姫川産ヒスイなどが出土しており沖縄・奄美における拠点的な遺跡とされる。隣接する伊礼原E遺跡から船元系土器が出土し、伊礼原遺跡北側に近接する平安山原B遺跡から大洞系土器が出土している。同遺跡ではグスク時代初期頃に浜堤背後の湿地条件を利用した耕作域、関連する可能性が高い遺構やウシ蹄跡などが発見されている。

グスク時代初期の遺跡には、10～12世紀代のオオムギ・イネ・アワや掘建柱建物跡、カムイヤキを副葬した土壌墓などが発見され、喜界島城久遺跡群との関係が指摘される小堀原遺跡（後2期～グスク時代初期）、①11世紀後半～13世紀前半と②14世紀後半～16世紀の集落遺跡である後兼久原遺跡では、①では掘建柱建物跡と高床式倉庫跡がセットで検出されたほか砂鉄貯蔵穴や鍛冶関連遺物が出土した。小堀原遺跡では貝塚時代後期（後2期）の掘建柱建物跡、貝製腕輪の素材となる貝のストックなどが発見されている。

国指定史跡『北谷城』は町内唯一のグスクである。琉球王府によってまとめられた沖縄最古の歌謡集『おもろさうし』に「きたたんのてだ」や「きたたん世の主」と謡われた按司の居城である。

北山、中山、南山が鼎立していた三山時代の中山の要衝であったと考えられ、曲輪内の造成が行われた13世紀後半～14世紀、石垣や殿舎が築かれた最盛期の14世紀～15世紀中頃、15世紀中頃～16世紀前半に廃城となる。同城の城下には、『おもろさうし』に採録された奄美・沖縄諸島に伝わる古歌謡「おもろ」に「きたたん」の地名が見られるムラが所在した。

琉球王府の頃の間切にある村は、「おもろ」に「きたたん」「くわい」「くになおり」「やら」「やまち」の5つの地名が見られ、文献史学における時代区分の古琉球期の記録では「きたたん（北谷）・くわい（桑江）・やら（屋良）・やまち（山内）・のくに（野国）・平安山、砂辺」の7つの村名が確認されている。これには、村名とならなかった「くになおり（国直）」、別名になったと考えられている「中村渠」の地名は含まれていない。

琉球王府の地方行政の単位である間切（現在の市町村に相当）及び村は『北谷町史』第一巻通史編によると「北谷間切の範囲とその内に含まれる村が成立し確定したのは17世紀後半のことである。」とされる。

1609年の島津侵入以後の「近世琉球」では、『絵図郷村帳』（1646年）に見られる9つの村は「北谷、くわい、平安山、すなべ、野国、賀手納（嘉手納）、屋郎（屋良）、山内、あぎな（安仁屋）」であるが、新設の宜野湾間切に「あぎな（安仁屋）」が、越来間切に「やまち（山内）」を割かれ7つの村となる。また、1660年～1670年代には既存の村から玉寄（玉代勢）、伝道、伊礼、西平安山（浜川）、中真（野里）の5つの新しい村の分割が行われ、近代まで踏襲される12カ村が成立している。

18世紀初頭（1735年）に、尚敬王代の琉球王府が「諸間切公事帳」を出したことで士族に他の「諸職」に就くことをゆるしたこととなり、王府から土地を払い受け首里・那覇から田舎下した士族が農業に従事した散村的集落、いわゆる屋取（ヤドリ：方言でヤードゥイ）が形成されると考えられている。

北谷間切は屋取集落が多い地域で、地元の本村（在来の古村）の範囲内に形成されているが、複数にまたがるものもある。平安山ヌ上集落跡は「平安山ヌ上屋取」、下勢頭集落跡は「下勢頭屋取」の集落跡で、両屋取は平安山と浜川の両村に、下勢頭屋取の一部は字野里にもまたがる。

下勢頭屋取集落の名前は原名（小字名）に由来しており、1899～1903（明治32～36）年にかけて行われた土地整理において原名（小字名）、字名が確定されている。「勢頭七組（シードゥナナクミ）」^{註1}と称される小屋取集落は、北谷の屋取集落のなかで最も早く行政字として1921（大正10）年に独立・成立し、「佐久川屋取（サクガーヤードゥイ）」が「字下勢頭」となり、他の「組」は「字上勢頭」となる。平安山ヌ上屋取は「平安山（ハンザン）」の北側、坂の上の高台に位置していたことに名前の由来があり、「字浜川」に属し独立した行政字とならなかった。行政字となった「字下勢頭」の地籍は本村に属したままの独立であった。

平安山ヌ上屋取（ハンジャヌウィーヤードゥイ）

平上（ヘイジョー）と略して呼ばれたこともある平安山ノ上屋取の始祖は、勢理客一族の六世の宗寔（そうしょく）（五世宗武の四男）とされ、七世宗興（六世宗寔の長男）の長男である八世宗穩（そうおん）が平安山ノ上大勢理客、八世宗穩の三男の宗懿（そうい）がウガン根（御願根）の立口となったとされる。宗懿の長男宗紀が平安山ノ上屋取の本家（ムートゥヤー）、また、四男宗矩（そうち）は上勢頭の大勢理客の始祖となったとされる。^{註2}

勢理客一族の編集本である『劉氏家譜』によると一族の初代は、第二尚氏王統第七代の尚寧王に仕えた日本京境（泉州：大阪府、堺だという）の出の町田伊兵衛なる人物で、氏（うじ）名は「劉」、四世宗安が1670年に浦添間切勢理客地頭となったことが勢理客姓の始まりとされ、その後本家は「糸洲姓」、分家は「勢理客」を名乗るが昭和15年に初代の「町田」に因んで複（改）姓が行われた。

移入の始まりは定かではないが、田名真之氏は『上勢頭誌 上巻 通史編（I）』で「六世宗寔は平安山ノ上の祖とされているが、居住は同人より一～二代か後なのか等々、不明である。」とする。『平安山ヌ上誌』^{註3}によると1740（乾隆5）年と推測され、主に首里・那覇系の士族が移入したとされている。『北谷村史』では「西紀千七百年から千八百年頃と推測され、其の後是等親戚縁者が寄留したであろう。」とする。

勢理客家に続くのは、新城（あらぐしく）、禰覇（ねは）とされており、新城家は同屋取で最北に位置する与儀家の北側に居を構えたという伝承があり、乾隆年間中期（1765年頃と推測されている）に首里から帰農したとされ、その始祖は糸満真壁の地頭であった大宗祝自楽島尻眞壁親雲上長元で、後に宜野湾新城（アラグシク）の地頭となったことに家名の由来があるという。

禰覇家は、禰覇里主親雲上盛郎（十一世：1763年生）が桑江ヌ前屋取集落に居を構え、その三男盛扶（十二世）が平安山ヌ上の始祖と言われており、1823年頃に転入したと推測されている。禰覇家の初代は中城按司護佐丸盛春となっており、九世の盛征が読谷山間切禰覇地頭となったのが禰覇姓の由来とされている。

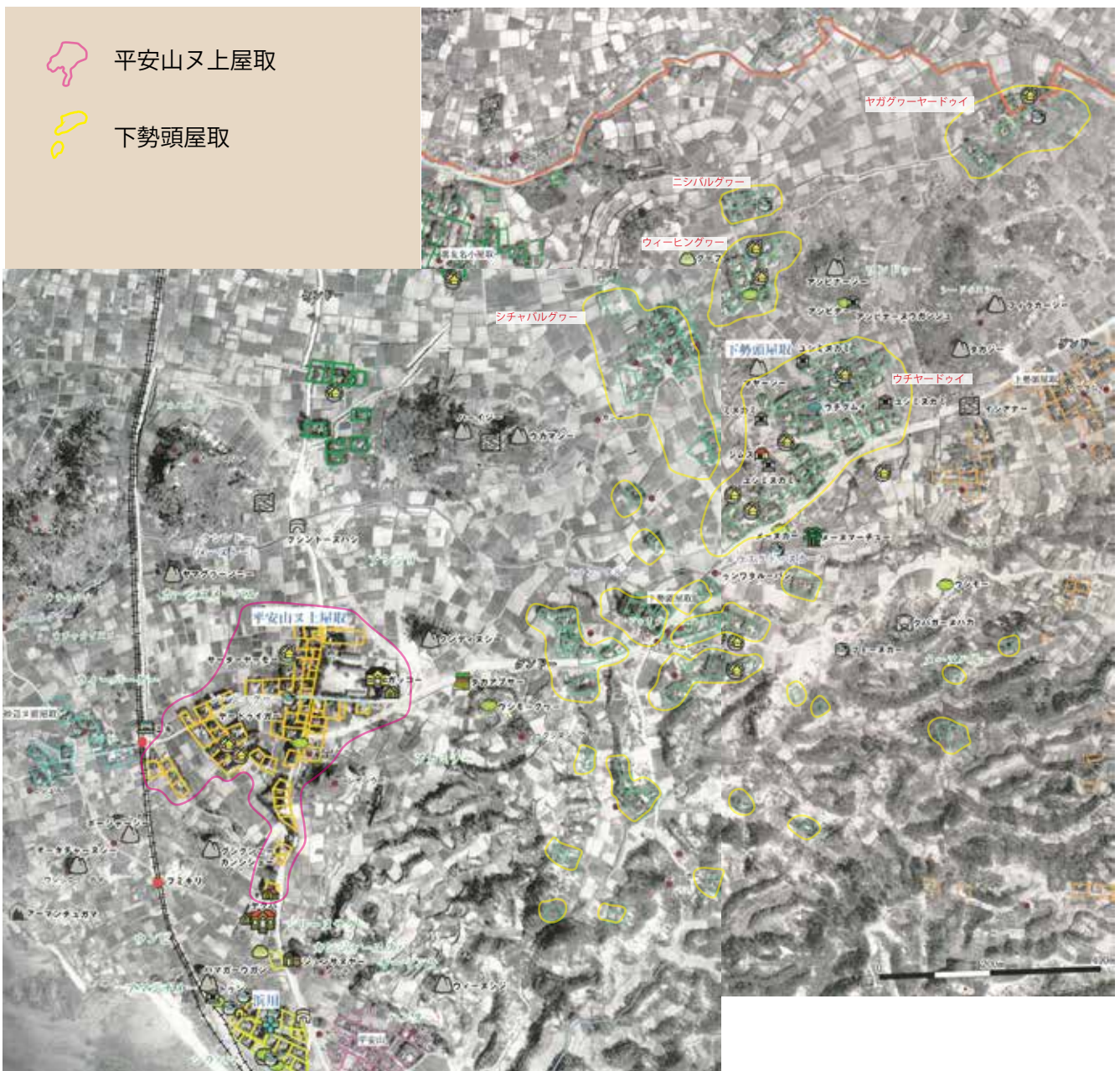
この3家に続くのは、廃藩置県以後の明治時代に1897（明治30）年に知花家、1902（明治35）年に仲泊、松島家が転入し、大正時代に6家（与儀、伊禮、稲嶺、島袋、安次嶺、新里）、昭和に6家（亀島、金城、有銘、島袋、渡慶次、知花）が転入している。初期の3家以外をみると北谷、平安山、北谷ヌ前屋取、上勢頭屋取、下勢頭屋取、千原屋取、野国兼久、野里、中城村屋宜原、那覇の通堂、久米島などからの転入も見られ、新里、亀島、金城家が雑貨店、スバ（そば）屋を島袋（屋号：通堂島袋）、運天（屋号：蕎麦屋運天小）、散髪屋を伊禮、高江洲、荷馬車業を渡慶次が営んでいる。

雑貨店やスバ屋、散髪屋があり「ちょっとした田舎町」とも言われた集落のほぼ中央を南北に通る県道は、1897（明治30）年以前は「踏み石で整備されていたため、雨天になると支障をきたした。」^{註2}とあり、「国頭街道」とも呼ばれたこの道は『沖縄県歴史の道調査報告書』^{註4}で近世の「宿道」、「中頭方西海道」が

想定されているルートでもある。県道は、明治30年代から準じ整備が進められ、1909（明治42）年に国頭街道改修工事が北谷間切北部（比謝橋近辺）の整備で完成しており、この整備では県内初の北谷トンネルが1905（明治37）年に開通している。

1900（明治33）年の「小学校令」改正公布の授業料免除が招いた生徒の増加に対応するため、北谷間切の北谷小学校と野国小学校を併合し、北谷間切の中央部となる平安山又上への移転が決定され、1901（明治34）年に同2校から旧校舎の移築と新校舎建設がおこなわれるが、建築工事中の11月3日に暴風により校舎の5割が破壊されたが、1902（明治35）年に高等科併設を経て北谷尋常高等小学校として開校する。県道沿いの正門の両側には蔡温松があったという。

1908（明治41）年に「北谷間切」から「北谷村」に改称し、北谷城の城下である「字北谷」に所在した木造瓦葺の北谷村間切役場（1897年に間切番所から改称されていた）が1910（明治43）年に解体運搬され、翌年の1911（明治44）年に平安山又上に移転し行政と教育の中心地となった。役場が解体運搬された同年に集落で最初の井戸「屋取ガー」が掘削され、この地下水の確認によって自家用の井戸が次々掘削され、水を汲みに浜川まで行っていた生活が改善されている。



第7図 平安山又上屋取と下勢頭屋取：※『北谷町の地名』より抜粋し加筆

1917（大正6）年に乗合バスが運行していた集落の西側に、那覇から北上し北谷城の海側をへて嘉手納の製糖工場に至る鉄軌道の敷設が1921（大正10）年に行われ翌年に開通した。この全長23.6kmの「県営鉄道嘉手納線」である「軽便鉄道」は「ケービンミチ」と呼ばれ、北谷村内には桑江ヌ前、平安山、嘉手納に駅があり、停留所（無人駅）が平安山ヌ上のほか北谷、野国に整備されており、開所当時は木造であった平安山駅は1933（昭和7）年頃に、南に20m程位置を移しコンクリート造に改築されている。「軽便鉄道」開通の同年に平安山ヌ上から国直にいたる群道が開通し、ウクマガイ川が架橋されている。平安山駅から東に延び集落内を通る道路を境にメーグミ（前組）とクシグミ（後組）に組分けされている。雑貨店やスバ屋は道沿いで営まれていた。

集落の人口について『平安山ヌ上誌』では、1904（明治37）年の「沖縄県災害地方田畑地租税免除に関する請願書」（7ヶ月に及ぶ旱魃による請願）にある18名の署名捺印から人口は150人と推測しており、1945（昭和20）年3月時点は首里系士族が26世帯、那覇系士族が25世帯、その他10世帯の61世帯395人（男198人、女197人：『平安山ヌ上誌』より）である。

集落内の屋敷配置図を『北谷町の地名』を基に勢理客家系、新城家系、禰覇家系の屋敷位置を見ると勢理客家系と禰覇家系は県道より西側、新城家系は県道の両側に位置しているが、この3家系のムートゥヤー（本家）はいずれも県道の西側にある。新城家が最初に居を構えた場所は、集落内の屋敷の最北に位置する与儀家の北側と伝承されていることから中央部へ移動したこととなる。

平安山ヌ上屋取（ヤードゥイ）でおこなわれた大きな行事は、豊年を祈願し日頃の労働を癒やす行事であるニングウチャーと盆に祖霊を送る踊りのヤイサー（エイサー）があるが、屋取集落であるため年中行事は家庭での行事が中心で仏壇や火の神を拝んでいる。正月の若水汲みをおこなうのは、1910（明治43）年に「屋取ガー」が掘削された後はウブガー（産井）とした世帯が多いが、それ以前は浜川のカーから若水を汲んでいる。平安山ヌ上屋取で唯一の拝所となっていたのは、「屋取ガー」井戸口の北側の石材上部をくり貫いて造られた香炉の側面に土帝君（トゥーティークン）が彫り込まれていたという。

集落の南側にある標高44.3mの岩山を平安山ヌ上屋取ではウガンヌシーと称しているが、その南側に「平安山ウガン」と称される御嶽があり、在来の古村である平安山の聖地である。戦前は赤瓦葺のウカミヤー（神殿）があり、白露の拝みが行われていたと言う。『北谷村史』には、「平安山オガン」とあり、近世期の北谷間切にいた5人のノロのうちの平安山ノロが祭祀を行っていた「オヤギヤクイ君ガ嶽」ではなかろうかとされている。このウカミヤー（神殿）は、現存せず、宮城区に設けた合祀所に祀られている。

南西側には、グシクンニーと呼ばれた標高34.5mの岩山があり、移民や出稼ぎなどで本土や海外に渡航する際に那覇港から出港する船を見送った場所には、1940（昭和15）年民間防空機関として「21番嘉手納監視哨」の名称をもつ監視哨施設が設置されており、米軍機の機銃掃射を受けている。

下勢頭屋取（シチャシードゥヤードゥイ）

最初の移入者で、村立てをした佐久川家の名を取って「佐久川屋取（サクガーヤードゥイ）」と呼ばれることもある。

佐久川屋取は、通称「勢頭七組（シードゥナナクミ）」と呼ばれた小屋取の1つで、1800年代の前半頃に入植したと考えられており、地縁血縁関係をもって集落が形成されていたとされる。前述の「勢頭七組」のひとつであった。

村立てをした佐久川家は住居を構え定着したが、後に首里に移転し、その分家の佐久川家はその屋敷に転入している。下勢頭屋取の喜友名家の移入経緯には、与論喜友名（ユンヌキユウナ）の初代の喜友名朝隆は与論島から上勢頭屋取に移住したとの口碑がある。

下勢頭屋取には、屋取発生地帯と言われるウチャードゥイ（内屋取）のほかに、シチャバルグラー（下原小）、ウィーヒングラー（上辺小）、ニシバルグラー（北原小）、ヤガグラーヤードゥイ（屋我小屋取）と呼ばれた小集落とウチャードゥイより南側に点在する屋敷や屋敷の纏まりがあるが、それらをまとめた呼称はなく、これとは別に組分けの名称に郡道を境に北部をクシンダカリ（後村渠）、南部をメーダカ



第 8 図 ① 平安山又上・下勢頭屋取 (1945年) : 北谷町の地名より抜粋



第 8 図 ② 平安山又上屋取 (1945年 8 月 18 日) : 沖縄県立公文書館所蔵資料より抜粋



第 8 図 ③ 平安山又上屋取 [2021年 (令和 3 年) : (株) パスコのパスカルウェブより抜粋]



第9図 平安山又上屋取と爆煙があがる浜川ウガン (1945年4月1日) : 沖縄県立公文書館所蔵資料に加筆



第10図 米軍上陸時の平安山又上屋取や砂辺・砂辺又前 (写真右中央: 平安山又上屋取、左上: 中飛行場、中央: 砂辺) : 沖縄県立公文書館所蔵資料より抜粋し加筆

リ（前村渠）と称しているが、集落を1～4組の組分けがなされてからは、前者は3・4組、後者は1・2組を合わせて称されたが2組は郡道北側の組であるが行事の際にはメーダカリに含まれている。

集落内の道には、最も古い道と言われるウチャードゥイミチとシチャバルグワーミチがあり、前者はサンゴ等を砕いた細かい砂利（イシグー）を敷いた道で馬車も通る道、後者の道沿いには1926（昭和元）年に養蚕室として作られたが長続きせず集会所としても利用された事務所（ジムス）が1940（昭和15）年に北谷尋常小学校分教場となっている。

集落の人口は、戦争により資料が失われたため『下勢頭誌』では記憶を辿って推定しており、1944（昭和19）年8月頃は750人位とされ、『北谷町の地名』で示す1945（昭和20）年の戸数は135戸である。

集落内の屋敷配置図を『北谷町の地名』を基に屋取を形成する血縁集団の屋敷の分布を見ると、村立てをした佐久川家の下勢頭屋取での本家はウチャードゥイにあり佐久川姓の分家は、本家周辺やシチャバルグワーとウィーヒングワーに分布し、同屋取で最も多い喜友名姓は屋取内に広く分布しており、その次に多い花城姓はウチャードゥイに多く分布している。

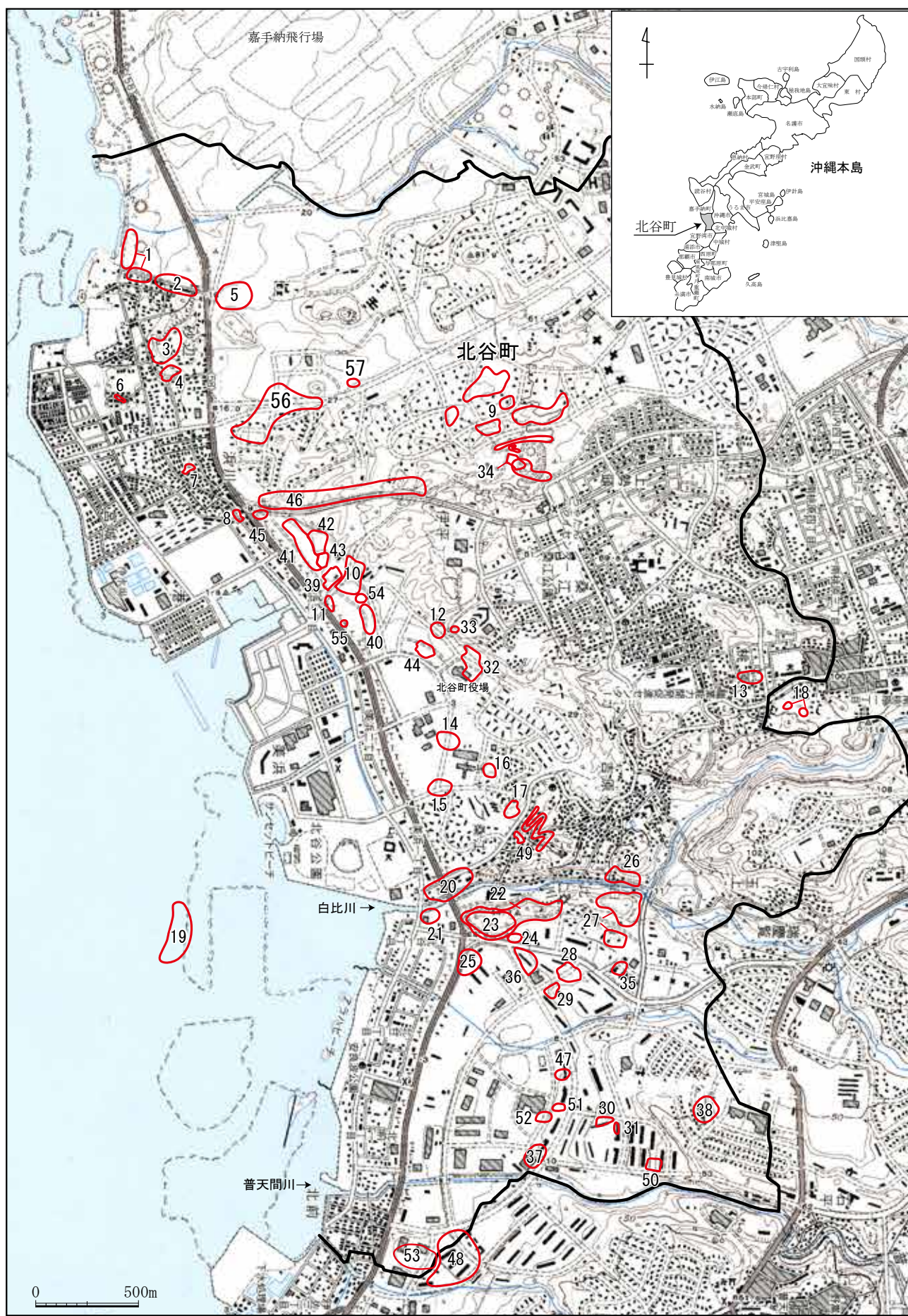
屋取集落で行われた年中行事のうち集落全体の拝みとして行われたのは、集落についての過年の守護に感謝（おふとち）と来年の守護を祈願する「おふとち（ウグランプトゥチ）」が行われており、その際の拝所は①～④ユシミノカミ（喜友名朝栄氏著『佐久川屋取』や『下勢頭誌』では、フンシーの四神：ユシミ（四角）の神、集落の守護神（四シンハシンのフンシの神などの呼称がある。）⑤遊び神、⑥～⑧井戸の三神〔⑥トゥクガー（徳川：ナガンニーともいう。）、⑦フェーナカー（南ノ井戸）、⑧メーナカー（前ノ井戸）〕、⑨ウチグムイ〔（内グムイ）、ナーカクムイともいう。：溜池・池沼〕の9か所で行われている。

⑤遊び神は、字で行った芝居である「アシビ」を、集落の守護神に祈願又は感謝の意を持って奉納する趣で行われていたと言う。「アシビ」の起こりは、「悪疫がはやった際に悪疫を払い除けて集落民の命果報を守ってください。そのお礼に若者達に遊びをさせて奉納します。」と守護神（四シンハシンのフンシの神）に祈願したとの口碑があり、ウチャードゥイ北側の岩山を「アシビジー（遊び庭岩）」、その裾野の広場を「アシビナー（遊び庭）」と称しており、広場南側に所在したアシビナーヌウガンジュ側の舞台上、1886（明治19）年頃から行われるようになり1927（昭和2）年以降は字事務所で行われていたという。また、「ニングウチャー」の際にもアシビナーの神（遊び神を祀ってある拝所）に御馳走を供え、奉納が行われている。

両屋取集落は、アジア・太平洋戦争における沖縄島への米軍上陸により占領され集落は失われる。現在の嘉手納飛行場の前身は、旧日本陸軍の中（なか）飛行場（屋良・嘉手納飛行場とも称された。）である。1944（昭和19）年4月下旬に着工し、北谷村屋良・東・野里・野国・国直の5字にまたがる農耕地を整地して建設された飛行場は9月末に完成するが、「十・十空襲」と称される米軍艦載機による10月10日の南西諸島大空襲による爆撃を受ける。この空襲後の昭和40年1月から2月にかけて、平安山ヌ上屋取の中央付近で県道と郡道が交差する十字路（カジマヤ）から東側に小さな飛行機を飛ばせる程の幅員を有する誘導路が整備されている。中飛行場は1945（昭和20）年3月23日から4月1日の沖縄本島上陸地の事前制圧を目的とした激しい攻撃を受け（第9図）、3月30日に日本軍が滑走路を放棄する際に破壊され、米軍上陸の艦砲射撃と爆撃のすさまじい攻撃を受けるが、上陸1時間後には米軍に占拠される（第10図）。上陸日に不時着用として使用可能な修復が行われ、4月5日に本島中部一帯を制圧した米軍は、同年6月には大型爆撃機が離発着できる全長2,250m級の滑走路を完成させるなど基地整備・拡張が行われる。その後も現在に至るまで基地整備が行われており、平安山ヌ上屋取の家屋は、米軍上陸後の4月3日にはほとんど無くなっている（第8図①～③）。

近世に確立した村は造成工事や繁茂した森に埋もれたが、基地内の文化財として拝所や井戸、古墓等が保存され集落周辺の特徴的な岩山がランドマークとなり、往時の景観を垣間見る手がかかりとなっている。

整備拡張される嘉手納飛行場の管理が強化され、1948（昭和23）年に全面通行立入禁止となり、分村して行政運営を行う必要が生じたことから同年12月4日付けで北谷・嘉手納村に二分することとなり現在に至る。



第11図 北谷町の位置と遺跡分布 (北谷町地形図 2万5千分の1に加筆)

第1表 北谷町遺跡一覧

2021年10月現在

No.	遺跡名	時期	所在地
1	砂辺(すなべ)サーク原貝塚	貝塚後期	字砂辺差久原
2	砂辺サーク原遺跡	貝塚前IV期～近世	砂辺加志原
3	砂辺貝塚	貝塚前IV期～グスク	砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	貝塚後期	砂辺加志原
5	カーシーノポントン遺物散布地	貝塚前V期	砂辺加志原
6	クマヤー洞穴遺跡	貝塚前II期～戦前	砂辺村内原
7	浜川千原岩山(はまがわせんばるいわやま)遺物散布地	貝塚前V期	浜川浜川千原
8	浜川ウガン遺跡	貝塚後期	浜川浜川
9	上・下勢頭区古墓群(かみ・しもせどくこぼぐん)	近世	上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原(いれいばる)遺跡	貝塚前I期～戦前	伊平伊礼原
11	伊礼原B遺跡	貝塚I～V期・晩期・近世・戦前	伊平伊礼原
12	桑江ノ殿(くわえのとうん)遺物散布地	グスク～近世	桑江小堀原
13	鹿化石出土地	旧石器	吉原栄口原・桃原
14	前原古島(めーばるふるじま)A遺跡	近世	桑江桑江原・前原
15	前原古島B遺跡	近世	桑江前原
16	伊地差久原(いじさくばる)古墓	近世	桑江伊地差久原
17	前原古墓群	近世	桑江前原
18	桃原(とうばる)洞穴遺跡	中世	吉原東新川原
19	インディアン・オーク号の座礁地	近世	北谷地先
20	池(いち)グスク	グスク	吉原東宇地原・西宇地原
21	白比川(しらひがわ)河口遺物散布地	貝塚前II期	北谷西表原
22	北谷城(ちやたんぐすく)遺跡群	貝塚後期末～グスク	大村城原
23	北谷城	貝塚後期末～近世	大村城原
24	北谷城第7遺跡	貝塚後期～グスク	大村城原
25	北谷番所址	近世	北谷北谷原
26	吉原東角双原(よしはらあがりちぬまたばる)遺物散布地	グスク	吉原東角双原・西角双原
27	山川原(やまがーばる)古墓群	近世	大村山川原
28	玉代勢原(たまよせばる)遺跡	貝塚後期末～グスク	大村玉代勢原
29	長老山(ちやうろうやま)遺物散布地	グスク～近世	大村玉代勢原
30	大道原(うふどうばる)A遺跡	グスク	北谷大道原
31	大道原B遺跡	貝塚前V期	北谷大道原
32	後兼久原(くしかにくばる)遺跡	グスク	桑江後兼久原・字桑江小堀原
33	ジョーミーチャー古墓	グスク	桑江小堀原
34	伊礼伊森原(いりーいーむいばる)遺跡	グスク	上勢頭伊礼伊森原
35	後原(くしばる)遺跡	グスク～近世	大村玉代勢原
36	塩川原(すーがーばる)遺跡	グスク	北谷塩川原
37	稲千原(んにふしばる)遺跡	貝塚後期	北前稲千原
38	横嵩原(よこたけばる)遺跡	グスク	北前横嵩原
39	伊礼原D遺跡	貝塚後期～近世	伊平伊礼原
40	伊礼原E遺跡	貝塚前II期～近世	伊平伊礼原
41	平安山原(はんざんばる)A遺跡	貝塚後期～近世	伊平平安山原
42	平安山原B遺跡	貝塚後期～近世・戦前	伊平平安山原
43	平安山原C遺跡	貝塚後期～近世	伊平平安山原
44	小堀原(くむいばる)遺跡	貝塚後期～近世	桑江小堀原
45	千原(せんばる)遺跡	グスク	伊平千原
46	大作原(うふさくばる)古墓群	貝塚後期・近世	伊平大作原
47	東表原(あがりうむていばる)遺跡	貝塚前V期	北谷東表原
48	新城下原(あらぐすくしちやばる)第2遺跡	貝塚前I期～近世	北谷安仁屋原
49	東宇地原(あがりうじばる)古墓群	近世	吉原東宇地原
50	大道原C遺跡	近世	北谷大道原
51	大道原D遺跡	グスク	北谷大当原
52	高畔原(たかぶしばる)水田跡	近世～戦前	北谷高畔原
53	安仁屋原(あにやばる)遺跡	グスク～近世	北前安仁屋原
54	伊礼原A遺跡	貝塚前III期～貝塚後期	伊平伊礼原
55	蔵森(くらんもー)	近世～戦後	伊平伊礼原
56	平安山又上集落跡	近世～戦前	宇浜川
57	下勢頭集落跡	近世～戦前	字下勢頭

註：時代表記は概ね「グスク」→「10～17世紀前半」、「近世」→「17世紀後半～明治以前」、「戦前」→「1945年以前」

*番号は第11図と一致

第III章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査区及びグリッド

設定

調査地は、嘉手納飛行場保安施設設備地内において、平成29年度の埋蔵文化財確認調査により遺構・遺物包含層が確認された場所を調査対象として4地区に分けて設定した。4地区は嘉手納第1ゲートから始まる道路の周辺となっており、西側から東側に向けてA・B・C・D地区と設定した(第12図)。調査面積はA地区444㎡、B地区2,149㎡、C地区658㎡、D地区1,226㎡の合計4,477㎡となっている。なお、A・B・C地区の3地区が平安山又上集落跡、D地区が下勢頭集落跡の遺跡の範疇となっている。

西側のA地区から東側のD地区まで直線距離で約700mと長い距離での調査となったことから、調査地全体を網羅できるようにグリッド設定を行った。グリッド設定はX=37000m、Y=25100mを基準に、X=36600m、Y=25900mまでの間に方位に沿ってメッシュを組み、100M×100Mを大グリッドとして算用数字を設定し、10M×10Mを小グリッドとして南北方向を北から南に向かってアルファベットでA～J、東西方向を西から東へ向けて1～10と設定した(第12図)。グリッド名は、大グリッドと小グリッドを合わせた名称を用い、「26-D5」「8-J4」などと表記した。

掘削作業

表土掘削は0.5m毎に磁気探査を実施しながらバックホウを用いて行った。磁気探査では、米軍に帰属する不発弾が3回出土した。その際は速やかに米軍憲兵隊及び消防隊によって処理された。掘削土は10tダンプトラックを用いて残土置き場へ運搬した。

遺物包含層は移植ごてや手鋏、ねじり鎌を用いて掘削した。出土遺物は層位・グリッド毎に取上げ、特徴的な遺物等は実測図作成と写真撮影を行った。遺構検出はねじり鎌を用いて行った。遺構掘削は基本的に遺構の長軸で半裁し、溝は規模に応じて数か所の土層観察用畔を設定して掘削した。掘削には移植ごてやスプーン等を用い慎重に行った。

記録作業

実測は主に平面図を写真測量とトータルステーションを併用して行い、断面図は手実測で行った。写真撮影は35mmフィルムカメラ(カラーリバーサル・モノクロネガ)と1000万画素以上のデジタルカメラを使用した。また、特徴的なものに関しては6×7判フィルムカメラ(カラーリバーサル・モノクロネガ)も使用した。遺構検出と完掘時にはラッカースプレーやチョーク等で遺構の輪郭をなぞり、高所作業車27mを使用して上空から全景の撮影を行った。

埋め戻し

発掘調査完了後は埋め戻しを行い現状復旧した。埋め戻しは場外搬出した掘削土をそのまま使用した。10tダンプトラックで残土置き場から運搬し、タイヤローラーで転圧しながらバックホウ及びブルドーザーで埋め戻した。なお、調査時に露出させた埋設管は管上30cmまで保護砂を敷き詰めた。

現状復旧は、芝生部分であった場所は高麗芝を使用して復旧した。道路であった場所は掘削前と同じになるように道路工事を行い復旧した。

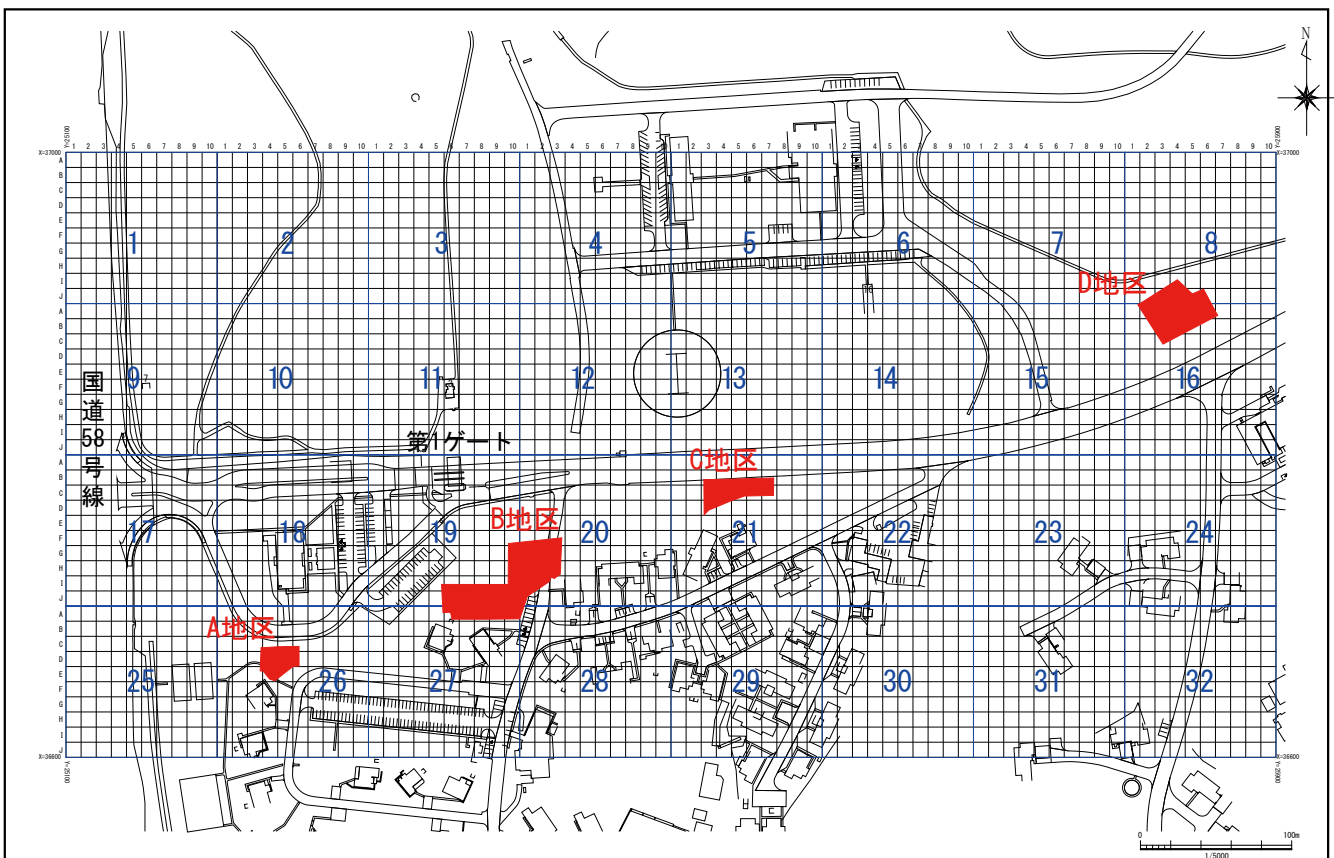
遺構記号の付与と報告方法

調査時には第1表のように遺構記号を設定した。この中でもSK(土坑)と設定したが、検討の結果でSP(柱

穴・ピット) のほうが妥当であろうと判断したもの等がある。しかし、遺構が数多く確認され、修正を行うと混乱が生じることが懸念されたことから、遺構名は修正しないこととした。そのため、本報告での遺構名は調査時の遺構名のままである。遺構の解釈と遺構名が合わない場合があるが、このように報告する。

第2表 遺構記号凡例

遺構記号	遺構種類	遺構記号	遺構種類	遺構記号	遺構種類	遺構記号	遺構種類
SA	石積	SH	—	SO	—	SV	—
SB	建物	SI	—	SP	柱穴・ピット	SW	—
SC	—	SJ	—	SQ	集石	SX	不明遺構
SD	溝	SK	土坑	SR	石列	SY	—
SE	井戸	SL	炉・カマド	SS	礎石	SZ	—
SF	砂利敷遺構	SM	石組土坑	ST	—	石敷き	石敷き
SG	—	SN	—	SU	—	—	—



現場安全及び赤土流出対策状況



芝張り復旧作業



道路アスファルト復旧作業

第12図 調査区及びグリッド設定図

第2節 層序

本調査では、直線距離で約700mと長い距離のなかで4つの調査区（A・B・C・D地区）に分けて調査を行ったため、土層の堆積状況は調査区を通して確認することができなかった。しかし、土層の特徴や遺物の出土状況から基本層序として4大別することができた。以下、各層の概要について記述し、第13～19図及び第3・4表に示す。

第I層 現代

表土及び1945年の米軍上陸後から現在までの米軍基地建設に伴う造成土を第I層とした。I層を細分すると、①表土、②米軍基地建設に伴う大規模な盛土・造成土、③1945年の占領後すぐに米軍によって行われた整地・整備活動に伴う土層となる。③については、当地を平坦に整地・整備する際に、下層に位置する第II層が大型の重機等によって移動・均された土壌となっていた。そのため③に関しては、II層と同じ土壌であるが現代遺物が混在している。II層との違いは、現代遺物が出土すること、石等の混入物が多いこと、層全体が本来のII層よりもくすんだ色調をなしていることで区別した。以下、各地区の概要について記述する。

A地区は表土（Ia層）及び米軍基地建設に伴う盛土・造成土（Ib層）を一括してI層、米軍による整地活動によって移動された土層をIc層及びId層とした。なお、Ic層は下層のII層の土壌であるが、Id層は下層の堆積では確認されなかった土壌となっている。B地区は表土及び米軍基地建設に伴う盛土・造成土をI1層、米軍による整地活動によって移動された土層をI2層とした。I2層は下層のII3層の土壌となっている。C地区は表土及び米軍基地建設に伴う盛土・造成土となっており一括してI層とした。D地区は表土が芝生と森林の場所に分かれていたが、堆積としては連続していたことから表土をI1層とし、米軍基地建設に伴う盛土・造成土をI2層とした。

第II層 近代・近世に伴う土層

米軍に占領される直前まで存続していた平安山又上・下勢頭集落に伴う造成・堆積土層、及びその集落と関連した畑等の耕作土層をII層とした。時期の下限は米軍上陸前後の砲撃による火災と考えられる焼土（B地区II1a層、C地区SB1）が確認されたことから1945年の戦時中であることが判明した。上限は明確な根拠が確認されなかったため不明であるが、出土遺物でグスク時代まで遡るものはなかったことから近世までとした。本調査の主体層となっている。以下、各地区の概要について記述する。

A地区は耕作土層となっていた。戦後の米軍基地建設に伴う大規模な工事によって大きく削平されており、堆積はほとんど残っておらず、確認できる部分で10cm程度となっていた。地山上面において当層を埋土とした溝状遺構（SD1、2）を検出しており、畑に伴う溝であると考えた。遺物の観察から戦前の時期にあたる遺物が主体となっており、近世まで遡るものがなかったことから近代の時期と判断した。

B地区は東側で平安山又上集落に伴う造成土層（II1、2層）、西側で耕作土層（II3層）が確認された。調査区のほとんどが戦後の米軍基地建設に伴う大規模な工事によって大きく削平されていたが、南東側では米軍上陸前後の砲撃による火災と考えられる焼土（II1a層）が確認できたことから、工事に伴う掘削の影響が少なく、そのまま盛土されて堆積の上部まで残存していることが確認された。平安山又上集落に伴う造成土層であるII1層とII2層であるが、II2層の大部分が削平されていたことや攪乱が調査区の中に大きく入っていたこと等から堆積の上下関係がつかめなかった。そのため、1、2層として付してあるが新旧関係での層序ではなく便宜的な記述となっている。II1層は調査区の南東側で確認されたものでありa、b層の2層に細分した。II1a層は焼土層となっており、戦時中に屋敷が焼けた痕跡と判断した。II1b層は近代から戦時中までに存続した集落に伴う造成土層である。上面は屋敷の遺構面となっており、建物を構成するピット群や土坑等を検出した。II2層も集落に伴う造成土であり、調査区東側の屋敷の区画の一部と考えられる溝状遺構（SD23）よりも東側で確認された。a、b、c、d層の4層に細分できた。上面は遺構面

となっており、屋敷の区画の一部と考えられる溝状遺構(SD23、SD26)を検出した。地形が本層の堆積によって溝状遺構よりも高くなっていることから、屋敷を構築する際の盛土・造成の役割を担っていたと考えられる。Ⅱ3層は耕作土層となっており調査区の西側で確認された。遺物の観察から近代の時期と判断したが、同時期と判断したⅡ1層及びⅡ2層よりは若干古い様相を示していたことから近世の可能性も考えられる。上面は遺構面となっており、建物を構成するピット群やブタが埋葬されたと考えられる土坑(SK72)、耕作に伴う溝(SD6)等を検出した。土層と遺構面の関係から、当地はもともと畑として使用していたが、後に屋敷として利用したことが看取される。なお、建物を構成するピット群等の遺構から出土した遺物もⅡ3層同様にⅡ1層及びⅡ2層よりも若干古い様相を示していたことから、当地の屋敷が集落の拡大・整備によって西側のⅡ1層及びⅡ2層側に移動したことが考えられる。

C地区は西側で平安山ヌ上集落に伴う造成土層(Ⅱ1層)、東側で耕作土層(Ⅱ2層)、Ⅱ1層の下層で耕作土層(Ⅱ3層)が確認された。なお、Ⅱ1層とⅡ2層は調査区中央で検出したSD18及びSD19を境に堆積していたことから新旧関係を確認することができなかった。Ⅱ1層は平安山ヌ上集落に伴う造成土層である。a、b層の2層に細分され、上面はともに大型の建物または施設の遺構面となっていた。a、b層ともに部分的にしか堆積していなかったが、これは遺構の残存状況から、米軍の基地建設に伴う工事で削平されたのではなく、もともとこの遺構群に伴ってこの場所のみに造成したものであると判断した。Ⅱ1層は周辺に類似する土壌が存在しないことから、造成土として他の場所から運ばれてきたものと考えられる。また、土層は転圧されて締め固められていたことから、大型な建物の構築に地盤が耐えられるようにしたものと思われる。当地は戦前の航空写真や聞き取りの史料から学校(第Ⅱ章第3節参照)が既存していたことが分かっており、これらはそれを裏付ける土層及び遺構群であることが判明した。学校の存続期間が1902(明治35)年から1945(昭和20)年までとなっており、本調査でもⅡ1a層の上面に米軍上陸前後の砲撃による火災と考えられる焼土(SB1)が確認されていることから、Ⅱ1層の上限は1902(明治35)年、下限は1945(昭和20)年であると位置づけた。なお、Ⅱ1a層とⅡ1b層の上面の遺構群はともに建物が想定できるものとなっていたことから、学校の存続期間内に建物が一度建替えられていることが判明した。Ⅱ2層は耕作土層となっている。a、b層と2層に細分した。Ⅱ2a層は土層の色調にムラがあり、白色粒の混入等も多かったことから米軍による整地活動によって移動された土層の可能性はあるが、遺物の出土量が少なく時期の判別ができなかったため、Ⅱ2b層と同じ土壌であることからⅡ層にまとめた。上面では直径80cmほどの大きなピットが10基確認されている。Ⅱ2b層は上面で耕作に伴うものと考えられる溝状遺構が確認された。Ⅱ3層は耕作土層となっている。調査区の西側においてⅡ1層の下層で確認され、a、b、c、d層の4層に細分された。Ⅱ3a層で遺構は確認されなかったが、上層との境目で横位に白色砂が堆積していたことから旧地表面となっていた可能性がある。Ⅱ3b層は上面にて土坑(SQ)を3基検出した。Ⅱ3c層では畑の区画と考えられる大型の溝状遺構が確認された。Ⅱ3層は1902(明治35)年から始まった学校に伴う造成土層であるⅡ1層の下位で確認されたことから、下限は1902(明治35)年以前と判断できる。上限は遺物の観察から近代若しくは近世末と考えられる。

D地区では下勢頭集落に伴う造成土層であるⅡ1、2層、耕作土層であるⅡ3層が確認された。D地区の地表は調査区中央が森林となっており、そこから南側にかけては芝生で比較的平坦となっているが、中央から東西及び北側にかけては勾配をなしており最大4mの標高差がある地形となっている。今回の調査では北側と東側、南側の大部分は戦後の米軍基地建設に伴う大規模な工事によって大きく削平されており、近代以前の堆積土は残っておらず地山であった。堆積土層であるⅡ層は、調査区中央及び南西部分で確認できた。下勢頭集落に伴う造成土層はⅡ1層とⅡ2層となっており、森林周辺で確認できた層をⅡ1層、森林内で確認された層をⅡ2層と分けた。Ⅱ1層は造成土層であり盛土の役割も担っている。a、b層の2層に細分できた。Ⅱ1層上面は遺構面となっており屋敷の区画と考えられる溝状遺構(SD42・43)を検出した。Ⅱ2層はa、b、c、d層の4層に細分された。Ⅱ2層の堆積状況から、ゆるやかな斜面地であった当地を盛土によって平坦にし、屋敷を構築したことが伺えた。上面は屋敷に伴う遺構面となっており、もともと地表に残っ

ていたフル、シーリとともに溝状遺構（SD35、36）、埋め甕、竈が想定できるSB3等を検出した。遺物の観察から近代と判断した。Ⅱ3層はa、b層の2層に細分した。耕作土層であり溝状遺構（SD7、33、41など）や土坑（SK15）を検出した。Ⅱ1層の下に堆積していること、検出した遺構の向きが屋敷址に伴う遺構と合わないことなどから、近世或いは近代でも古い時期と考えた。

第Ⅲ層 先史時代の遺物を包含する堆積土層

谷地（迫地）地形であったところに堆積したと考えられる土層をⅢ層とした。全体的に黒褐色から暗褐色の色調をなし、上方から下方へと粘質が強くなり、炭化物、焼土、マンガン、黄褐色粘質土を含む。水の影響を受けたと考えられ、マンガンが下方に向かうにしたがって大きくなり量も増える。層中には黄褐色の色調をした粘質土で植物の根痕が多くみられる。これらの特徴から数層に細分でき、細分された層の上面ではピットや土坑が確認されている。遺物はグスク時代及び貝塚時代の土器や石器が出土しており、近世以降の遺物は出土していない。これらのことからⅢ層は貝塚時代からグスク時代相当の時期と考えられる。以下、各地区の概要について記述する。

A地区では調査区南西側で確認された。地山が北東から南西に向けて傾斜しており、その傾斜部分に堆積している。層序の特徴から大きく1～3層の3層に大別でき、更に各層内の特徴をもとにa、b、c層の3層に細分した。層の堆積状況は下層のⅢ3層からⅢ1層に堆積していくにしたがって水平になっていく。Ⅲ層全体としては厚い部分で0.8mほどの堆積であった。層中からグスク土器、平底・くびれ平底土器と時代の違う土器が混在した状況で出土している。このことからⅢ層は周辺に存在するであろう時代の違う遺跡の土砂が流れ込んで堆積した土層と判断した。Ⅲ2層とⅢ3層の上面ではピット、土坑を検出した。出土遺物では時代の違う土器が混在している状況のため各遺構面の時期を決定することができなかったが、本層が流れ込みの堆積と判断したことから、出土遺物のなかでも時代が新しいものであるグスク土器を根拠にグスク時代の遺構面と捉えた。なお、後述（第IV章第1節）する自然科学分析の放射性炭素年代測定の結果からは2,405±30yrBPから825±25yrBPの年代観が得られている。

B地区は調査区中央の南側で確認された。平安山ヌ上集落に伴う層であるⅡ1層の下位で確認されており、堆積は0.3mほどの厚さであった。遺物は貝塚時代前期・後期の土器が数点出土しているが、量が少ないため時期を判断することができなかった。本層に関連する遺構は確認されなかった。層は調査区の更に南側に伸びている。

C地区は調査区西側のⅡ3層の下で確認された。堆積は薄く、遺物は土器が小破片で数点出土する程度であったことから、時期を判断することはできなかった。

第3表 基本土層注記表

A地区 基本土層注記

層		色・土質	特徴	備考	
大別	細分				
I	c	褐色シルト 2.5Y4/4	表土及び米軍基地に伴う造成土。a、b層一括表記。	米軍造成	
	d	にぶい黄褐色シルト 2.5Y5/4	白色粒、炭、礫含混じる。	米軍整地	
II		褐色シルト 10YR4/4	土粒大きい。	米軍整地	
III	1	a	黒褐色土 10YR3/2	6層土に3層が根痕、攪拌でみられる。	耕作
		b	黒褐色土 10YR3/2	炭、赤褐色土粒、褐色土粒、マンガン混じる。黄褐色粘質土の根痕が多量。	堆積
	2	a	暗褐色土 10YR3/3	炭、赤褐色土粒、褐色土粒、マンガン混じる。にぶい黄褐色粘質土の根痕少量。	堆積
		b	黒褐色粘質土 10YR3/2	炭、小石少量混じる。にぶい黄褐色粘質土の根痕多量。	堆積
		c	黒褐色粘質土 10YR3/2	炭、小石少量混じる。にぶい黄褐色粘質土の根痕が幅広く多量。	堆積
3	c	にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3	マンガンが大きく多量に含まれる。層の色調がまばら。	堆積	
地山		島尻マージが主体。調査区北側で部分的に国頭マージもみられる。III層が堆積している部分は黒色に変色しておりマンガン塊が混じる。		地山	

B地区 基本土層注記

層		色・土質	特徴	備考	
大別	細分				
I	1		表土及び米軍基地に伴う造成土。	米軍造成	
	2	褐色シルト 10YR4/4	焼土粒、炭化物、マンガン粒、石灰岩小礫混じる。	米軍整地	
II	1	a	にぶい赤褐色土 5YR4/4	焼土層。戦時中の火災痕跡。	集落
		b	にぶい黄褐色土 10YR4/3	白色粒多量、焼土粒、マンガン少量混じる。黄褐色マージが斑点、シミ状にみられる。	集落
II	2	a	褐色土 10YR5/6	やや粘性。白色粒混じる。灰黄褐色土の根痕が多くみられる。	集落
		b	褐色土 10YR4/4	白色粒、貝殻片混じる。	集落
II	2	c	褐色土 10YR4/4	白色粒、貝殻片少量混じる。	集落
		d	褐色土 10YR4/4	白色粒、貝殻片、礫少量混じる。	集落
II	3	a	褐色土 10YR5/4	炭化物、焼土粒、石英混じる。黄褐色のマージが斑点。シミ状にみられる。	耕作
		b	暗褐色粘質土 10YR3/4	マンガン粒・塊、焼土粒、石英混じる。黄褐色のマージが斑点・シミ状にみられる。	堆積
地山		島尻マージが主体。調査区の南側と西側に部分的に国頭マージもみられた。III層が堆積している部分は黒褐色に変色しておりマンガンが混じる。		地山	

C地区 基本土層注記

層		色・土質	特徴	備考	
大別	細分				
I			表土及び米軍基地に伴う造成土。	米軍造成	
II	1	a	褐色シルト 10YR5/6	転圧されて固く締まっている。白色石粒、炭混じる。	集落
		b	にぶい黄褐色シルト 10YR4/3	転圧されて固く締まっているがa層よりは緩い。白色石粒、炭、黄褐色土、黒褐色土混じる。くすんだ色調。	集落
II	2	a	にぶい黄褐色シルト 10YR4/3	白色粒多量。色調にむらがある。	耕作
		b	にぶい黄褐色シルト 10YR4/3	地山が攪拌して若干混じる。	耕作
II	3	a	にぶい黄褐色シルト 10YR4/3	白色粒、炭、黄褐色土、焼土混じる。上面は白色砂が横位にラミナ状に堆積。	耕作
		b	褐色シルト 10YR4/4	白色粒、炭、黄褐色土、焼土混じる。	耕作
		c	暗褐色シルト 10YR3/3	白色粒、炭、黄褐色土、焼土を少量混じる。	耕作
III	a	a	褐色土 10YR4/4	やや粘性。白色粒、炭、赤褐色土粒混じる。	堆積
		b	黒褐色土 10YR3/2	やや粘性。白色粒、炭、赤褐色土粒混じる。	堆積
		c	褐色粘質土 10YR3/4	黄褐色粘質土の根痕がみられる。	堆積
		d	褐色粘質土 10YR3/4	黄褐色粘質土の根痕がみられる。	堆積
地山		調査区の東側は国頭マージが主体、西側は島尻マージが主体。III層が堆積している部分は黒褐色に変色しておりマンガンが混じる。		地山	

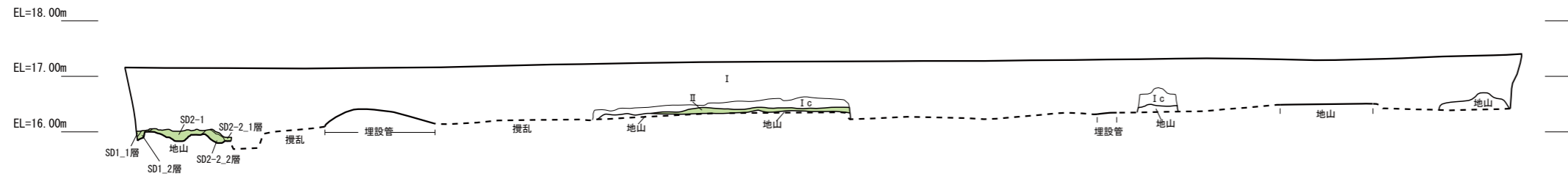
D地区 基本土層注記

層		色・土質	特徴	備考	
大別	細分				
I	1	褐色土 10YR3/1	現表土（芝生及び森林）。	米軍造成	
	2		米軍基地に伴う造成土。	米軍整地	
II	1	a	褐色土 10YR4/6	土粒やや粗目。5mm大の礫少量混じる。	集落
		b	褐色土 10YR4/6	土粒やや粗目。5mm大の礫少量混じる。粘性強い。	集落
II	2	a	褐色土 10YR4/6	礫、国頭マージ土混じる。	集落
		b	褐色土 7.5YR4/6	国頭マージ土混じる。	集落
		c	褐色土 10YR4/6	国頭マージ土混じる。	集落
		d	褐色土 7.5YR4/6	国頭マージ土若干混じる。	集落
		a	褐色土 10YR4/6	粘性強い。	耕作
		b	にぶい黄褐色シルト 10YR4/3	下層の地山がブロックで混じる。	耕作
地山		島尻マージもみられるが国頭マージが主体。		地山	

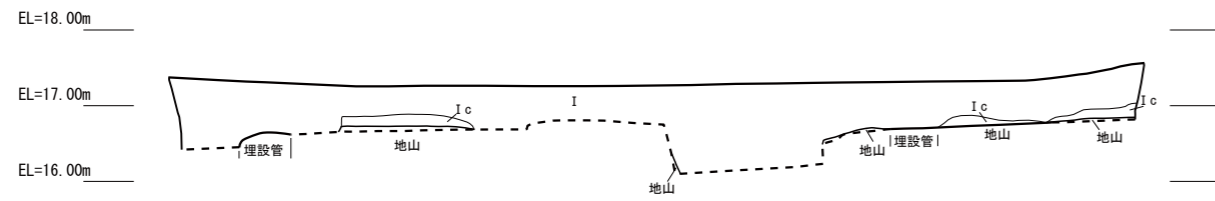
第4表 各地区層序分類表

層	A地区		B地区		C地区		D地区				
	土地利用・細分層	特徴	土地利用・細分層	特徴	土地利用・細分層	特徴	土地利用・細分層	特徴			
I	米軍造成	現表土及び米軍基地建設に伴う造成土。	米軍造成	1 現表土及び米軍基地建設に伴う造成土。	米軍造成	現表土及び米軍基地建設に伴う造成土。	米軍造成	a 現表土（芝生、森林）			
	米軍整地	米軍による耕作土の整地・整備。	米軍整地	2 米軍による耕作土の整地・整備。				b 米軍基地建設に伴う造成土。			
II	耕作	基地建設に際して大きく削られている。出土遺物から近世に遡るものはないことから、近代の時期と判断した。	集落	1 a	戦時中の火災による焼土。	集落	1 a	層上面に戦時中の火災痕と思われる焼土面（SB1）が見られたこと。1902年から当地に学校があることが記録に残っていたことから、1902年から1945年まで存続した学校に伴う土層と判明した。A、b層との連携面から、建て替えが1回はあることが判明した。			
				b	近代の集落に伴う造土。広大な範囲で上部が米軍により大きく削られているため1層、2層と層を分けたが同時期と考えられる。検出した溝を単位に屋敷の配置が想定できる。			b	近代の耕作土。b層上面は溝状遺構、ピットが検出した遺構面。A層は戦後の米軍により整地された可能性あり。		
				c				c	近代及び近代の耕作土。B層上面では土坑が検出。C層上面では溝状遺構が検出。		
				d				d			
III	堆積	1b層、2層、3a層上面は遺構面、ピット、土坑等が検出。貝塚時代の土器出土。調査区より西側に広がっている。	堆積	調査区の南側で確認された。土器敷点出土。調査区より南側に広がっている。	堆積	1 a	2 a	調査区の西側で確認された。南東から北西に向けて傾斜して深く堆積している。土器敷点出土。調査区より西側に広がっている。			
								b		b	
								c		c	
								d		d	
地山		島尻マージが主体で部分的に岩盤・国頭マージが確認された。									

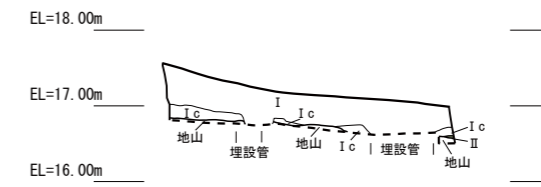
①北壁



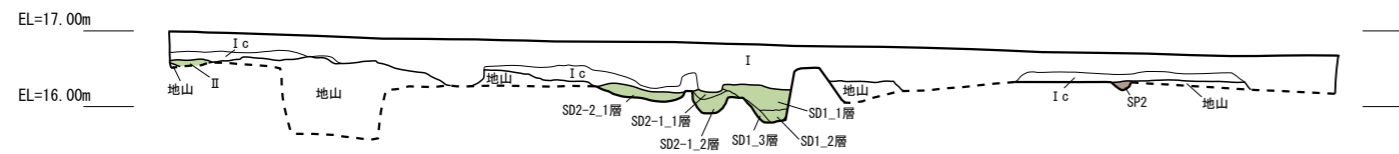
②東壁



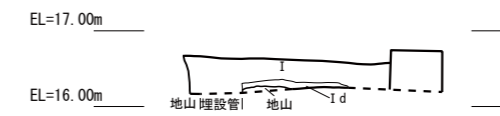
③南壁



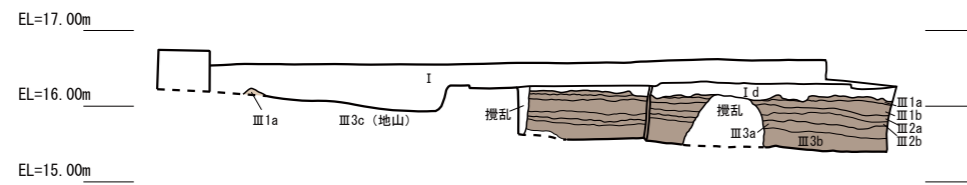
④南東壁



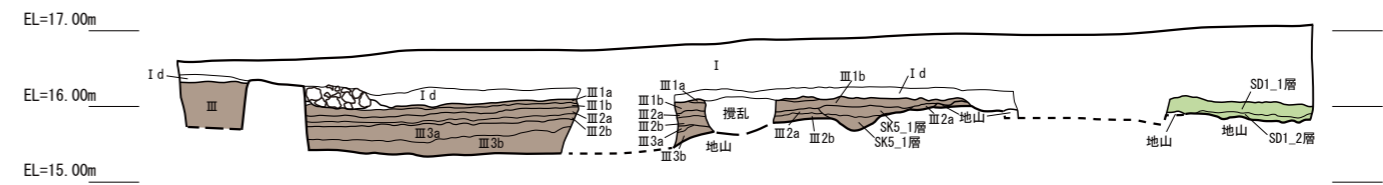
⑤南西壁1



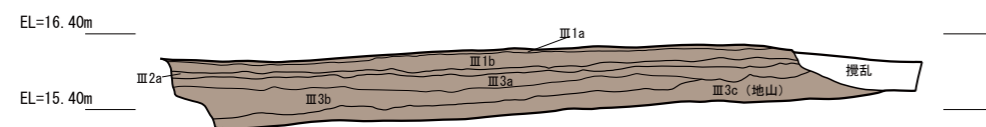
⑥南西壁2



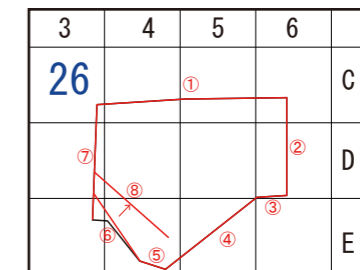
⑦西壁



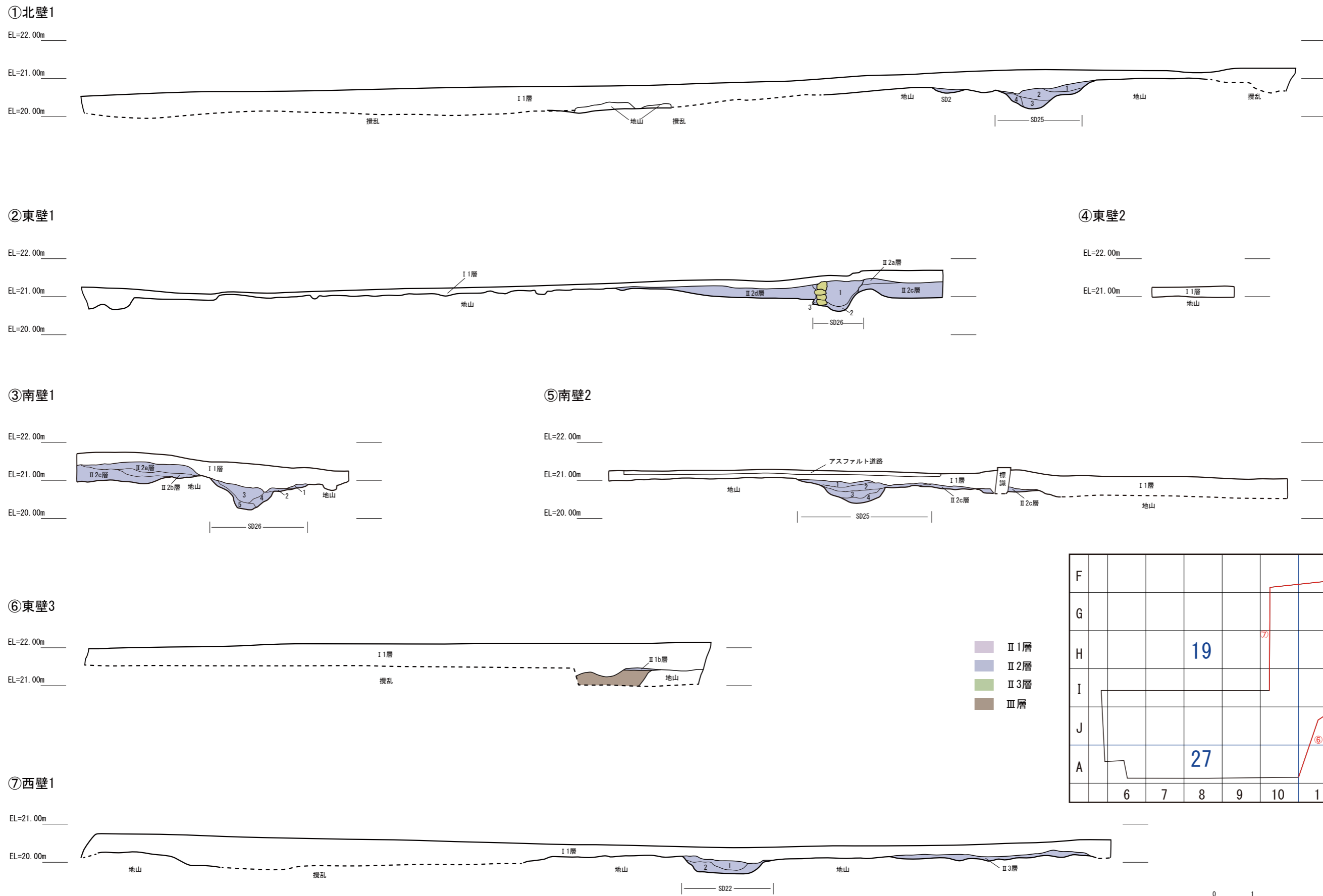
⑧攪乱部分 (Ⅲ層堆積部分) 北壁



II層
III層



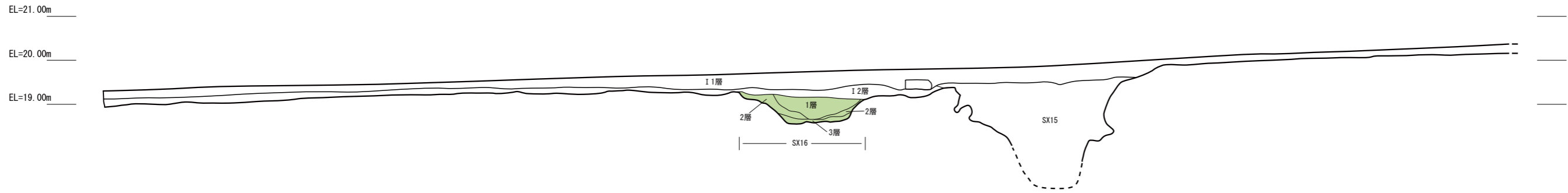
第13図 A地区の層序



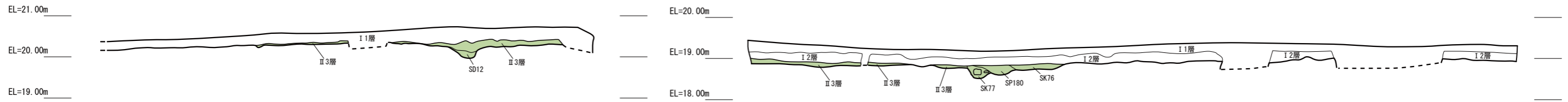
第14図 B地区の層序1



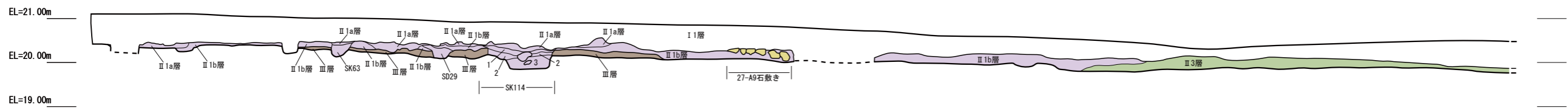
①北壁2



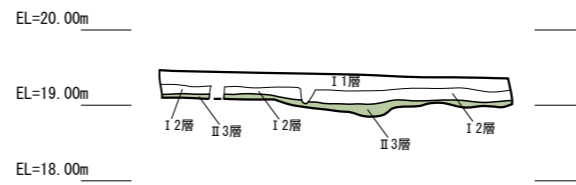
②西壁2



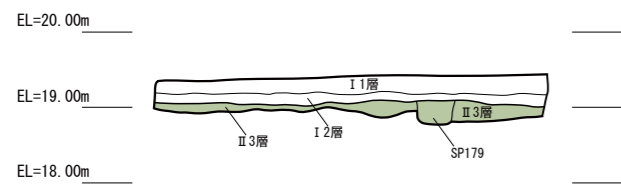
③南壁3



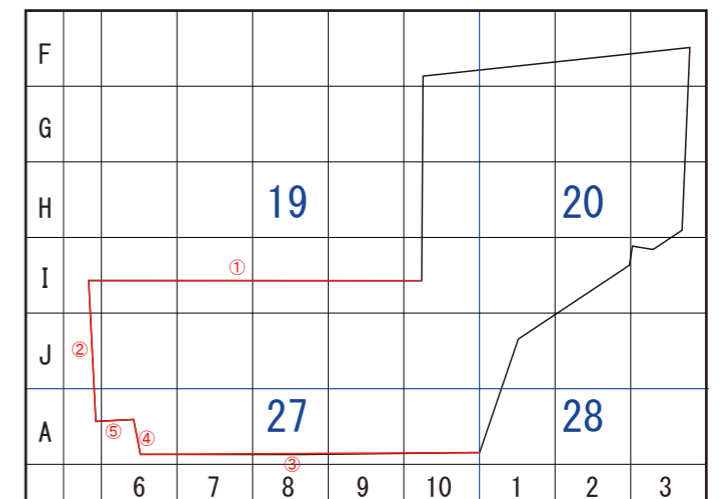
④西壁3



⑤南壁4

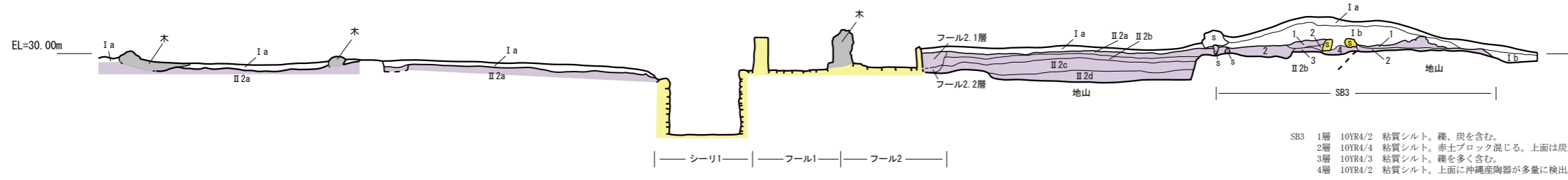


- II 1層
- II 2層
- II 3層
- III層

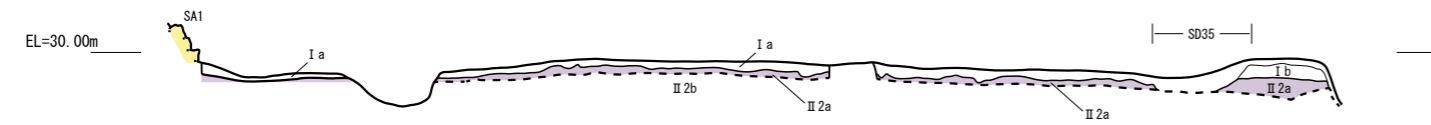


第15図 B地区の層序2

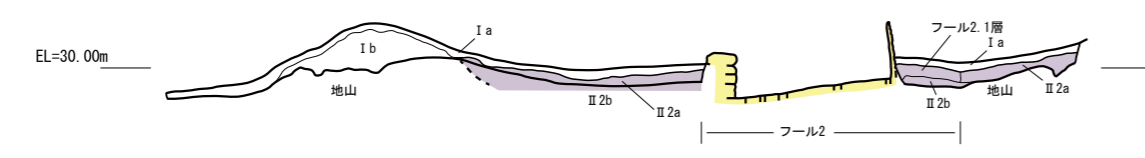
① Aライン北壁



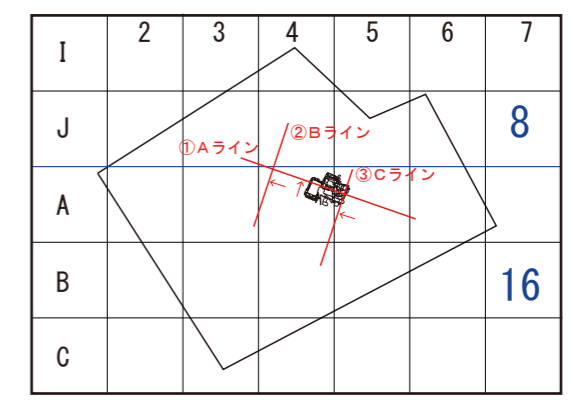
② Bライン西壁



③ Cライン西壁



- II 1層
- II 2層
- II 3層

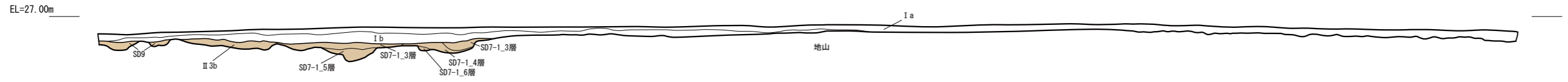


第17図 D地区の層序1

①北西壁1

D地区西側ゴルフ場

D地区北側ゴルフ場(西)

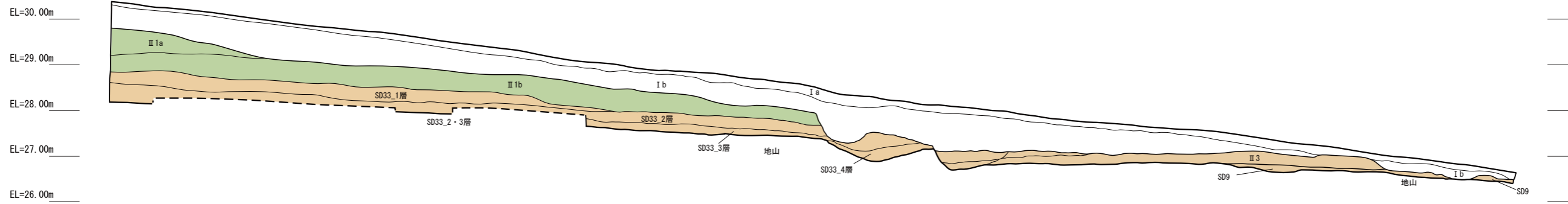


②南西壁

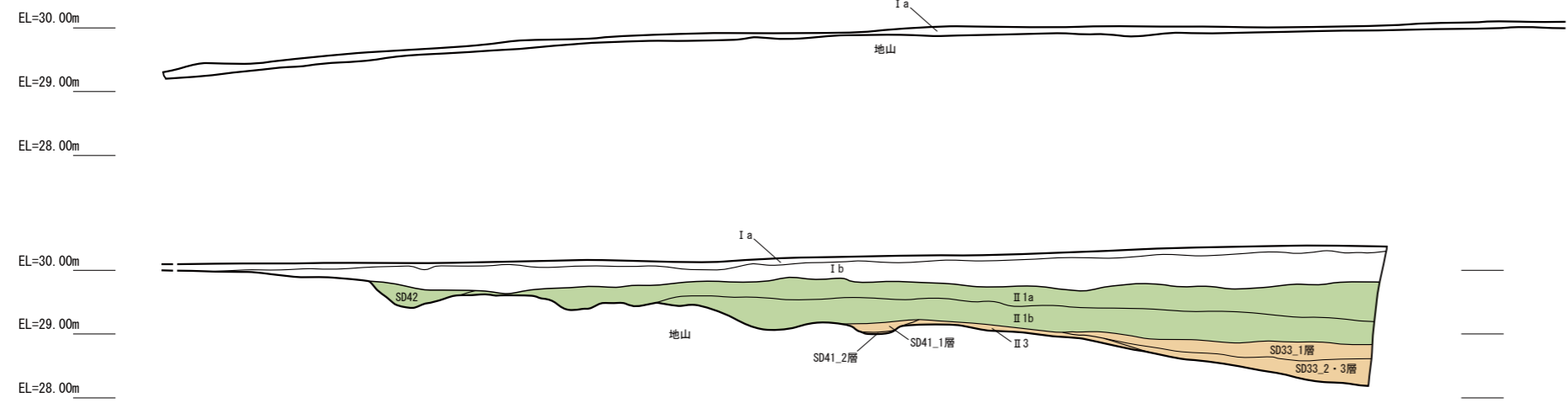
D地区南

D地区西

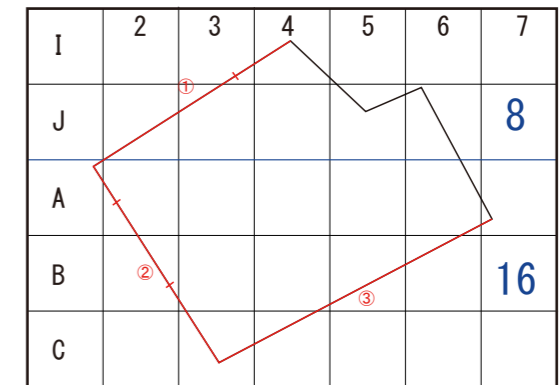
D地区西側ゴルフ場



③南東壁

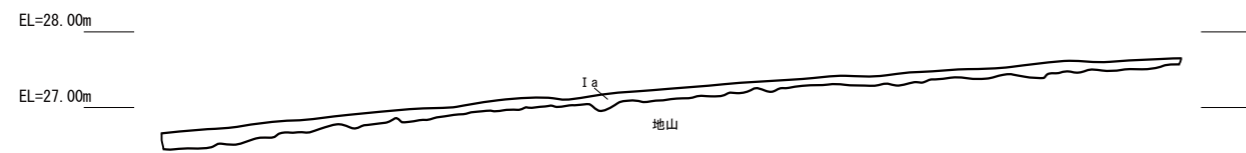


- II 1層
- II 2層
- II 3層

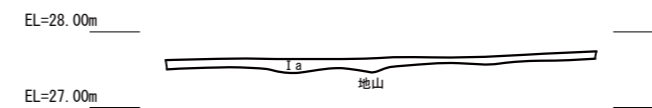


第18図 D地区の層序2

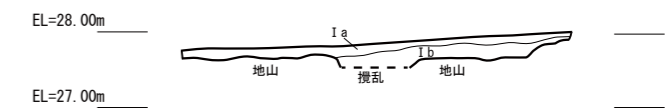
①北東壁1



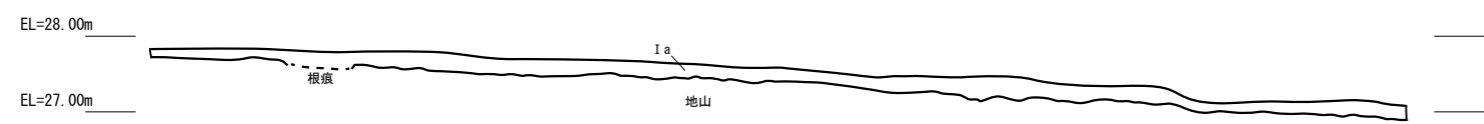
②北西壁



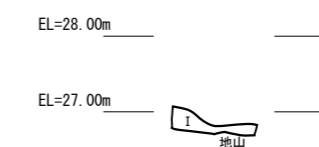
③北東壁2



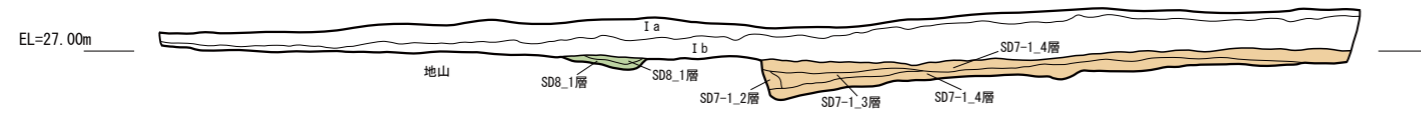
④南西壁



⑤西壁



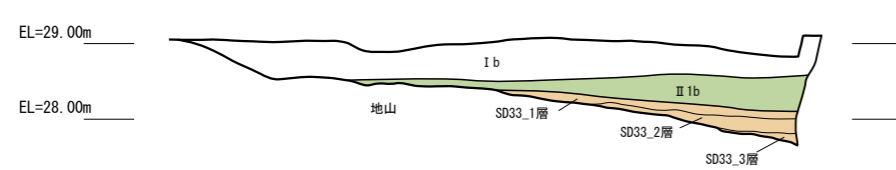
⑥南東壁



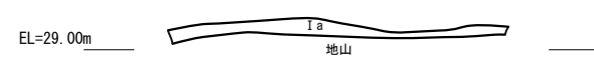
⑦東壁



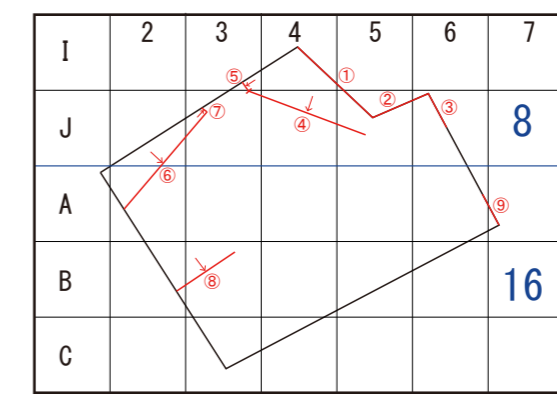
⑧南東壁



⑨北東壁3



- II 1層
- II 2層
- II 3層



第19図 D地区の層序3

第3節 遺構

今回報告する遺跡はA、B、C地区の平安山ヌ上集落跡とD地区の下勢頭集落跡の2つの遺跡となっている。2つの遺跡は、戦前を下限として近代が主要な集落遺跡であった。上限は平安山ヌ上集落跡ではA・B・C地区にてⅢ層からグスク時代及び先史時代の土器（貝塚時代前V期、貝塚時代後期後半）が出土し、またⅢ層の年代測定結果（ $2,405 \pm 30 \text{yrBP}$ ～ $825 \pm 25 \text{yrBP}$ ）から少なくともグスク時代まで遡ることが判明した。下勢頭集落跡であるD地区では、Ⅱ層の堆積の状況から近世までであった。本調査では近世・近代の時期としたⅡ層において数多くの遺構が検出している。これらは米軍によって撮影された戦時中の空中写真や戦前の地図、聞き取り調査などとの比較から、戦前における平安山ヌ上集落及び下勢頭集落に伴うものであると考えられる。大まかにはA地区は平安山ヌ上集落近隣の耕作地、B地区は平安山ヌ上集落のメインストリート沿いの屋敷群、C地区は平安山ヌ上集落内に所在した学校地、D地区は下勢頭集落内の屋敷地となっている。以下、地区ごとに遺構を記述していく。

1. A地区

A地区では溝状遺構、ピット、土坑、不明遺構を確認している（第20図）。遺構検出面はⅡ層上面、Ⅲ層中で2面、地山上面で1面の4面となっている。なお、Ⅱ層及び地山上面検出遺構は、米軍の整地活動により大きく削平され遺構上部は残っていなかった。本調査区においてはⅡ層が近代、Ⅲ層がグスク時代に相当する。地山上面で検出した遺構で遺構埋土がⅢ層のものはⅢ層中の検出遺構として取り扱う。そのため、遺構埋土で遺構面を分けると、近代の遺構面が1面、Ⅲ層中の遺構面が2面の合計3面となる。以下、近代の遺構、Ⅲ層中の遺構について記述する。

近代の遺構

〈溝状遺構〉

調査区の中央において北西から南東の向きで並行する3条の溝状遺構（SD1、SD2-1、SD2-2）を確認している。米軍の整地活動によって遺構上部は削平されており地山上面での確認となった。遺構埋土はⅡ層土となっており、SD2-2、SD2-1、SD1の順で堆積していることが確認できた。3条の溝状遺構が独立して存在していたのか、或いは同時期に存在したのかは検討したが不明である。SD1は長さが22.5m、幅が平均0.9mで最大1.4m、深さが約0.5mを測る。SD2-1は長さが22.5m、幅が約0.5m、深さが約0.3mを測る。SD2-2は長さが22m、幅が平均0.6mで最大1.2m、深さが約0.16mを測る。戦前の地図や米軍によって撮影された戦時中の空中写真で当地は耕作地となっていたことから、この溝状遺構は耕作にともなう溝であると判断した。遺構埋土の出土遺物から、近代の本土産陶磁器や沖縄産陶器等、現代の鉄製品が出土していたことにより、時期は近代から戦前までと考えられる。

Ⅲ層検出の遺構

調査区南西側に谷地（迫地）地形に堆積したと考えられるⅢ層が存在し、その層中及び地山上面からピット22基、土坑5基、不明遺構1基を確認している。Ⅲ層は細分することができ（第III章第2節参照）、遺構はⅢ2層上面及びⅢ3a層上面での確認となっている。

〈ピット〉

ピットはⅢ2層上面で17基、Ⅲ3a層で5基の22基確認されている。平面は円形で15～20cmのものが殆どで、最も大きいもので36.5cmである。深さは8～10cm、最も深いもので20cmとなっている。埋土はⅢ層土となっている。比較的小さくて浅いものであるが、断面で柱痕を有するものが多いことから建物若しくは柵等を構築する柱穴として機能したのと考えられる。しかし明確な建物プラン等を提示することはできなかった。

〈土坑〉

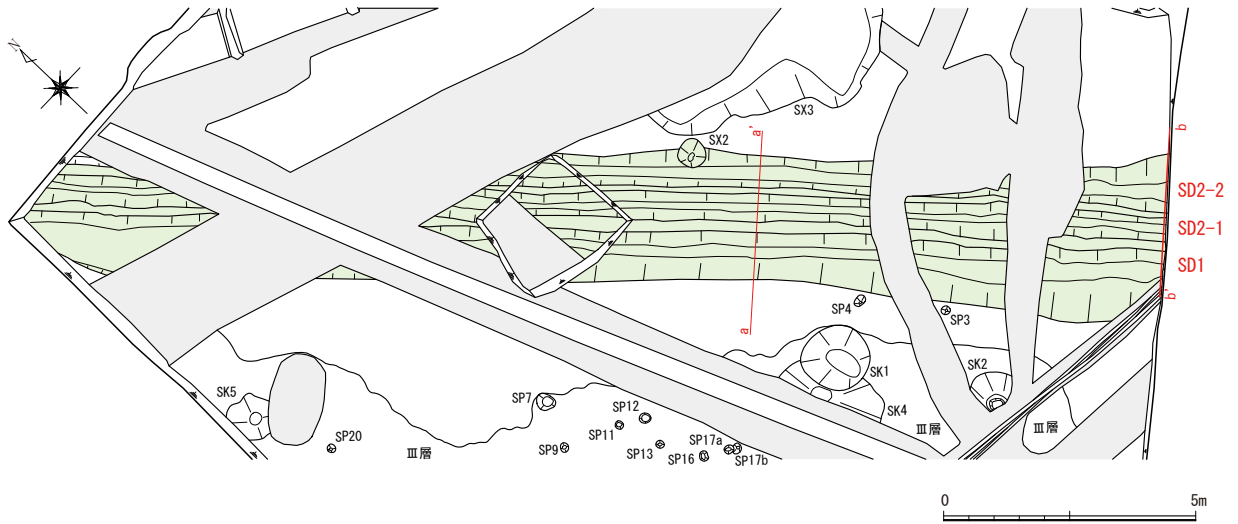
土坑はⅢ2層上面で3基、Ⅲ3a層で2基の5基確認している。素掘りの土坑で、平面は小さいもので約0.9m、大きいもので約2mの円形となっており、深さは浅いもので約0.2m、深いもので0.9mとなっている。埋土はⅢ層土である。SK1とSK4は切りあい関係をもって確認されている。

〈不明遺構〉

不明遺構はSX3として地山上面で1基確認している。平面は不定形で長軸約5m、深さは約0.7mを測り大きな土坑状のものとなっている。埋土はⅢ層土である。SX3の下にもⅢ層土が続いていたが、いびつな断面形状であったことから、SX3の影響でできた水の通った痕跡やドリーネの痕跡であると判断した。水を貯蓄する土坑等を想定したが、調査時に降った大雨で水が溜まらなかったため性格は不明である。



第20図 A地区の遺構位置図



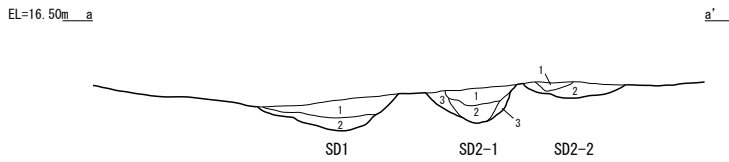
SD1・2-1・2-2平面図



SD1・2-1・2-2 完掘（北東から）



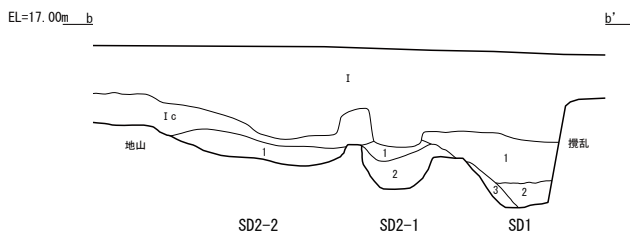
SD1 断面（aライン）



SD1・2-1・2-2 断面図（aライン）



SD2・2-1 断面（aライン）



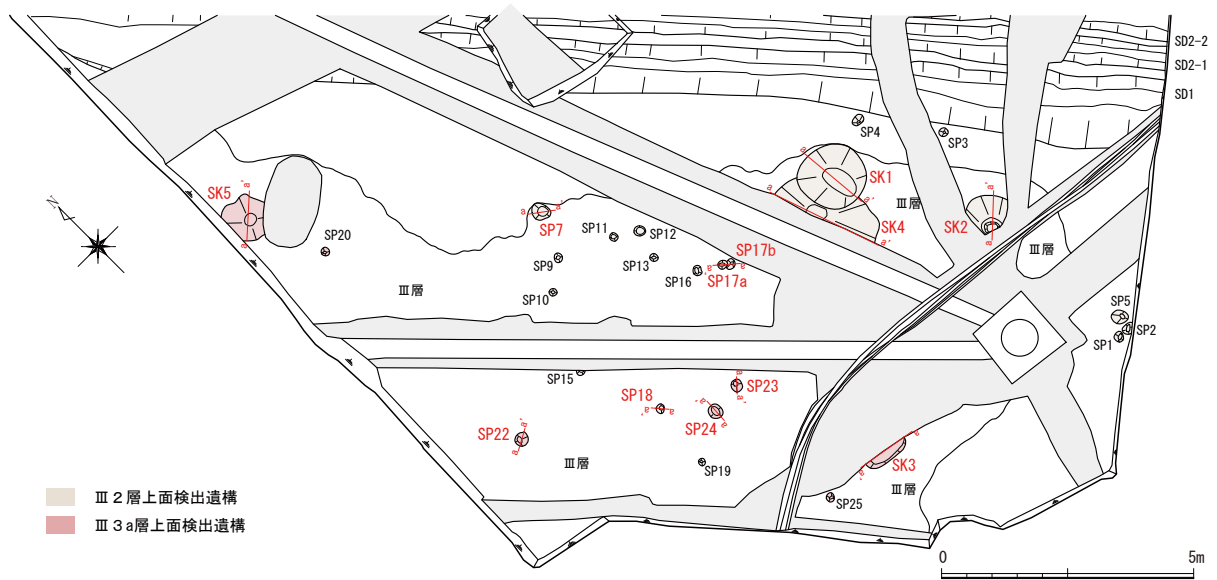
SD1・2-1・2-2 断面図（bライン）

SD1	1層	10YR4/3 砂質シルト
	2層	10YR4/3 砂質シルト
SD2-1	1層	10YR4/4 砂質シルト
	2層	10YR4/4 砂質シルト
	3層	7.5YR5/6 砂質シルト
SD2-2	1層	10YR4/4 砂質シルト
	2層	10YR4/4 砂質シルト
	3層	10YR4/6 砂質シルト



SD1・2・2-1 断面（bライン）

第21図 A地区の遺構1



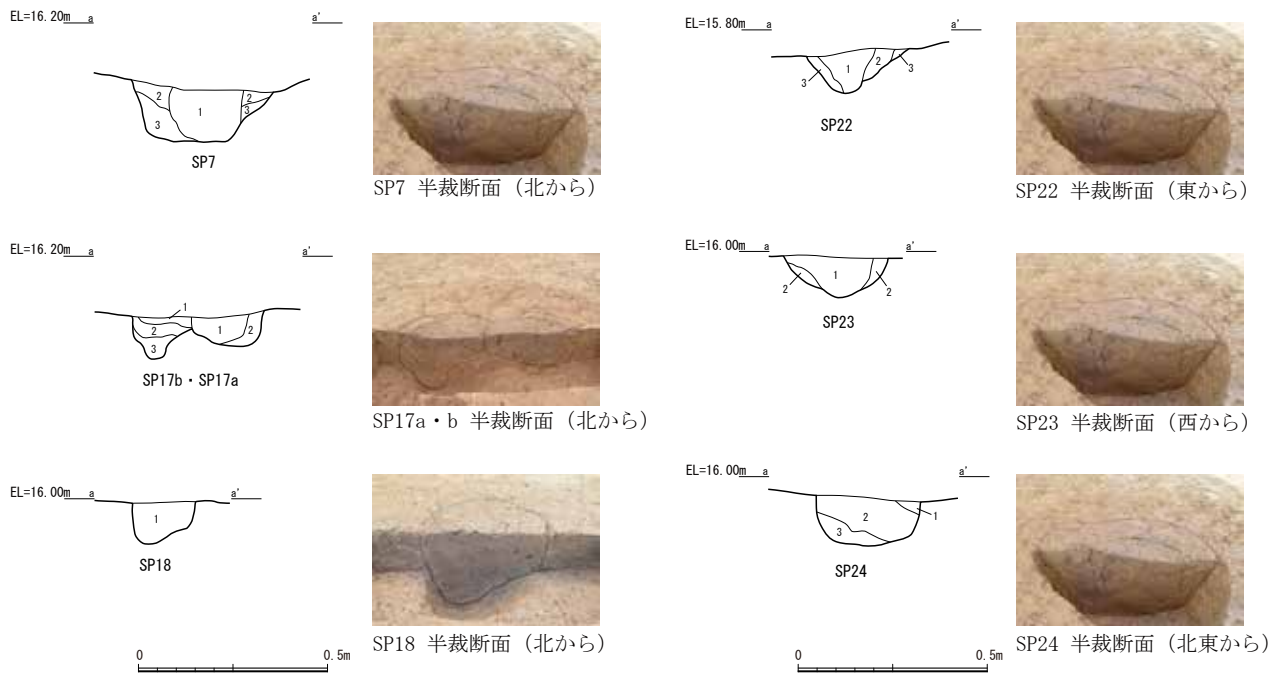
III層遺構検出平面図



III 2層遺構検出状況（西から）



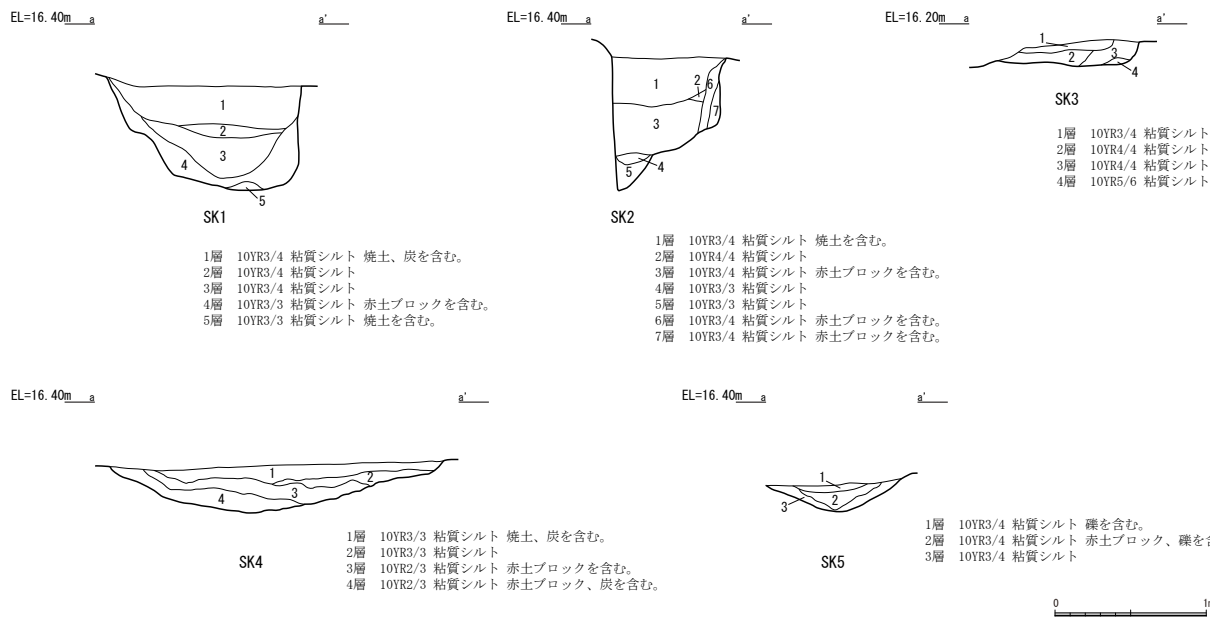
III 3 a層遺構検出状況（西から）



III 2層検出遺構半裁断面図

III 3 a層検出遺構半裁断面図

第22図 A地区の遺構 2



III層検出遺構半裁断面図



SK1 完掘 (西から)



SK2 完掘 (南東から)



SK3 完掘 (北西から)



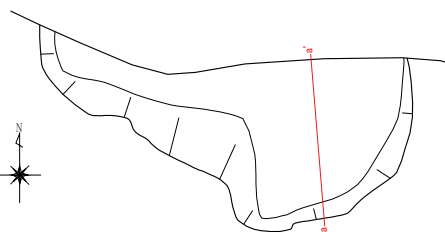
SK4 完掘 (南西から)



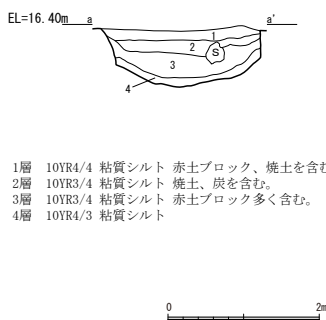
SK5 完掘 (西から)



SX3 完掘 (北から)



SX3平面・半裁断面図



SX3 半裁断面 (東から)

第23図 A地区の遺構3

2. B地区

本調査区で確認された遺構は、近世から近代の時期で下限が戦前の遺構が主体を占める。主な遺構としてはピット、土坑、方形石組遺構、石列遺構、井戸、溝跡、道跡、炉跡などの集落に関連する遺構、集落に付随する耕作地に関連する溝跡などがある（第25図）。そのなかでも溝跡は、道跡と判断したものも含めて軸が一定方向に延びる状況で検出していることから、集落の屋敷の区画などを示すものと考えられる。本調査区ではグスク時代以前の堆積層であるⅢ層は確認されているが、それに伴う遺構は確認されていない。本報告では、B地区を8区画と道の部分に分けられると想定した（第24図）。以下、区画ごとに報告する。



第24図 B地区の区画配置図

区画1・2

調査区の東端で西側に道1が隣接し、SD26を境に分けられる。遺構は確認されなかった。



第25図 B地区の遺構配置図



区画1・2・道1の遺構検出状況（北から）



区画1・2・道1の遺構完掘状況（北西から）



区画4・5の遺構検出状況（東から）



区画3・4・5の遺構完掘状況（東から）



区画6・7の遺構検出状況（南西から）



区画6・7の遺構完掘状況（南西から）



区画8の遺構検出状況（南から）



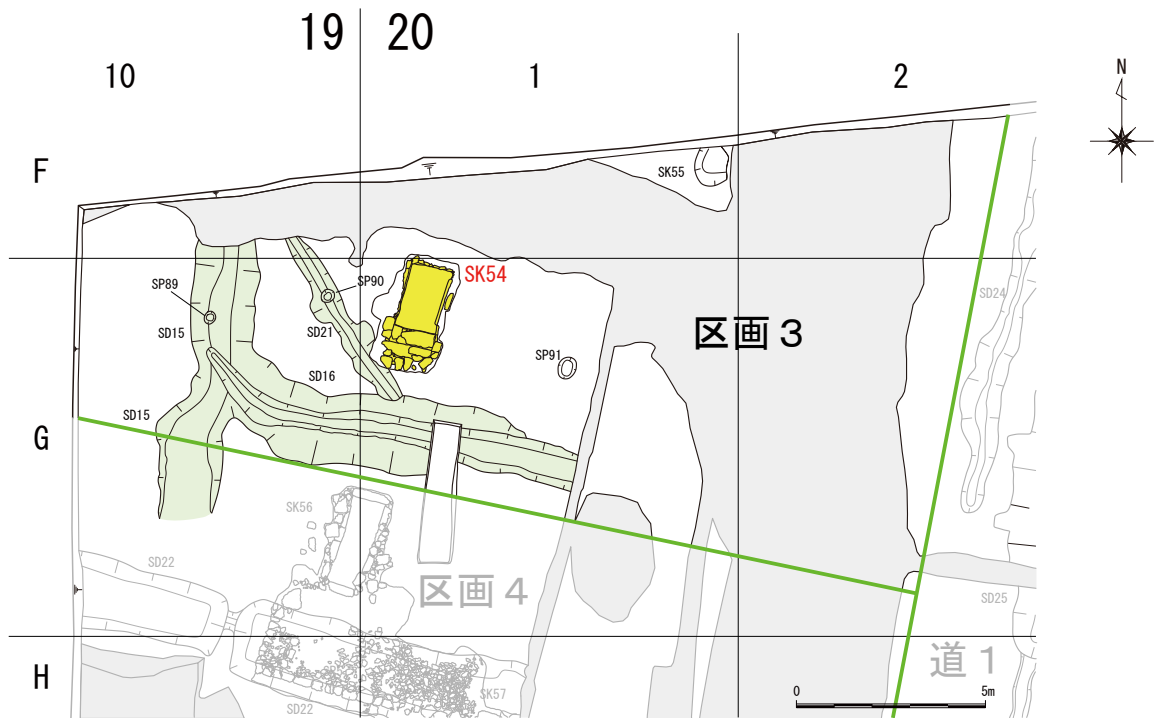
区画8の遺構完掘状況（南から）

図版1 B地区の各区画遺構確認状況

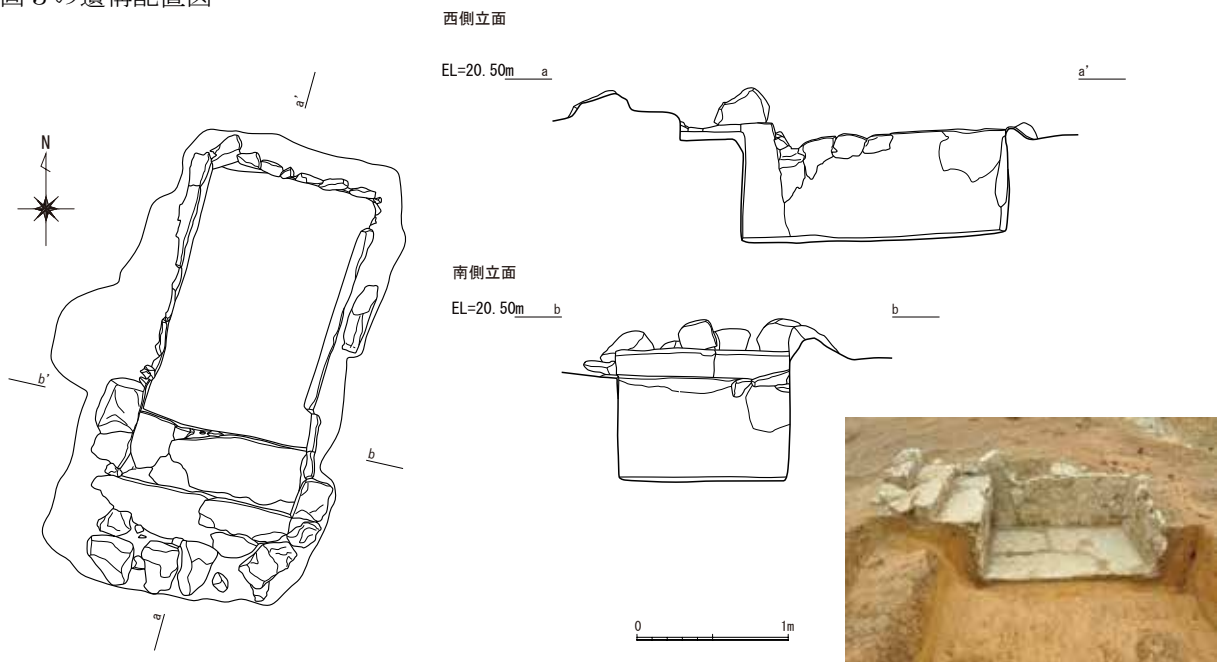
区画3

東側に道1、南側に区画4と隣接する。遺構はピット、土坑、方形石組遺構、溝跡等を確認している。

方形石組遺構（SK54）は地山を方形状に掘り込み、石灰岩の切石を四方に配置しており丁寧な作りとなっている。北北東から南南西に軸を向く。遺構の北側は1.7m×1m、深さ0.7m規格の石組土坑となっており、壁面は50cmから100cm以上の大きく扁平な石灰岩を配置している。床面は扁平な石灰岩を使用して石敷きがされている。南側は扁平な石灰岩を使用して階段状に組んでいる。石組を施した後に組んだ石の隙間にはモルタル（又はセメント）が塗布されている。遺構埋土には客土が堆積していたことから米軍による占領時まで存続していたと考えられる。水を溜めて使用する機能が想定される。



区画3の遺構配置図



SK54 平面・立面図

SK54 断割り断面（東から）

第26図 区画3の遺構（B地区）

区画 4

北側に区画 3、南側に区画 5、東側に道 1 が隣接する。遺構はピット、土坑、方形石組遺構、井戸、石列遺構、溝跡等を確認している。

ピットは複数確認されたが、明確な建物プランは確認できていない。土坑も方形状のものが複数確認されたが性格は不明である。

溝跡はSD22が確認されている。水場を想定できるSR5、SK57が切りあい関係をもってSD22の上で確認されていることから、屋敷の区画ではないと考えられるが性格については不明である。東西の二つに分けられ、東側のほうが深くなっている。埋土は西側にⅡ層土が堆積しており、東側はⅡ層土と共に30cm大の石灰岩の切石が充填されている。

水場を想定できる遺構が井戸 (SE2)、方形石組遺構 (SK56、SK57)、石列遺構 (SR5) として確認されている。

井戸 (SE2) は水場を想定できる遺構の東端で確認されている。地山を掘り込み、20cmから40cm大の石灰岩をほぼ垂直に積み上げている。積み方は布積みで段ごとに横目地が通っており、石と石の間もみられることからやや雑な印象をうける。積み上げられている石の面は丁寧に成形されている。裏込めは逆ハの字状に掘り込んだ地山と積み上げられた石の間に5cmから10cm大の石灰岩礫を密に敷き詰めている。今回は安全面を考慮したことにより深度1.8mまでの確認・記録で調査を完了した。

方形石組遺構のSK56は、地山を方形状で垂直に掘り込み、石灰岩の切石を四方に配置している。壁面及び床面にはモルタル (又はセメント) が厚く塗布されている。北北東から南南西に軸を向き2.4m×0.8m、深さ0.7m規格の石組土坑となっている。水を溜めて使用する機能が想定される。SK57は石列遺構 (SR5) の東端で確認されている。南側半分が残っておらず全景を伺えないが、方形の石組遺構であったことが残存部分で想定できる。壁面は30cm大の石灰岩を配置し、モルタル (又はセメント) を塗布している。床面は3cmから5cm大の石灰岩を密に充填し、その上にモルタル (又はセメント) を厚く塗布している。全面をモルタル (又はセメント) で塗布していることから水を溜めて使用する機能が想定できる。

石列遺構のSR5は直角の平面形状で長軸 (東西) 6m×短軸 (南北) 1.8mの規格で確認されている。長軸の東端は方形石組遺構 (SK57) と繋がっている。石列は30cmから40cm大の石灰岩を1段並べた状態で確認されたが、石の上部が揃っていないことなどから本来は石が数段積まれたものと考えられる。SR5の裏側は30cm大の石灰岩が多量に確認されている。水場のエリアとして井戸 (SE2)、方形石組遺構 (SK56、SK57) 間を区画していたものと想定できる。

土坑 (SK48) は地山を東西方向に幅広く方形状に掘り込んだ素掘りの土坑である。長軸1.8m×短軸1.3m、深さ0.5mの規格となっている。多量の瓦とともにガラス製の一升瓶や硯等が出土していることから、廃棄土坑と考えられる。

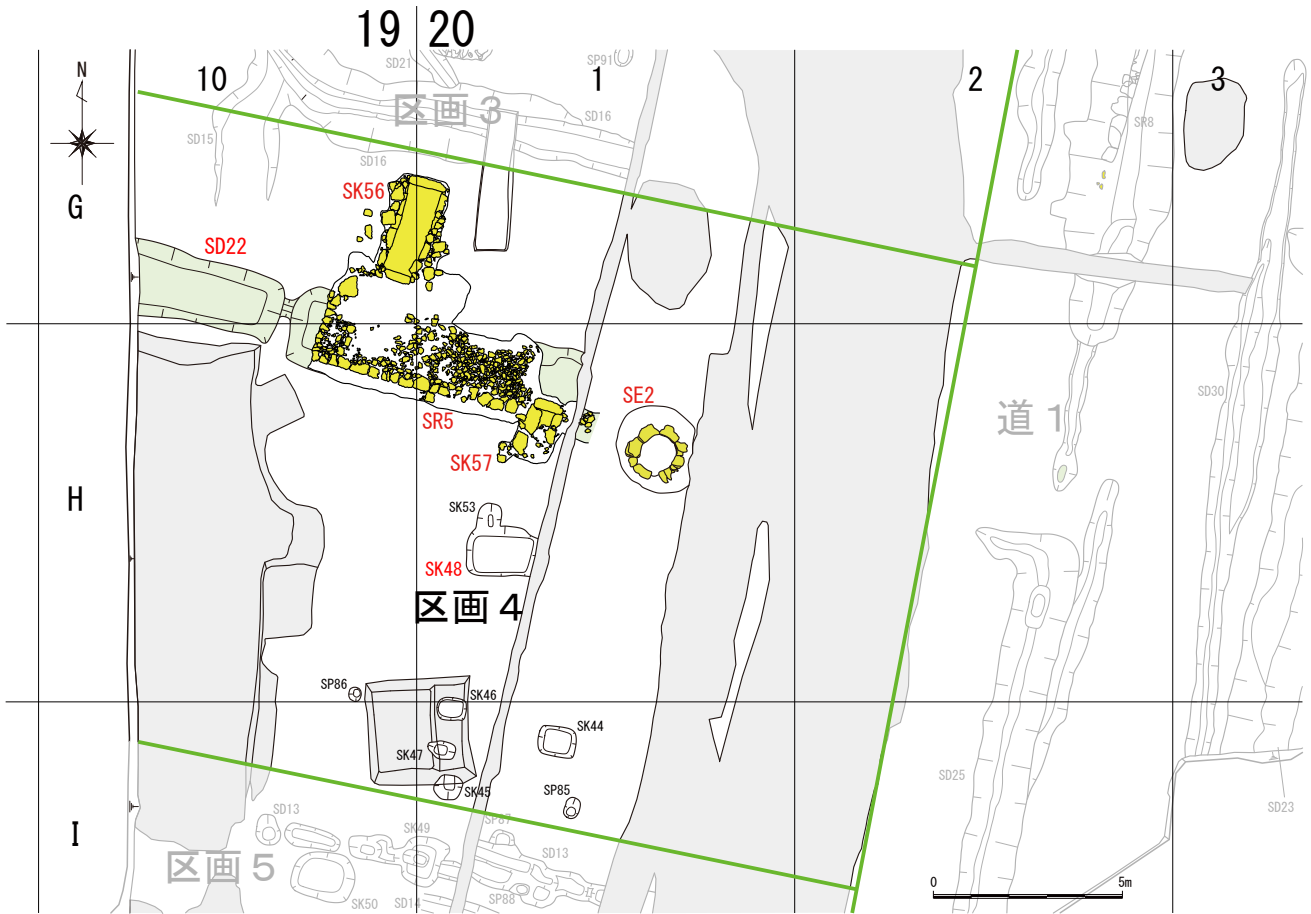


区画 4 遺構検出状況 (南から)

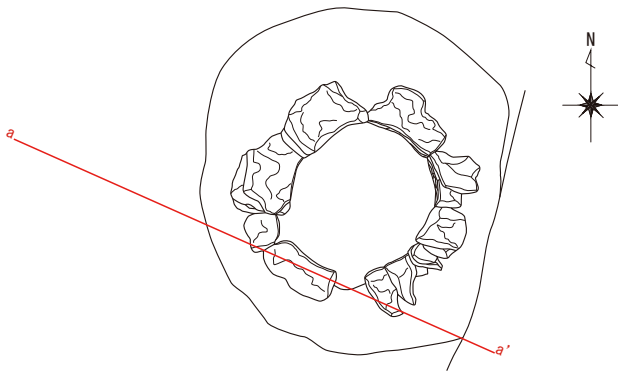


SD22 完掘状況 (西から)

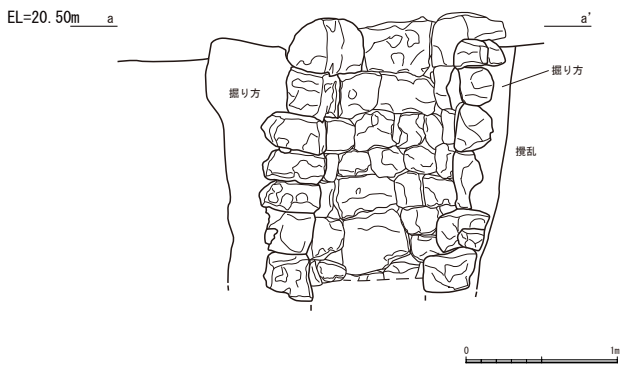
図版 2 区画 4 の遺構 (B 地区)



区画4の遺構配置図



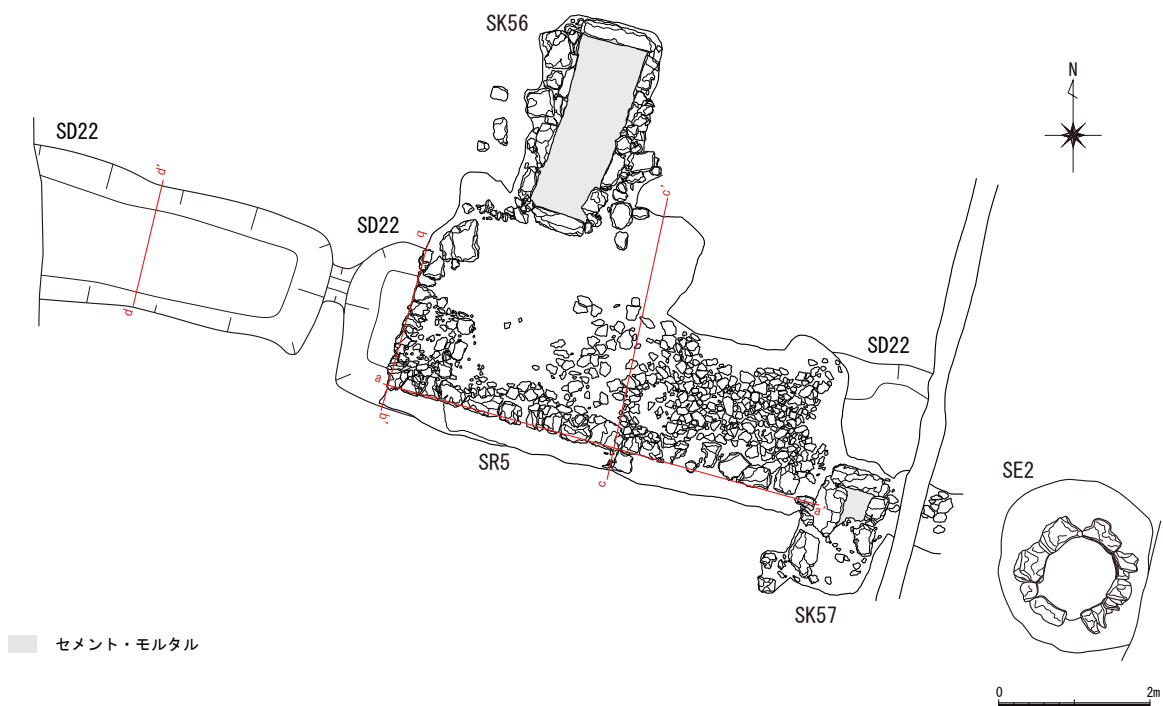
SE2 検出状況（北東から）



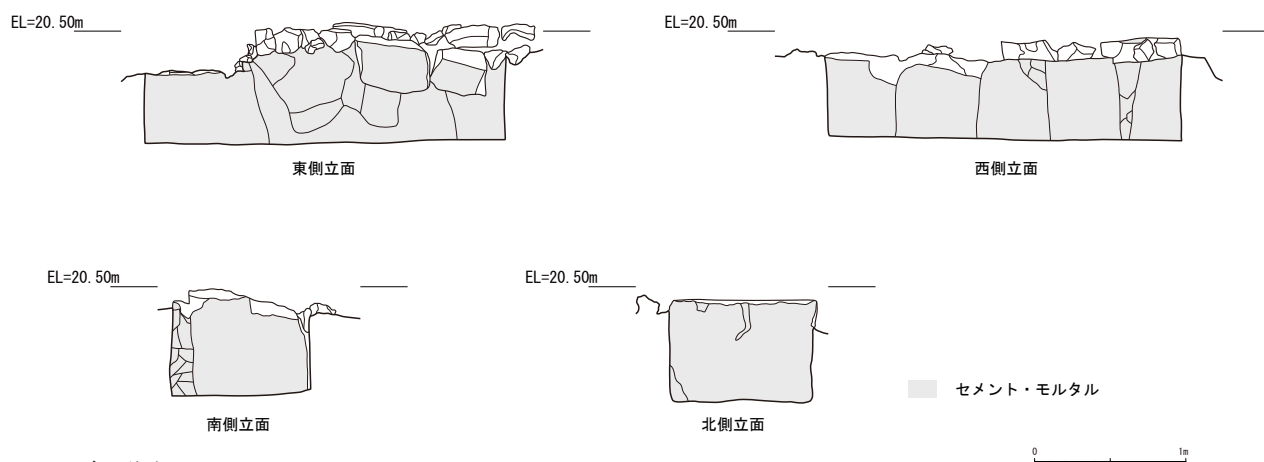
SE2 半裁断割り状況（南から）

SE2 平面・半裁立面図

第27図 区画4の遺構1（B地区）



SK56・SK57・SR5・SD22 平面図



SK56 立面図



SK56 検出状況（北から）



SK56 断ち割り断面（東から）

第28図 区画4の遺構2（B地区）

南側立面

EL=20.50m a



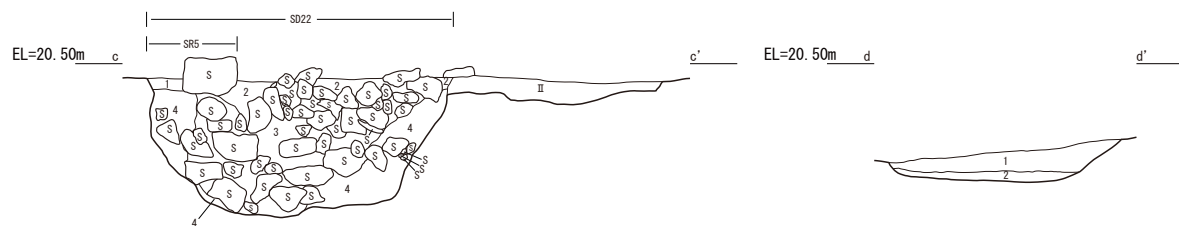
西側立面

EL=20.50m b

b'

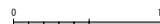


SR5 立面図



- 1層 10YR4/2 砂質シルト 石灰岩礫1mm大で多く含む。
- 2層 10YR4/2 砂質シルト 石灰岩礫1mm大で多く含む。II層土混じる。
- 3層 10YR4/2 砂質シルト 30cm大以上の石灰岩礫が充填して入る。
- 4層 10YR4/4 砂質シルト 粘性強い。マンガンがスジ状に多く入る。

SD22 断面図



SD22 断ち割り断面 (東から)



SR5 西側立面 (西から)



SK48 半裁断面断面 (南から)



SK48 一升瓶出土 (南から)

第29図 区画4の遺構3 (B地区)

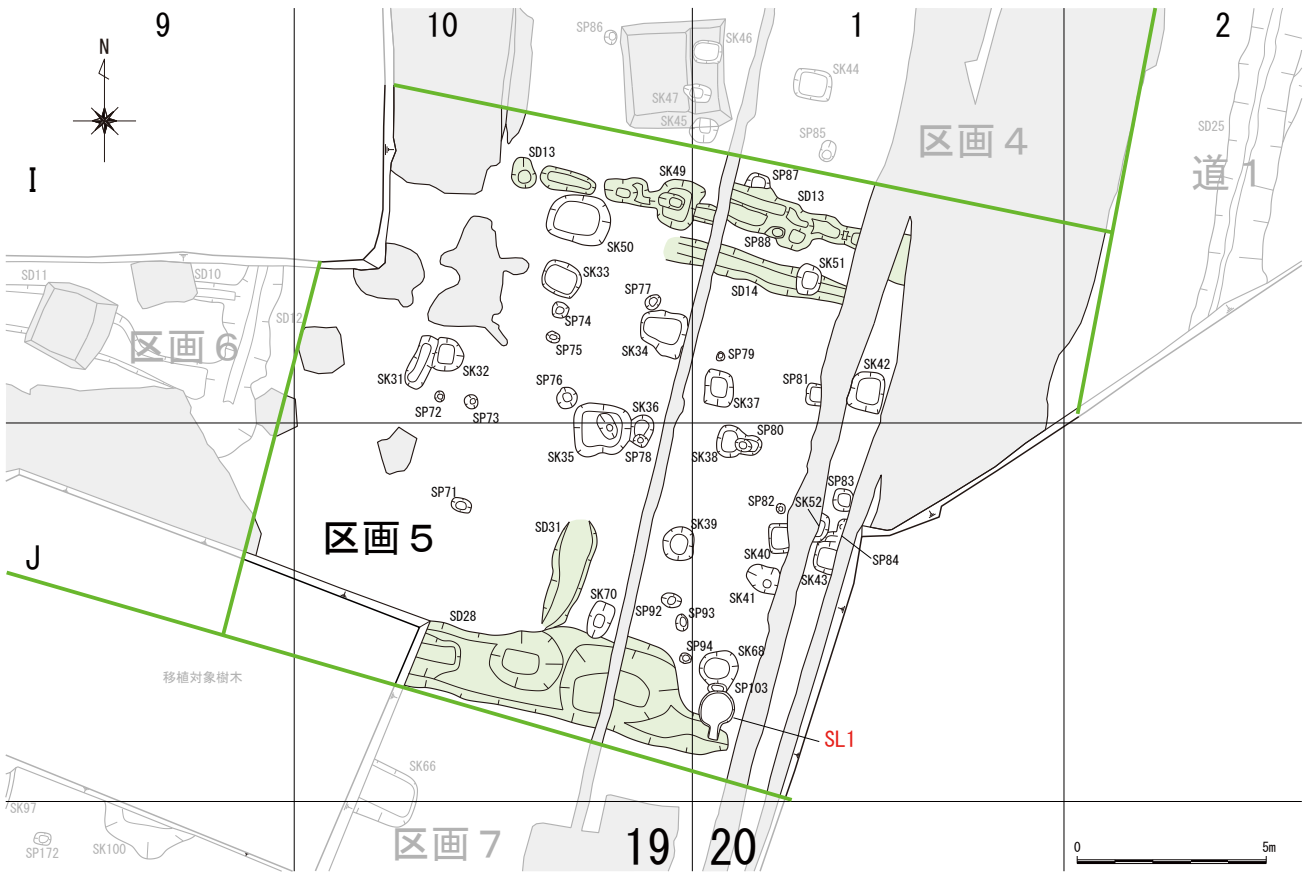
区画5

北側に区画4、南側に区画7、西側に区画6、東側に道1が隣接する。遺構はピット、土坑、炉跡、溝跡等を確認している。

ピット、土坑は多数確認されている。大まかに40cm大のもの（SP）、80cm大のもの（SK）と2つの大きさに分けられる。その多くは屋敷跡に関連するものと考えられるが、明確な建物プランは確認できなかった。

溝跡は複数確認されている。そのうちSD13、SD28、区画6に含めたSD12は空間を囲うように方形状を呈し、その内側の空間に多くのピットや土坑等が確認されることから、屋敷の区画としての機能が考えられる。

炉跡（SL1）は区画3南端で1基確認されている。SD28よりも上、SP103より下と切り合い関係をもって確認されている。平面形態は軸を南北方向にもち北側が直径約0.9mの円形、南側が0.3mの方形が合わさった形となっている。北側の円形部分は壁面に被熱の影響による硬化や炭の付着がみられる。床面についても被熱による硬化がみられ炭層が堆積していた。南側の方形部分には被熱の影響はなく、炭の堆積も殆ど確認されていない。



区画5の遺構配置図



SL1 焼土・硬化面検出状況（南から）

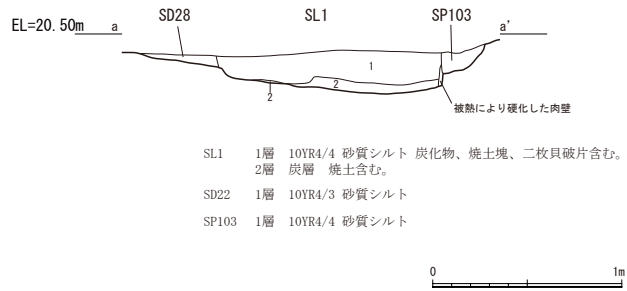
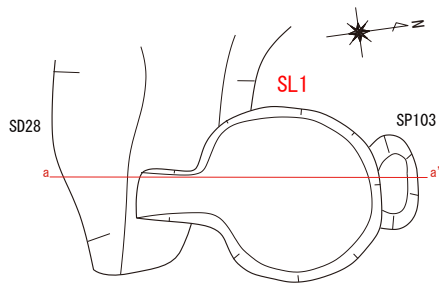


SL1 半裁断面（東から）



SL1 壁面硬化状況（南から）

第30図 区画5の遺構1（B地区）



SL1・SP103・SD28 平面・半裁断面図

第31図 区画5の遺構2 (B地区)

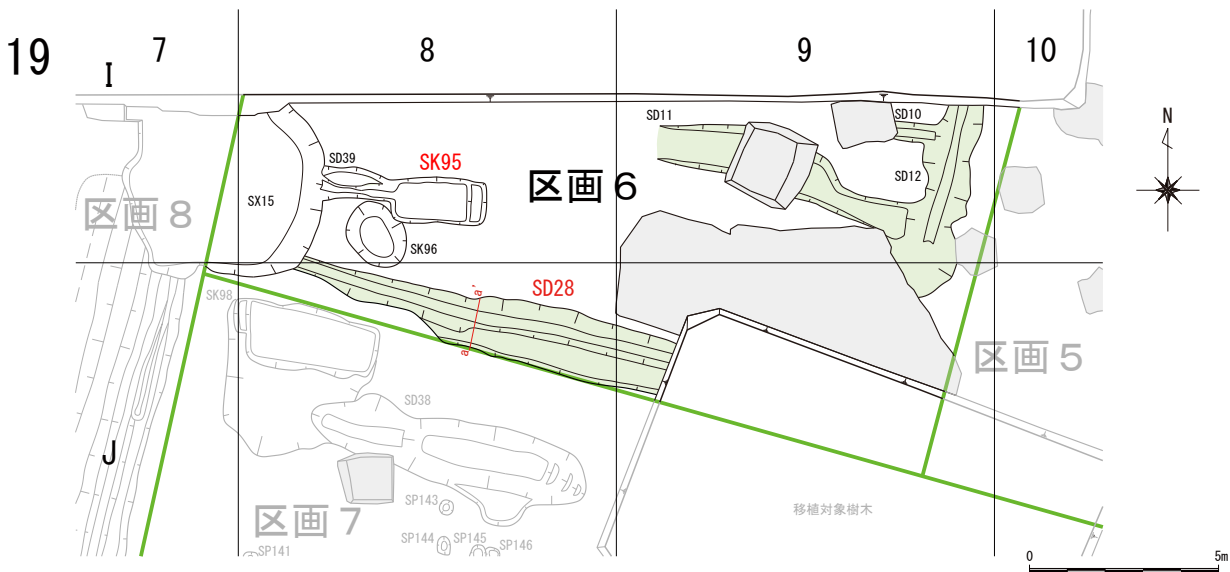
区画6

西側に区画8、南側に区画7、東側に区画5が隣接する。土坑、溝跡等を確認している。

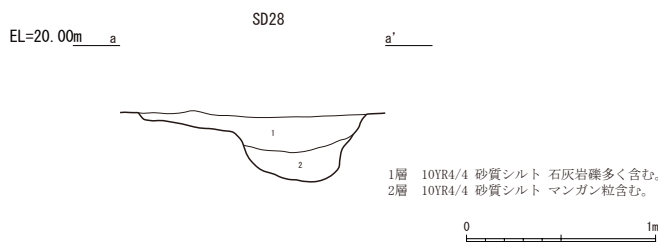
溝跡 (SD28) は区画5から続いており、SD12とともに屋敷の区画としての機能が考えられる。西から東に向かうにつれ幅が広く、深くなっていく。断面記録ライン付近から東側は、遺構の南側が段状になり幅が広がっている。

土坑 (SK95) は地山を東西方向に幅広く掘り込んだ素掘りの土坑で長軸2.5m×短軸1.5m、深さ0.4mの規格となっている。東側に階段状の段差が設けられ、床面からは沖縄産無釉陶器、ガラス製品、位牌等が出土している。これらのことから地下室或いは戦時中に家財道具を隠したものと考えられる。

不明遺構としたSX15は、多量の近代陶磁器が出土していたが、周辺の遺構検出状況と合わないことや現代遺物も多く混在していたことから戦後の攪乱と判断した。



区画6の遺構配置図

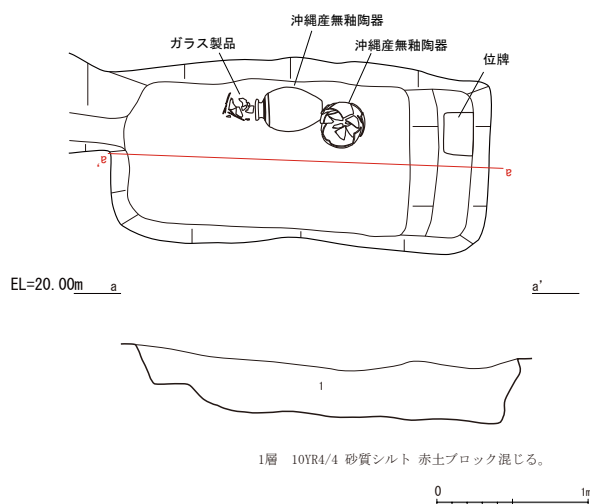


SD28 半裁断面図



SD28 半裁断面 (東から)

第32図 区画6の遺構1 (B地区)



SK95 平面・半裁断面図



SK95 遺物出土状況（南から）



SK95 位牌出土状況（西から）

第33図 区画6の遺構2（B地区）

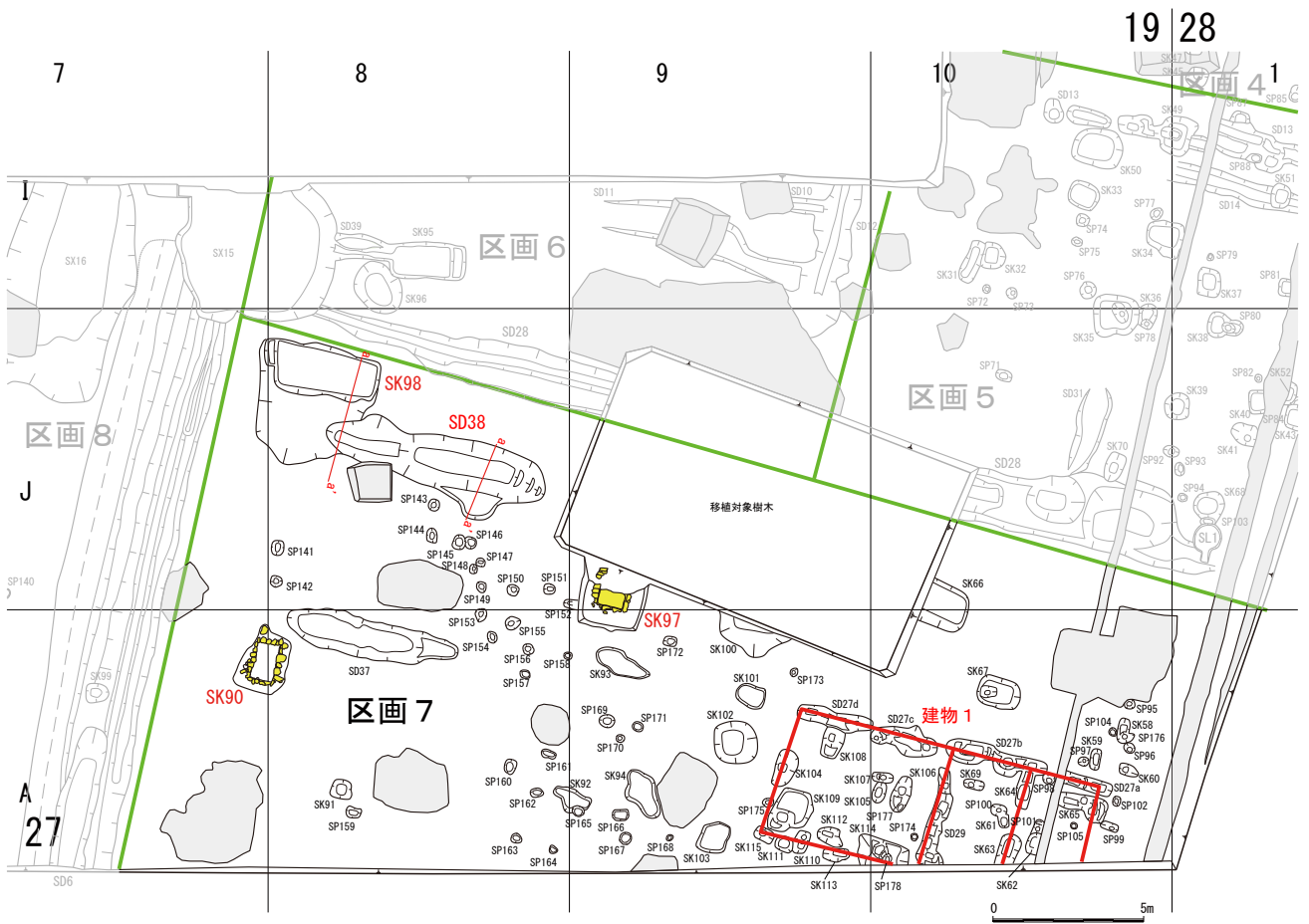
区画7

北側に区画5及び区画6、西側に区画8が隣接する。遺構密度が高く、屋敷跡に関連するピット、土坑、方形石組遺構、溝跡等を確認している。建物跡と考えられるものが1棟確認できている。また、区画7の東側は米軍上陸前後の砲撃による火災と考えられる焼土層（Ⅱ1a層）が確認されたことから、米軍占領直前までの集落に伴う遺構が良好な状態で残っていたことが観取される。

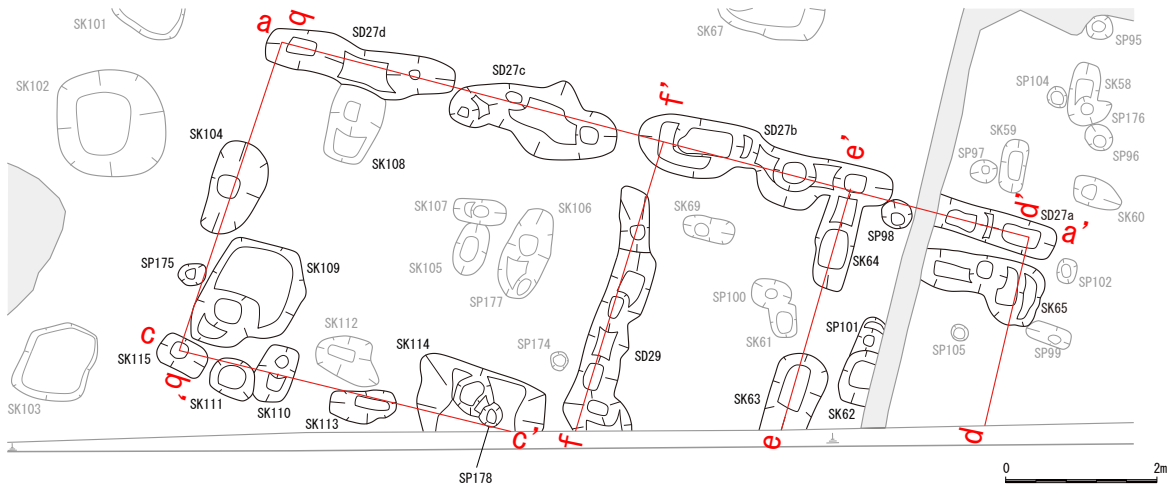
建物1は区画7の南東側で確認されている。検出時には短い溝跡が方形の区画を示すように確認された。調査の結果、複数の柱穴が重複しているものであったことから、この区画状にみられる柱穴を使用しての掘立柱建物跡と想定した。切り合い関係が溝状にみられるほど多いことから建て替えがあったことが考えられる。建物プランは3つの空間を作っており、連続した建物や建て替えがあった可能性もあるが、今回は近代の沖縄の伝統的な母屋^{註5}として1つの建物跡と想定した。東西方向に長軸をもつ建物となっており、規模は西側が5m×4.3m、中央部分が2.5m×4.3m、東側が2.5m×4.3mの計10m×4.3mとなっている。

土坑（SK98）は地山を掘り込んだ土坑である。西北西⇄東北東に長軸をもつ3.3m×1.3mの規格の方形の土坑を基に西北西端は階段状の段差を設けており、南側は方形部分に向かって緩やかに傾斜して降っている。床面からは沖縄産無釉陶器甕や一升瓶、石臼、位牌等が出土している。これらのことから地下室或いは戦時中に家財道具を隠したものと考えられる。土坑（SD38）は検出時に溝跡と思われたものである。調査の結果、地山を掘り込んだ土坑であると判断した。西北西⇄東北東に長軸をもつ7.5m×2.5mの規格で3つのエリアに分かれていた。中央部は3.4m×0.7m、深さ0.55mの方形状となっており、東側は中央部に降りるための3つの踏面を有する階段が設けられている。西側は中央部より床面が一段高くなる。床面に遺物はなかったが、SK98と同様に地下室或いは戦時中に家財道具を隠したものと想定できる。

方形石組遺構はSK90、SK97の2基確認されている。SK90は地山を方形状に掘り込み、石灰岩の切石を4段積みで四方に配置している。北北東から南南西に軸を向き、1.2m×0.7m、深さ0.6mの規格となっている。切石は上の段よりも下の段が大きい石を使用している。南側は大型の石を使用しており2段積みとなっている。積み方は切石が不揃いであることや隙間が多くみられるなどやや雑な印象を受ける。床面は地山となっている。一時的に汚水を排水するなどの廃棄施設の機能が想定できる。SK97は地山を方形状に掘り込み、石灰岩の切石を四方に配置し全面にモルタル（またはセメント）を塗布している。しかし、大部分が攪乱で破壊されており、遺構下部の南側半分のみ残存していた。残存部分では長軸0.9mの規格となっている。床面にもモルタル（またはセメント）を塗布していることから水を溜めて使用する機能が想定される。



区画7の遺構配置図



建物1 平面図

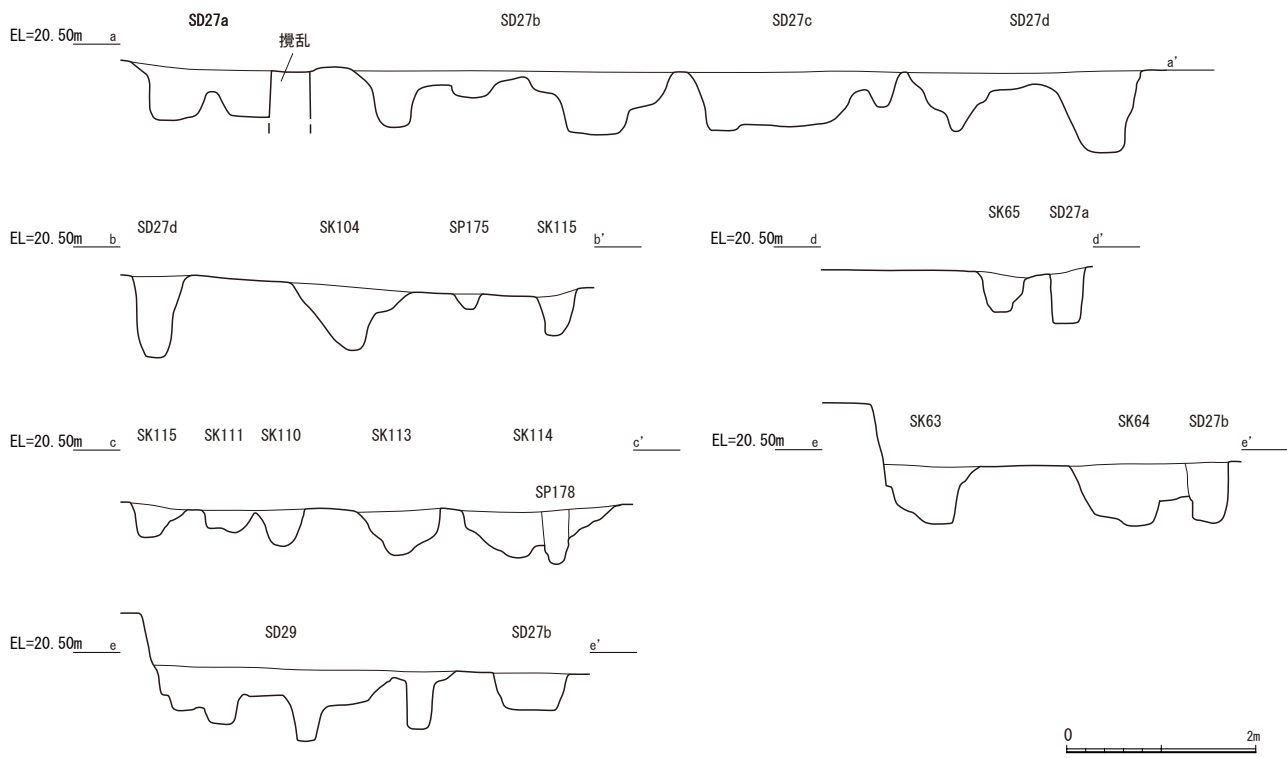


建物1 西側遺構完掘状況(南から)

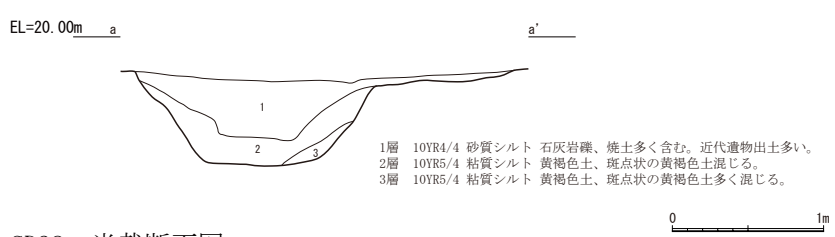


建物1 東側遺構完掘状況(南から)

第34図 区画7の遺構1 (B地区)



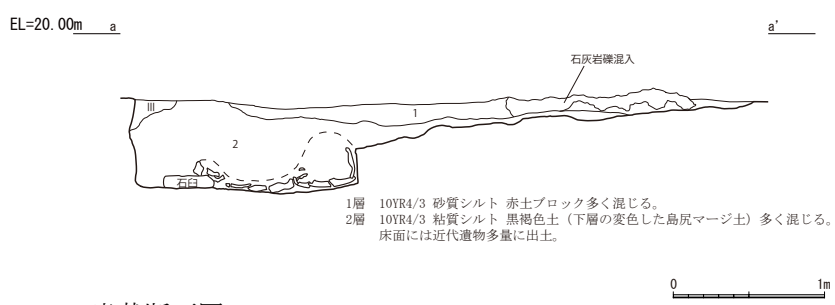
建物 1 半裁断面図



SD38 半裁断面図



SD38 完掘状況 (北から)



SK98 半裁断面図



SK98 完掘状況 (北から)

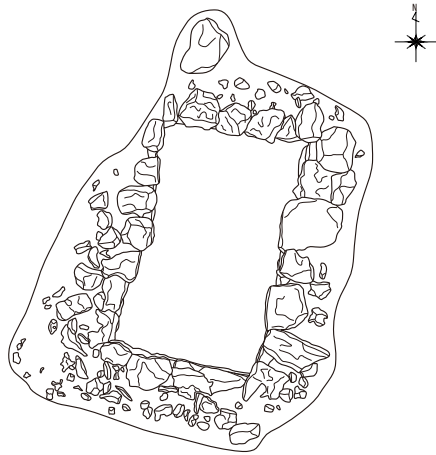


SK98 遺物出土状況 (北東から)



SK98 位牌出土状況 (南東から)

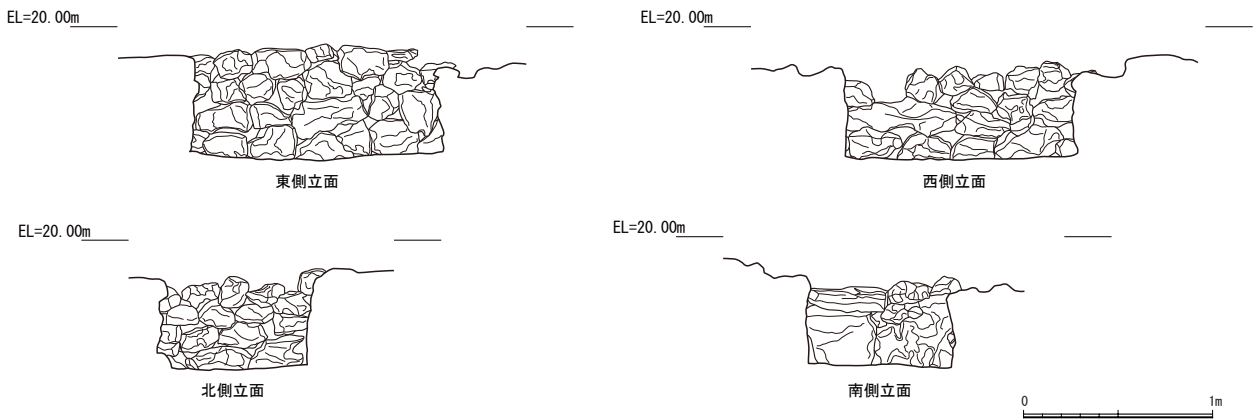
第35図 区画7の遺構2 (B地区)



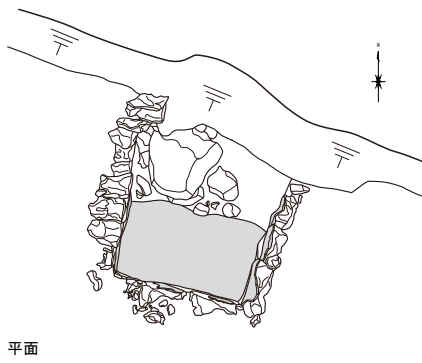
平面



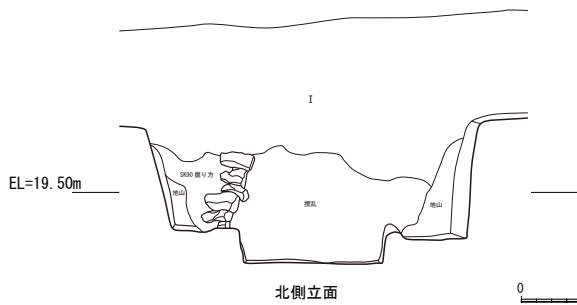
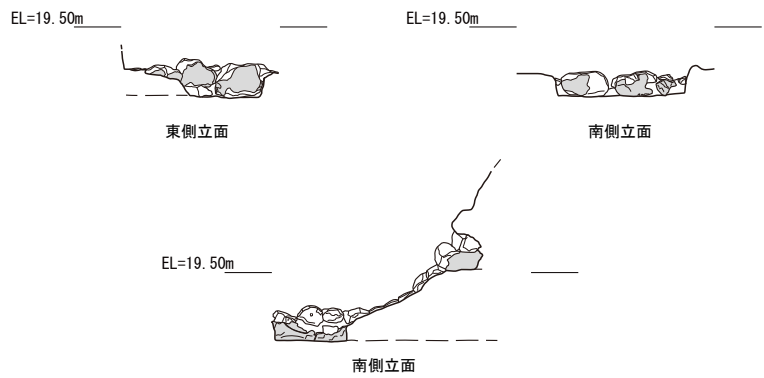
SK90 検出状況（南から）



SK90 平面・立面図



平面



北側立面

SK97 平面・立面図



SK97 検出状況（南から）

第36図 区画7の遺構3（B地区）

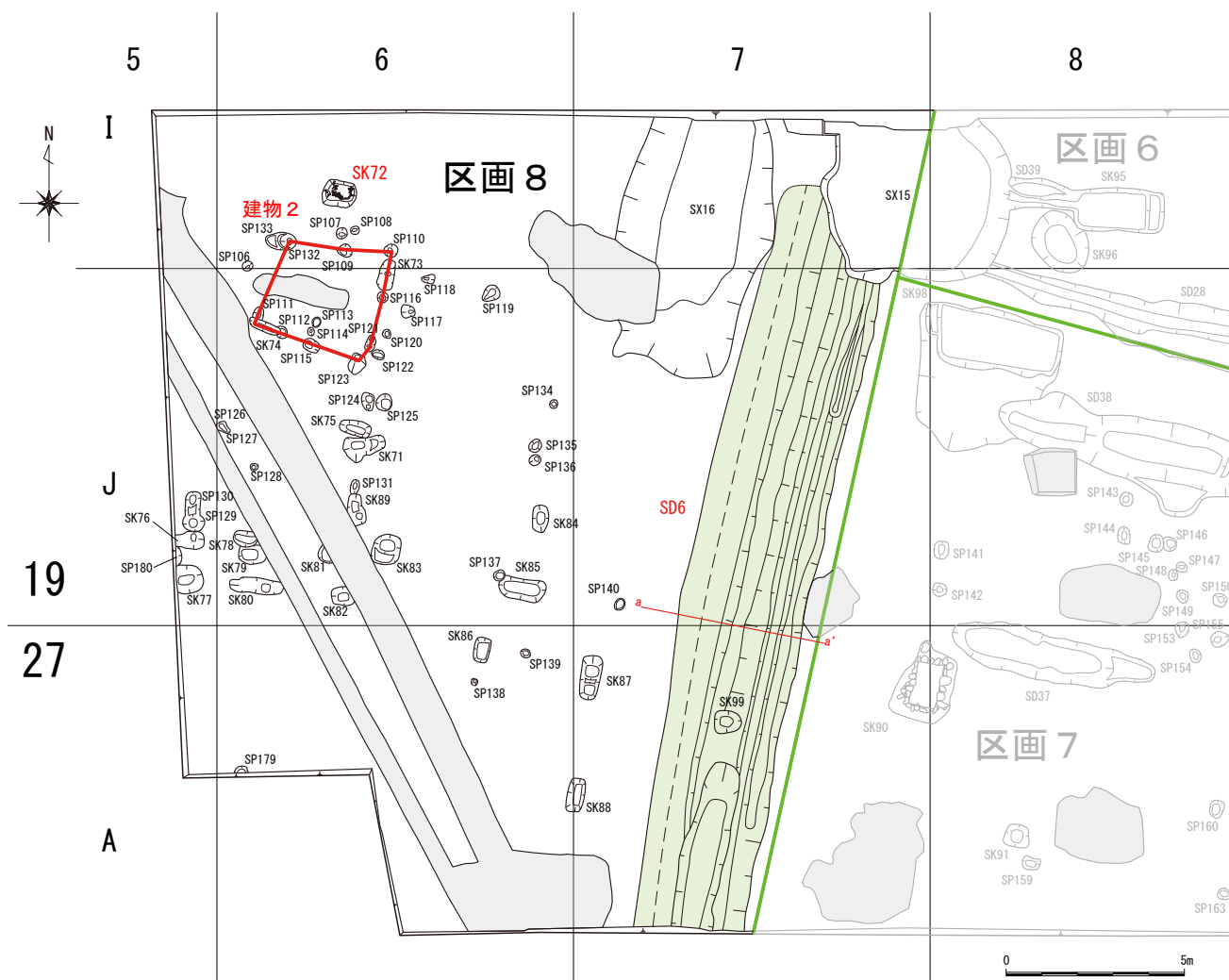
区画 8

東側に区画 6、区画 7 が隣接する。屋敷跡に関連するピット、土坑、溝跡を確認している。建物跡と考えられるものが 1 棟確認できている。遺構はⅡ3層上面で掘り込まれていることが断面で確認できる。しかし、上層に米軍による整地活動によって移動されたⅡ層土であるⅠ2層が堆積していたため、掘削時には判断が難しく、Ⅱ3層上面で遺構を検出することができなかった。そのため遺構の確認・記録は地山上面となっている。

建物 2 は区画 8 の北西側で確認されている。柱穴の並びはやや不揃いであり、四方の長さもそれぞれ違うが 2.6m から 3m の長さの正方形に近い建物プランを想定した。建物プランの方位は北から東に若干ずれて確認されている。柱穴は 28cm から 56cm、深さ 8 cm から 54cm となっている。

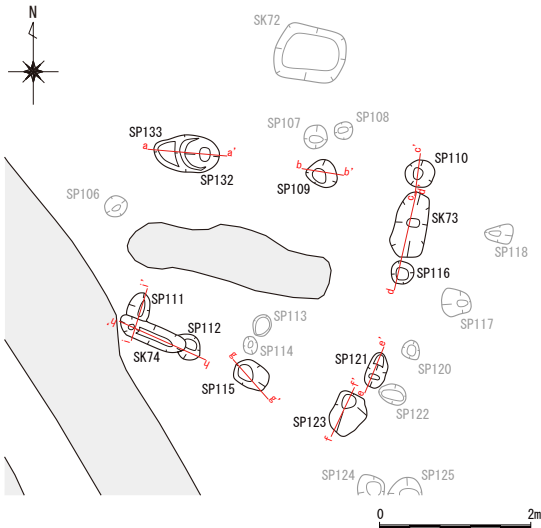
土坑 (SK72) は地山を掘り込んだ土坑である。東西方向を長軸に長径 0.9m、短径 0.7m の隅丸形状で深さ 0.16m を測る。土坑内からはブタの全身骨が解剖学的位置を保った状態で確認されている。ブタは南向きに置かれ、頭位は西向きであった。上記のことから本遺構はブタ埋納遺構と考えられる。出土したブタの分析結果は第三章第 5 節に記す。

溝跡 (SD6) 北北東から南南西の向きに伸びており、屋敷の区画としての機能が考えられる溝跡である。溝幅が 3.5m と他の屋敷の区画として想定した溝跡よりも幅広く、溝内で更に 2 条から 3 条の溝に分けられる。このことから屋敷の区画、且つ A 地区の溝状遺構 (SD1、SD2-1、SD2-2) と同様な耕作に伴う溝跡も兼ねていると判断した。



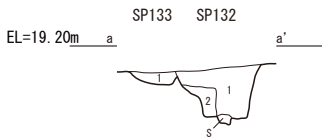
区画 8 の遺構配置図

第37図 区画 8 の遺構 1 (B 地区)

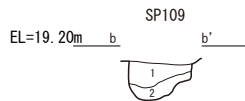


建物2 遺構完掘状況（北東から）

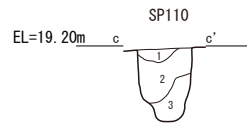
建物2 平面図



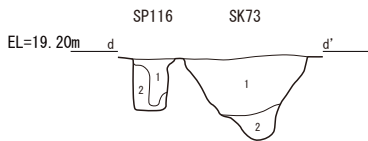
SP132 1層 10YR4/3 砂質シルト 赤土ブロックが斑点状に混じる。
2層 10YR4/3 砂質シルト 赤土ブロックが多く混じる。
SP133 1層 10YR4/4 砂質シルト 赤土ブロックが多く混じる。



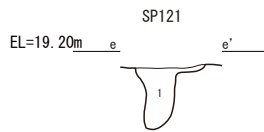
1層 10YR4/4 砂質シルト
2層 10YR4/4 砂質シルト 黄褐色土が多く混じる。



SP132 1層 10YR4/3 砂質シルト
2層 10YR4/3 砂質シルト 炭化物含む。
3層 10YR4/3 粘質シルト 赤土ブロック多く混じる。



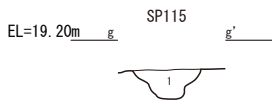
SP116 1層 10YR4/3 砂質シルト
2層 10YR4/4 砂質シルト 赤土ブロック混じる。
SK73 1層 10YR4/4 砂質シルト
2層 10YR4/4 砂質シルト 締まり弱い。



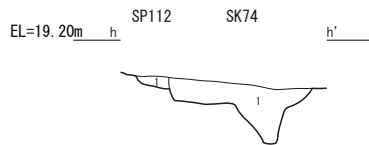
1層 10YR4/4 砂質シルト 赤土ブロックがシミ状に混じる。



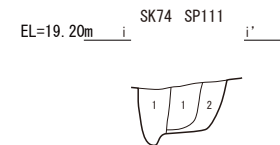
1層 10YR4/4 砂質シルト 赤土ブロックがシミ状に混じる。



1層 10YR4/4 砂質シルト 赤土ブロック混じる。



SP112 1層 10YR5/3 砂質シルト
SK74 1層 10YR4/3 砂質シルト 赤土ブロック多く混じる。



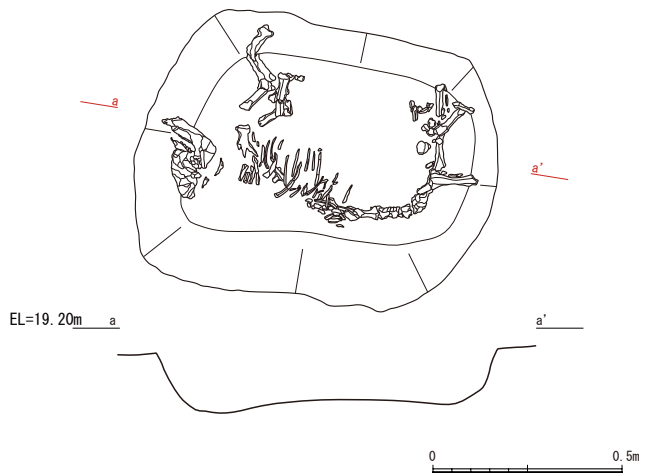
SP111 1層 10YR5/4 砂質シルト
2層 赤土（鳥尻マーヅ）に1層が混じる。
SK74 1層 10YR4/3 砂質シルト 赤土ブロック多く混じる。

0 1m

建物2 半裁断面図

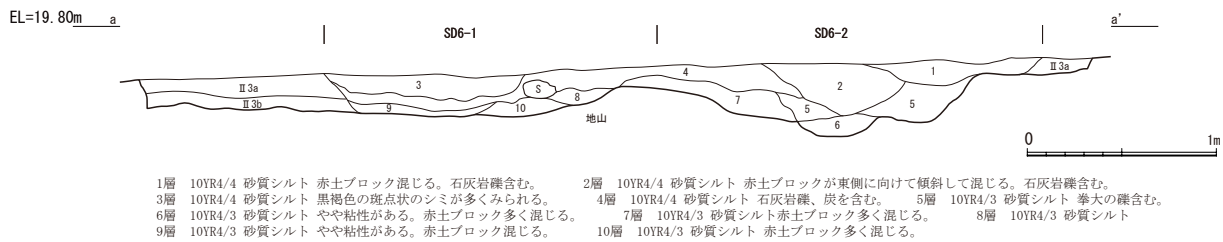


SK72 ブタ埋納遺構完掘状況（北から）



SK72 平面・断面エレベーション図

第38図 区画8の遺構2（B地区）



SD6 半裁断面図



SD6 半裁断面状況 (南から)



SD6 遺構完掘状況 (南から)

第39図 区画8の遺構3 (B地区)

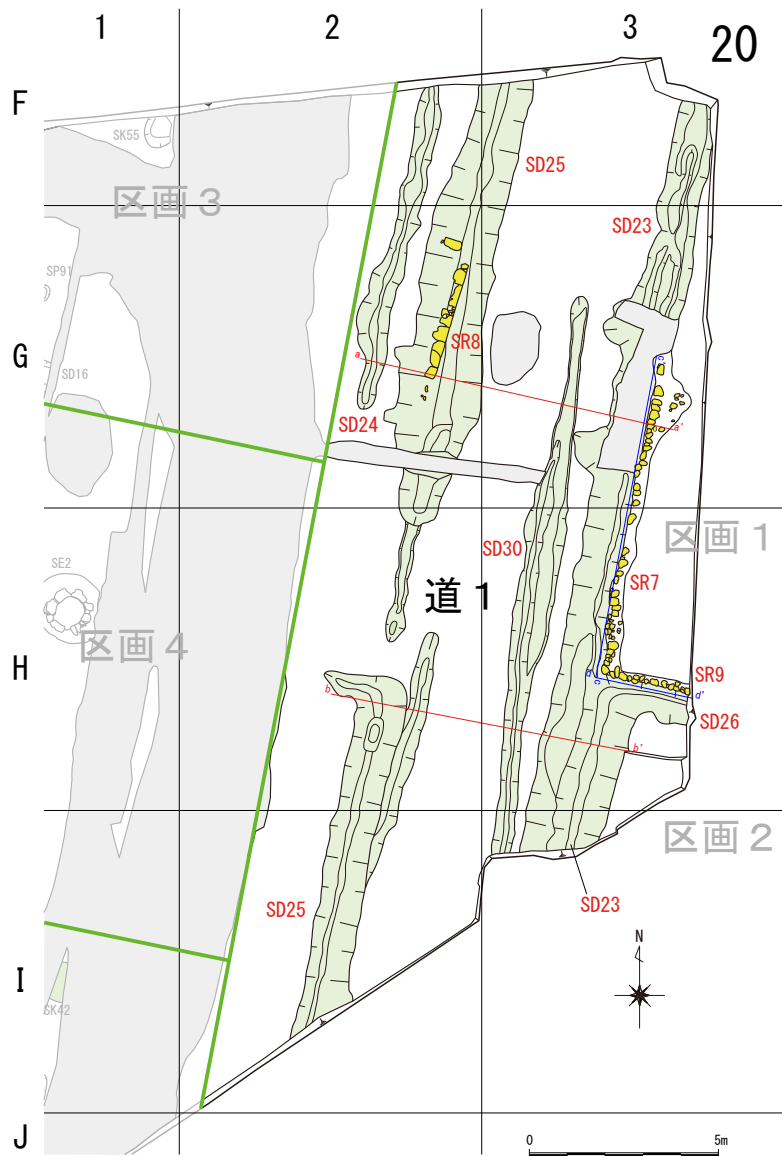
道1

東側に区画1及び区画2、西側に区画3、区画4、区画5が隣接する。溝跡、石列遺構、石積み遺構が確認されている。

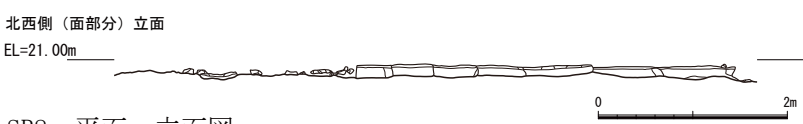
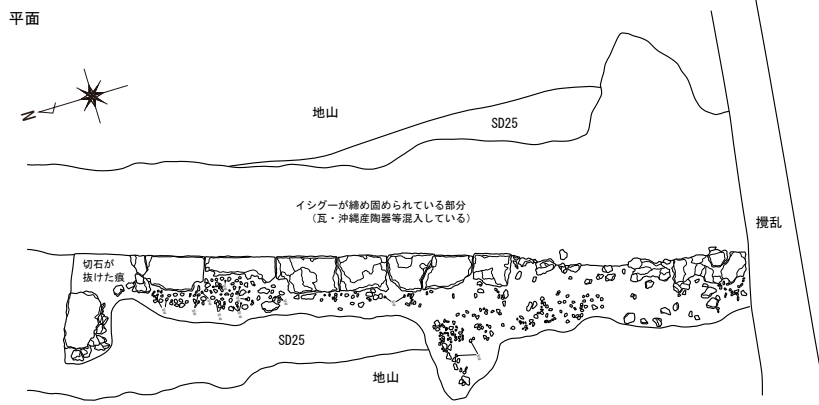
溝跡に挟まれた空間を道跡として想定した。道跡は北北東方向から南南西方向へと続いており、幅は最大で約5mとなっている。東西の縁には排水溝と考えられる溝が設けられており(東側がSD23、西側がSD25)、周辺の地形から雨水等は北北東から南南西へと流れていたと考えられる。また、西側の溝跡(SD25)上部では石列遺構(SR8)が配置され道路面にはイシグーが敷かれていた。このことから、溝跡(SD25)が埋まった後に石列遺構(SR8)が配置されたことになり、両サイドに排水溝を有していた道から片側(東側)のみ排水溝を有した道になったことが想定される。西側の溝跡(SD25)からは近代遺物がメインに出土していたが、それとともに近世に位置付けられる沖縄産施釉陶器灰釉碗も一定量出土している。東側の溝跡(SD23)からは近代の遺物とともに現代遺物が出土している。このことから道は近世から使用され、近代の時期に一度作り変えられ、米軍に占領される直前まで使用されていたと考えられる。

溝跡はSD23・24・25・26・30が確認されている。SD23及びSD25は上述した道の排水溝の機能が考えられる。道の東側の排水溝と考えられるSD23は幅1.4mから2.7m、深さ最大0.65mとなっている。SD23から東側へ直角にSD26が伸びており、その部分から南側で起伏があり大きく窪む。このSD25とSD23を境に区画1、区画2と区分けした。SD23、SD26ともに区画1側の溝縁には土留めの機能が想定できる積み石が確認されている(SD23側がSR7、SD25側がSR9)。道の西側の排水溝と考えるSD25は幅1.3mから2.7m、深さ0.65mとなっている。連続したものではなく中央で一旦途切れて南北に分かれている。区画3・4の境界となる溝でもあるため、途切れている場所は屋敷の入口となる可能性も考えられる。SD24とSD30は深さが0.12cmと浅い溝であった。用途は不明であるが、SD30は道跡内にあることから轍の可能性も考えられる。

石列遺構(SR8)は道の西側溝跡(SD25)の上部で確認されている。長さ7.2mで道側に面をもった切石で配列されている。道の部分にはイシグーが固く締め敷かれていた。部分的にのみの検出となっていたが、SD25の埋土にこのイシグーが混在している層があったことから、本来は道の大部分に石列が配されイシグーが敷かれていたと考えられる。

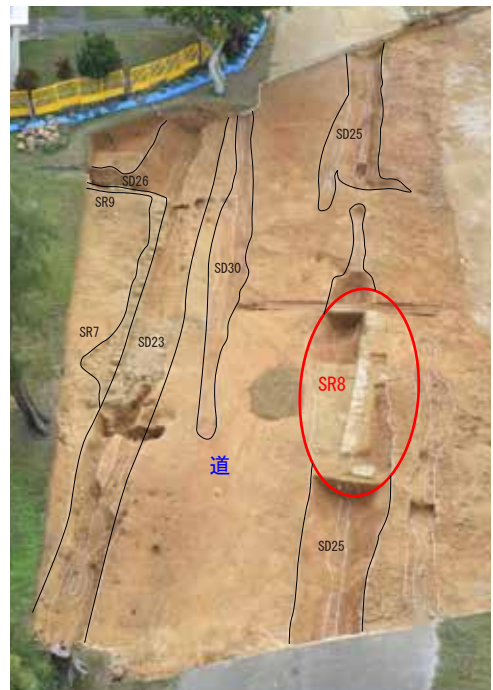


道1の遺構配置図



SR8 平面・立面図

第40図 道1の遺構1 (B地区)



SR8 検出位置 (北から)



SR8 検出状況 (北から)



SR8 検出状況 (南東から)



SR7 立面図



SR7・SR9 検出状況（南西から）

SR9 立面図

aライン 半裁断面



- | | | |
|------------------------------|--|---|
| <p>SD24 1層 10YR5/4 砂質シルト</p> | <p>SD23 1層 SR8の使用面 10YR6/4 砂質シルト インターを固く敷きつけている。
2層 SR8の掘り方 10YR5/6 粘質シルト 5cm大の石灰岩を含む。
3層 SD25 10YR5/6 粘質シルト 1層が多く混じる。
4層 SD25 10YR4/6 砂質シルト 1層が混じる。
5層 SD25 10YR4/6 粘質シルト 1層が混じる。人頭大の石灰岩を含む。
6層 SD25 10YR4/4 粘質シルト 赤土ブロック多く混じる。</p> | <p>SD30 1層 10YR5/4 砂質シルト 1mm大の石灰岩礫含む。</p> |
|------------------------------|--|---|

bライン 半裁断面



- | | | |
|---|--|--|
| <p>SD25 1層 10YR6/4 砂質シルト 土粒大きめ。粘性。赤土ブロック多く混じる。
2層 10YR6/4 砂質シルト 土粒大きめ。粘性。黄橙色土が混じる
3層 10YR5/4 砂質シルト 拳大の礫含む。
4層 10YR6/4 砂質シルト 粘性強い。赤土ブロック多く混じる。</p> | <p>SD30 1層 10YR5/4 砂質シルト 拳大の石灰岩、1mm大の石灰岩礫含む。
2層 10YR6/4 砂質シルト 1mm大の石灰岩礫含む。</p> | <p>SD23 1層 10YR4/4 粘質シルト 0.3mm大の石灰岩礫含む。
2層 10YR4/6 粘質シルト 拳大の石灰岩、0.5mm大の石灰岩礫含む。
3層 2.5Y5/3 粘質シルト 拳大の石灰岩とともにガラス瓶やジュース缶等の遺物出土。
4層 2.5Y5/3 粘質シルト 5cm大の石灰岩含む。
5層 10YR6/4 粘質シルト
6層 地山（国頭マージ）に5層が混じる。</p> |
|---|--|--|

SD23・24・25・30、SR7・8 半裁断面図



SD25 北壁（南から）



SD25 半裁断面aライン（南から）



SD25 半裁断面bライン（南から）



SD25 南壁（北から）



SD23 半裁断面bライン（南から）



SD26 東壁（西から）

第41図 道1の遺構2（B地区）

3. C地区

C地区で確認された遺構は、近世から近代の時期で下限が戦前の遺構が主体を占める。主な遺構としてはピット、土坑、礎石、集石遺構、石列遺構、石敷き遺構、方形石組遺構、井戸、溝状遺構等が確認されている。調査の結果、本調査区は近世から戦前までの時期の中で大きく2時期に分かれることが判明した。第1・2・3遺構面が近代の時期であり（第42図）、その下層に確認された第4・5遺構面が近世の時期となる（第47図）。以下、近代の遺構、近世の遺構として記述する。

近代の遺構

Ⅱ1層で確認された遺構面が第1・2遺構面、Ⅱ2層で確認された遺構面が第3遺構面となっている。

第1・2遺構面では南北方向に長軸をもつ建物3と建物4の2棟の建物プランが確認されており、建物3は第1遺構面（Ⅱ1a層上面）、建物4は第2遺構面（Ⅱ1b層上面）と検出面が別になっている。第Ⅱ章第3節及び第Ⅲ章第2節でも述べた通り、当地は学校（1902（明治35）年開校）があったことが分かっており、建物3・4はこの学校の校舎であったことが想定される。建物3は礎石建物となっており、約2m間隔で格子状に礎石（SS）が配置されている。戦後に破壊された部分もあるが、東西方向に5本、南北方向に9本の柱をもつ6m×7.5mの総柱建物であつことが想定される。礎石は浅く掘り込んだ穴に20cmから25cm大の石を上面が平らになるように配置されている。建物4は集石土坑（SQ）を基礎とした建物と想定される。集石土坑は約1.5mの不定形な土坑で、拳大から人頭大の石を密集して作られている。この集石土坑が建物3と同じ方位軸に1m間隔で配置されている。調査区外まで伸びていることから全体の規格はつかめていないが長軸（南北方向）20m以上、短軸（東西方向）約5.8mの規格となる。短軸の方向には集石土坑が8m間隔で2列確認されており、この長軸と短軸の土坑の配置から8m×5.8mの空間が3つ設けられている。この配置状況から建物4は8m×5.8mの部屋を3つ以上もつ間取りが想定される。上述したとおり1902（明治35）年開校の学校校舎であったことが想定されることから、1902（明治35）年に建物4が建設され、その後に建物3に改築されたことが調査の結果明らかとなった。

石列遺構（SR1）と石敷き遺構（SF1）は建物3・4の西側で確認されている。SR1は20cmから40cm大の石を平らに並べ、西側の縁は方形の石を組んで角を意識して作られており、石敷き遺構（SF1）とは20cmの段差が設けられている。軸を同じにして南側にSR2が確認されているが、構築方法が違うものとなっている。SF1は1cm大の石灰岩及びサンゴ砂利が敷き詰められている。石列遺構（SR1）と石敷き遺構（SF1）はセット関係となっており、建物3・4の西側端で確認されていることから、石敷き遺構（SF1）が歩道で石列遺構（SR1）が校舎へと続く段差（縁側など）となっていたことが想定できる。

方形石組遺構はSK6とSK7の2基確認されている。ともに地山を掘り込み、サンゴ砂利と石灰岩礫を混ぜ固めた後にモルタル（又はセメント）で全面を塗布して作っている。SK6は2.4m×1m、深さ0.4mの規格となっており、SK7が1.9m×0.9m、深さ0.5mの規格となっている。井戸（SE21）の南隣で確認されていることから水場の機能が考えられる。

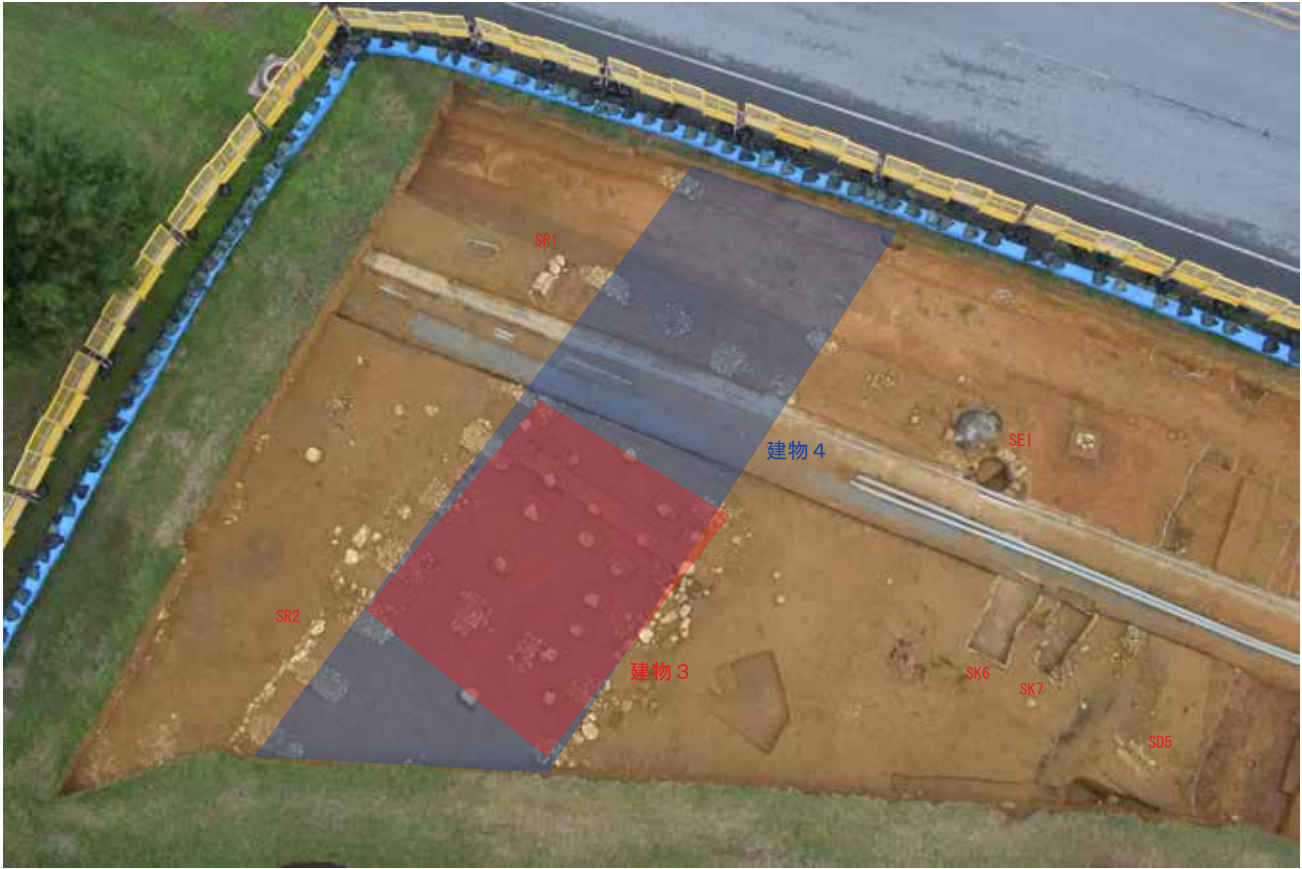
溝状遺構（SD5）はSK6、SK7の南東側で大部分が破壊された状態で確認されている。地山を溝状に掘り込んだ後に切石を配置し、その表面をモルタル（又はセメント）で全面を塗布して作っている。検出状況からSK6、SK7に配水する溝であることが想定される。

井戸（SE1）は建物3・4の東側で水場の可能性が考えられる方形石組遺構（SK6、SK7）に隣接して確認されている。地山を掘り込み、20cmから50cm大の石灰岩を逆ハの字状に積み上げている。使用している石の面は丁寧に成形され、積み方も相方積みで隙間なく目地が通らない丁寧な作りとなっている。裏込めは石灰岩や礫が混在した地山土となっており、面石と面石の間には10cm大の石をかませて面石の角度を整えている。今回は安全面を優先したことにより深度2mまでの確認・記録で調査を完了した。

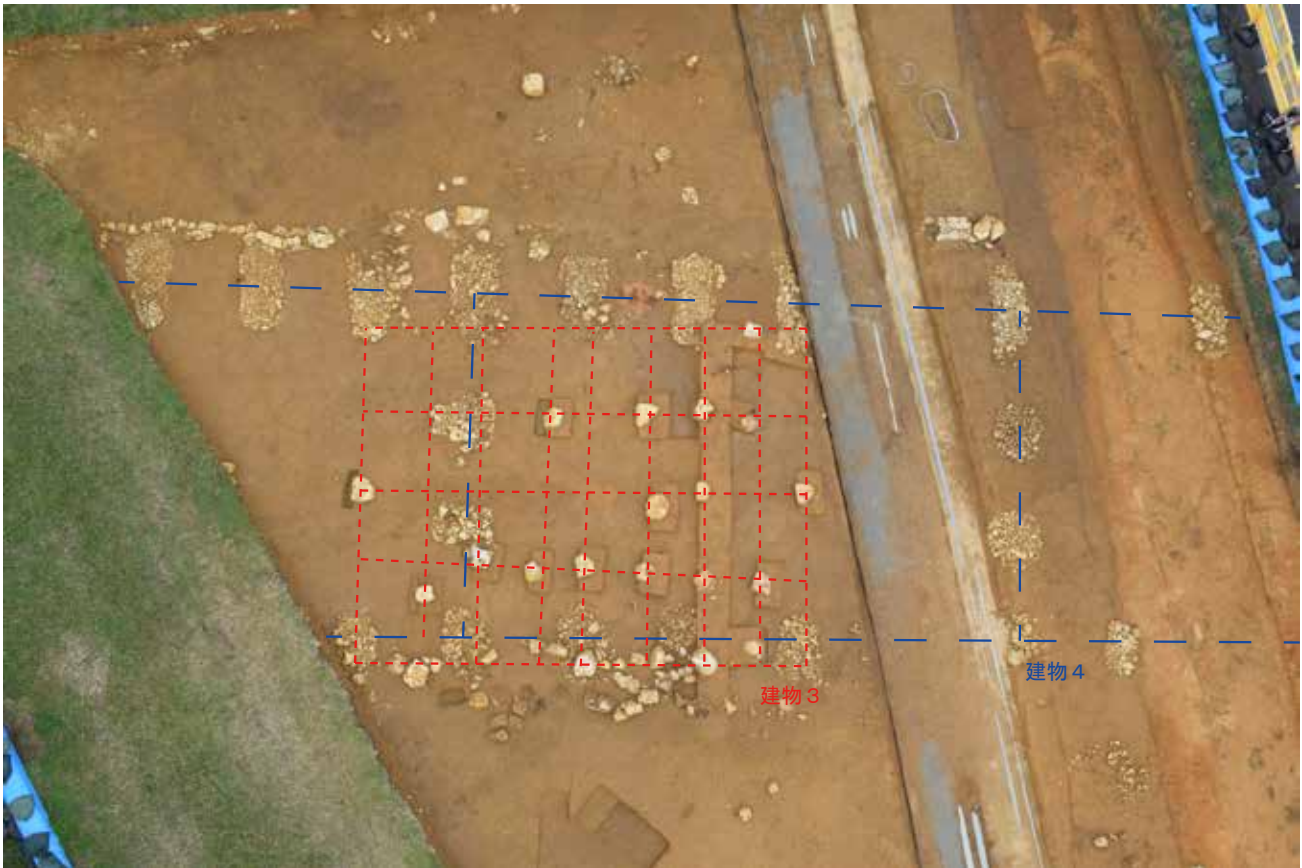
第3遺構面は耕作土層と捉えたⅡ2層上面でピット、溝状遺構が確認されている。溝状遺構は耕作に伴う溝跡と考えられるが、ピットは明確な建物プランを把握することができなかつたため機能等は不明である。



第42図 C地区の遺構配置図(近代)



Ⅱ1層の検出遺構（南から）



建物1・2（東から）

図版3 C地区の遺構1（第1・2・3遺構面）



建物跡上面の焼土面及び瓦集中部（南から）



焼土面及び瓦集中部（南西から）



SK6・7（南から）



SE1（南から）



SD5（北から）



II 2層の遺構（南から）



SP32断面（西から）

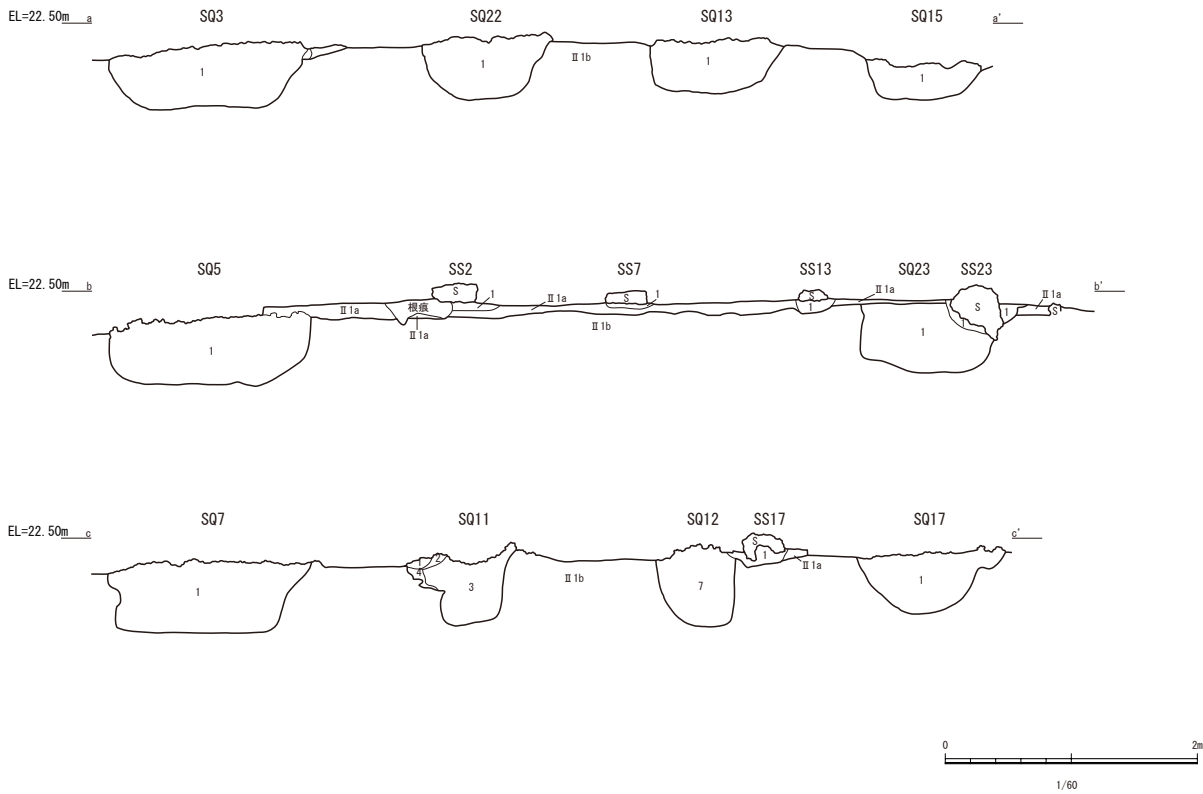


SP35断面（北から）

図版4 C地区の遺構2（第1・2・3遺構面）



建物 3・4 平面図



建物 3・4 半裁断面図

第43図 C地区の遺構(近代) 1



SS7 検出状況（南から）



SS7 半裁断面（南から）



SQ22 検出状況（南から）



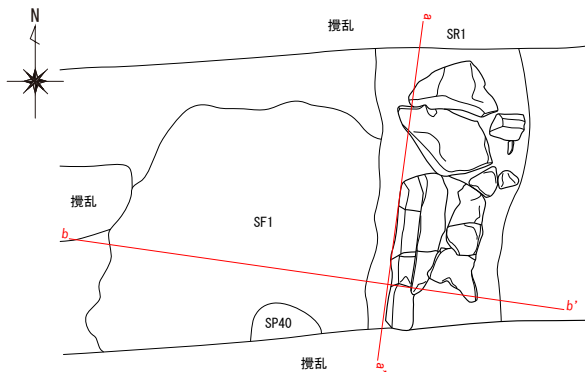
SQ22 半裁断面（南から）



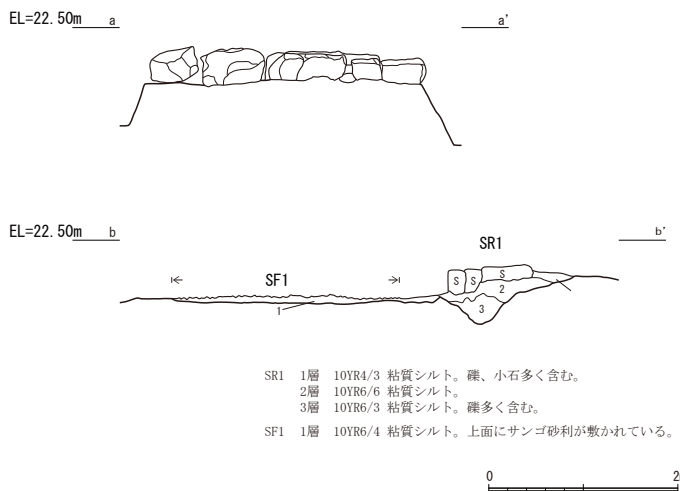
SS17・SQ12 検出状況（南から）



SS17・SQ12 半裁断面（南から）



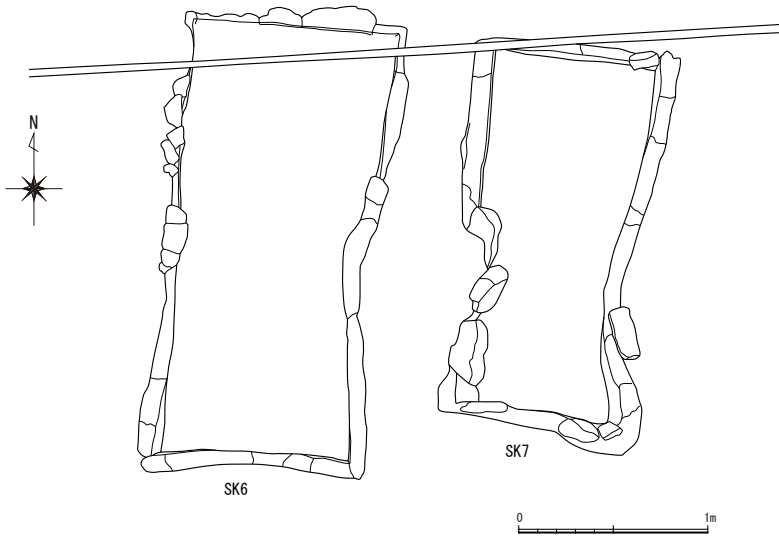
SR1・SF1 検出状況（西から）



SR1・SF1 半裁断面（南から）

SR1・SF1 平面・立面・半裁断面図

第44図 C地区の遺構（近代）2



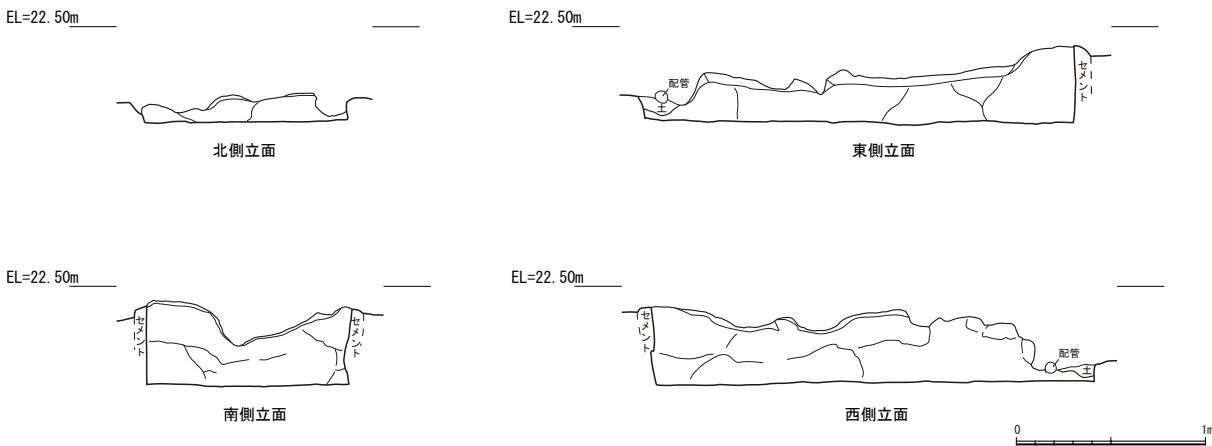
SK6・SK7 平面図



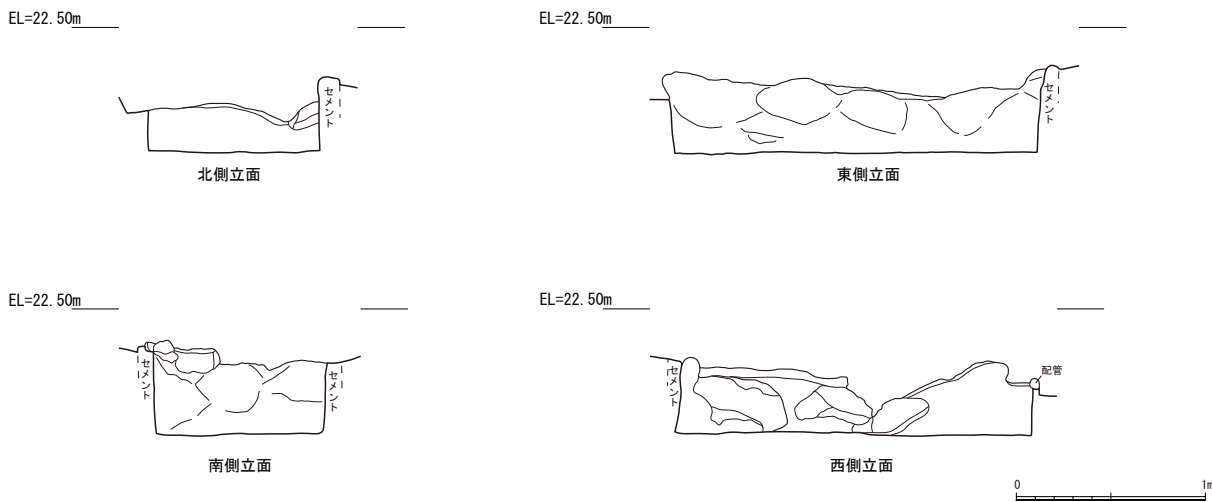
SK6 断ち割り断面 (北から)



SK7 断ち割り断面 (北から)

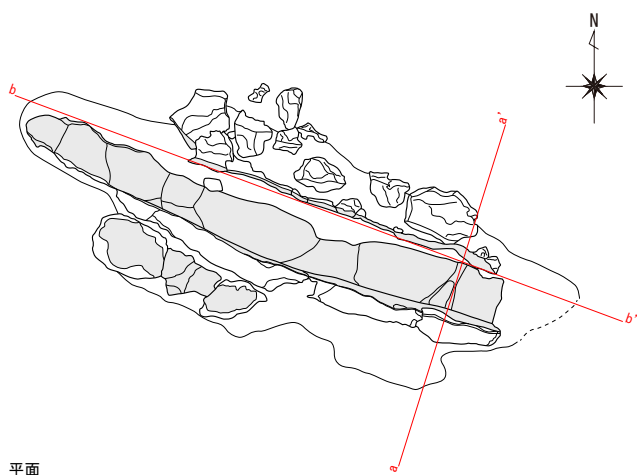


SK6 立面図



SK7 立面図

第45図 C地区の遺構(近代) 3



平面

EL=22.50m b



北側立面



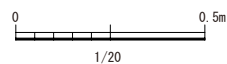
SD5 断ち割り断面 (東から)

EL=22.50m a



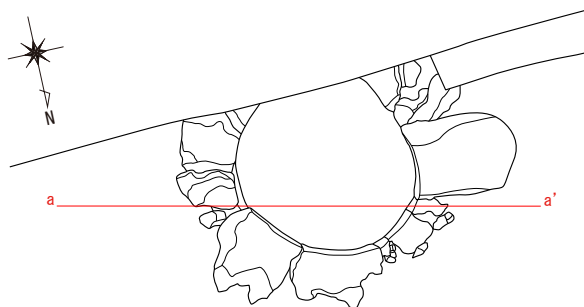
断面

- セメント
- 1層 石灰岩礫、砂、セメントを締め固めている。
- 2層 砂、セメントを敷いている。
- 3層 10YR5/4 粘質シルト



SD5 平面・半裁断面・立面図

平面



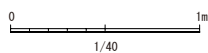
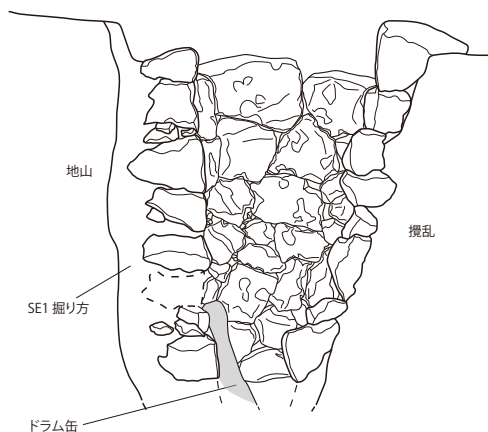
南側立面

EL=22.50m a

a'



SE1 半裁断割り状況 (南から)



SE1 断割り状況拡大 (北から)

SE1 平面・半裁立面図

第46図 C地区の遺構 (近代) 4

近世の遺構

調査区の西側において、Ⅱ1層下に堆積しているⅡ3層で遺構が確認されており、Ⅱ1層が1902（明治35）年開校の学校に伴う造成土層であったことから、それよりも古い時期の遺構として捉えた。Ⅱ3層は耕作土層であることから、確認された遺構は耕作に伴う遺構と考えられる。Ⅱ3b層上面で確認された遺構面が第4遺構面、Ⅱ3c層上面で確認された遺構面が第5遺構面となっている（SQ25、SQ26、SQ27）。

第4遺構面では集石遺構が東西方向に3基並んで確認されている。浅い掘り込みに20cm大の石灰岩が詰められていた。周辺に遺構の広がりはなく本遺構のみの確認であったため機能等は不明である。

第5遺構面では溝状遺構(SD17、SD18)、不明遺構(SX11)が確認されている。SD17は東西方向に伸びており、幅2mから3mと大型な溝状遺構となっている。SD18はSD18-1、SD18-2と2基確認されており、南北方向に並列して伸びている。SD17、SD18は直行するように確認されており耕作に伴う溝と考えた。不明遺構であるSX11は土坑状に地山を掘り込んでいるが、中央部底面が凸状に盛り上がっている。機能等は不明である。



第47図 C地区の遺構配置図（近世）

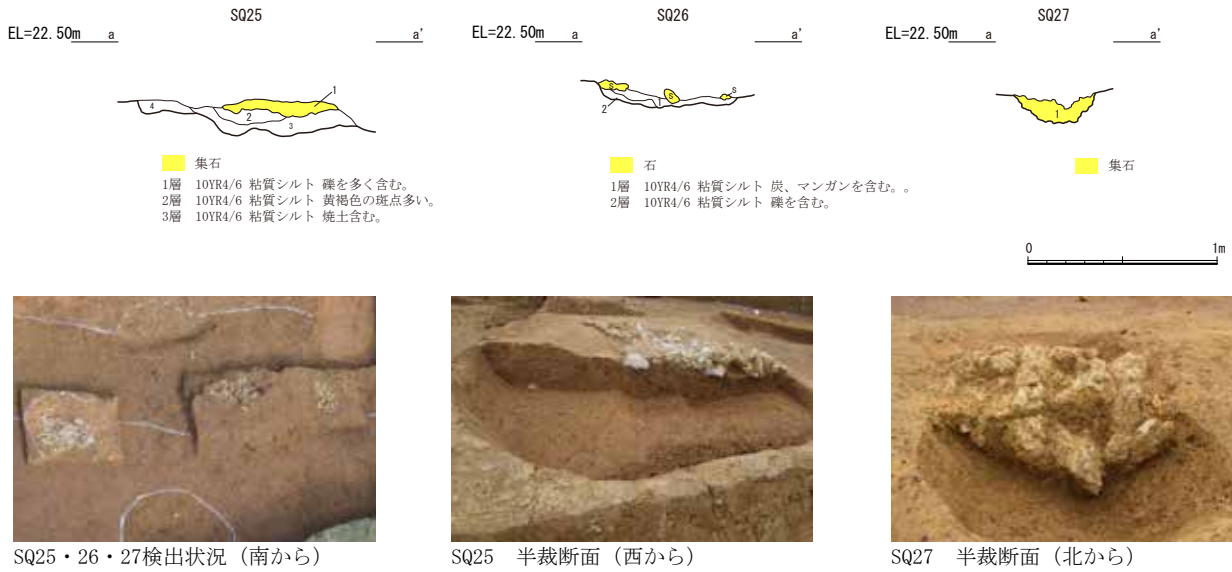


第4遺構面の検出状況（南から）

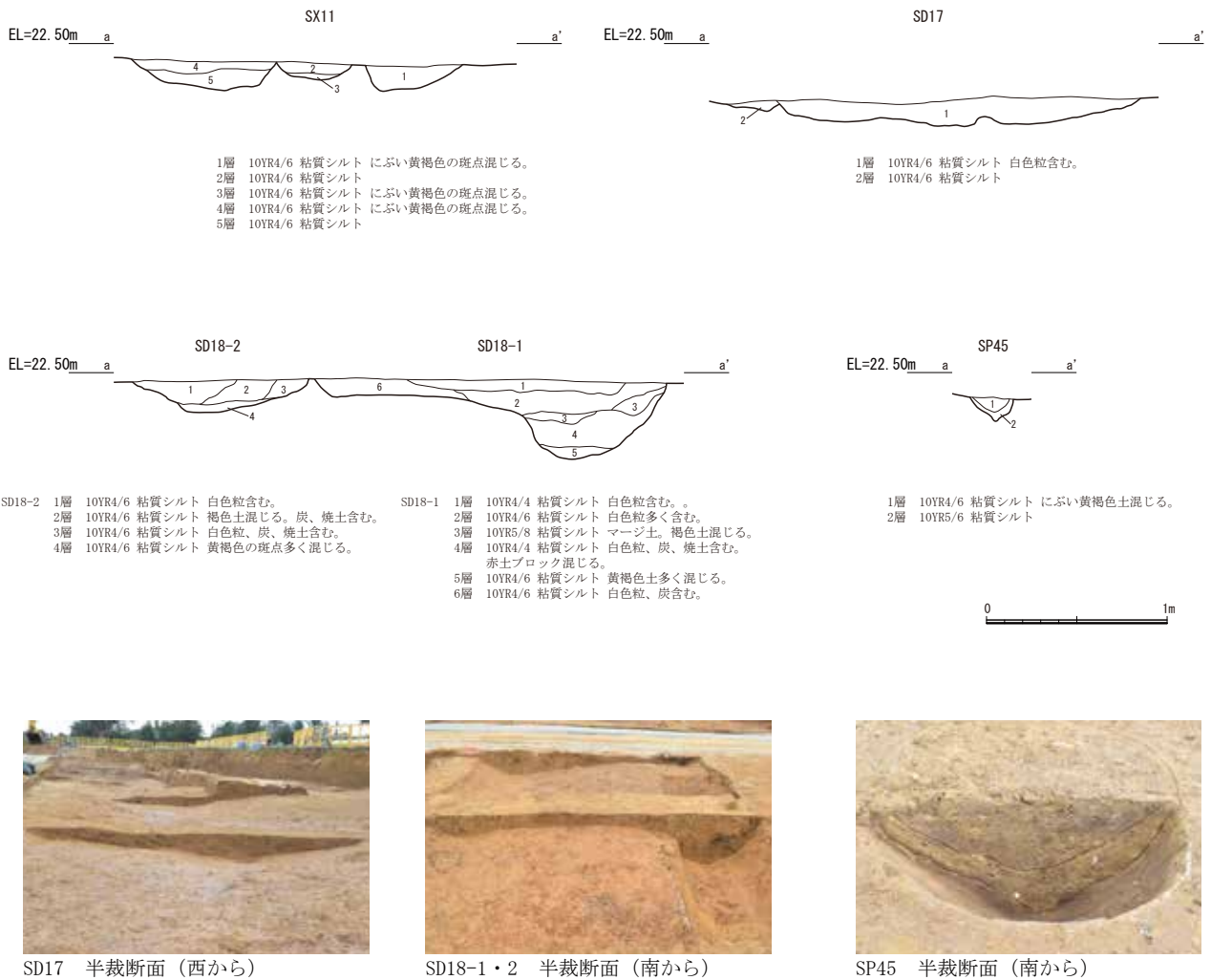


第5遺構面の完掘状況（南から）

図版5 C地区の遺構（第4・5遺構面）



第4遺構面の遺構



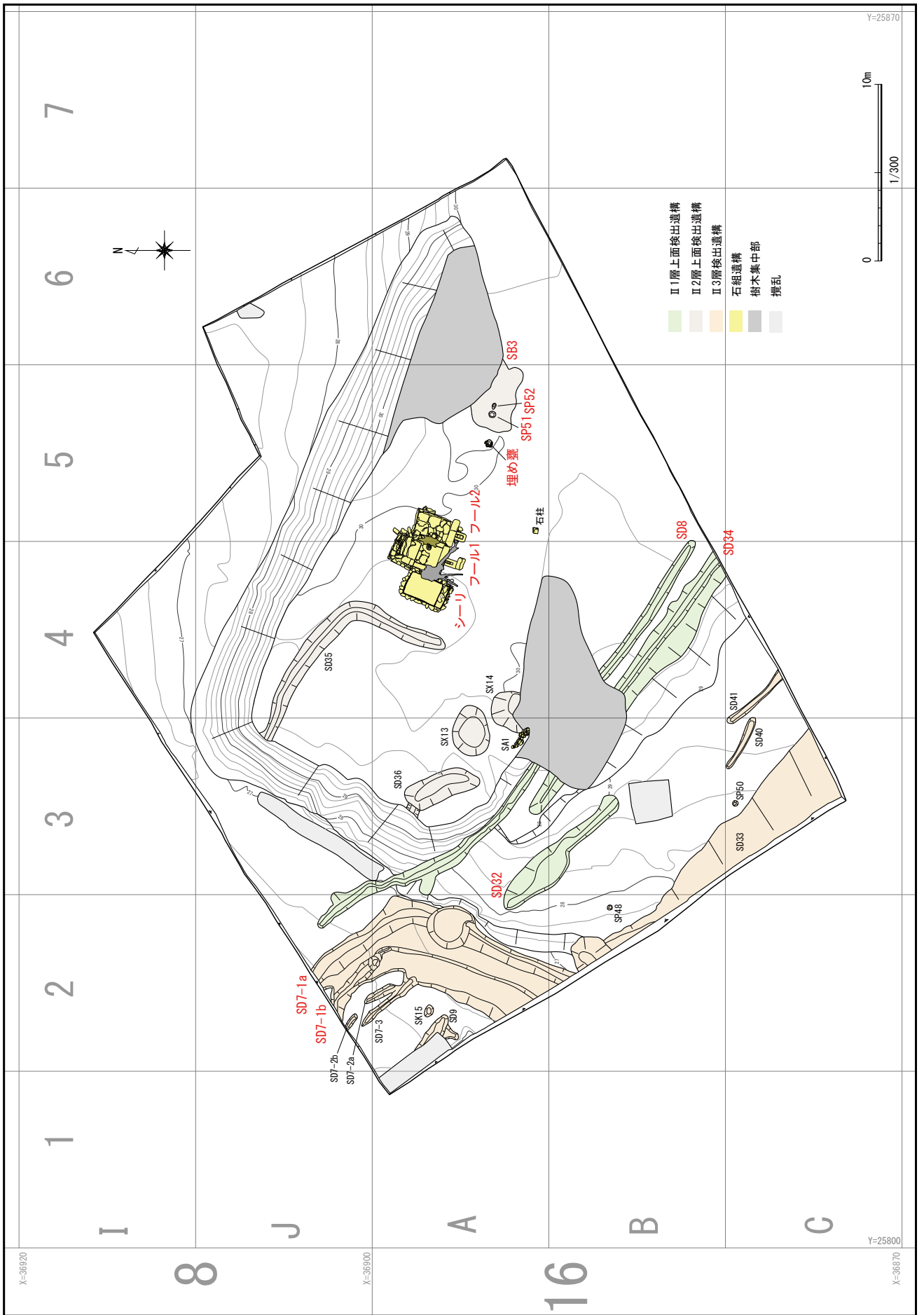
第5遺構面の遺構

第48図 C地区の遺構（近世）

4. D地区

D地区で確認された遺構は、近世から近代の時期で下限が戦前の遺構が主体を占める。主な遺構としてはフール、シーリ、埋め甕、ピット、土坑、焼土面、溝状遺構等が確認されている（第49図）。本地区周辺は大きく地形が改変されているが、当地は森林地として残っていたことから遺構が破壊されずに残っている部分が多く、特にフール、シーリは埋設されずに良好な保存状態で残っていた。第III章第2節でも述べた通り、当地は中央部分から北側及び西側に向けて急な勾配の地形となっている。フール、シーリは標高地の高い平坦な中央部分で確認されており、北側に向けての傾斜地や平坦な部分では溝状遺構が多く確認されている。本地区は下勢頭集落の西端の屋敷地となっており、フール、シーリが確認された中央部分が屋敷地、そこから勾配をなしていく北側及び西側は耕作地であろうと想定した。以下、主な遺構について記述する。

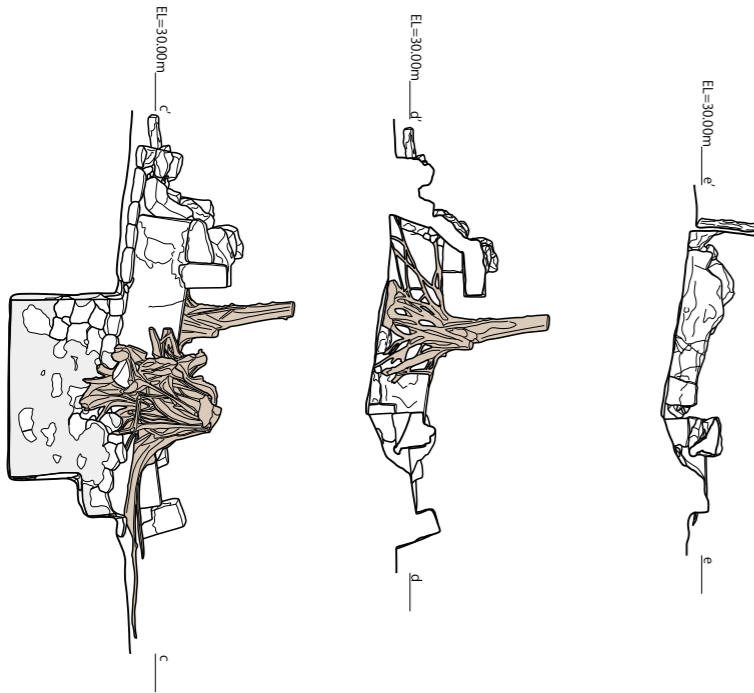
フール2基（フール1、フール2）、シーリ1基が連結して確認されている。フールは「ワーフール」、「ウワーフール」等とも呼ばれ、便所機能と豚の飼育を目的とした機能を併せ持った施設となっている。シーリは「キューチブ」、「コグーエーチブ」等とも呼ばれ、豚小屋と関連しつつ肥溜めにより水肥を生産する部分となっている^{註6}。フールはフール1、フール2とも便座を南西部分に据えて確認されている。フール1は石井龍太氏による分類基準に照らし合わせると「石製布積・石屋根型」に分類される^{註6}。直方体に加工された石灰岩を布積みして壁面を築き小屋部を作っている。石材の中には1mを超す大型のものも使用しており、内部壁面にはモルタル（又はセメント）が塗布されている。壁面は正面壁に沿って排水溝が設けられており、フール2→フール1→シーリへと排水溝が連結して小屋内部の汚物がシーリに流れ込むようになっている。小屋部の奥側半分には石灰岩を積んで屋根をかける。屋根は方言でマチと呼ばれる技法で上面は平坦、内面はアーチ型を作っている^{註7}。屋根は5枚の石灰岩で製作されており、壁面との接合部分には石材に凹凸を設け、噛み合うように工夫されている。床面は扁平にした石灰岩を敷き詰めた後にモルタル（又はセメント）を塗布しており、屋根の下の部分は平坦で無蓋の部分は手前に向かって傾斜する。小屋部中央の右端には沖縄産施釉陶器の大碗（ワンプー）をモルタル（又はセメント）で床面に張り固めて水入れが設けられている。小屋部の正面壁外側には便座が設けられている。便座は一つの石灰岩を削って作られており、上面は平坦に成型され、そこから急角度に落ち込む溝を設けて通し孔とする。便座に近接して石灰岩が置かれているが目隠し壁の残りかどうかは判断としない。フール2はフール1の東隣に連結して作られている。小屋部の左壁はフール1の右壁を使用しており、その他は扁平に薄く加工した石材を並べて築いている。屋根はない。屋根を構築するような柱や柱穴も確認することはできなかった。床面は扁平にした石灰岩を敷き詰めた後にモルタル（又はセメント）を塗布しており、奥側から手前に向かって傾斜する。小屋部中央の左端にモルタル（又はセメント）で形作られた水入れが設けられている。便座は一つの石灰岩を削って作られており、上面は平坦に成型され、そこから急角度に落ち込む溝を設けて通し孔とする。フール2はフール1と比較すると使用した石材の成形が粗く、また左壁をフール1の石材を使用していることから、フール1よりも後に作り加えられた可能性が考えられる。シーリはフール1の西隣に連結して作られている。方形に地山を掘り込んでやや雑に面取りした石灰岩を野面積みしておりモルタル（又はセメント）を壁面、床面に塗布する。深さは1.2mとなっている。フール1から連結している排水溝よりも南側には0.4mの段を設けられている。このフール、シーリは出土遺物が殆ど無かったことから建築時期は判断できなかったが、埋設されずに遺構が残っていたこと、石井龍太氏の論考による『沖縄風俗図絵』（1897年）にフールの「石製布積・石屋根型」が掲載されていることを根拠に19世紀末までには登場していたであろう^{註6}としていることから、本遺構も近代から米軍占領直前までの時期と捉えておきたい。



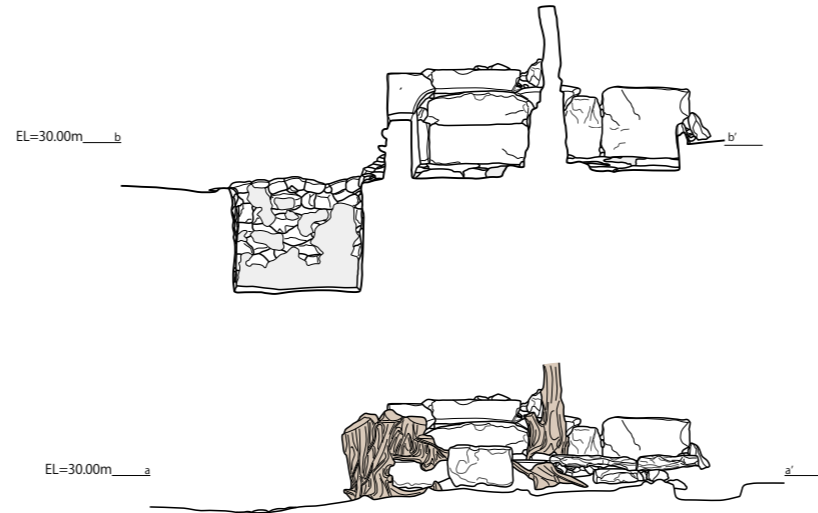
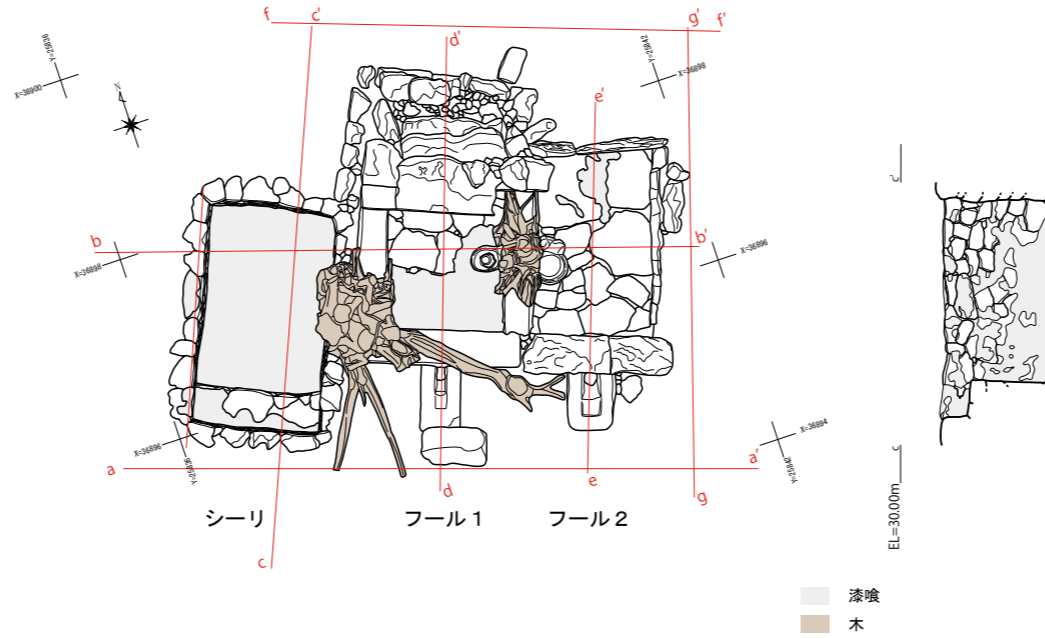
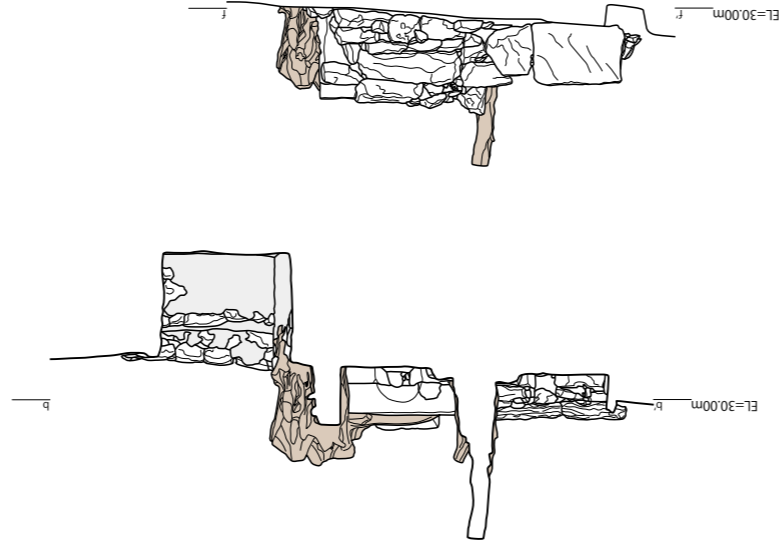
第49図 D地区の遺構位置図



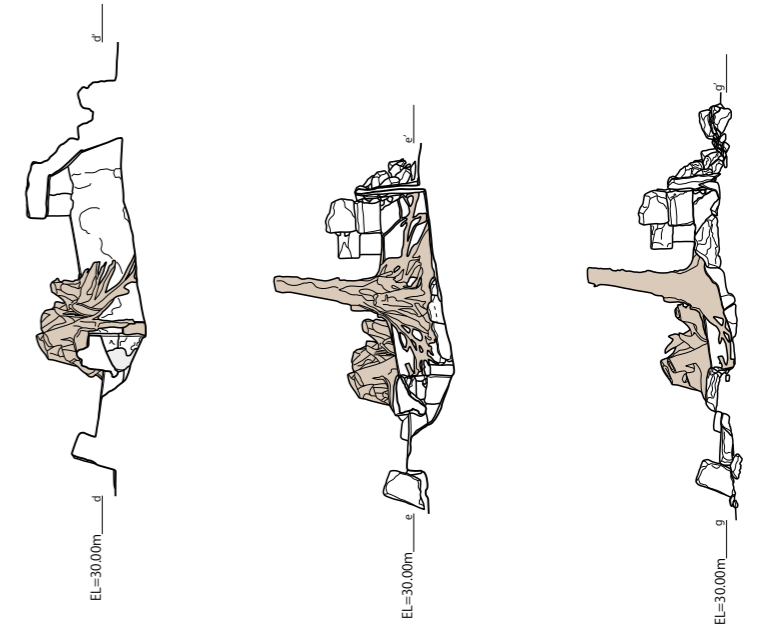
全体俯瞰



左側側面

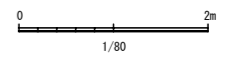


右側側面



正面

第50図 D地区の遺構1





シーリ 床面検出状況（南から）



シーリ 検出状況（西から）



フール1・2 検出状況（南から）



フール1・2 裏側（北から）



フール1 裏側（北から）



フール1 便座部分（西から）



フール1 内部正面（南から）



フール1 内部前方（北から）

図版6 D地区の遺構1



フール1 シーリへと続く排水溝（東から）



フール1 水入れ（南西から）



フール2 便座部分（西から）



フール2 内部正面（南から）



フール2 内部正面（北から）



フール2 内部西側面（東から）



フール2 フール1へと続く排水溝（東から）



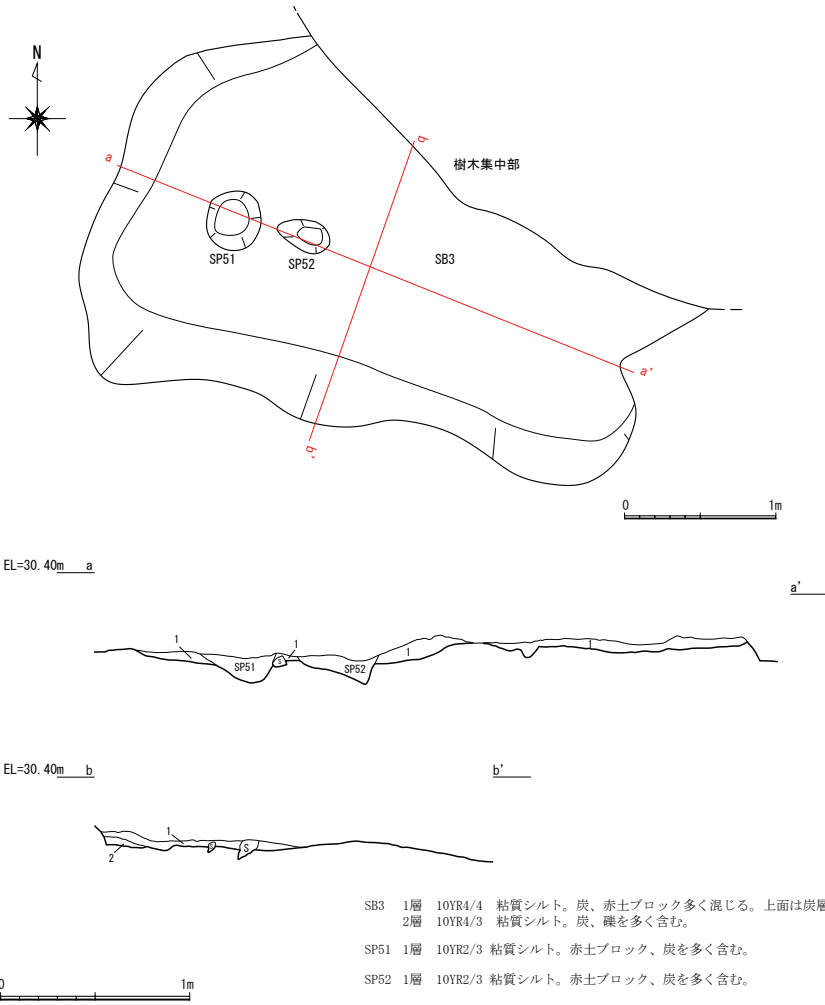
フール2 水入れ（南東から）

図版7 D地区の遺構2

焼土面（SB3）、ピット（SP51、SP52）がフールの西側で確認されている。SB3は地山を浅く掘り込んだ土坑状となっており、北側の一部分を検出することができなかったが、3.5m×2.4mの規格になると想定できる。埋土は周辺のⅡ層土と炭が混在したものとなり、上面は焼土を多く含んだ炭層が堆積していた。SB3内ではSP31、SP32と2基のピットが確認されている。このピットを含んだ焼土面は、北側に伐採できない樹木があったため全面を確認することができなかったが、第Ⅱ章第2節層序の第17図Aライン北壁で観察すると石が土坑状に配置されていることがみられることから、台所の竈の機能が想定できる。フール、シーリと同遺構面の検出であることから近代から米軍占領直前までの時期と考えられる。

埋め甕は焼土面（SB3）の西隣で確認されている。沖縄産無釉陶器の甕が浅く掘り込んだ窪みに置かれて埋土で固定されていた。埋め甕の沖縄産無釉陶器甕は第57図（図版11）の6に示した。

溝状遺構は調査区の西側で確認されている。SD8、SD32、SD34はⅡ1層上面で検出しており、周辺の地形に沿って傾斜しながら南東方向から北西方向へと続いている。深さは0.1mから0.4mとなっている。東側に展開する屋敷地に沿って伸びていることから、屋敷の区画の機能が想定できる。時期は屋敷に伴う溝と想定できることから、近代から米軍占領直前までの時期と考えられる。SD7は大型の溝でⅡ3層の下、地山上面で確認されている。深さは0.4mから0.6mとなっている。南側にあるSD33と連続性があることから、一つの大型の溝の可能性も考えられる。溝内で更に2条から3条の溝に分けられることからA地区の溝状遺構（SD1、SD2-1、SD2-2）と同様な耕作に伴う溝跡であると判断した。時期は上面が近代遺構面としたⅡ1層の下に堆積するⅡ3層よりも更に下で確認されていることから、近世の時期が考えられる。



SB3・SP51・SP52 平面・半裁断面図



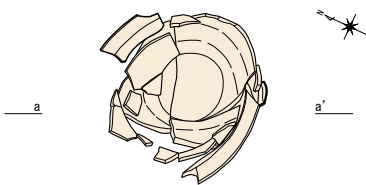
SB3 検出状況 (南から)



SB3 半裁断面 (南から)



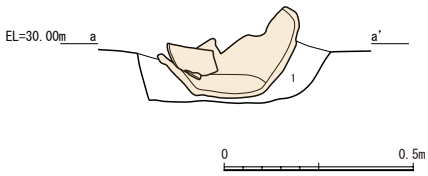
SB3 半裁断面 (西から)



埋め甕 検出状況 (西から)



SB3 半裁断面 (南から)



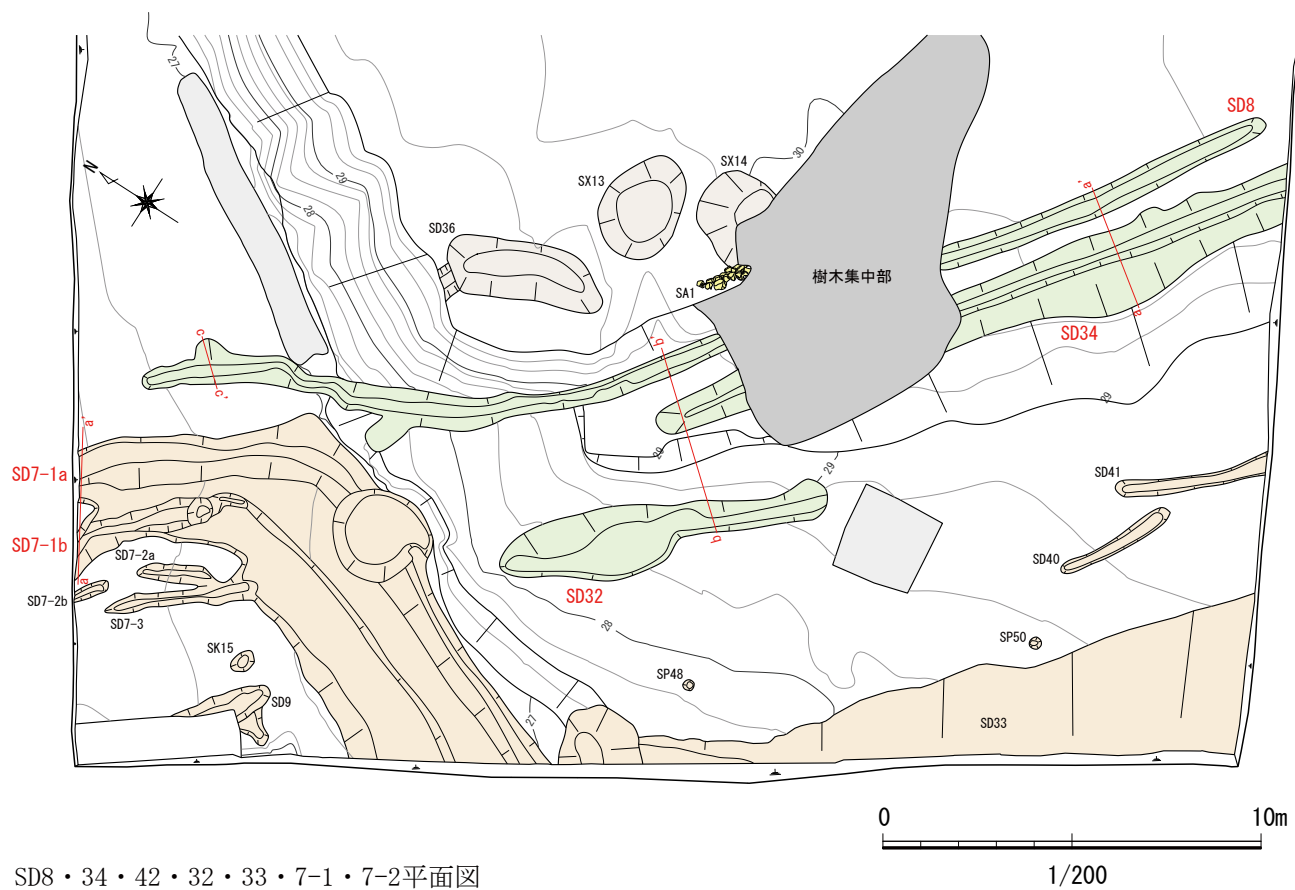
埋め甕 半裁断面 (西から)



SB3・SP51・SP52 半裁断面 (北から)

埋め甕 平面・半裁断面図

第51図 D地区の遺構2



SD8・34・42・32・33・7-1・7-2平面図



SD完掘状況 (南から)



SD完掘状況 (南から)

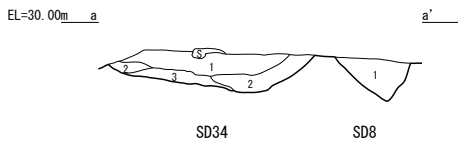


SD完掘状況 (北東から)



SD完掘状況 (南から)

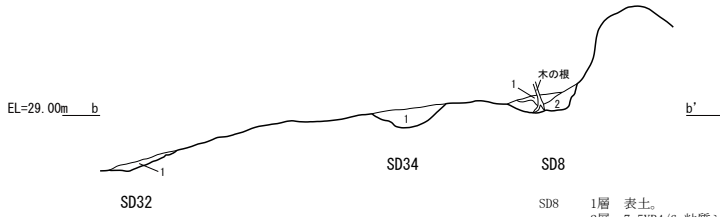
第52図 D地区の遺構3



SD18 1層 10YR3/3 粘質シルト。
 SD34 1層 10YR3/3 粘質シルト。
 2層 10YR3/3 粘質シルト 赤土ブロックを多く含む。
 3層 国頭マージに1層が混じる。



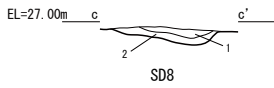
SD34・8 断面 (aライン)



SD8 1層 表土。
 2層 7.5YR4/6 粘質シルト。
 SD34 1層 7.5YR4/6 粘質シルト。
 SD32 1層 7.5YR4/6 粘質シルト。



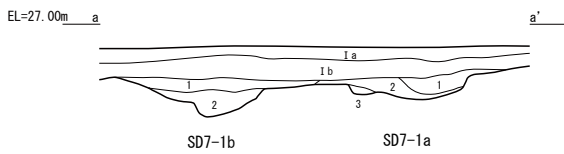
SD8 断面 (bライン)



SD8 1層 10YR3/3 粘質シルト。
 2層 10YR3/3 粘質シルト 赤土ブロックを含む。



SD34 断面 (bライン)



SD7-1 1層 10YR4/6 粘質シルト。
 2層 10YR4/4 粘質シルト 礫を多く含む。
 3層 国頭マージに2層が混じる。
 SD7-2 1層 10YR4/4 粘質シルト。
 2層 10YR4/6 粘質シルト。



SD32 断面 (bライン)



SD7-1・2 断面



SD8 断面 (cライン)

第53図 D地区の遺構 4

沖縄産施釉陶器（第54・55図、図版8・9、第6表）

方言で「上焼（ジョウヤチ）」と称される一群で、器の表面に釉薬を塗布する製品を指す。釉薬には灰釉、黒釉、鉄釉、白化粧（白化粧+透明釉）などがあり、その中でも白化粧（白化粧+透明釉）のものが最も多く、それに呉須（酸化コバルト）や緑釉で文様を描くものもある。器種としては碗、皿、鉢、瓶、壺、急須、蓋物、酒器（カラカラ）、杯、鍋、火取、火炉、香炉、灯明具、壺、壺蓋、厨子甕があった。4,543点が出土しており、うち24点を図示した。

〈碗〉（1～7）

3,160点が出土しており器種別出土量は最多である。直口碗と外反口縁碗に分かれ、外反口縁碗が多い。1は直口碗で腰に丸味を持ち口縁に向けて直に立ち上がる。高台は内外を斜めに削り出し高台脇に挟りが入る。2～7は外反口縁碗で、大きめの高台で高台脇に削りを巡らし、逆八の字状に直線的に立ち上がり口縁が外反する。いずれも内底面に蛇の目釉剥と重ね焼きの目痕が認められる。文様は1、6の呉須（酸化コバルト）で絵付けする唐草文、5の丸に勾玉と一の文字を上下に配置した巴の変形型丸文、7の呉須（酸化コバルト）と鉄釉により絵付けする花文（イングアーチチャー）がみられる。無文の碗には2の全面に鉄釉と白化粧掛けした飴色碗、3の鉄釉掛け碗、4の白化粧碗がある。

〈小碗〉（8・9）

109点出土している。8は外面が鉄釉、内面が白化粧と掛け分けがされている。9は白化粧の小碗となっている。

〈皿〉（10・11）

22点出土している。10は底部から口縁まで開きながら立ち上がり口縁上部で僅かに内湾する。口唇は肥厚気味で丸い。高台は外側を斜めに削り高台脇に挟りを入れている。文様は呉須（酸化コバルト）で口唇を塗布し、内体面に草花文を描き花卉内に鉄釉を差している。11は口縁が輪花を成形する。底部から腰部にやや丸味を持ち口縁まで開きながら立つ。高台に内外から斜めの削りを入れる。畳付けの断面は方形になっている。文様は呉須（酸化コバルト）で口唇を塗布し、口縁内面に有心の弧状文を描き圏線で閉じ、内底面中央に渦巻き文を描く。10、11いずれも内底面に蛇の目釉剥ぎ、高台畳付けに化粧土掛けの工程がみられる。

〈鉢〉（12・13）

367点出土している。12は底部から胴部まで緩やかに立ち上がり口縁は内湾し、口唇は肥厚する。高台は内外から削り出しており先端の断面は三角形となる。13は腰部がやや膨らみ逆八の字状に直線的に立ち上がり、口縁は外側に折り返して下向きに鏝状を成す。高台は内外から斜めに削り、断面は三角形となる。12、13共に釉が内外で掛け分けられており、外面は口唇先端から底部まで鉄釉掛け、内側は口縁内から内底まで白化粧が施されている。内底部に蛇の目釉剥ぎと重ね焼きの痕（化粧土）がみられる。

〈火取〉（14）

104点出土している。14は小さめの高台で腰から口縁まで垂直に伸び筒状を成す。口唇は内側に丸め肥厚する。内外に白化粧を施し、外面は口唇から腰まで透明釉掛けされている。底部と内側は透明釉の掛からない白化粧となっている。

〈灯明具〉（15・16）

5点出土している。15は体部が丸碗状で断面形が逆T字状の脚台が付くものである。内底面に三角錐状の突起を有する。全体に鉄釉掛けされるが脚台の外面は露胎している。16は灰釉碗の底部を二次転用し灯明皿として使用したものである。縁部に加工痕はないが煤痕がみられる。

〈瓶〉（17・18）

35点出土している。なおそのうち20点は花瓶となっている。17、18は台付の花瓶である。17は丸味のある胴部から長い頸部を持ち口縁で外側に開く。頸部と胴部の境目から対の縦耳を貼付している。全体に白

化粧し外面に呉須(酸化コバルト)を掛けている。18は花瓶の胴部から底部までの資料である。胴部は張った肩から底部に向かいハート形に窄む。肩から頸にかけて対の縦耳が付く。底部は脚台を持ち高台部分は浅い輪状となっている。外面に白化粧、緑釉、透明釉を掛けている。緑釉は体部上位のみ施釉している。

〈壺〉(19)

19点出土している。19は口径よりも胴径のほうが大きな深鉢型の壺で胴上部に断面形がD字状の縦耳を貼付している。全面に黒釉が掛けられている。方言で「アンダガーミー」と称されるものである。

〈酒器〉(20・21)

方言で「カラカラ」と称されるもので9点出土している。20は胴部がかぼちゃ形で頸部が長く伸び、外反口縁となる。肩部に注ぎ口の孔がみられるが、注ぎ口自体は破損し残っていない。外面に白化粧し鉄釉、緑釉を交互に掛け縦縞状を成す。高台内は白化粧が掛かっている。21は側面が紡錘型の胴体を持ち断面形は菱形となっている。胴部の上半分に幾何学模様(円に三角形)を線彫と呉須(酸化コバルト)で枠を描き三角形に鉄釉を差している。胴部の下半分に文様や白化粧は無く透明釉もまばらである。20、21共に底部は外側に傾斜する幅広高台を持つが割りは浅い。

〈蓋〉(22・23)

40点出土している。22は縁甲部が三度笠形になるもので小鉢の蓋と考えられる。甲部全体は平坦で中心に摘みがある。摘みは円形の中心が窪んだ形となっており断面形はハート形に近い。内側に輪状突起(身との接地部分)を有し、突起の先端は細く断面形は方形となっている。表面には幾何学模様(円形、放射線、菱形)の線彫りに呉須(酸化コバルト)と鉄釉で絵付けしている。全体的に白化粧され外面のみ透明釉掛けされている。内面に透明釉は施されていない。23は急須の蓋と考えられる。縁部が四角く甲部の中心は僅かに盛り上がるが全体的にやや扁平である。摘みは宝珠型を成す。内側に輪状突起を有し、甲内面はドーム状で粗孔を穿っている。甲部表面に白化粧が施されており、線彫りの幾何学模様(円に星形)と呉須(酸化コバルト)で絵付けされている。内側は白化粧のみである。

〈鍋〉(24)

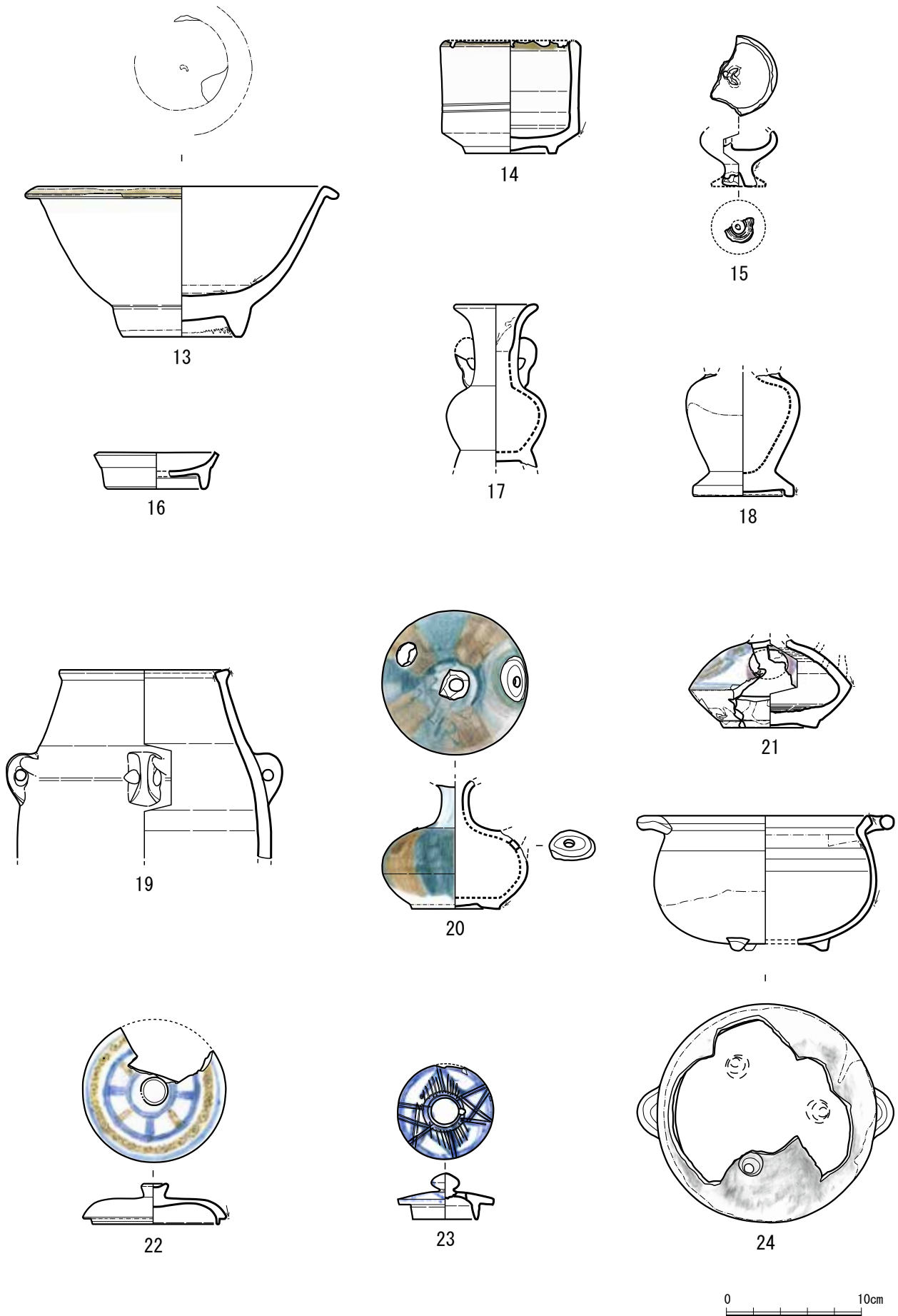
5点出土している。24は丸底で円錐形の脚が三ヶ所に付く。底部から胴部は丸型で内湾し口縁部がくの字状に屈曲する。口縁の内側は蓋受けの溝を巡らしている。外側は横耳を口縁下位に対で貼付している。胴下部から内底まで鉄釉が施されている。

第6表 沖縄産施釉陶器 観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	法量 (cm)			釉	素地	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
			口径	器高	底径					
第54図 図版8	1	碗	口～底	11.5	5.7	5.6	釉の範囲：全面 釉の種類：白化粧土・呉須・透明釉 釉剥ぎ箇所：内底面	淡褐色	口縁が直口するやや小ぶりの碗。口唇は舌状先端は丸い。高台は内外を 斜めに削り高台に挟み入れている。内底面に蛇の目状の釉剥ぎがみ られる。外面に呉須の花唐草文、口縁内に草花文を施文している。	B地区 20-G2 SD25 3～5層
	2	碗	口～底	12.75	5.55	5.7	釉の範囲：全面 釉の種類：白化粧土・鉄釉釉剥ぎ箇所： 内底面	灰褐色	腰部に膨らみを持ち、胴部は上部まで直線的に開き立ち上がる。口縁は 外反し、口唇は舌状。高台は内外から斜めに削り出し、畳付けは平坦。 釉は白化粧した後に鉄釉掛けしている。外面は轆轤の痕に釉の濃淡が横 縞を成す。内底面に蛇の目状の釉剥ぎがみられ、高台に化粧土が残る。 高台内に一字の線刻が認められる。蓋印か。	D地区 8-J3 SD8 1層
	3	碗	口～底	13.9	6.7	6.6	釉の範囲：高台脇 釉の種類：鉄釉 釉剥ぎ箇所：内底面	淡褐色	ほぼ直口するが口縁先端のみ僅かに外側に屈曲させる。口唇は舌状。高 台は内外から斜めに削り、畳付けは四角い。釉は高台脇まで施釉され内 底面の中心の釉は拭き取る様な渦巻きを見せる。その外側に蛇の目釉剥 ぎがある。重ね焼きの化粧土が残り、高台畳付け脇に化粧土が僅かに残る。	B地区 19-J8 SD28 2層
	4	碗	完品	13.8	6.4	6	釉の範囲：全面 釉の種類：白化粧土・透明釉 釉剥ぎ箇所：内底面	確認	底部は高台を内外から斜めに削り、畳付けは四角い。高台脇を削り出す。 口唇は丸味持ち胴部は直線的に開きながら立ち上がる。口縁は外反し、 口唇は丸い。釉は白化粧、透明釉を全面に施す。内底面に蛇の目状の釉 剥ぎがみられる。	B地区 19-J8 SD38 2層
	5	碗	口～底	14.4	6.9	6.7	釉の範囲：全面 釉の種類：白化粧土・呉須・透明釉 釉剥ぎ箇所：内底面	淡褐色	底部からほぼ真っ直ぐに立ち口縁は外反する。口唇は舌状に尖る。高台 脇に削り、高台内外から斜めに削り畳付けは四角い。内底面に蛇の目 状の釉剥ぎがみられる。外面に呉須で円の中に向かい合う勾玉と一の文 字を上下に配置した巴文の変形型の様な文様が見られる。	B地区 19-J8 SD38 1層
	6	碗	口～底	13.55	6.35	6.3	釉の範囲：全面 釉の種類：白化粧土・呉須・透明釉 釉剥ぎ箇所：内底面	淡褐色	底部からほぼ直線的に立ち上がり口縁が外反する。口唇は舌状で先端は 尖る。高台脇に削りがみられ高台は内外から斜めに削る。内底面に蛇の 目状の釉剥ぎがみられる。外面に呉須の花唐草文を施文している。	B地区 19-J8 SD38 1層
	7	碗	口～底	13.8	7.9	6.6	釉の範囲：全面 釉の種類：白化粧土・呉須・鉄釉・透 明釉 釉剥ぎ箇所：内底面	淡褐色	腰部はやや丸味を持ち胴部は真っ直ぐに開き立ち上がる。口縁は先端で 反る口唇は丸い。高台は内外から斜めに削るが畳付けは平坦。外面に呉 須で丸い花弁と鉄釉の花心を描く花文(イングラーチヤ)を三ヶ所 に施文している。内底面に蛇の目状の釉剥ぎがみられる。外表面と高台 内に指の痕が認められる。	B地区 19-J8 SK98 2層
	8	小碗	口～底	8.2	4.45	3.75	釉の範囲：全面、掛け分け 釉の種類：内面：白化粧土・透明釉・ 外面：鉄釉	暗褐色	底部から丸味を持ち立ち上がり口縁は直口する碗である。口唇は舌状 に尖る。高台脇に挟み入る。高台は内外から斜めに削り出すが畳付け は平坦。高台内に窯裂痕がみられる。釉は内面と外面とに掛け分けされ 外面は鉄釉、内面は白化粧の後に透明釉を掛けている。	C地区 21-C5 SK6 1層
	9	小碗	口～底	8.1	4.2	3.9	釉の範囲：全面 釉の種類：白化粧土・透明釉 釉剥ぎ箇所：内底面	淡褐色	腰部にやや丸味を持ち口縁まで直に立ち上がる。口唇は先端が尖る。高 台脇に削りがあり、高台は内外から斜めに削られる。内底面に蛇の目状 の釉剥ぎがみられる。	B地区 20-G2 SD25
	10	大皿	口～底	20	5.25	9.2	釉の範囲：全面 釉の種類：白化粧土・呉須・鉄釉・透 明釉 釉剥ぎ箇所：内底面	淡褐色	口縁は内湾、口唇はやや肥厚する。高台は外側に斜めに削り高台脇に挟 み入れている。畳付けは化粧土、内底面は蛇の目釉剥ぎしている。口 唇に呉須を塗布し、内表面に草花文、呉須で描いた花弁に鉄釉を差して いる。口縁外面に虫食い(釉の剥落)がみられる。	B地区 19-110 SP78 1層
	11	皿	口～底	10	3.45	5.6	釉の範囲：全面 釉の種類：白化粧土・呉須・透明釉 釉剥ぎ箇所：内底面	淡褐色	口縁を外側から押し、十六花弁の輪花作っている。底部からの立ち上 がりは腰部でやや丸味をもつがほぼ直に立つ。高台は内外から斜めに削 り、畳付けは四角い。内底面に蛇の目状の釉剥ぎがみられる。口唇部に 呉須を塗布し、口縁の内側に有心の弧状文を施す。内底面に纏線、中央 に渦巻き文を施文している。	B地区 19-J8 SD38 1層
12	鉢	口～底	22	9.5	8.1	釉の範囲：全面、掛け分け 釉の種類：内面：白化粧土・透明釉・ 外面：鉄釉 釉剥ぎ箇所：内底面	灰褐色	底部から胴上部まで直線的に立ち上がるが口縁は内湾し口唇は肥厚する。 高台は内側と外側から削り先端は断面形は三角状である。釉は内面と外 面に掛け分けられ外面は鉄釉、内面は白化粧の後に透明釉を掛けている。 内底面に蛇の目状の釉剥ぎと重ね焼きの痕(化粧土)がみられる。畳付 けは露胎し一部化粧土が残る。	B地区 20-H2 SD25 4層	
第55図 図版9	13	大鉢	口～底	23.2	11.15	8.8	釉の範囲：全面、掛け分け 釉の種類：内面：白化粧土・透明釉・ 外面：鉄釉 釉剥ぎ箇所：内底面	淡褐色	腰部がやや膨らみ逆八の字状に直線的に口縁に至る。口縁は外に折り返 し下向きに鏝状を成す、口唇は舌状である。高台は内外から斜めに削り 先端は三角状に削る。断面形は三角。釉は内外で掛け分けられ、外面は 口唇先端から底部まで鉄釉掛け、内側は口縁内から内底まで白化粧に透 明釉掛けされている。内底面に蛇の目状の釉剥ぎがみられる。	B地区 19-17 SX16
	14	炉	口～底	10.4	8.35	6.7	釉の範囲：外面腰上 釉の種類：白化粧土・透明釉	淡褐色	筒型の炉(火取)である。底部は小さい高台を持ち腰まで皿状に広がり、 胴部は筒状に口縁まで伸びる。口縁は内に丸味肥厚させる。口唇部に鉄 釉を塗らしている。外面の腰から底部と内側は白化粧のみである。	B地区 20-H2 SD25 4層
	15	灯明台	胴部	-	(4.15)	7.6	釉の範囲：表面 釉の種類：鉄釉	淡褐色	体部は丸碗の様な形態で脚台が付く。内底面に三角錐状の突起を有す。 口縁は内湾。底部は中空。全体に鉄釉掛けされている。脚台の裏は露胎 している。	B地区 19-J7 SX16
	16	灯明	底部	-	(2.7)	7.6	釉の範囲：なし 釉の種類：なし	淡褐色	灰釉碗の底部を二次転用し灯明皿として使用したものである。縁部に加工 痕はないが煤痕がみられる。	B地区 19-J10 II1b層
	17	瓶	口縁	6.2	(12.15)	-	釉の範囲：全面 釉の種類：白化粧土・透明釉	淡褐色	花瓶、丸味のある胴部から長い頸部を持ち口縁を外側に開く、口唇は舌 状。頸部と胴部の境目から対の縦耳を貼付、耳は紐をS字状に折り曲げ 成形している。	B地区 19-17 SX15
	18	瓶	底部	-	(9.2)	7.5	釉の範囲：外面のみ 釉の種類：白化粧土・緑釉・透明釉	灰褐色	花瓶の胴部から底部までの資料である。胴部は張った肩から底部に向か いハート形に窄む、底部は脚台を持ち高台部分は浅い輪状である。肩 から頸にかけて対の縦耳が付く。外面に化粧土、緑釉、透明釉を掛けている。 緑釉は体部上位のみの施釉である。高台は化粧土が残り、内側は露胎。	B地区 20-H2 SD25 4層
	19	甕壺	口	12.6	(14.1)	-	釉の範囲：全面 釉の種類：鉄釉	灰褐色	深鉢型の壺(アンダーグラーミー)。胴部はドンダグ型で、口縁はハの字状 に内湾し、断面形は逆L字状を成す。口唇は肥厚し内湾に傾斜させ先 端は露胎している。胴上部に断面形が切字状の縦耳を両側に貼付している。	B地区 20-12 SD25 2層
	20	酒器	底部	-	(9.4)	6.5	釉の範囲：表面、内体面不明 釉の種類：白化粧土・透明釉	淡灰褐色	酒器(カラカラ)。底部は幅広高台を持つが削りは浅い、かぼちゃの様 な胴体を持ち一孔の注ぎ口を持つ、頸部は鶴首状に伸びて口縁を外側に 開く。外表面に鉄釉、緑釉を交互に掛け縦縞状を成す。	B地区 20-13 SD23 1層
	21	酒器	底部	-	(6.6)	7	釉の範囲：表面のみ 釉の種類：白化粧土・透明釉	淡褐色	酒器(カラカラ)。底部は幅広高台を持つが削りは浅い、紡錘型の胴体 を持ち断面形は菱型である。胴部の上半分に幾何学模様(円に三角形) を線彫と呉須で描き三角形に鉄釉を差している。胴部の下半分に文 様や白化粧は無透明釉もまばらである。	B地区 20-H3、20-13 SD23 1層
	22	蓋	縁～摘	10.6	3.0	9.4	釉の範囲： 釉の種類：蓋表面、白化粧土・透明釉 蓋表面、白化粧のみ	淡褐色	縁部は傘状に丸くなり先端は四角。甲部はほぼ平坦。摘みは円形で中心 が窪んだ断面形がハート形である。身の内側は輪状の突起を有する。突 起の先端は細く断面形は三角。甲部内面は中心が垂れ下がる形。甲部表 面に幾何学模様(円形、放射線、菱型)の線彫に呉須と鉄釉で色を差し ている。	B地区 19-J8 SD38 2層
	23	急須蓋	完品	7.2	3.4	4.8	釉の範囲：蓋表面 釉の種類：白化粧土・透明釉	淡褐色	甲部の中心が僅かに上がるやや扁平な蓋で、縁部は四角状、摘みは宝珠 型である。内側に輪状の突起を有し、甲内面はドーム状で粗孔を穿ている。 甲部表面に呉須と線彫の幾何学模様(円に星形)を施文している。 内側は白化粧のみ	B地区 20-G2 SD25 3～5層
	24	鍋	口～底	15.4	10	9.4	釉の範囲：外面、口縁～胴部・ 内面、胴部～底部 釉の種類：鉄釉	赤褐色	丸底で円錐形の脚が三ヶ所に付く。胴部は内湾し頸部で窄まり口縁は外 側に屈曲するように開き肥厚し断面形は三角状を成す。口唇は尖る。口 縁の内側は露胎し蓋受けの溝を巡らしている。紐状の横耳は口縁下位に 対で貼付されている。	B地区 19-11 SK44 1層



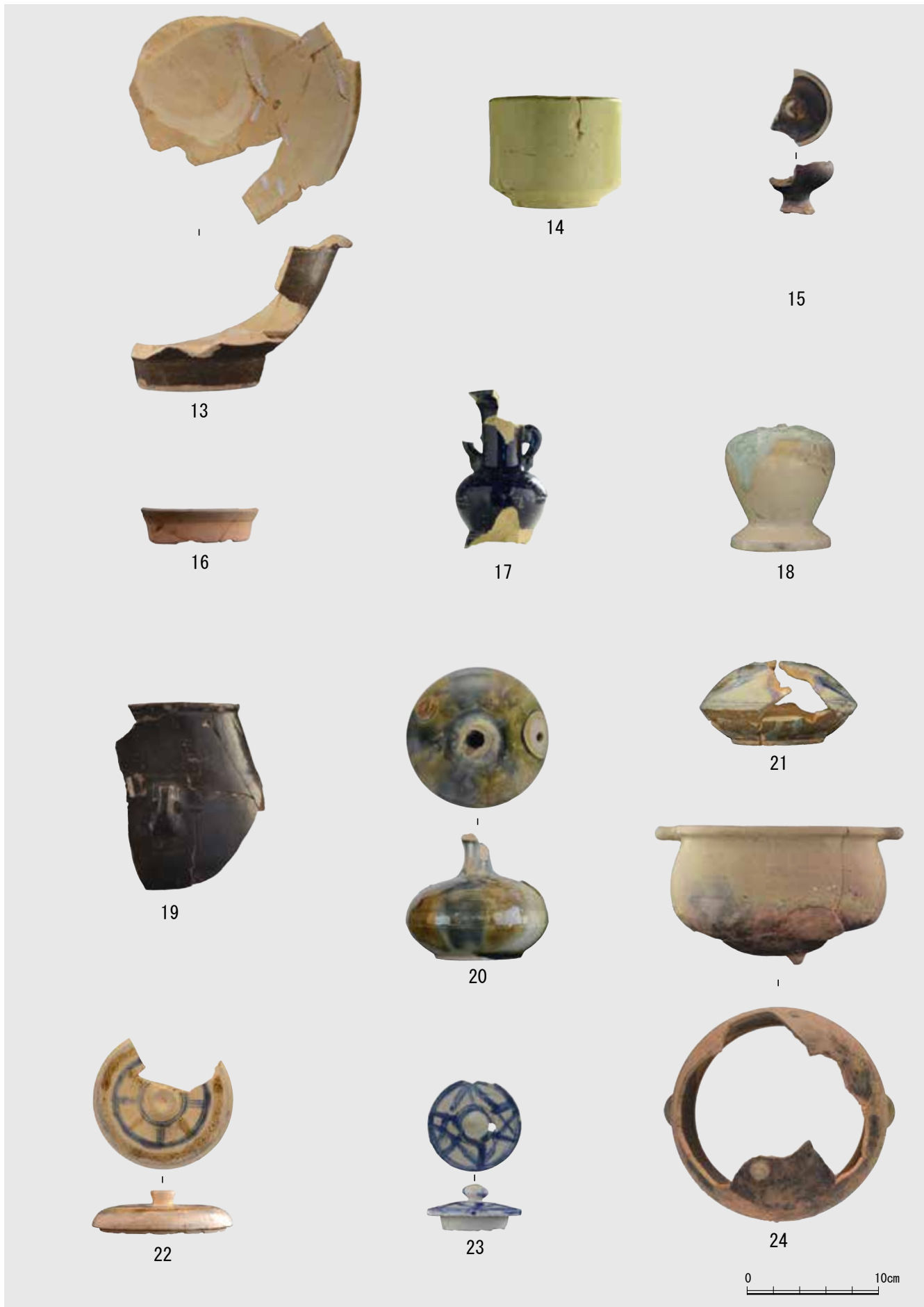
第54図 沖縄産施釉陶器1



第55図 沖縄産施釉陶器2



図版8 沖縄産施釉陶器1



図版9 沖縄産施釉陶器2

沖縄産無釉陶器（第56・57図、図版10・11、第7表）

方言で「荒焼（アラヤチ）」と称される一群で、高火度で焼成された焼き締め陶器を指す。基本的には無釉だが、マンガン釉や泥釉が施されたものもみられる。器種としては皿、播り鉢、鉢、瓶、壺、徳利が得られている。器種別累計数を見ると貯蔵容器である壺、調理容器の播り鉢が多数になる。この二つは日常に欠かせなかった器と言えそうである。3,758点が出土しており、うち14点を図示した。

皿（1）

1点出土している。1は小皿の口縁から底部まで残る資料である。口縁部は内湾気味の直口で外側に逆八の字状に開く。底部は中心がやや上がる平底となる。灯明皿と考えられる。

播り鉢（2・3）

完形4点を含め201点が出土している。口縁は鏝縁状であり、胴が丸く少し小ぶりのタイプと逆八の字状に直線的に開くタイプがある。2はやや水平に伸びる鏝を口縁に持ち、胴腰が丸く底部は平底である。外面に一条の圈線を巡らす。内面は口縁部より2cm下から底部にかけて十二条の櫛で全面に目ガキしている。3は底部から逆八の字状に直線的に開くタイプである。口縁斜め下に伸びる鏝に一条の圈線を巡らす。内面は口縁の2cm下から底部にかけて十二条の櫛で目ガキしている。

鉢（4・5）

207点出土している。4は口縁が鏝縁となる深鉢で、底部から胴部まで直線的に開き、頸部で直に立ちあがり口縁で外に折れ幅広の鏝を作る。外面頸部に横位沈線と櫛状工具による波状文を巡らしている。5は水鉢で腰部から胴部にかけて逆八の字状に直線的に伸び、口縁部が内湾する。底部は真中がやや上がる平底である。胴部に櫛状工具による波状文を巡らしている。

瓶（6～8）

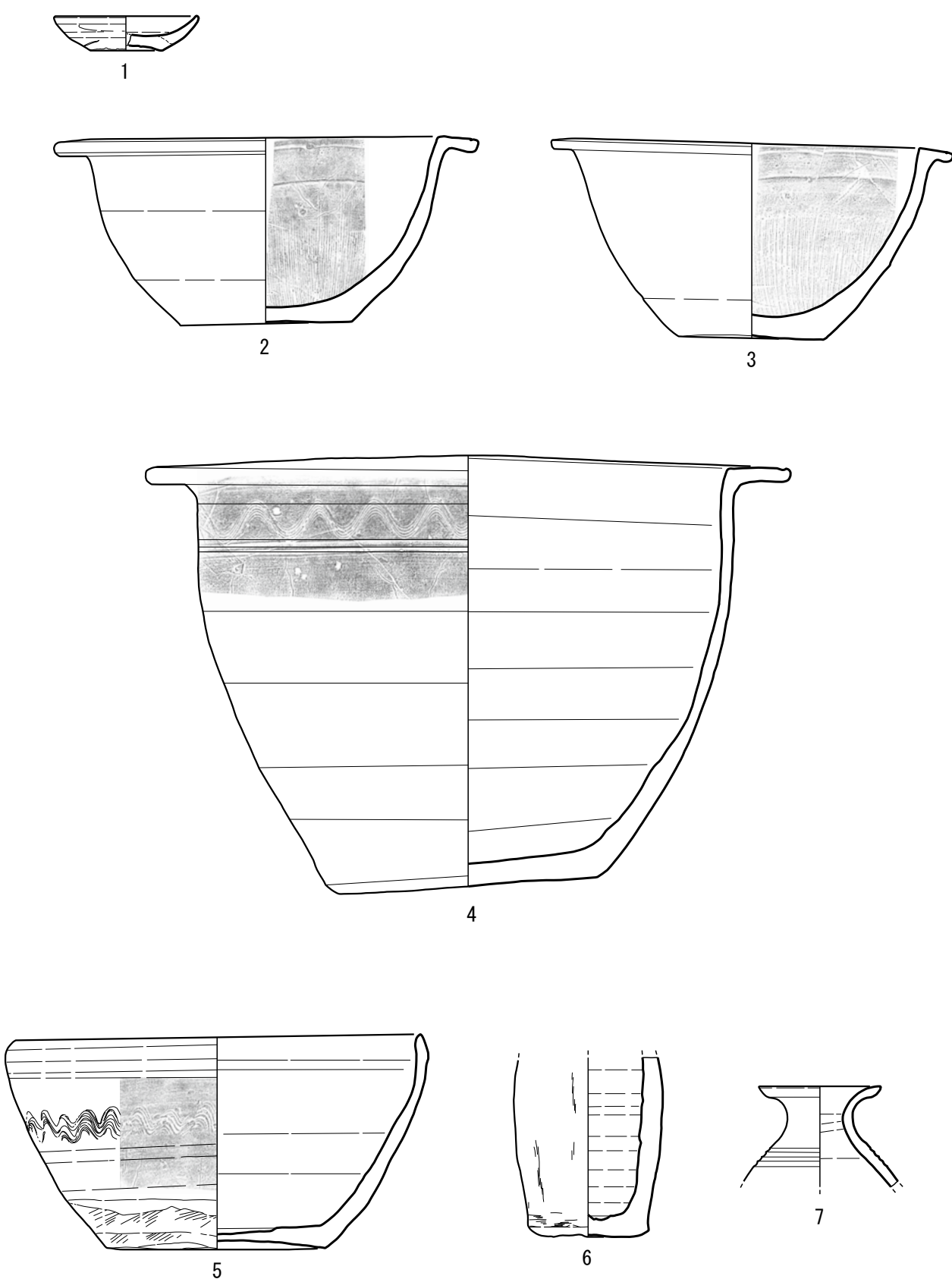
10点出土している。全器種別累計数を見ると0.2%とかなり少なく、時代背景（昭和初期から太平洋戦争）から沖縄産陶器から本土産陶磁器、ガラス製品へと大部分が置き換わったものと考えられる。6は底径8.4cm、器厚1.5cmの瓶底となっており、底部近くの器厚が器高に対してかなり厚い。7は口縁部から肩部まで資料で三角フラスコ型の瓶が考えられる。なでがたの肩部から頸部で締め、口縁部に向けてラップ状に開き口縁部はやや肥厚させ口唇を尖らせている。8は口縁部を欠いたもので、全体のホルムは砲弾型である。胴部に2条、肩部に3条の篋による圈線を巡らす。底部外面に指痕がみられる。

壺（9～14）

完形7点を含め217点が出土している。9、10は胴部中位に最大径を持つ。底部から胴部に向けて直線的に立ち上がり、胴部から緩やかに内に窄まり頸部に至る。口縁は外側に引き上げ鏝状になる。底部外面に整形のための篋削りがみられる。肩部に6～7条、胴部に一条の圈線を巡らしている。11、12は口縁が外に折り返し鏝状となる。口縁部断面は方形になり、鏝先に篋による凹線を巡らす。頸部はほぼ肩から筒状に伸びる形態である。11は肩部が丸く張り、器の最大径は肩部になる。肩部に2条の圈線を巡らし、圈線と頸部間に篋による窯印がみられる。12は胴部が丸く胴部の中位に最大径を持つ。肩部に1条、頸部下部に3条の圈線がみられる。13、14は三つ耳の大型の壺である。13は肩部が丸く張り、頸部が締まった壺で口縁は外側に折り返し玉縁状を成す。底部は腰部まで直線的に開き、胴部は丸味を持たせる。胴部と肩部の圈線間に横耳を三ヶ所に貼付する。肩部に窯印と考えられる「十一」の線彫りがみられる。14は口縁が外側に折り返した肥厚口縁で、口唇の断面形はかまぼこ型となる。底部から胴部かけて直線的に立ち上がる。肩部に圈線を巡らし、その上に横耳を貼付する。肩部に窯印と考えられる線彫りがみられる。

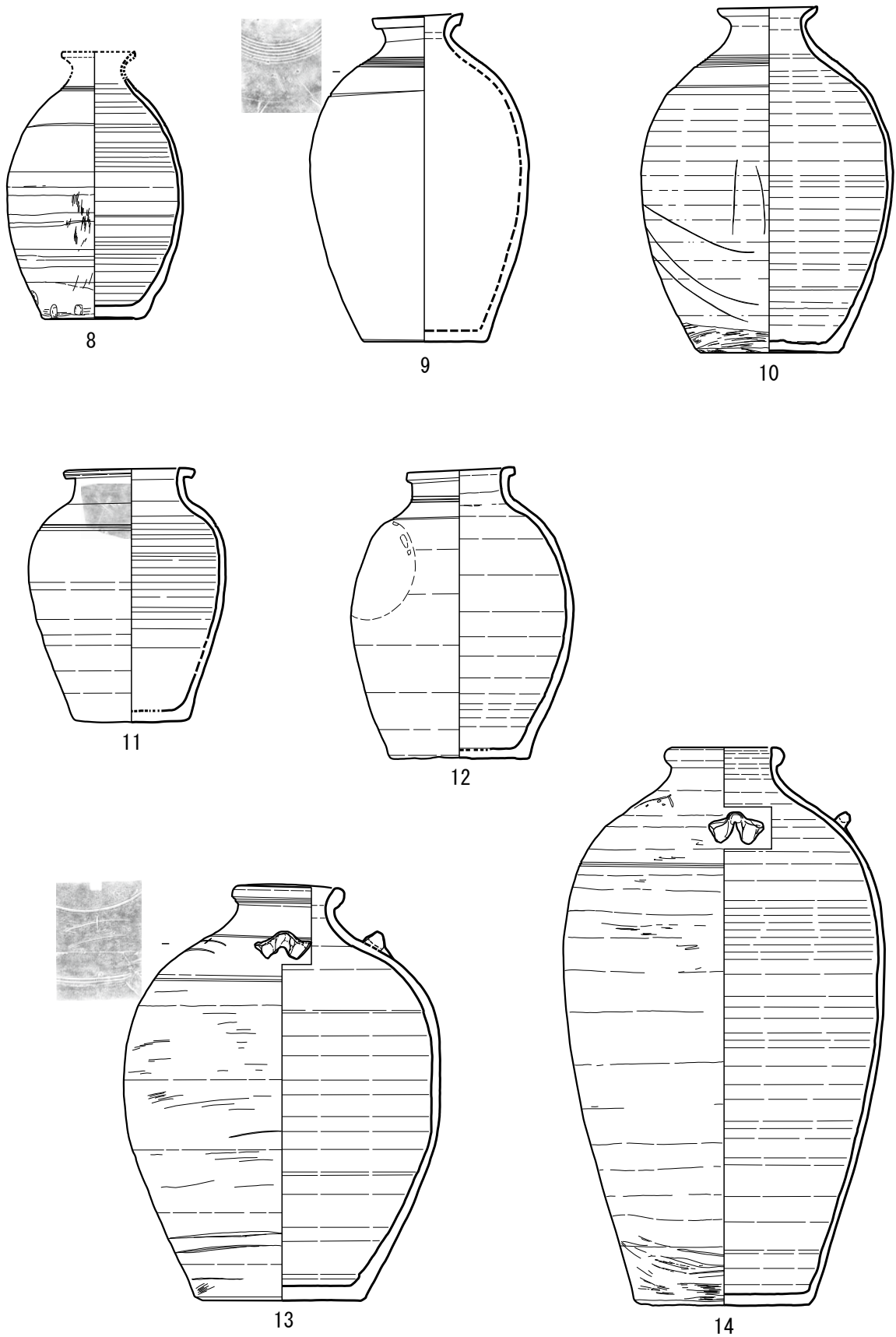
第7表 沖縄産無釉陶器 観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	法量 (cm)			色調	素地	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
			口径	器高	底径					
第56図 図版10	1	皿	口～底	10.1	2.4	5.0	外-茶褐色 内-茶褐色・良	茶褐色・褐色粒	口縁部は内湾気味の直口皿。外側に逆八の字状に開く。底部は中心がやや上がる平底、灯明皿と考えられる。	B地区 27-A7 SD6-2 1～3層
	2	播鉢	ほぼ完	29.5	13.0	12.0	外-茶褐色 内-赤褐色・良	赤褐色・貝殻粒、石灰粒	口縁はやや水平伸びる銚を持ち胴が丸く、底部は平底である。銚の外縁に一条の圏線を巡らす。内面は口縁から底部にかけて十二条の櫛で全面に目ガキしている。目は細かい。	B地区 20-H2 SD25 2・3層
	3	播鉢	ほぼ完	28.0	13.8	10.1	外-茶褐色 内-赤褐色・良	赤褐色・石灰粒	平底から直線的立ち上がり胴上部でやや丸味を持つ。口縁部は銚状で一条の圏線を巡らす。内面は口縁の2cm下から底部にかけて十二条の櫛で全面に目ガキしている。	B地区 19-J10 SD28 1層
	4	深鉢	完	45.0	29.8	19.0	外-茶褐色～赤褐色 内-茶褐色・良	茶褐色・	底部から胴部まで直線的に開き、頸部で直に立ちあがり口縁部が銚状となる。頸部に横位沈線と櫛状工具による波状文を巡らしている。	D地区 16-A5 埋め堖
	5	鉢	完	28.2	14.8	15.2	内外-赤褐色・良	赤褐色・不明	口縁部が内湾し胴上部まで丸味をもつ、底部は真中がやや上がる平底である。腰部は胴上部まで逆八の字状に直線的に伸びている。口唇部は舌状。胴部に櫛状工具による波状文を巡らしている。	D地区 16-A5 II2a層
	6	瓶	胴～底	-	(11.5)	8.4	外-暗褐色 内-赤褐色・良	赤褐色・貝殻粒	瓶底であるが予想される器高はせいぜい23cm前後。底部近くの器厚が器高に対してかなり厚い。	B地区 20-G2 SD25 3～5層
	7	瓶	口	8.5	(7.1)	-	外-暗褐色 内-茶褐色・良	茶褐色・石灰粒	なで肩の肩部から頸部は八の字状に縮まり口縁はラップ状に開く。三角フラスコ型の口縁部となる。口縁部は肥厚させ口唇は尖らせる。	B地区 20-F3 SD25 3～5層
第57図 図版11	8	瓶	胴～底	-	(16.4)	14.0	外-茶褐色 内-暗褐色・良	茶褐色・石灰粒	底部から頸部近くまで残る資料で、全体のホルムは砲弾型である。胴上部に2条、肩部に3条の圏線による圏線を巡らす。底部外面に指痕がみられる。	B地区 19-J9 SD11 1層
	9	壺	完	12.3	44.5	16.7	外-暗褐色～赤褐色 内-暗褐色・良	茶褐色・石灰粒	なで肩の肩部から頸部で窄まり、ラップ状に開く口縁部は肥厚させ菱形の銚を成す。底部から胴部まで開きながら直線的に立つ、胴上部に丸味を持たせ頸部に至る。胴上部に1条、肩部に7条の圏線による圏線を巡らす。口縁部から胴上部は自然釉と溶けて泡立った様な痕がみられる。	B地区 19-I8 SK95 1層
	10	壺	完	13.7	46.4	17.0	外-暗褐色～赤褐色 内-赤褐色・良	赤褐色・褐色粒	底部から胴部まで開きながら直線的に立つ、胴上部に丸味を持たせ、なで肩の肩部から頸部で窄まり、口縁はラップ状に開く。口唇部は尖る。胴上部に1条、肩部に6条の圏線による圏線を巡らす。底部外面に整形のための篋削りがみられる。	B地区 19-J8 SK98 2層
	11	壺	完	7.8	34.5	15.5	外-茶褐色～赤褐色 内-暗褐色・良	茶褐色・石灰粒	肩部は張り、頸部で窄み断面はくの字状となる。口縁部は銚状を成し、口唇部は方形で頸下部に篋による凹線を巡らす。底部から胴上部まで開きながら直線的に立つ。肩部に2条の圏線を巡らし圏線と頸間に篋による窯印がみられる。胴下部に自然釉。	B地区 19-J8 SK92 2層
	12	壺	完	14.6	39.8	19.0	外-暗褐色 内-暗褐色・良	茶褐色・赤色粒	胴上部に丸味を持たせ頸部に至る。頸部は筒状に伸び口縁に至る。口縁部は銚状、口唇部は方形で頸下部に篋による凹線を巡らす。底部は丸味のある胴部まで開きながら緩やかに立つ、胴部の中位に最大径を持つ。肩部に1条、頸部下側に3条の圏線がみられる。全体的に自然釉がみられる。胴部に焼成時の溶着痕が認められる。	B地区 19-J8 SK98 2層
	13	壺	完	15.2	56.5	21.5	外-褐色～赤褐色 内-茶褐色・良	-	肩部は丸くやや張り、頸部で窄む、口縁は玉縁を成す。底部は腰部まで逆八の字状に直線的に開く、胴上部に2条、肩部に1条の圏線を巡らし圏線間に横耳を三ヶ所に貼付る。肩部に「十一」の窯印がみられる。全体的に自然釉。	B地区 19-J8 SK98 2層
	14	壺	完	14.0	75.8	23.5	外-褐色 内-赤褐色・良	-	肩部は丸く頸部で窄む、口縁は外側に折り返し口唇を丸く整え断面形はかまぼこ型を成す。底部から胴上部まで直線的に開き立ち上がる。胴上部に2条の圏線を巡らす。肩部に横耳を三ヶ所に貼付し、篋で傘を描く様に描き中に三角形に点を入れた窯印がみられる。底部外面に篋削りの器面調整がみられる。	B地区 19-J8 SK98 2層



第56図 沖縄産無釉陶器1

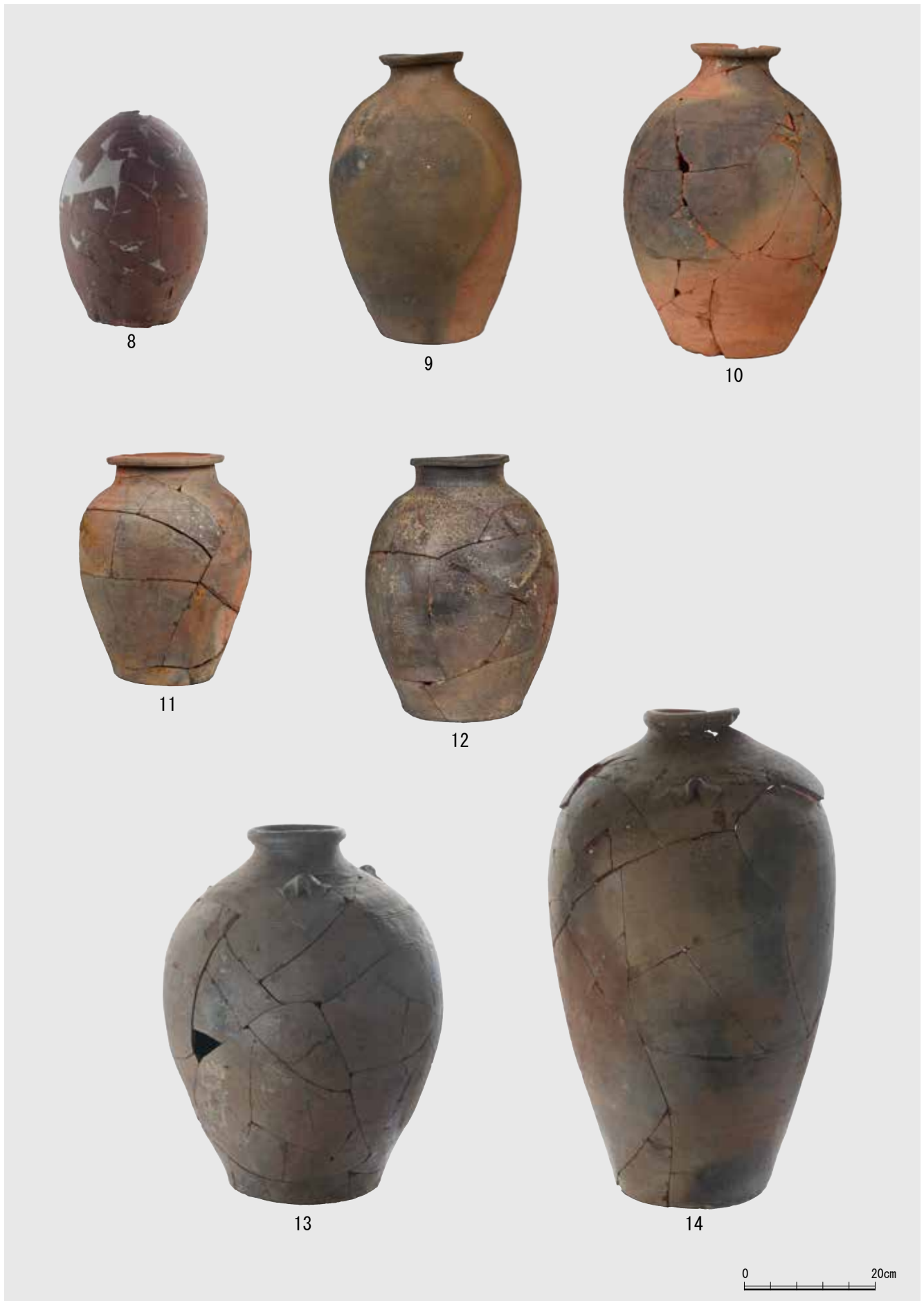
0 10cm



第57図 沖縄産無釉陶器2



図版10 沖縄産無釉陶器1



図版11 沖縄産無釉陶器2

陶質土器 (第58図、図版12、第8表)

方言で「アカムヌー」などと称される一群で、橙色を呈した軟質の土器を指す。器種としては鍋、土瓶、鉢、火炉、焜炉の5器種が得られている。970点が出土しており、うち13点を図示した。

鍋 (1~4)

身が258点、蓋が32点の計290点出土している。1は口縁をくの字状に折る鏝縁の鍋である。鏝上面には蓋受けの窪みを巡らし、鏝外面に紐状の横耳を貼付している。2は丸底の底部で、中央に僅かに平坦面を作る。3は1、2より小ぶりの鍋である。口縁は外側にくの字状に折り鏝縁状を成す、鏝の上面に僅かに窪みがみられ、胴部は丸い。4は縁甲部が円形傘状を成す鍋の蓋である。摘みは輪状の突起で、高台付きの皿を伏せた様な形態である。縁部は断面形が三角状にやや肥厚している。

瓶 (5・6)

身が369点、蓋が11点の計380点出土している。5は三角フラスコ型の胴部を持ち、口縁は直口し立ち上がる。胴下部に円孔を穿ち筒状の注ぎ口を貼付している。6は蓋で縁甲部が円形傘状を成し、摘みは宝珠型である。内面に輪状の突起を有し、甲部の内面は中心が僅かに垂れ下がる。

鉢 (7・8)

96点出土している。7、8は口縁が内湾する水鉢の口縁部資料である。7は胴部が逆八の字状に外に開き、口縁で強く屈曲して内湾する。口唇を肥厚させ先端はやや尖る。外体面に四状のクシ描波状文を巡らし幅広篋で文様を含め削り取り成形している。8は口縁に丸味のある内湾を呈し、口唇を僅かに肥厚させ先端を尖らせている。口縁の外面に線彫りにより一条の波文を巡らす。

火炉 (9~10)

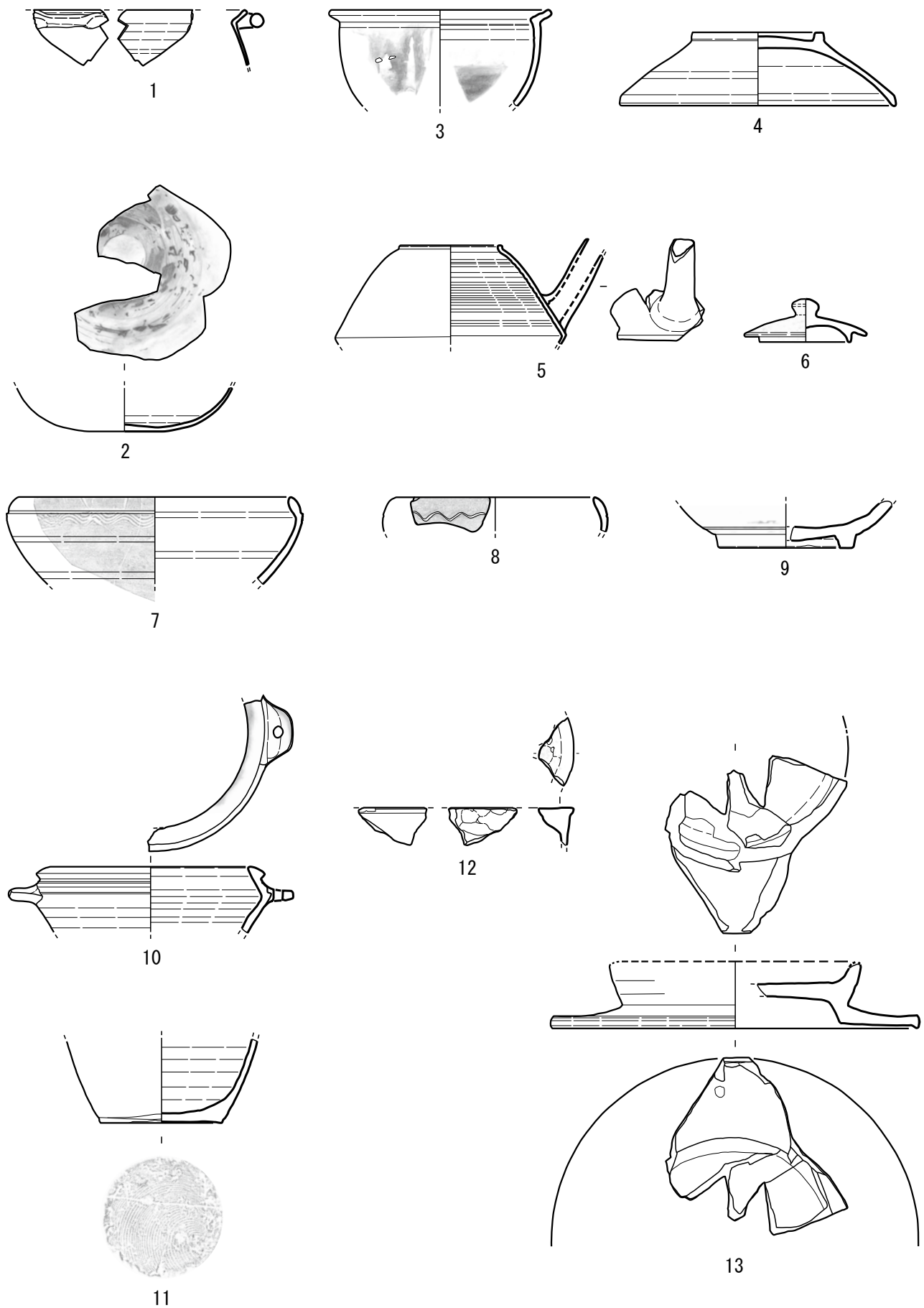
122点出土している。胴が丸く口縁が内湾するもの、直線的に開き立つもの、筒状になるものがみられる。9は胴部が球状に丸く口縁は内湾するタイプの底部である。底部は丸身を持ち立ち上がる。高台は断面が方形を呈する。高台の外側と内側で中心軸にずれがある。胴外面は全体に白化粧した後に等間隔で縞状に削り白横縞文を作る。10は口縁をくの字状に内側に屈曲させ、上位外面に三角状の帯を三条削り出し、口縁断面形は鋸歯状になる。屈曲する部分に把手を貼付し、握手中央に円孔を穿っている。11は平底で開きながら直に立ち上がる。外底部に糸切り痕がみられる。12は口縁が筒状になることが考えられる。内側は上面観がイチョウの葉状となり、断面形は三角状の突起を有する。

焜炉 (13)

1点出土している。13は円盤状の器台か蓋かと考えられる。

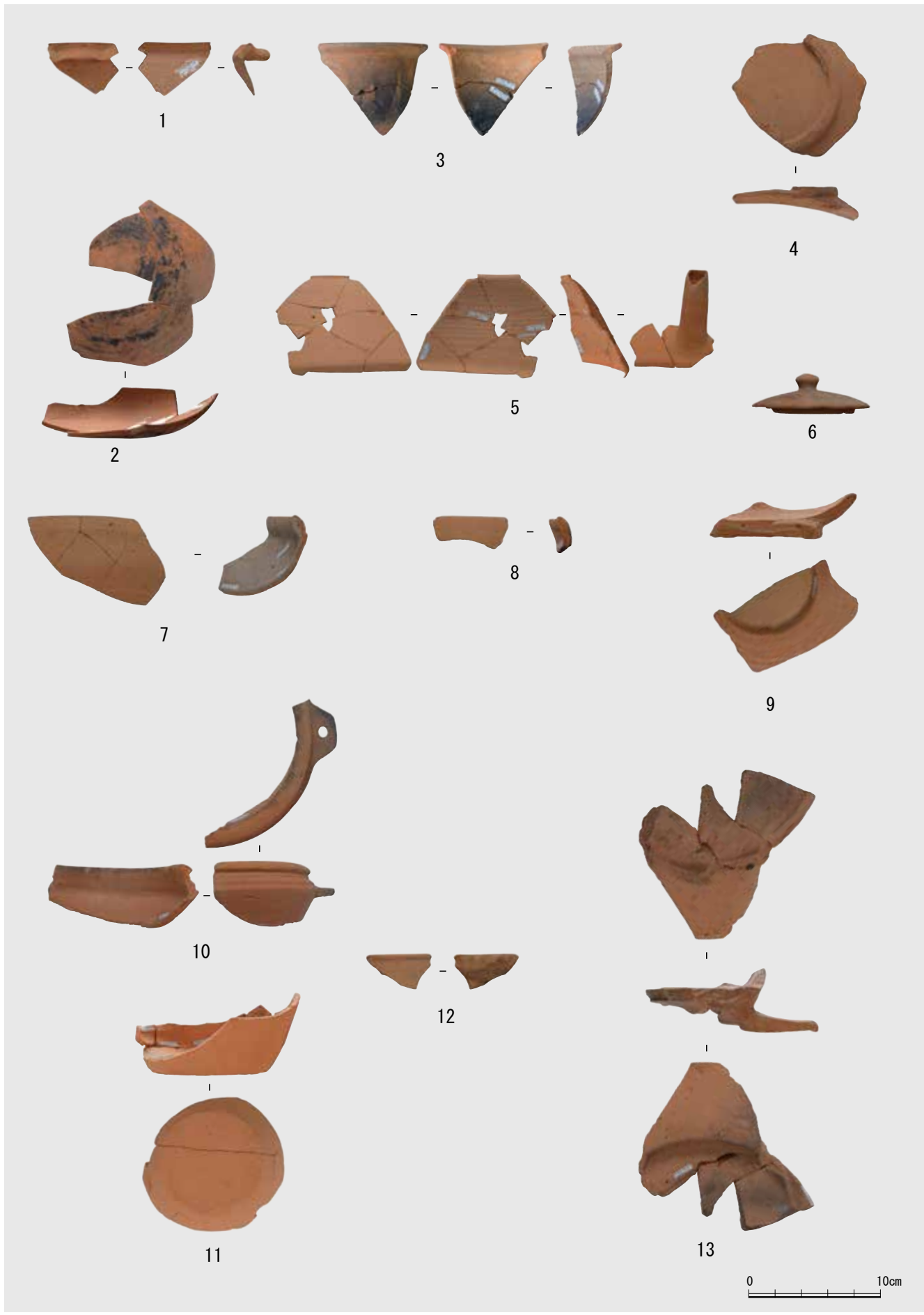
第8表 陶質土器 観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	法量 (cm)			釉	素地	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
			口径	器高	底径					
第58図 図版12	1	鍋	口縁	-	(4.2)	-	橙赤褐色色・良い	褐色粒、雲母	口縁部はくの字状に外側に折り鏝縁状を成す鏝の上面に蓋受けの窪みが僅かにみられる。鏝の裏面に紐状の横耳を貼付している。	B地区 20-H2 SD25 2・3層
	2	鍋	底部	-	(3.2)	6.0	橙赤褐色色・良い	褐色粒、雲母	丸底である。中央に平坦面を作る。	B地区 19-J10 SD28 1層
	3	鍋	口縁	16.4	(7.2)	-	橙赤褐色色・良い	褐色粒、雲母	口縁部はくの字状に外側に折り鏝縁状を成す鏝の上面に蓋受けの窪みが僅かにみられる。胴部は丸い。器面煤痕。	B地区 19-17 SX17
	4	鍋蓋	縁・摘み	20.4	5.4	9.6	橙赤褐色色・良い	褐色粒、雲母	縁甲部は円形傘状。摘みは輪状の突起状。高台付きの皿を伏せた形態である。縁部は断面形が三角状にやや肥厚している。	B地区 19-J10 SD28 1層
	5	瓶	口縁 注ぎ口	7.6	(7.35)	-	橙赤褐色色・良い	褐色粒、雲母	三角フラスコ型の胴部を持ち口縁は直口し小さい立ち上がりである。胴下部に穿孔し筒状の注ぎ口を貼付している。底部は丸底と考えられる。	B地区 19-19 SD12 1層
	6	瓶蓋	完品	9.0	3.15	6.7	赤褐色・良い	褐色粒、雲母	縁甲部は円形傘状。摘みは宝珠型内面に輪状の突起を有する。甲部の内面は中心が僅かに垂れ下がる。	B地区 27-A10 SX64 1層
	7	鉢	口縁	20.0	(6.4)	-	橙赤褐色色・良い	褐色粒、雲母	胴部は直線的に開き口縁はくの字状に内側に丸めた内湾を呈する。口唇は肥厚し先端はやや尖る。口縁の外面に四状のクシ描波状文を巡らし幅広篋で文様を含め削り取る。	B地区 20-H1 SD22 1層
	8	鉢	口縁	14.6	(2.5)	-	橙赤褐色色・良い	褐色粒、雲母	口縁が内湾を呈し口唇は肥厚、先端が尖る。口縁の外面に線彫りにより一条の波文を巡らす。	B地区 19-J10 II3層
	9	火炉	底部	-	(3.3)	10.0	橙赤褐色色・良い	褐色粒、雲母	断面形が方形を呈する輪状の高台を持つ高台の外側と内側の円の中心軸にずれがあり高台中に違いがある。(月見高台) 胴部が丸く、外面に白化粧し等間隔で開け帯状に削り取り、白土の縞縞文を作る。	B地区 20-G3 I層
	10	火炉	口縁	15.0	(4.85)	-	橙赤褐色色・良い	褐色粒、雲母	胴上位でくの字状に内側に屈曲させ向かい合わせの把手を貼付、握手中央に孔を穿っている。口縁は胴部まで断面形が鋸歯状の帯を大小三条削り出す。口唇に煤痕。	B地区 19-J10 SD28 1層
	11	火炉	底部	-	(6.3)	8.9	橙赤褐色色・良い	褐色粒、雲母	平底から開きながら直に立ち上がる。外底部に糸切り痕がみられる。	B地区 19-J10 SD28 1層
	12	火炉	口縁	-	(3.0)	-	橙赤褐色色・良い	褐色粒、雲母	口縁はほぼ筒状になることが考えられる。内側に上面観イチョウの葉状断面形は三角状の突起を有する。	B地区 19-J10 II1a層上面
	13	コンロ	部位不明	-	(4.8)	27.1	橙赤褐色色・良い	褐色粒、雲母	円盤状の器台か蓋か不明。	B地区 19-J7 1層



第58図 陶質土器

0 10cm



図版12 陶質土器

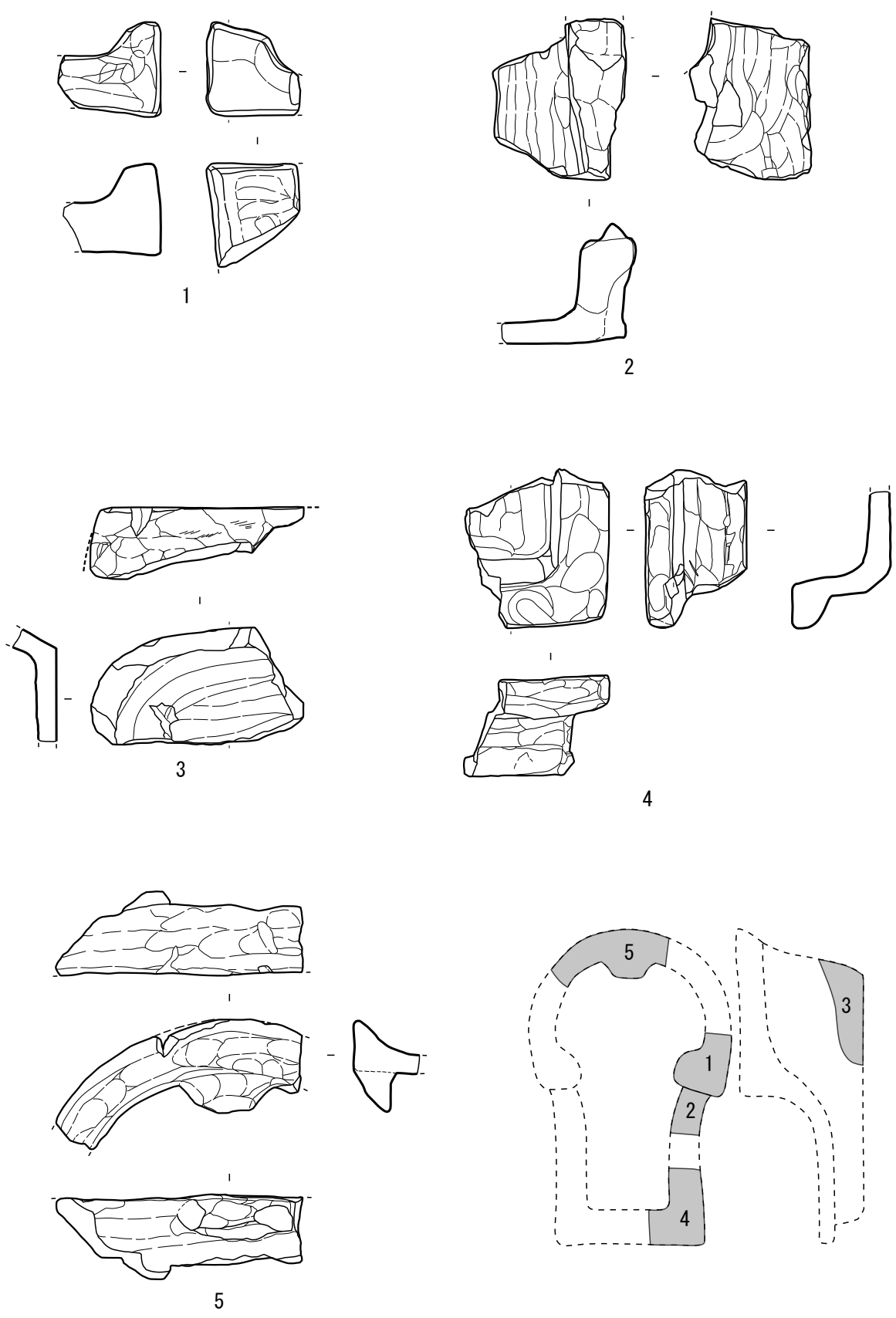
瓦質土器（第59図、図版13、第9表）

31点出土しており、うち5点を図示した。1～5は馬蹄形焜炉である。馬蹄形焜炉とは上面観が前円後方形となっており、焜の部分が丸く、火入れ部が方形を呈し、焜の部分に突起を有するものである。喜友名貝塚タイプとも称され喜友名貝塚・喜友名グスク^{註8}、湧田古窯群IV^{註9}、平安山A遺跡^{註10}で類似する資料が確認されており、在地（湧田系）の可能性が高いものと考えられている^{註10}。

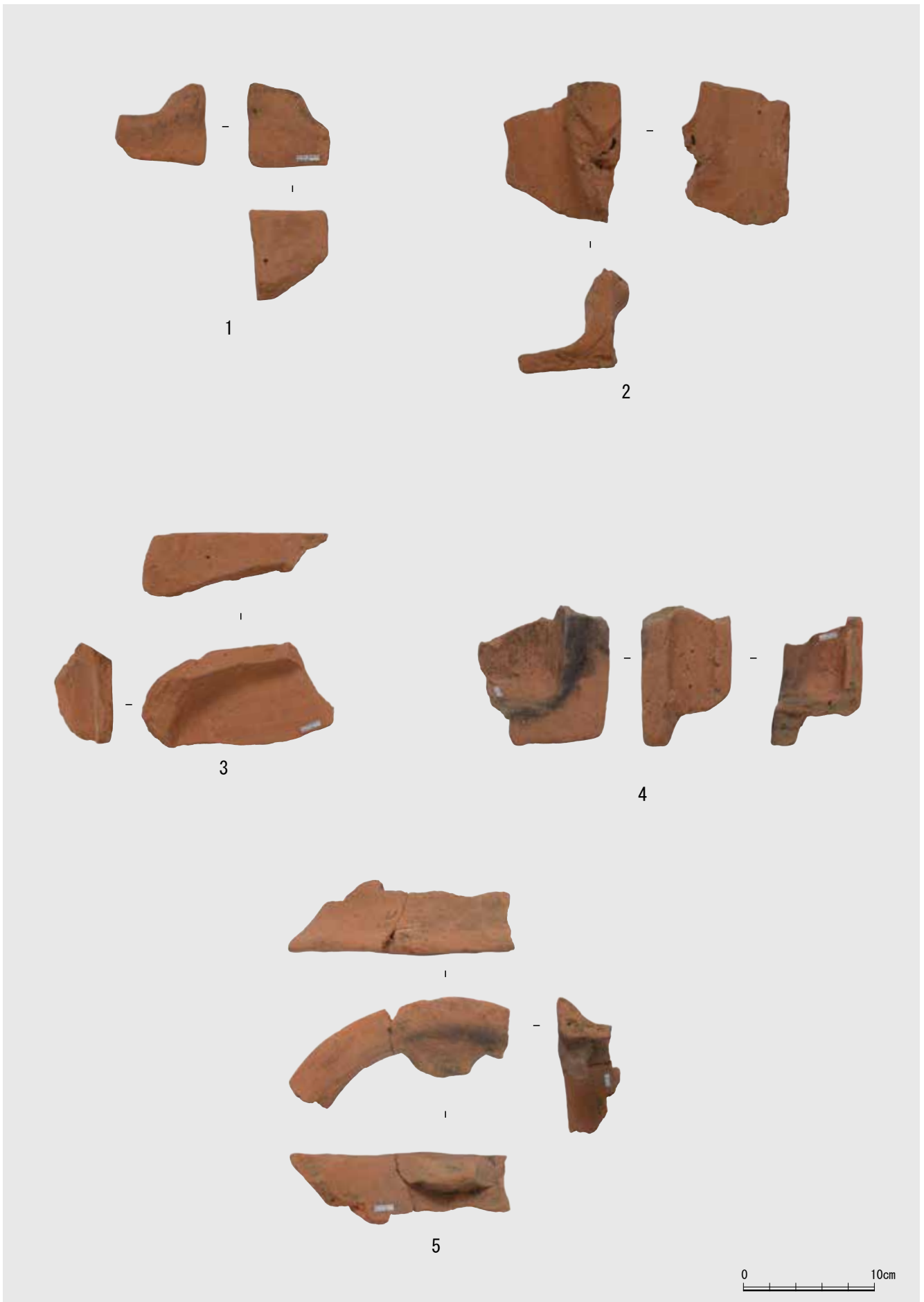
1は外底平面に粘土ブロックを押圧成型したことが伺える。内底面に指撫で痕が顕著にみられる。2は焜部分と焚口部の接する左側面の破片である。焚口の口縁は外側に折り返し逆L字状の鏝を持つ。側面は粘土帯を積み重ね、篋と指で整形している。側面から外底面断面形はL字状である。3は焜部分の底面で半円形の扁平を成す。4は焚口部の右角破片である。口縁は焜から一段下げた外側に折り返した逆L字状の鏝を持つ。鏝の断面形は方形状。底部は立ち上がりの角を削り取り、鏝までは垂直な作りである。5は焜の上面部分、半円形を成す部分である。口縁を外側に折り返し断面形は三角状の鏝状を成し、台形の突起を有する。

第9表 瓦質土器 観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	法量 (cm)			釉	素地	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
			口径	器高	底径					
第59図 図版13	1	馬蹄形焜炉	焜	-	(5.4)	-	橙赤褐色色・良い	褐色粒、雲母	口縁外面はやや垂直に立つことが予想される。内側は内向し断面形が三角状に肥厚する。上端は平坦、鍋等を設置する為の略三角形の突起を焚口部の接点に貼付する。	B地区 20-G2 SD25 3～5層
	2	馬蹄形焜炉	焚口	-	(6.0)	-	橙赤褐色色・良い	褐色粒、雲母	竈部分焚口部の接点、口縁は焚口部のみ残す。後方、焚口（方形）の口縁は外側に折り返し逆L字状の鏝を持つ。外底面は板所の平面に粘土のブロック置き押圧成型したことが伺え粘土のブロック痕をそのまま残す。内底面に指撫で痕が顕著である。	B地区 20-G2 SD25 6層
	3	馬蹄形焜炉	焜	-	(3.7)	-	橙赤褐色色・良い	褐色粒、雲母	底部から僅かに外に開き立つ、外面に篋による削り痕と、内面に輪積痕がみられる。底面は馬蹄形の扁平、内底面に指撫で痕が顕著である。	B地区 20-I2 SD25 2層
	4	馬蹄形焜炉	焚口	-	(5.0)	-	橙赤褐色色・良い	褐色粒、雲母	上面観は方形の焚口である。口縁は外側に折り返し逆L字状の鏝を持つ。鏝は平坦断面形は方形。底部は立ち上がりの角を削り取り、鏝までは垂直な作りである。底面は方形の扁平を成し内底面に指撫で痕を残す。	B地区 20-F3 SD25 6層
	5	馬蹄形焜炉	焜	-	(4.4)	-	褐色色・良い	褐色粒、雲母	上面観が半円の竈部分。口縁は外に折り返し断面形は三角状の鏝状を成す。上端は平坦である。鍋等を設置する為の台形の突起を中央に貼付している。	B地区 27-A7 SD6-2 2層



第59図 瓦質土器



図版13 瓦質土器

本土産磁器（第60・61図、第10表）

総数4,096点出土した。その中で産地をおおよそ判断できるものとしては砥部、瀬戸・美濃系、肥前系などが見られた。数的には砥部、瀬戸美濃系が大部分を占める。器種は碗、小碗、皿、火取、杯、急須、湯呑、花瓶、香炉、甕、大鉢、小瓶等多種多様である。出土の多くが小破片で占められており、実測対象は残存状態の良い完形に近いもの23点を図示した。

〈砥部焼〉（1～9）

碗が654点、小碗が6点、皿が66点、火取が9点出土している。

1～5は砥部産の型紙刷りで文様を施した碗である。1は外反碗で、点描で菱形格子を描きその中に菊花紋を施す、当地でスンカンマカイとして認識される典型的な例である。2も外反碗で、外面に唐草地を貴重とし四弁花を施す。3、4は直口碗である。3は寿と桜をモチーフとしており、4は先述した1と同様の文様構成である。直口碗は外反碗に比べてやや小ぶりな印象を受ける。5は外反碗で、外面は点描で松竹柄を描き、その中に鶴丸文を施す。6～9は砥部産の型紙刷りで文様を施した皿である。

〈肥前系〉（10～11）

肥前系と考えられるものは皿のみで30点出土している。

10、11は肥前系と考えられる小皿である。10は百人一首をモチーフとしたもののようである。ともに型物による成型とみられる。

〈瀬戸美濃系〉（12～23）

碗1975点、皿445点、杯82点、急須212点、湯呑み66点、花瓶1点、香炉23点が出土しており、今回出土した本土産磁器の中では最多である。

12.13.14はいわゆる国民食器、統制陶器である。12は碗、13は小碗、14は皿で、口縁外面もしくは内面にクロムで着色した二重圈線が特徴的である。14は高台裏に統制番号が認められる。「岐1128」もしくは「岐1.128」と賦されている。

15.16はともに直口碗で、15は柴垣文と福、縁の組み合わせ、16は百人一首をモチーフとした文様が施される。

17.18は17.18ともに口鏽を口唇に施す皿である。

19.20は杯である。19には百人一首をモチーフとした文様、20には草花をモチーフとした文様が施される。

21は湯呑である。船や人、風景をモチーフとした文様である。

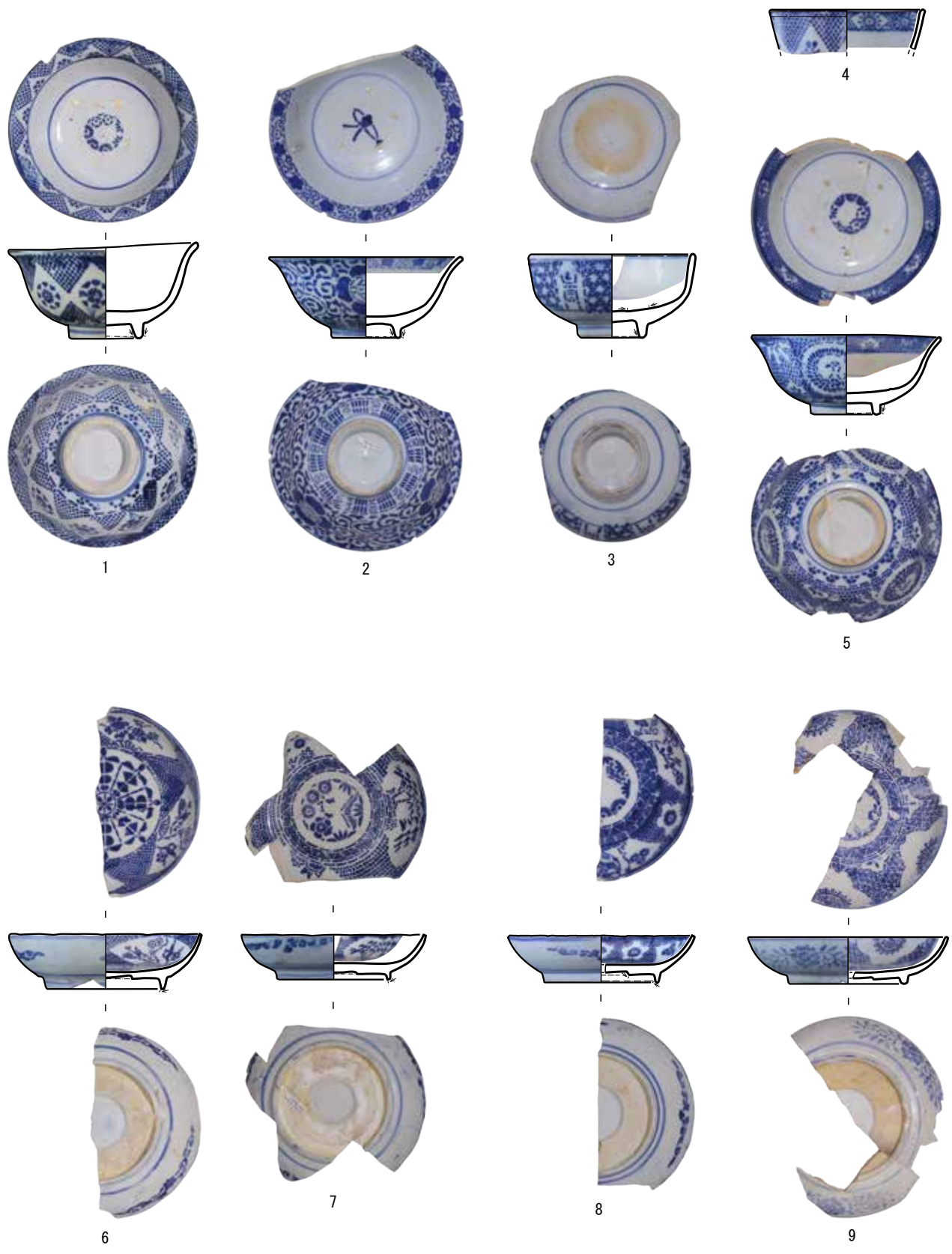
22はクロム青磁の碗である。外面には飛び鉋が施される。

23はクロム青磁の香炉である。口縁外面には雷文、胴部に浮彫の龍が施される。

その他、産地な不明な本土産磁器が出土しているが今回は図示しなかった。産地不明とした本土産磁器は碗257点、皿51点、杯79点、湯呑み35点、急須58点、甕25点、大鉢3点、香炉1点、花瓶10点、小瓶3点、ティーカップ3点、不明2点の機種が得られている。

第10表 本土産磁器 観察一覧

神田番号 図版番号	器種	生産地	部位	法量 (cm)				文様色	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
				口径	器高	底径	器壁厚				
第60図	1	碗	砥部	口～底	13.7	6.6	4.9	0.4	コバルト	型紙刷りで文様を施した外反碗である。外面は点描で菱形格子を描き、その中に菊花文を施す。腰部及び口縁内面には点描の三角文を巡らせる。見込みには松竹梅のモチーフを用いる。五足のハマ痕が見受けられる。	B地区 19-B18SX15
	2	碗	砥部	口～底	13.5	5.6	4.7	0.4	コバルト	型紙刷りで文様を施した外反碗である。外面は唐草地に四弁花。腰部は八卦文、口縁内面には花唐草を巡らせる。見込みには動物文(魚?)を用いる。五足のハマ痕が見受けられる。	B地区 29-J8 SD38 1層
	3	碗	砥部	口～底	11.8	5.8	4.4	0.4	コバルト	型紙刷りで文様を施した直口碗である。外面は寿と桜をモチーフとし、見込みは蛇の目軸刺ぎである。五足のハマ痕が見受けられる。	B地区 20-G21 SK54 2層
	4	碗	砥部	口縁部	10.9	-	-	0.3	コバルト	型紙刷りで文様を施した直口碗である。外面は点描で菱形格子を描き、その中に菊花文を施す。腰部の文様は欠損のため不明。口縁内面には点描の三角文と菊花文を巡らせる。	B地区 19-J7 SD6
	5	碗	砥部	口～底	13.2	5.5	4.5	0.4	コバルト	型紙刷りで文様を施した外反碗である。外面は点描で松竹柄を描き、その中に鶴丸文を施す。腰部には点描の三角文を巡らせる。口縁内面には松竹柄を巡らせる。見込みには松竹梅のモチーフを用いる。五足のハマ痕が見受けられる。	D地区 8-J4 1層
	6	皿	砥部	口～底	13.5	3.8	8.2	0.4	コバルト	型紙刷りで文様を施した皿である。外面は花唐草と圏線を巡らせ、内面は点描地に扇状の窓絵、その中に松竹梅のモチーフを施す。見込みには幾何学状の花紋のモチーフを用いる。外面は花唐草と腰部に圏線を施す。高台は凹形の蛇の目高台である。	B地区 20-G1 SK54 2層
	7	皿	砥部	口～底	12.9	3.1	7.7	0.4	コバルト	型紙刷りで文様を施した皿である。外面は花唐草と圏線を巡らせ、内面は点描地に松竹梅の窓絵を描く。腰見込みには松竹梅のモチーフを用いる。五足のハマ痕が見受けられる。外面は花唐草と腰部に圏線を施す。高台は凹形の蛇の目高台である。	B地区 20-H3 SD26 1層
	8	皿	砥部	口～底	13	3.1	7.9	0.3	コバルト	型紙刷りで文様を施した皿である。外面は花唐草と圏線を巡らせ、内面は点描地に五弁花、扇状の窓絵、その中に松竹梅のモチーフを施す。腰見込みには松竹梅のモチーフを用いる。ハマ痕が見受けられる。外面は花唐草と腰部に圏線を施す。高台は凹形の蛇の目高台である。	B地区 20-H3 SD23 1層
	9	皿	砥部	口～底	14	3.1	8.2	0.4	コバルト	型紙刷りで文様を施した皿である。内面に点描地の桜花文、見込みには昆虫?文様とハマ痕も見受けられる。外面は花唐草と腰部に圏線を施す。高台は凹形の蛇の目高台である。	D地区 16-A5 1層
第61図	10	小皿	肥前系	口～底	10.6	1.9	6.4	0.3	コバルト	肥前系と目される小皿である。内面は点描地に百人一首をモチーフとした文様を描かれる。外面にもコバルトの着色が見られるが不鮮明。型物で成型されている。	B地区 19-J8 SD38 1層
	11	小皿	肥前系	口～底	10.7	1.9	6.9	0.3	コバルト	肥前系と目される小皿である。内面は点描地に桜花文が描かれる。外面にもコバルトの着色が見られるが不鮮明。型物で成型されている。	B地区 19-110 II3層
	12	碗	国民食器	口～底	11.4	5.1	3.7	0.5	クロム	いわゆる国民食器である。外面口縁部下に緑色の二重圏線を施す。窯銘、統制番号は見受けられない。鋳型成型である。	A地区 26-E5 SD2-1
	13	小碗	国民食器	口～底	8.2	4.8	2.9	0.5	クロム	いわゆる国民食器である。外反した外面口縁部下に緑色の二重圏線を施す。窯銘、統制番号は見受けられない。鋳型成型である。	B地区 27-A9 II1a層上面
	14	皿	国民食器	口～底	18.6	2.3	10.8	0.5	クロム	いわゆる国民食器である。口縁内面に緑色の二重圏線を施す。窯銘、統制番号は見受けられない。鋳型成型である。高台に統制番号が認められる。「岐1.128」	B地区 19-J8 SK98 2層
	15	碗	瀬戸・美濃	口～底	8.3	4.8	2.7	0.3	コバルト	瀬戸美濃系と目される直口碗である。外面には口縁直下の圏線下に菱形と四角形の柴垣文と「福」、「縁」の文字を巡らせる。	C地区 21-B5、21-G5 SD18-1 4層
	16	碗	瀬戸・美濃	口～底	10.8	5.7	3.9	0.4	コバルト	瀬戸美濃系と目される直口碗である。外面には百人一首をモチーフとした文様が描かれる。口唇内面には格子状の文様、見込みには松竹梅のモチーフを用いる。	B地区 19-J7 1層
	17	皿	瀬戸・美濃	口～底	13.5	2.5	7.5	0.4	クロム	瀬戸美濃系と目される小皿である。内面には格子文と桜花が描かれる。見込みは幾何学文様が描かれる。口唇は全周に口鈿を施す。	B地区 19-J7 SD6-2 1・2層
	18	皿	瀬戸・美濃	口～底	18.2	2.5	11.5	0.5	コバルト	瀬戸美濃系と目される皿である。内面には格子文と桜花が描かれる。見込みは龍をモチーフとした文様が描かれる。口唇は全周に口鈿を施す。	D地区 16-A5 7-42
	19	杯	瀬戸・美濃	口～底	6.4	4.3	3.5	0.3	コバルト	瀬戸美濃系と目される杯である。口縁は外反し、外面には百人一首をモチーフとした文様が描かれる。発色は余り良くなくぼやけた印象である。型物成型である。	B地区 20-G2 SD25 3～5層
	20	杯	瀬戸・美濃	口～底	4.8	2.8	1.8	0.2	コバルト	瀬戸美濃系と目される杯である。口縁は外反し、外面には草花をモチーフとした文様が描かれる。型物成型である。	B地区 20-H3 SD26 1層
	21	湯呑	瀬戸・美濃	口～底	5.7	5.7	3.4	0.3	コバルト	瀬戸美濃系と目される湯呑である。口縁は外反し、外面には船や人と風景をモチーフとした文様が描かれる。型物成型である。	B地区 21-G1 SK54 2層
	22	碗	瀬戸・美濃	口～底	7.1	3.7	2.8	0.3	クロム	瀬戸美濃系と目されるクロム青磁の直口碗である。外面は飛び砲による削り目を周囲に巡らせる。高台は蛇の目高台である。	B地区 19-J8 SD38 1層
23	香炉	瀬戸・美濃	口～底	11.2	-	-	0.5	クロム	瀬戸美濃系と目されるクロム青磁の香炉である。口縁は直交し口唇は逆L字状に折れる。口縁外面はわずかに肥厚し、雷文の陰文を巡らせる。胴部には浮彫の龍が施される。	B地区 19-J7 SF4上面	



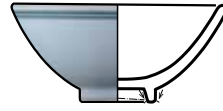
第60図 本土産磁器1



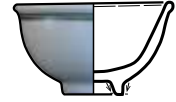
10



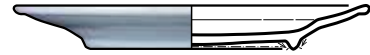
11



12



13



14



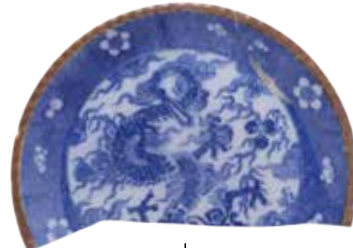
15



16



17



18



19



20



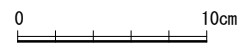
21



22



23



第61図 本土産磁器2

本土産陶器（第62図、図版14、第11表）

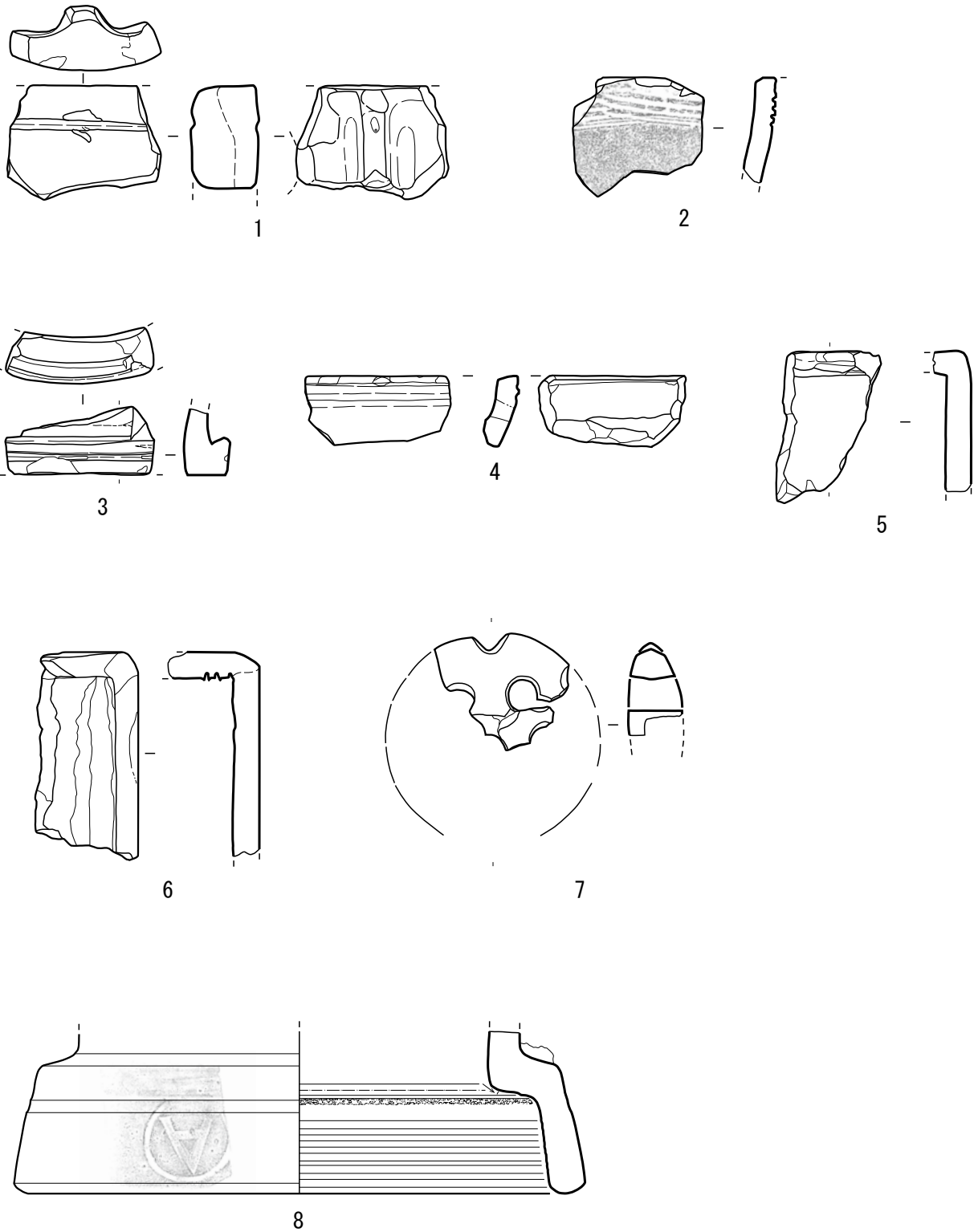
総数527点出土した。おおよその産地の判断がつくものとしては薩摩系、関西系などがみられるが、多くは産地不明である。器種は甕、壺、鍋、碗、急須、花瓶、小瓶、角皿、燭台、火取、瓦器、型物、焜炉、土管等がみられる。多くは小破片で器種不明なものも多い。今回は関西系と目される焜炉と産地不明の土管の8点を図示した。

1～7は焜炉およびそれに伴う火皿である。器形は円筒形、鍋形、立方体形が想定されるが、器形が複雑で判然としない。土質は軟質で雲母の混入が著しい。わずかに赤色粒、黒色粒が散見される。

8は陶製の土管である。土管と土管を連結させるソケット（継ぎ手）部分と考えられる。ソケット部外面には○に「A」の刻印が施される。製造会社の刻印かと考えられるが詳細は不明である。ソケット内面には横位に線条痕が走る。土管連結のための工夫と考えられるが詳細は不明である。胎土は紫灰色で白色粒がまばらに見られ、褐色釉が表面を覆う。明治以後、愛知県の常滑では土管製造が盛んで、日本の土管生産量の半分を担ったとされる。常滑焼の可能性も考えられるが類例に乏しく、産地不明とした。

第11表 本土産陶器 観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	生産地	部位	法量 (cm)				素地 色・質	器形・文様構成	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
				口径	器高	底径	器壁厚				
第62図 図版14	1	焜炉	関西系	口	-	(5.1)	-	1.2	燈色 雲母	関西系の焜炉である。部位は口縁部と考えられ、器形は円筒形が想定されるものの、いまいち判然としない。口唇は平たく整形され、煤の付着が認められる。口縁外面には一本の沈線を横位に巡らせる。口縁部内面には縦長の爪が貼り付けられている。爪上部から外面斜め下方向に向けて孔が穿かれているが貫通はしていない。	B地区 20-H3 SD23 1層
	2	焜炉	関西系	口	-	(6.2)	-	1.0	燈色 雲母	関西系の焜炉である。部位は口縁部と考えられ、器形は浅い鍋形が想定される。口縁外面には三条一組の沈線を横位に巡らせる。口唇部は平たく整形され、煤が付着する。内面には貼り付けられていたであろう爪が剥がれた痕跡が残る。	B地区 19-18 SX15
	3	焜炉	関西系	底	-	(3.4)	-	1.0	燈色 雲母	関西系の焜炉である。部位は底部と考えられ、器形は円筒形が想定される。底部断面はL字状。口縁外面には1本の沈線を横位に巡らせる。	B地区 19-110 I層
	4	焜炉	関西系	口	-	(4.6)	-	1.0	燈色 雲母	関西系の焜炉である。部位は口縁部と考えられ、器形は浅い鍋形が想定される。口唇は平たく整形され、口唇と内面側に微量の煤の付着が認められる。口縁外面には2本の沈線を横位に巡らせる。	B地区 27-17 I層
	5	焜炉	関西系	底	-	(7.1)	-	1.0	燈色 雲母	関西系の焜炉と考えられる。部位は底部であるとと考えられ、器形は立方体のような形状が想定されるが、いまいち判然としない。内面側は煤が多量に付着する。雲母の他にも赤色粒、微細な白色鉱物（石英？）が含まれる。	B地区 19-17、19-18 SX15
	6	焜炉	関西系	底	-	(10.4)	-	1.0	燈色 雲母	関西系の焜炉と考えられる。部位は底部であるとと考えられ、器形は立方体のような形状が想定されるが、いまいち判然としない。内面側は煤が多量に付着する。雲母の他にも赤色粒、微細な白色鉱物（石英？）が含まれる。	B地区 19-J7 SD6-2 1・2層
	7	火皿	関西系	口～底	10	(5.7)	-	2.5	燈色 雲母	関西系の焜炉に用いられた火皿と考えられる。器形は円盤状で、直径約10cmほどと考えられる。直径18mm程の孔が少なくとも体部に2箇所、端部に沿って幅10mm程の孔が2箇所確認できる。片面側は被熱により白色化している。雲母の他にも赤色粒、微細な白色鉱物（石英？）が含まれる。	B地区 27-A10 II1b層
	8	土管	不明	口	28	(8.2)	-	1.5	紫灰色 白色粒	土管のソケット（継手）部分である。継手表面には丸にAの刻印が見受けられる。継手内面には幅1mm程の溝が幾条も刻まれている。褐色釉が表面を覆う。	C地区 21-B5、21-C5 SD18-1 3層



0 10cm

第62図 本土産陶器



図版14 本土産陶器

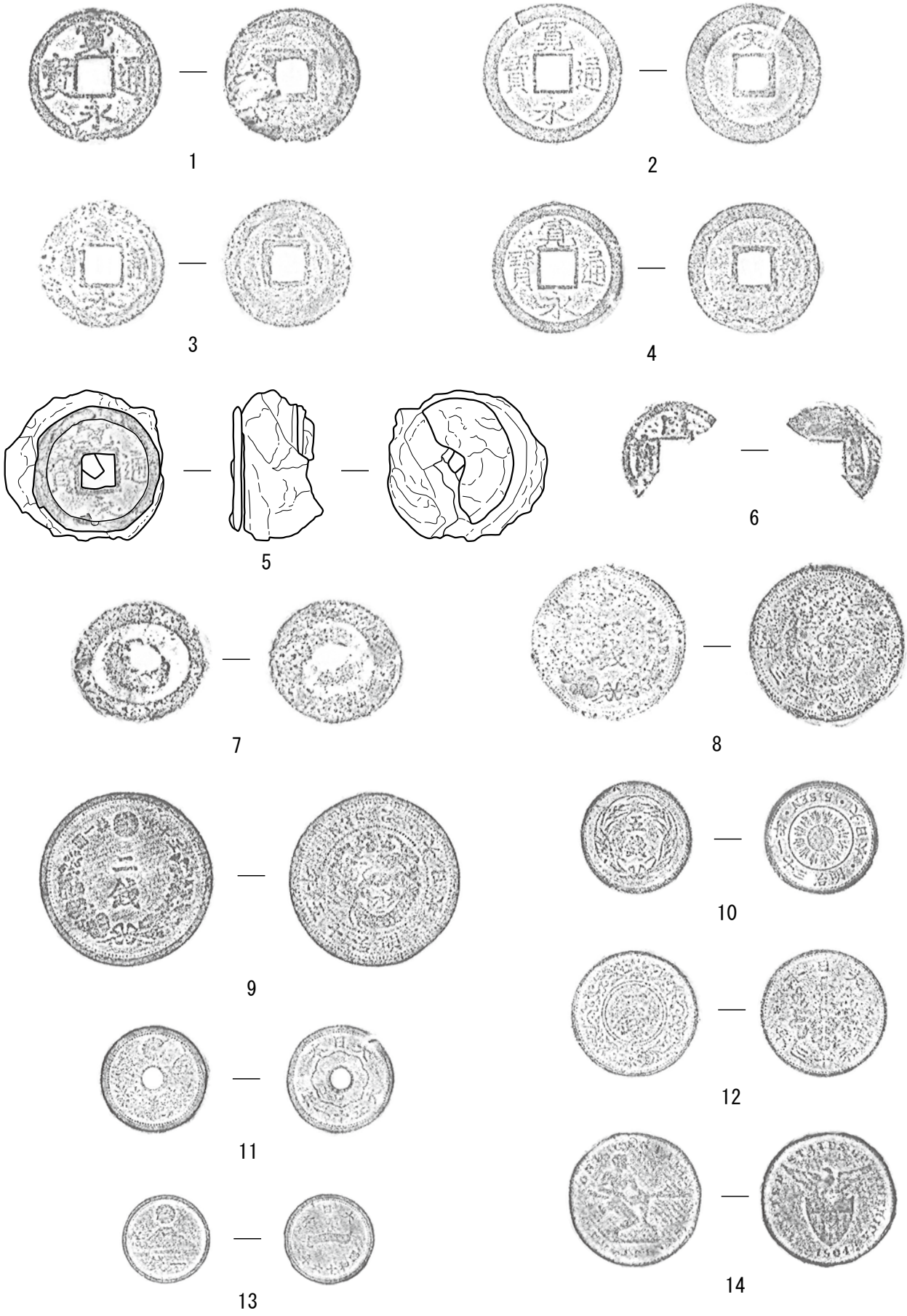
銭貨（第63図、図版15、第12表）

寛永通宝21点、成豊通宝1点、中国銭と考えられる不明銭4点、日本近代銭30点、和銭の無文銭3点、フィリピン近代銭1点の60点が出土し、うち14点を図示した。

1から5は寛永通宝である。1、4は背文がない寛永通宝であり、1は古寛永（1636年）、4は新寛永（1668年）である。2と3は寛永通宝の背文がみられるものである。2は新寛永（1668年）で背文に「文」の文字がみられる。3は新寛永（1668年）で背文に「元」の文字がみられる。5は差し銭と考えられるもので、寛永通宝を上にも7ないし8枚ほどの古銭が重なり錆で固まった状態で出土している。6は清朝の成豊通宝（1851年）で背文にモンゴル文字（戸部寶泉局）がみられる。7は雁首銭と称される無文銭で平面形は楕円となっており雁首を縦に平たく潰している。8～13は日本近代銭で明示13年から昭和16年までのものが確認されている。14はフィリピン近代銭で1904年の発行の銅貨である。

第12表 銭貨 観察一覧

挿図番号 図版番号	銭貨名 銭文	国名	初鋳造	背 文 字	残存	法量 (cm)			重量 (g)	字体	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
						外径 (直径)	孔径 (直径)	縁厚					
第63図 図版15	1	寛永通宝	日本	1636年（古寛永）	無	完	2.43	0.56	0.15	4.03	楷書	表裏面共に磨減、特に裏面の一部に腐食が著しい。	B地区 29-A10 SD27 1層
	2	寛永通宝	日本	1668年（新寛永）	文	完	2.50	0.58	0.12	3.46	楷書	銭表面は外圧により彎曲している。裏面に背文字の「文」が認められる。	B地区 19-J7 I層
	3	寛永通宝	日本	1668年（新寛永）	元	完	2.25	0.60	0.13	2.46	楷書	裏面に背文字の「元」が認められる。	B地区 19-J7 SD6-2 5、6層
	4	寛永通宝	日本	1668年（新寛永）	無	完	2.36	0.57	0.10	2.56	楷書	全体的に書体が細い。	B地区 19-110 SK49 1層
	5	寛永通宝	日本	不明	不明	不明	長軸2.9 短軸2.3	6.10	1.70	24.35	楷書	差し銭と考えられる。約7ないし8枚ほどが重なった状態で腐食し溶着している。全体は鉄錆の様な附着物で覆われ一部を除き全体は未確認。	B地区 19-J6 SK71 1層
	6	成豊通宝	中国	1851年	有	二ノ一	2.01	0.57	0.16	1.45	楷書	背文字モンゴル文字（戸部寶泉局）	B地区 20-G2 SD25 3～5層
	7	無文銭	日本	中世～江戸時代初期	無	完	長軸：2.35 短軸：2.13	長軸：0.55 短軸：0.45	0.13	2.24	無	無文銭の一種で通称雁首銭、平面形は楕円、雁首を縦に平たく潰している。	B地区 20-H3 I層
	8	一銭	日本	明治十三年	有	完	2.79	-	0.17	7.00	楷書	文様：龍 銅貨	B地区 27-A10 II1b層
	9	二銭	日本	明治十六年	有	完	3.17	-	0.23	14.06	楷書	文様：龍 銅貨	B地区 20-H3 I層
	10	五銭	日本	明治三十一年	有	完	2.06	-	0.19	4.58	楷書	文様：福徳 白銅貨	B地区 20-H3 I層
	11	五銭	日本	大正十一年	有	完	1.91	0.39	0.13	2.53	楷書	文様：菊文 白銅貨	C地区 21-C4 I層
	12	一銭	日本	昭和十三年	有	完	2.31	-	0.15	3.73	楷書	文様：桐 青銅貨	B地区 19-J7 I層
	13	一銭	日本	昭和十六年	有	完	1.60	-	0.16	0.65	楷書	文様：富士アルミ貨	C地区 21-D4 II1a層
	14	1セントボ	フィリピン	1904年	有	完	2.49	-	0.14	4.82	-	アメリカ植民地フィリピン通貨。 文様表：鉄を打つ労働者とマニラ北西にあるマヨン山「TEN CENTAVOS」「FILIPINAS」 文様裏：葉が13枚のオリーブの枝と13本の矢を両足にそれぞれ握った白頭鷲と13星と縦縞の盾「UNITED STATES OF AMERICA」	C地区 21-B6 II2b層



0 5cm

第63圖 錢貨



図版15 錢貨

簪（第64図、図版16、第13表 1～8）

20点出土しており、うち8点を図示した。簪（ジューファー）は沖縄の装束に欠かせなかったもので、女性用には本簪（ジューファー）の匙型と副簪（側差し）の細匙型があり、男性用には本簪（髪差し）の花型と副簪（押差し）の細さじ型がある。しかし、女性用の匙型などは元服前の男性も使用したことから一概に性別での区別は難しい。本調査では男本簪（髪差し）の花型の出土はなかった。女本簪は頭部の側面観が匙状、頭部は頸部から逆八の字状に徐々に広がり頂部までは真中に稜をつくり、やや三角に尖がるが縁部は丸く整えて匙状を成す。頸部は断面が六角形の棒状。竿部は先端が六角錐状を呈し、先端に向かい厚みを増す棒状となる。1と2は頭部が匙型の簪で女性用の本簪が考えられる。3は頭部が丸い匙状をなし、形状では女簪であるが本製品の長さが8.5cmと短いことから元服前の男子の物の可能性がある。頭部は細長い楕円形で側面観は細匙状となっており茶道で使う茶さじに形状が似ている。頸部は断面が六角形の棒状。竿部は先端に向かい尖る棒状である。4～8は頭部の上面観は楕円の匙状、細さじ型の副簪である。

第13表 簪 観察一覧

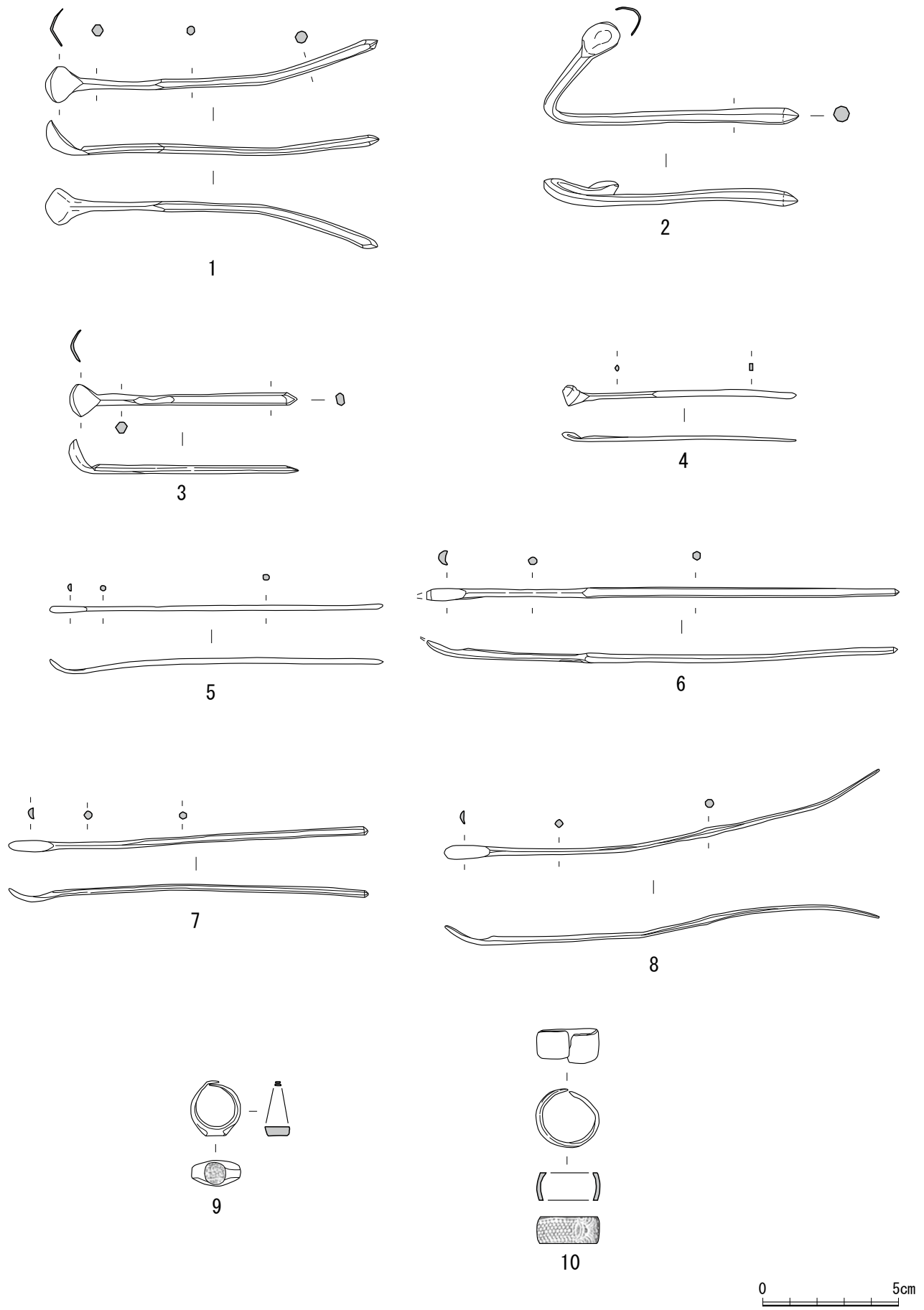
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	素材	残存 完/破	法量 (cm)							重量 (g)	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)		
						全長	頭長	頸長	竿長	頭幅	頭厚	頸厚				竿厚	
第64図 図版16	1	簪	女簪（ジューファー）	頭部～体部（竿）	銅	完	12.20	0.82	3.23	8.15	1.40	1.40	0.27	0.29	7.92	頭部の上面観は楕円の匙状、裏底面全体に船底状の稜がみられる。頭部の付け根（頭部）から断面が四角形状の棒状に2cm伸び体部は先端に向かい徐々に大きさを増す、先端で三角に尖る。体部の断面形は六角形。	B地区 19-J8 SD38 1層
	2	簪	女簪（ジューファー）	頭部～体部（竿）	真鍮	完	13.30	-	-	-	1.10	0.60	0.33	0.37	4.87	頭部の上面観は楕円の匙状、裏底面に縦の稜がみられる。頭部は断面形が四角形に近い六角形、体部の断面形は六角形を成し先端に向かい徐々に太くなり先端で三角に尖る。	B地区 19-J7 12層上面
	3	簪	女簪（ジューファー）	頭部～体部（竿）	銅	完	8.40	0.90	1.85	5.65	1.20	0.40	0.33	0.30	7.27	頭部が丸い匙状をなし、匙の裏底面中心まで体部から縦方向に稜が走る、裏面観は花卉の稜。体部は頭部の付け根から棒状に伸び先端は三角に尖る。体部の断面形は六角形。女簪は○cmが平均とあるから註、本製品は長さが8.5mmと短い、元服前の男子の物の可能性がある。	C地区 21-C5 SD5
	4	簪	男簪押し	頭部～体部（竿）	銅	完	8.60	-	2.30	5.46	0.60	1.50	0.17	0.12	1.79	頭部は上面の圧により潰れ詳細は不明。全体的に小ぶりであり体部は平たい作りである。細匙型、押しさじか。	B地区 19-G10 SK56 1層
	5	簪	男簪押し	頭部～体部（竿）	銅	完	12.30	1.45	1.50	9.35	2.50	0.20	0.14	0.16	2.49	同上小ぶりのため男簪押しさじの可能性はある。	B地区 19-J8 SD38 1層
	6	簪	女簪そば差し	頭部～体部（竿）	銅	ほぼ完	17.40	-	4.25	1.16	0.50	0.30	0.24	0.32	9.21	頭部は細長い匙状、断面形は半月状をなす。頭部は頭部から延長しながら徐々に窄まり中頃の断面形は丸みを持つ体部は頭部の根元で膨らみ断面形は六角形。先端は尖る。	B地区 19-J6 SK82 1層
	7	簪	男簪押し	頭部～体部（竿）	銅	完	13.40	1.60	1.90	9.90	0.40	0.25	0.17	0.14	4.30	頭部は細長い匙状、断面形は半月状。体部は頭部の根元でやや膨らみ断面形は不定形の六角形。先端は丸い。小ぶりのため男簪押しさじの可能性はある。	B地区 20-H1 II3層
	8	簪	女簪そば差し	頭部～体部（竿）	銅	完	16.40	1.70	7.70	7.00	0.60	0.30	0.26	0.29	6.00	頭部が細長い匙状をなし、断面形は三日月状。頭部が体部の半分ほどまで伸び体部は頭部の根元で一旦僅かに膨らむがジョジョ先端に向かい尖る。体部の断面形は頭部近くで六角形先端近くは円形である。	B地区 27-A7 SD6 3層

指輪・指貫（第64図、図版16、第14表 9・10）

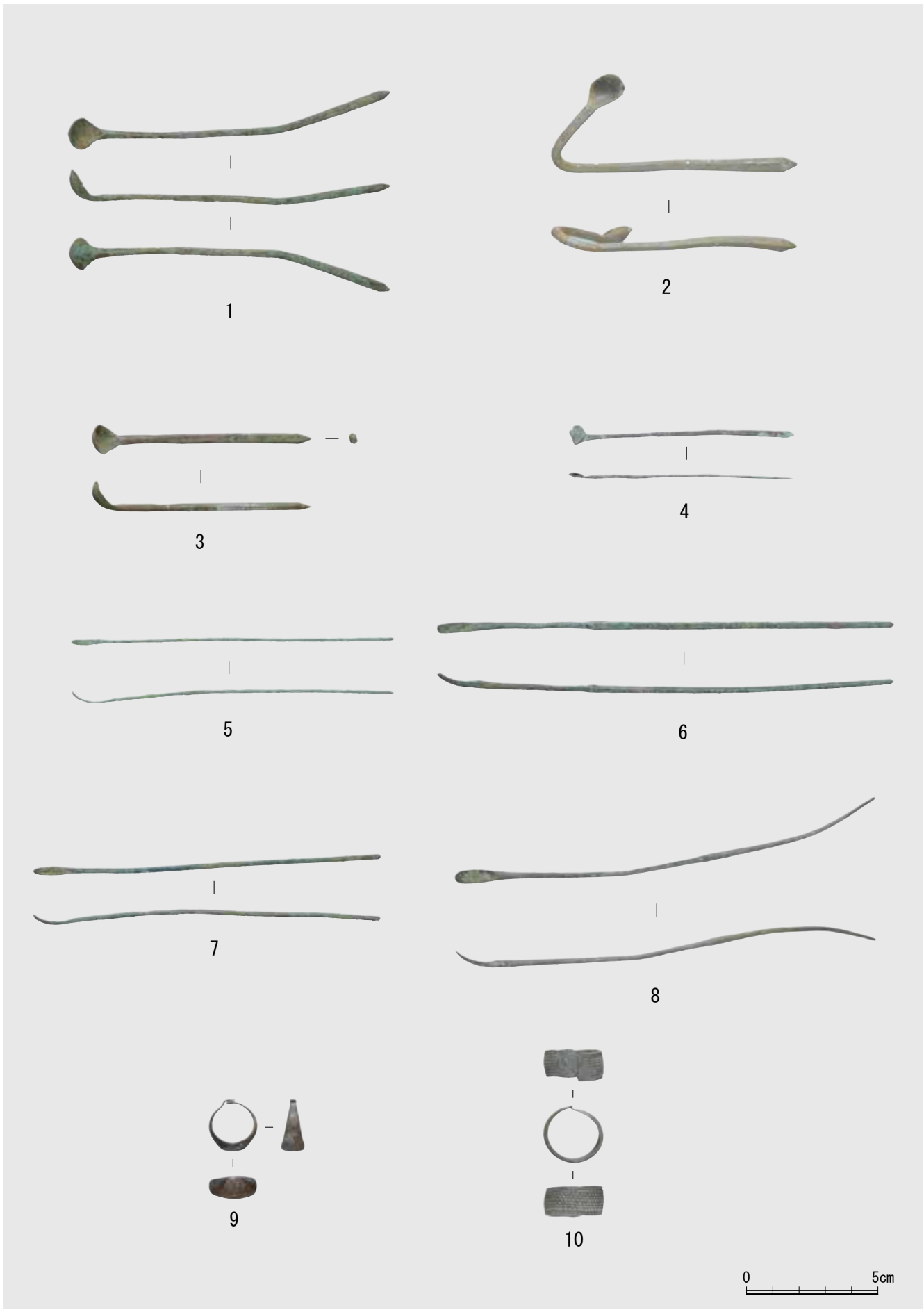
指輪・指貫は3点出土しており、2点を図示した。9は指輪である。略菱形の銅板を管状に巻いており、指輪の中心に円形の突起を持ち、帯の先端に向かい厚みと幅を徐々に減らして行く。横断面は台形状となる。円状突起表面に文様のような線刻が認められるが表面の状態が悪く詳細は不明である。10は裁縫道具の指貫である。隅丸方形の銅板の表面に輪郭線で縁取りし一端に獣面を刻印、空間は魚々子を充填し構成する。刻印後管状に巻いたものである。

第14表 指輪・指貫 観察一覧

挿図番号 図版番号	種類	器種	素材	残存 完/破	法量 (cm)			重量 (g)	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
					縦長	横長	厚さ				
第64図 図版16	9	指輪	装身具	銅	完	2.3	1.1	0.01	6.38	中心に円状の突起を持ち左右に厚みと幅を徐々に狭め、管状に巻いている。円状突起上面は表面の状態が悪く文様の有無は不明。	B地区 19-J10 SD28 2層
	10	指貫	裁縫用	銅	完	2.0	1.8	0.3	4.36	一枚の方形の銅板に動物の顔と魚々子を刻印し管状に巻いたもの。	B地区 21-C4 1層



第64図 金属製品（簪・指輪）



图版16 金属製品（簪・指輪）

煙管（第65図、図版17、第15表 1～11）

陶器製2点と金属製13点の計15点出土しており、うち11点を図示した。1、2は沖繩産施釉陶器製である。1は雁首で火皿が上面に立つ瓢箪形となり、くの字に折れた首から下膨れ状に膨らみ小口にいたる。羅宇と接合する孔は比較的大きい。2は吸い口で徳利を横にした形状で口元は丸く整えている。3から10は金属製である。3、4は雁首で火皿が上面に直に立つ碗状となり火皿縁は平坦を呈す。首から吸管までの体部は六面体である。4には木製の羅宇が差し込まれた状態で残存していた。5と6は吸い口で胴部が多面体となる。7は板状の金属を筒状に丸めて成型したもので、小口に接する部分が裂けている。8と9は同一製品と考えられるものである。8は雁首で火皿は上面に向かい逆八の字状に立つ碗状となり、火皿縁部はやや外側に傾斜する。体部は首から水平に伸び羅宇に接する頃にやや窄まる。9は吸い口で器厚は薄く、銅に銀のメッキを施している。10、11は雁首、羅宇、吸い口が一体となる延べ煙管である。10は火皿が小型で上面に向かう碗状となり、火皿縁部はやや外側に傾斜する。体部は首から緩く弧状に伸びる。胴部はほぼ円筒状となる。吸い口は胴部中頃から徐々に窄まり縁部にいたる。11は火皿が上面に向かい逆八の字状に立つ碗状となる。胴部は円筒状で吸い口に向かって一旦窄み、また開きながら吸い口にいたる。吸い口の縁部は丸く整えている。頸部は圧がかかり変形している。

第15表 煙管 観察一覧

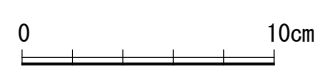
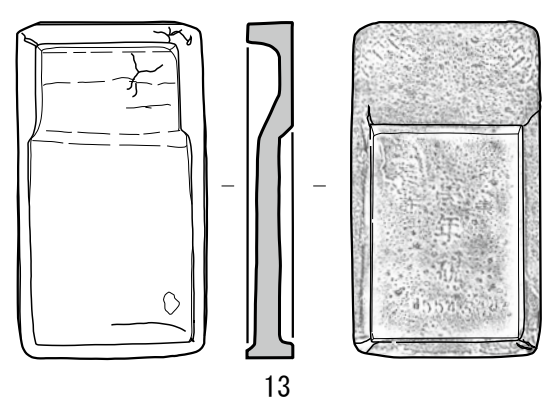
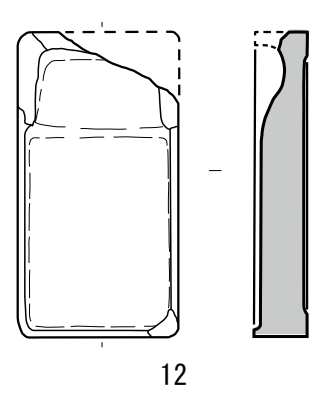
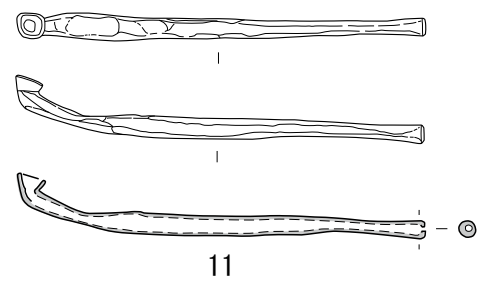
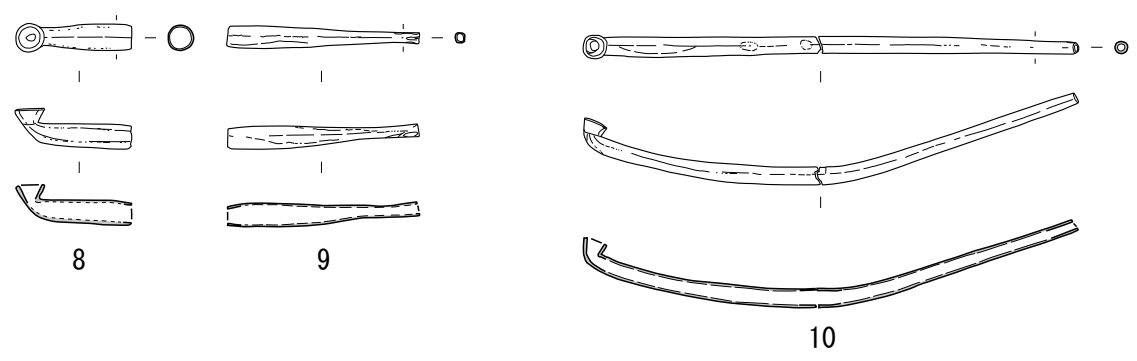
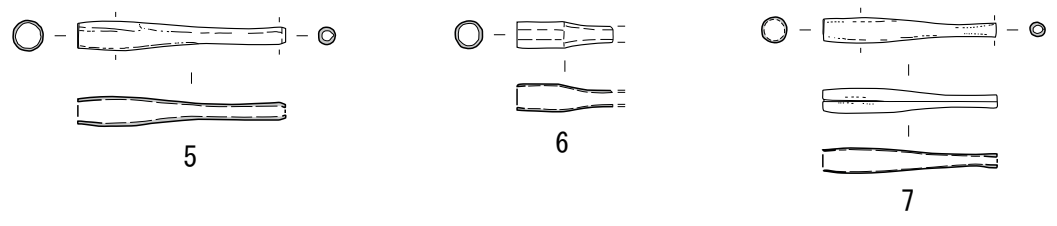
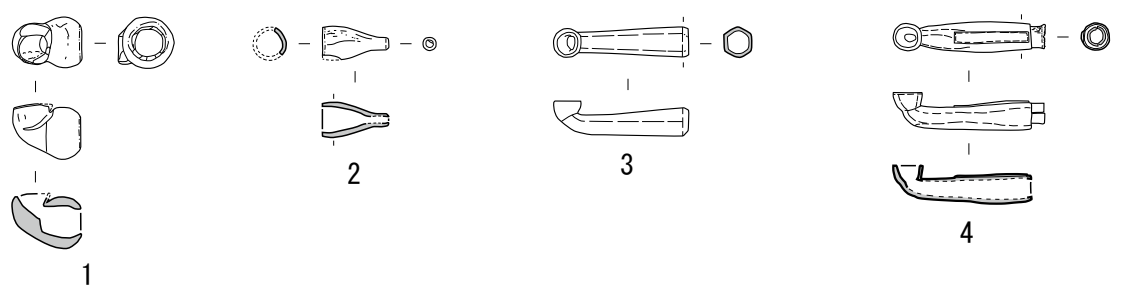
挿図番号 図版番号	器種	部位	素材	残存 完/破	法量 (cm)					重量 (g)	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
					縦長	横長	厚さ	火皿径	吸い口 径				
第65図 図版17	1	羅宇煙管	雁首	陶磁器	ほぼ完	2.62	2.10	0.91	-	-	8.57	上面観は丸みをおびた瓢箪形。火皿は上面に直に立つ碗状で首から羅宇に接する孔までは下膨れ状、孔径は比較的大きい。	B地区 27-A9 II 1b層
	2	羅宇煙管	吸い口	陶磁器	破	2.65	1.48	0.13	-	0.50	1.50	側面観が徳利形、吸い口の孔径は小さい。	B地区 19-J6 SP123
	3	羅宇煙管	雁首	銅	完	5.30	1.10	0.10	1.09	-	10.64	火皿は上面に直に立つ碗状。火皿縁は平坦を呈し、首から羅宇に接する体部の断面は六面体となる。	C地区 21-C4 SF3上面
	4	羅宇煙管	雁首	銅	完	5.00	1.20	0.15	1.07	-	11.61	銅に銀のメッキ胴上面に方形で断面が半月状の飾り板が付く。羅宇の一部が残る。	B地区 19-J8 SD38 1層
	5	羅宇煙管	吸い口	銅	完	8.25	1.20	0.15	-	0.65	11.15	羅宇に接続する筒部は所々平坦面を不規則に残し成型途上か不明。	B地区 19-J8 SK98 1層
	6	羅宇煙管	雁首	銅	破	3.80	1.50	0.15	-	-	6.35	口元がやや欠損している。小口までが比較的小さい。	B地区 27-A9 II 1b層
	7	羅宇煙管	吸い口	錫?	完	6.90	1.00	0.10	-	0.55	8.55	板状の金属を筒状に丸めて成型するのしており、小口に接する部分は裂けている。地肌が露出、表面は銅錆がみられる。	B地区 27-A10 II 1b層
	8	羅宇煙管	雁首	銅	完	4.60	1.09	0.10	1.09	-	8.00	火皿の側面は上面に向かい逆八の字状に立つ碗状。火皿縁部はやや外側に傾斜し、体部は首から一旦水平に伸び羅宇に接する部分でやや窄まる。	B地区 19-J7 SD6-2 1～3層
	9	羅宇煙管	吸い口	銅	完	7.65	0.90	0.13	-	0.49	6.89	銅に銀のメッキを施している器厚は薄い。	B地区 19-J7 SD6-2 1～3層
	10	延べ煙管	雁首～吸い口	銅	完	20.10	1.00	0.15	0.97	0.47	24.52	火皿は碗状。火皿縁部はやや外側に傾斜する。体部は首から緩い弧状に伸びる。胴部はほぼ円筒状。吸い口は胴部中頃からジョジョに窄まり縁部に至る。	B地区 19-J7 I 2層上面
	11	延べ煙管	雁首～吸い口	銅	完	16.20	1.10	0.08	1.10	0.71	17.93	火皿は上面に向かい逆八の字状に立つ碗状。頸部は圧がかかり変形のため形態は不明。胴部は円筒状で、吸い口に向かって一旦窄み、更に開きながら吸い口に至る。吸い口の縁部は丸く整えられている。	B地区 19-J8 SD38 1層

硯（第65図、図版17、第16表 12・13）

11点出土しており、うち2点を図示した。12は石灰岩製のものである。硯縁と硯池の一部が欠損している。13は型抜き製の土製品と考えられる。背面は岡部の裏側に方形に一段下げた面を持ち、「特許、新案、萬年硯、第15543〇〇（〇は判読不明）」と陽刻されている。背面の凸部又は格子文が刻印されている。作りはやや粗雑で、硯池の底に空気の破裂痕や器面にひび割れが多くみられる。

第16表 硯 観察一覧

挿図番号 図版番号	素材	残存 完/破	法量 (cm)			重量 (g)	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
			縦長	横長	厚さ				
第65図 図版17	12	石灰岩	破	12.1	6.4	2.1	212	硯池側の縁部と池の一部が破損している。	B地区 20-13 SD23 1層
	13	土製	完	13.3	7.5	1.8	188.5	型に素材を詰めて型を取り乾燥後焼く土製のものと考えられる。背面に一段下げた形の方形の室を作り「特許、萬年硯、荷案、第15543〇〇（〇は判読不明）」の陽刻印がある。周りに一部格子文が認められる。	B地区 20-11 SK48 1層



第65图 煙管·硯



図版17 煙管・硯

円盤状製品（第66図、図版18、第17表 1～8）

陶磁器や瓦を素材に、円形に打割成形した二次製品である。遊戯具などの用途が考えられており、グスク時代から近代以降と息の長い製品である^{註11}。111点出土しており、うち8点を図示した。

1、2は沖縄産施釉陶器の底部を利用しているもので、断面は平版である。1は大鉢の底部を利用して、高台から内側を残し高台脇から叩打剥離し整形している。剥離はやや雑な印象を受ける。2は小碗の底部を利用して、高台脇から叩打し剥離整形している。3～6は碗・壺類の体部部分を利用するもので、断面はやや湾曲する。3は沖縄産施釉陶器壺の胴部を利用して、平面形はやや方形に近い円形を呈し断面は厚みがある。縁部はやや雑な仕上がりとなっている。4は沖縄産施釉陶器碗の胴部を利用して、平面形は楕円状を呈し断面は薄い。5は本土産瀬戸・美濃碗の胴部を利用して、内面側から剥離調整し円形状に整えている。6本土産近世磁器の碗を利用して、胴部の内面側から剥離調整し円形状に整える。作りは丁寧である。4、5、6は丁寧な作りとなっており、表面の文様を意識して造られた印象を受ける。7、8は瓦を利用して造られている。7は明朝系赤瓦、8は近世大和系平瓦を利用している。

第17表 円盤状製品 観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	部位	素材	残存 完/破	法量 (cm)				重量 (g)	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
					縦長	横長	厚さ	底径				
第66図 図版18	1	沖縄産施釉陶器	大鉢	底部	破	6.6	1.05	3.4	-	10.8	大鉢の底部。高台から内側を残し高台脇から叩打剥離し整形している。剥離痕はやや雑である。	B地区 20-H2 SD25 4層
	2	沖縄産施釉陶器	碗	底部	完	4.65	4.93	1.8	4.2	35	小碗の底部。高台から内側を残し高台脇から叩打し剥離。高台も内側に剥離が及ぶが調整痕なのか破損の剥離か判別は付かない。剥離痕はやや雑である。	B地区 19-18 SD38 1層
	3	沖縄産施釉陶器	壺	胴部	完	3.28	3.43	1.04	-	14.5	壺の胴部。平面形は方形に近い円形を示し断面は厚みがみられる。縁部の作りはやや雑な剥離で仕上げている。	B地区 27-A9 II1a層上面
	4	沖縄産施釉陶器	碗	胴部	完	3.51	3.24	0.44 ～ 0.76	-	9.5	碗胴部から腰部にかけ文様部を意識して利用している。全体の平面形は楕円状を示し断面の縦軸に厚みの違いがみられる。縁部の作りはやや細かい剥離を施している。	D地区 16-A5 I層
	5	本土産磁器	碗	胴部	完	3.48	3.46	0.5	-	8.5	スキャンマカイの胴部の文様部を意識して利用している。胴部の文様部を内面側から剥離調整し円形状に整えている。剥離は細かい。	B地区 20-H3 SD23 1層
	6	本土産磁器	碗	胴部	完	2.47	2.47	0.24	-	2.5	近世磁器袋物の胴部を利用して、文様部のある胴部の内面側から剥離調整し円形状に整えている。剥離は細かい。	C地区 21-C4 SB1
	7	明朝系瓦	平瓦	筒部	完	6.06	5.47	1.83	-	63.5	明朝系赤瓦の平瓦を剥離と研磨で円形状に整形している。	B地区 20-G2 SD25 3～5層
	8	近世大和瓦	平瓦	筒部	破	4.62	5.17	1.84	-	56.5	近世ヤマト平瓦を利用して側面を研磨し円形状に整えている。	C地区 21-C4 I層

基石（第66図、図版18、第18表 9・10）

基石が6点出土している。9は黒石で粘板岩製と考えられる。平面観は円形、断面は凸レンズ型で上下ともに腹の頂点が小さく扁平になる。10は貝製の白石で平面観は円形、断面は凸レンズ型で上下ともに腹の頂点が小さく扁平になる。貝の素材は不明だが成長線と思われる螺旋がみられる。

第18表 基石 観察一覧

挿図番号 図版番号	素材	残存 完/破	法量 (cm)			重量 (g)	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
			縦長	横長	厚さ				
第66図 図版18	9	粘板岩	完	2.2	2.2	0.69	4.5	黒石。平面形は円形。断面形は凸レンズ型で上下ともに腹の頂点が小さく扁平になる。	C地区 21-C5 I層
	10	貝製	完	2.1	2.1	0.56	3.5	白石。平面観円形。断面形は凸レンズ型で上下ともに腹の頂点が小さく扁平になる。素材の貝種は不明だが、貝の成長線と思われる螺旋がみられる。	C地区 21-C4 II1a層上面

歯ブラシ (第66図、図版18、第19表 11)

1点出土している。11は骨製で、ウシ或いはウマの四肢骨を柄にした歯ブラシである。把柄部先端に金属製の銚を持つ。頭部の刷毛孔は4列16行で並んでいる。

第19表 歯ブラシ 観察一覧

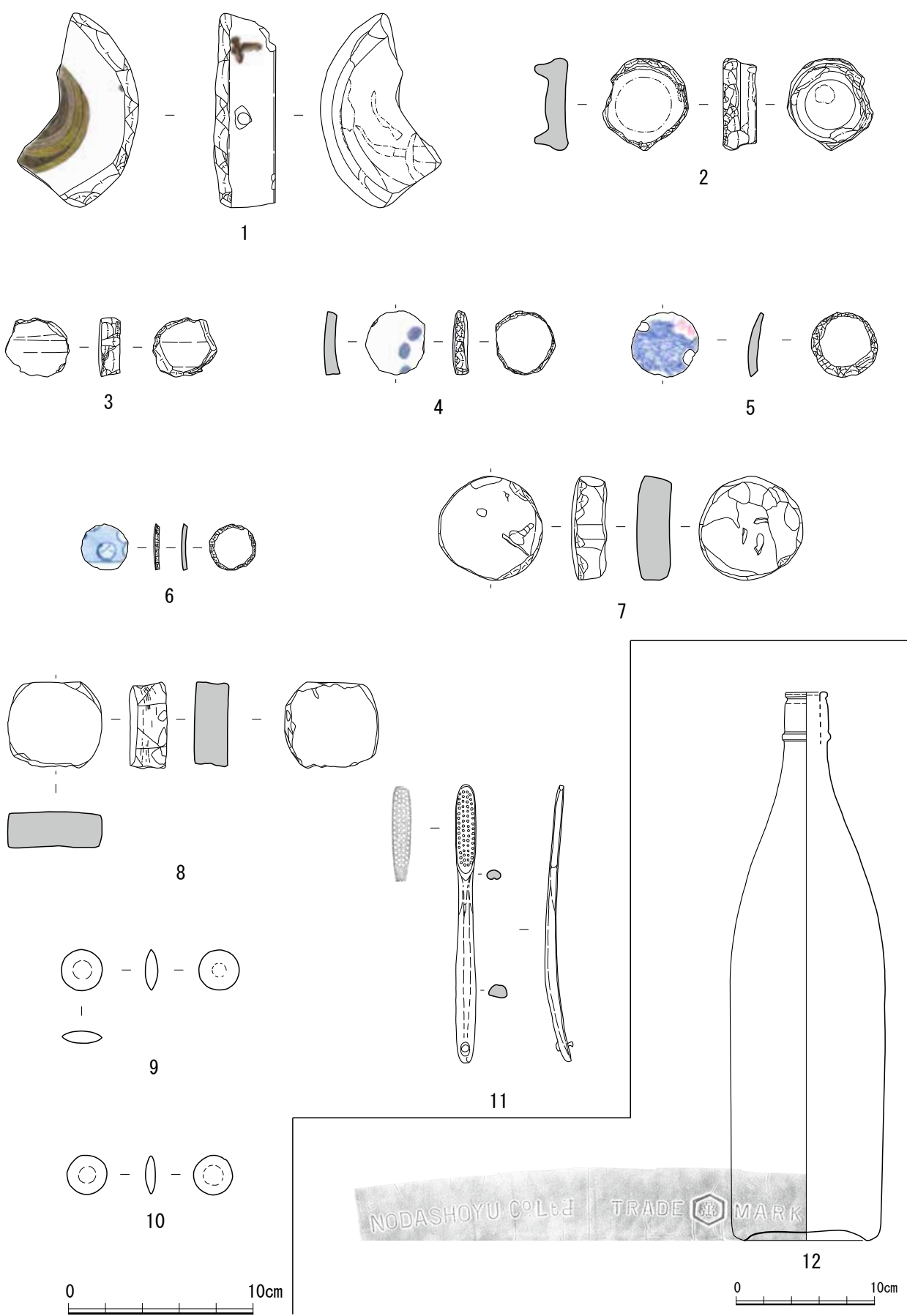
押図番号 図版番号	素材	器種・種類	残存 完/破	法量 (cm)			重量 (g)	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
				縦長	横長	厚さ				
第66図 図版18	11	ウシ 或いは ウマ	歯 ブラシ	完	15.1	1.1	0.7	11.5	ウシ（或いはウマ）の四肢骨を柄にした歯ブラシ。平面形は頭部が楕円状で頭部でくびれをなし把柄部が端の細長い楕円形となる。把柄部先端に金属製の銚を持つ。頭部の断面形は扁平隅丸方形、把柄部の断面形は半月状である。頭部の刷毛孔は4列となっており、柄の輪郭に沿った2列が15孔、中央の2列が16孔である。	B地区 27-A7 SD6-2 2層

ガラス製品 (第66図、図版18、第20表 12)

743点出土している。殆どが近代以降のもので化粧品の瓶、薬瓶、飲料用瓶、調味料瓶、インク瓶、ランプシェードやランプの火舎など多種多様な製品が出土している。完形品である1点を図示した。12は完形のガラス瓶である。青色の透明なガラス製一升瓶で形状はなで肩である。底部近くに右回りで「NODASHOYU CO., Ltd TRADE 萬（六角形の枠に囲まれている）MARK」と陽刻されていることから、野田醤油株式会社の製品であることが判明した。

第20表 ガラス製品 観察一覧

押図番号 図版番号	素材	器種・種類	残存 完/破	法量 (cm)			重量 (g)	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
				口径	底径	器高				
第66図 図版18	12	ガラス	瓶	完	3.0	10.8	39.6	1349	青色の透明なガラスの一升瓶で形状はなで肩である。「NODASHOYU CO., Ltd TRADE 萬（六角形の枠に囲まれている）MARK」と陽刻されている。	B地区 27-A7 SD6-2 2層



第66図 円盤状製品・基石・歯ブラシ・ガラス瓶



図版18 円盤状製品・基石・歯ブラシ・ガラス瓶

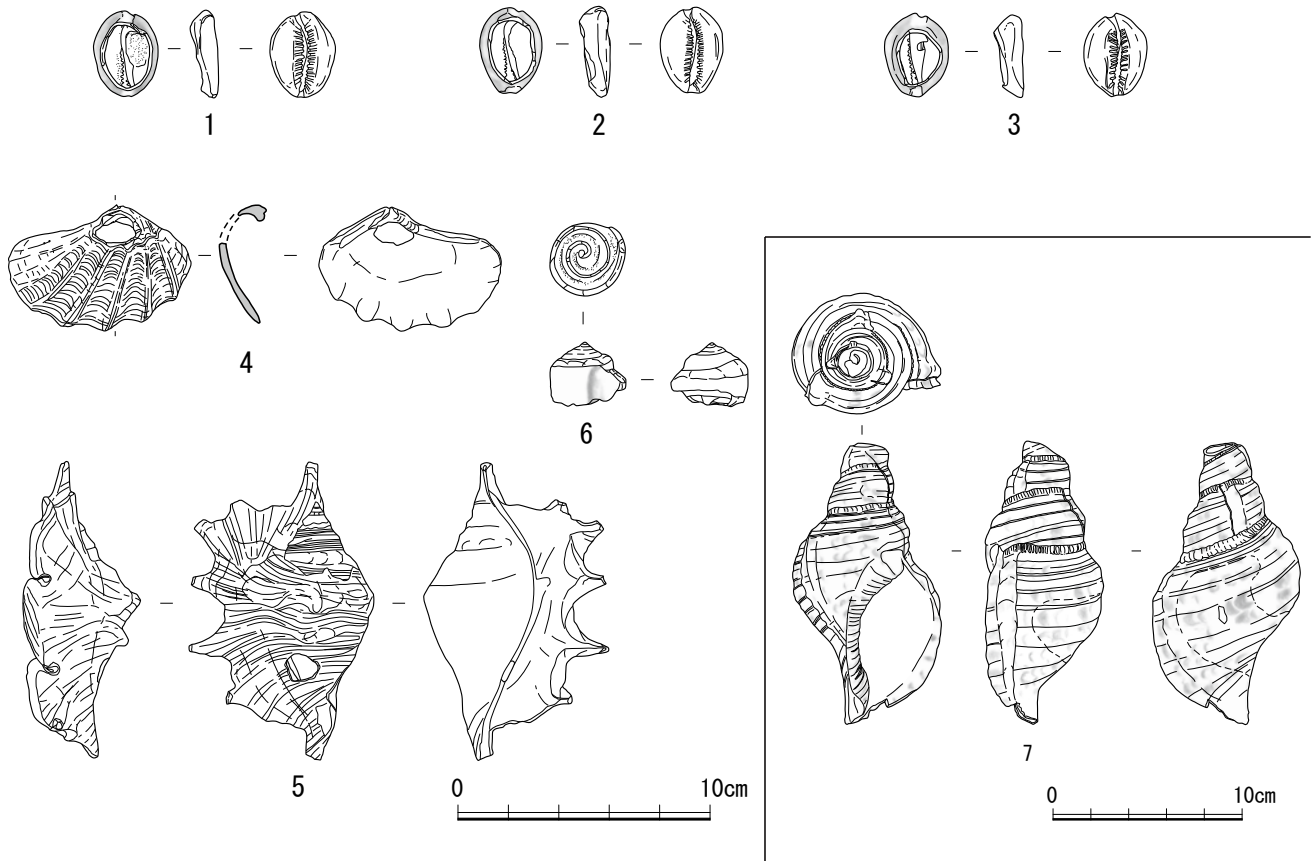
貝製品（第67図、図版19、第21表）

貝製品が12点出土しており、うち7点を図示した。法螺貝の法具やマガキガイ製の独楽など民俗事例のある近現代の製品が目につくが、二枚貝や巻貝に粗孔を穿った有孔貝製品も出土している。

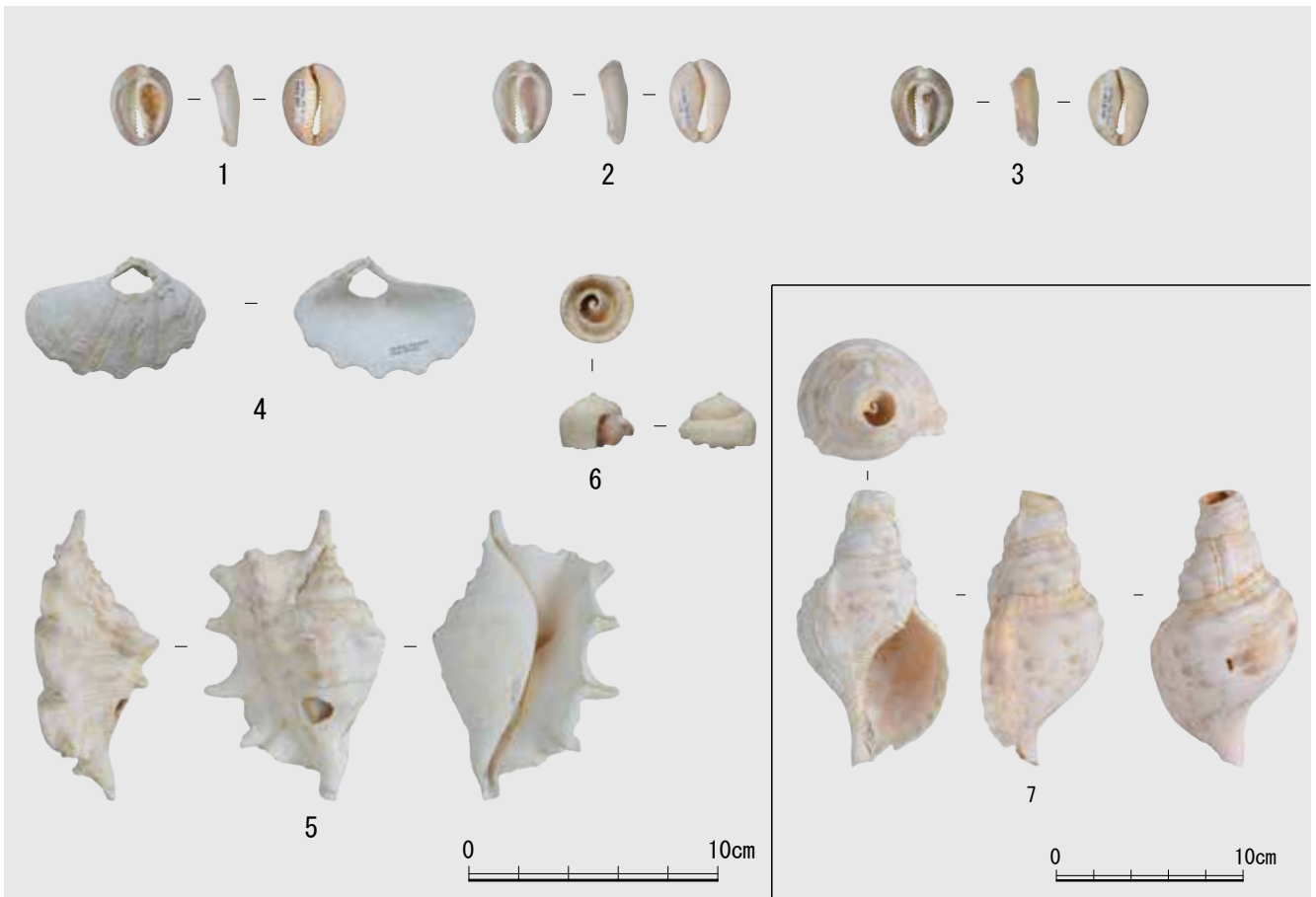
1～3はタカラガイ製品で、背面を打割し周縁を整えたものである。4は二枚貝のヒメジャコ製貝錘で殻頂に粗孔を穿っている。5はクモガイの体層背面部に粗孔を穿っている。いずれも民俗事例などから魚網錘とされている。6はマガキガイ体層部を打割や剝離などで取り除き残った螺塔部を利用している。民俗事例などから軸部を残した独楽が用途として考えられている。7はホラガイの体層を残し螺塔部先端を研磨し取り除いている。法具の法螺貝が考えられ、沖縄では現在でも祭りの際の囃子などに使われることが多いものである。

第21表 貝製品 観察一覧

挿図番号 図版番号	製品	貝種	残存 完/破	法量 (cm)			重量 (g)	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
				殻高 縦長	殻長 横長	厚さ				
第67図 図版19	1	貝錘	ヤクシマダカラ	完	3.4	2.9	0.1	8.5	背面を打割し取り除いている。民俗事例に魚網錘がある。	B地区 19-J10 SD28 1層
	2	貝錘	ヤクシマダカラ	完	3.4	2.6	0.1	7.5	背面を打割し取り除いている。民俗事例に魚網錘がある。	B地区 19-J10 SD28 2層
	3	貝錘	ヤクシマダカラ	完	3.4	2.5	0.2	8.0	背面を打割し取り除いている。民俗事例に魚網錘がある。	B地区 19-J1 II 1a層上面
	4	貝錘	ヒメジャコ	完	5.0	7.4	0.3	20.0	殻頂に粗孔を穿っている。	B地区 20-H1 SK48 1層
	5	有孔貝	クモガイ	完	11.8	7.4	0.2	118.0	体層背面部に粗孔を穿っている。	B地区 20-H3 SD26 2層
	6	不明	マガキガイ	不明	2.6	3.0	0.2	21.0	螺頭部を残し体層部を剝離し取り除いている。類例に軸部を残した独楽が民俗事例にある。	B地区 19-17・18 SX15
	7	法螺貝	ホラガイ	完	14.8	7.9	0.2	8.4	体層を残し螺塔部先端を研磨し取り除いている。笛が考えられる。	B地区 20-G2 SD25 3～5層



第67図 貝製品



図版19 貝製品

石製品（第68図、図版20、第22表）

近世、近代のものと考えられる石製品が35点出土している。主な種類としては石盤、砥石、石臼が得られている。8点を図示した。

〈石盤〉（1・2）

石盤は黒色千枚岩を薄い板に加工し、木枠をつけ使用したのと考えられる。明治、大正時代に学習用の筆記用具として広く使われとのことである。1、2ともに全体は残っていないが角部が残存しており、上面辺と横側は斜めに削り出されている事から木枠に収まる部分と考えられる。

〈砥石〉（3～6）

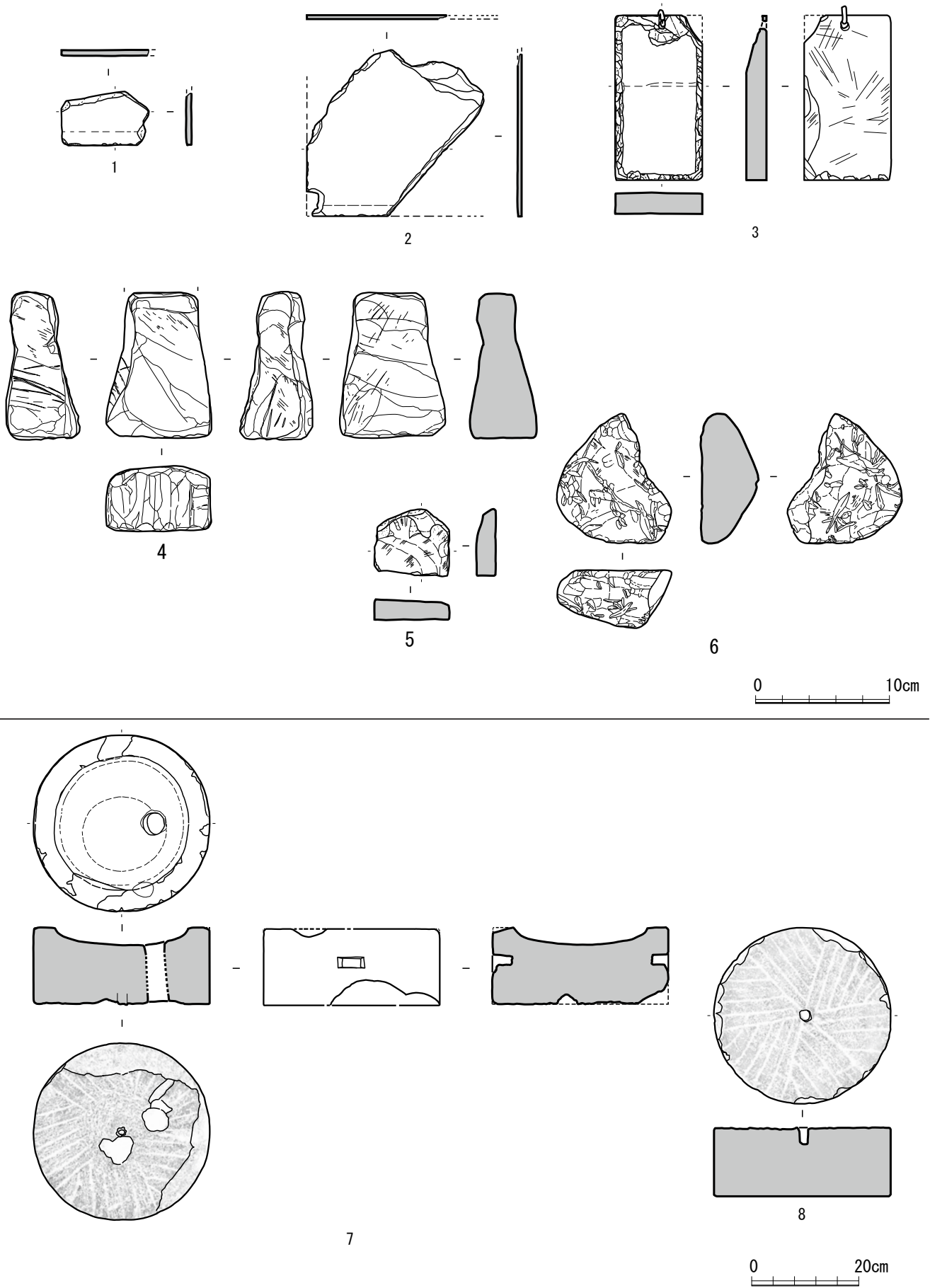
3は硯の転用品と考えられるもので、縁を打叩により除き、池部の器壁が薄い部分に粗孔を穿つ。針金を孔に通してねじり輪にしている。裏面に刃物痕が認められ、砥石として使用していたことが考えられる。4は本来は方形であったと考えられるものである。長軸の下端に鑿痕を残す。上端は折れ痕と考えられる。上面観の形態は撥形、上下端部以外の四面すべてが砥面である。5は上面のみ砥面が残り、その他の部分は破損面と考えられる。6は断面が三角形状となっており、三面に刃物痕と研ぎ痕がみられる。

〈石臼〉（7・8）

石臼は上部の回転臼と下部の固定臼の上一組で使用するものである。7は上部の回転臼である。円盤の上面に縁を巡らし中に皿状の窪みを持つ。中央より外側近くに4cm程の円孔を貫通させた投入口がある。側面に上面孔から見で約90度の位置に左右に方形の引手差し込み穴がある。方形穴は側面の中より上方に縁部と並行して穿っている。裏面は水平に整えているが鑿の痕が著しく、中心部に金属製の心棒の残りが認められる。8は下部の固定臼である。上面観は円形で目立ては中央から外側に向かい三角形の先端から広がる様に組まれている。三角形の枠内は斜めの浅い溝を彫っている。中央に上段の石臼と連結する心棒を通す縦孔がある。裏面は水平で鑿の痕が著しい。

第22表 石製品 観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	石質	残存 完/破	法量 (cm)			重量 (g)	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
				縦長	横長	厚さ				
第68図 図版20	1	石板	黒色千枚岩	破	6.05	4	0.42	22	板状に加工した黒色千枚岩。角部分を残すが全体の大きさは不明。	B地区 27-A8 II3層
	2	石板	黒色千枚岩	破	13.03	12.04	3	76	板状に加工した黒色千枚岩。全体の大きさは不明。	B地区 20-13 SD23 1層
	3	砥石	黒色千枚岩	完	12.23	6.44	1.5	261.5	硯の転用品。硯の縁を打叩により縁を除き、池側の器壁が薄い部分に粗孔を穿つ。孔に針金を通してねじり輪にしている。裏面に刃物痕が認められる。	B地区 19-J7 SD6
	4	砥石	流紋岩	完形	10.2	7.9	5.1	523	元々は方形の立方体と考えられる。長軸の下端は鑿痕を残す。上端は折れ痕と考えられる。上面観の形態は撥形、上下端部以外の四面すべてが砥面である。	C地区 21-C5 SK7 1層
	5	砥石	砂岩	破損	5	5.1	1.5	46	上面のみ砥面が残り、その他の部分は破損面と考えられる。	B地区 20-F3 SD25 3層
	6	砥石	砂岩	破損	9.5	8.6	4.3	332	断面形は三角錐状。三面に刃物痕と研ぎ痕がみられる。	B地区 27-A7 SD6-2
	7	石臼	玄武岩	完	32.9	32.9	14.3	20900	回転臼。上面観は円状。周囲に縁を巡らし中央に向かい皿状の窪みを持ち、中央面より外側近くに4cm程の円孔を貫通させる。側面は円柱状を成す。上面孔から水平位置で90度前後の位置に左右に方形の孔を有する。方形孔は側面の中央より上方に穿っている。裏面は水平に整えているが鑿の痕が著しい。中心部に金属製の心棒の残りが認められる。	B地区 27-A9 SX15
	8	石臼	玄武岩	完	32.9	32.9	14.3	21800	固定臼。上面観は円状。中央に向かい縁状に浅めの溝を彫りこむ。中央に上段の石臼と連結する心棒を通す縦孔が認めら。裏面は水平で鑿の痕が著しい。	B地区 27-A9 SK97 2層



第68図 石製品



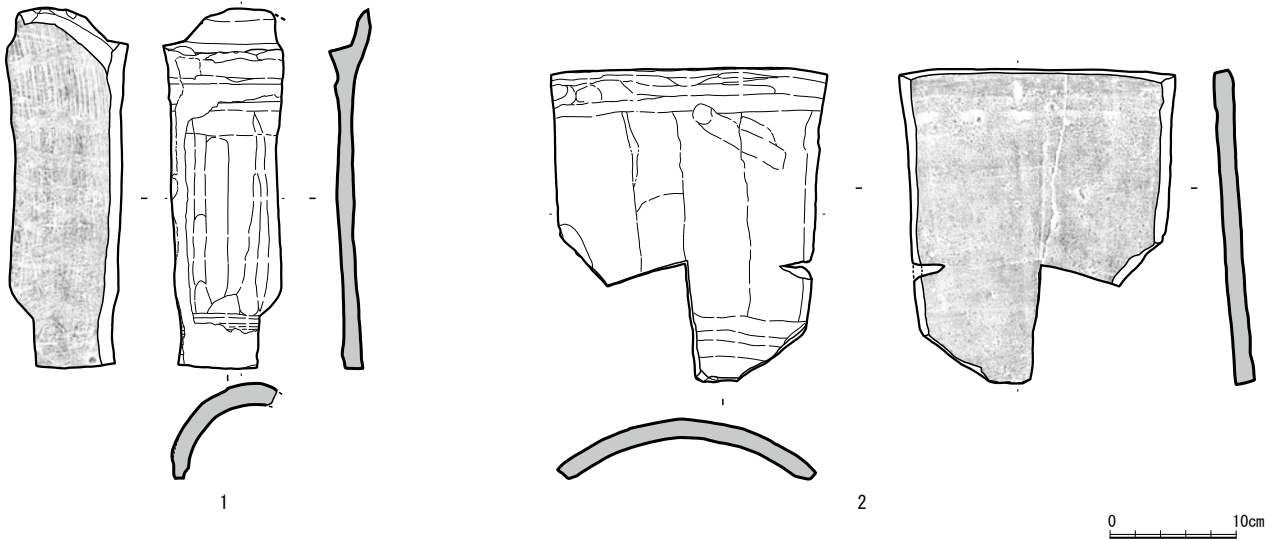
図版20 石製品

瓦 (第69図、図版21、第23表)

392点しており、うち2点を図示した。1は明朝系の丸瓦で玉縁から筒部下端まで残す資料であり、2は明朝系平瓦で下端部を欠く資料である。

第23表 瓦 観察一覧

挿図番号 図版番号	種類	部位		器色・焼成	法量 (cm)			重量 (g)	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
					縦長 (cm)	横長 (cm)	厚 (cm)				
第69図 図版21	1	明朝系	丸瓦	玉縁～下端部	赤褐色・焼成良好	28.5	90.5	26.0	810	玉縁から筒部下端まで残るが右側面部を大きく欠くものである。凸面上部に横位に幅広(1.5cm)の指撫だが二条、下位に幅の狭い(0.7cm)指撫でが横に伸びる。筒部に縦の窠削りが全体に施される。下端は櫛目状の窠による削りが横に数条認められる。凹面は布目が覆い玉縁の縁取る様削りがなされる。玉縁から続く側端部に縦溝の棒圧痕を残し割れ面をそのまま残す。下端部は平坦であるか窠削りはされていない。筒部の側端部、下端部、玉縁との境に3～5cmの漆喰が帯状に付着している。	B地区 20-H11 SK48 1層
	2	明朝系	平瓦	上下端部・側面	赤褐色・焼成良好	25.0	23.0	2.1	1057.0	凹面は布目痕を残し縦軸中央に布振れ圧痕を認められる。両側面に棒圧痕の溝がみられ、側面は割れ面をそのまま残している。凸面上位に二条の幅の広い指撫でが横に伸び、下位は撫でと窠削りされている。凸面に縦長方形の平坦面を残し敲き痕とみられる。上端面は一部のみであるが撫で整形した痕跡がある。下端面は特に調整はしていない。	C地区 21-C3 SB1



第69図 瓦



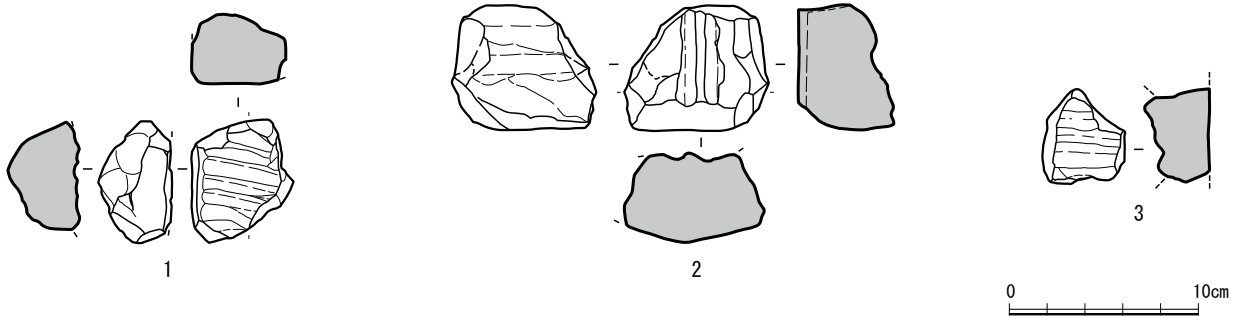
図版21 瓦

鍛冶関連遺物（第70図、図版22、第24表）

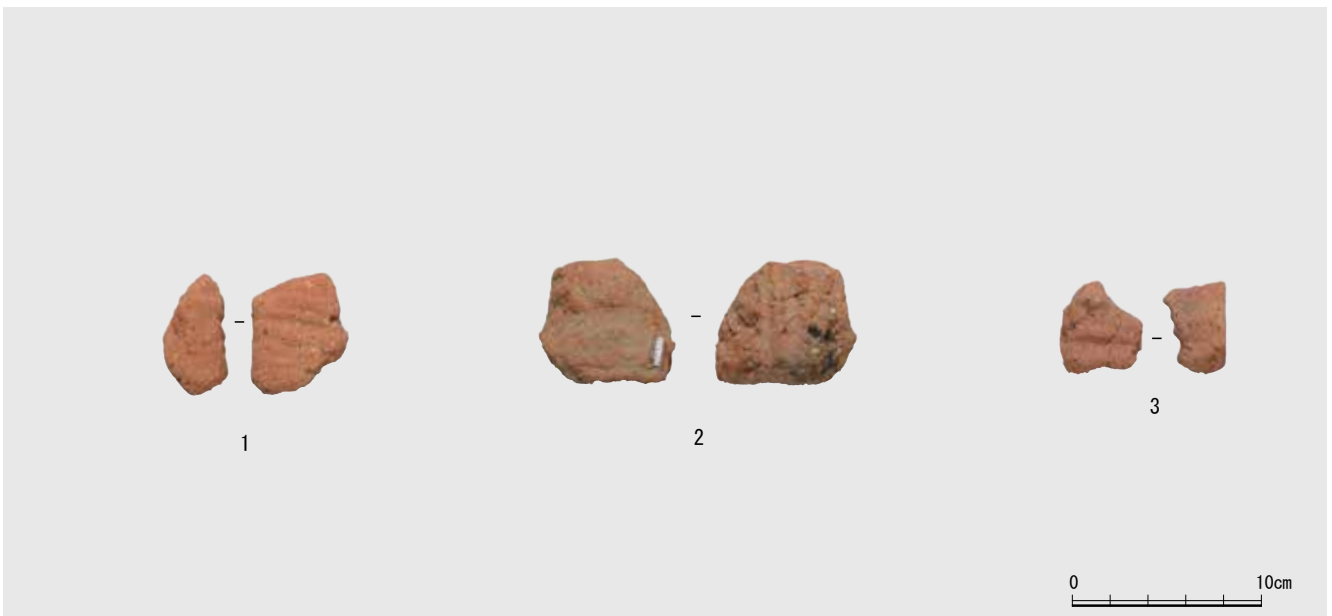
鍛冶関連として報告するが、被熱を受けて硬化している面がみられるものである。炉壁と考えられるもの、容器状のもの、焼土などが出土しているが、羽口や鉄滓等の明確な鍛冶関連遺物は出土していない。また溶着物などは認められなかった。11点出土しており、うち3点を図示した。1と2は被熱硬化面が一面みられるものである。側面も何かしらの可能性があるが全体の形態が把握できず判然としない。1は被熱硬化面に溝が左から斜め下に並行して三条伸びている。2は中央に二条の管か溝が伸びる。管か溝なのかは破損が著しいため判別できなかった。炭片が付着しているが破損面上のため使用時のものか不明である。1と2は炉壁の可能性はある。3は円筒の形態が想定できるもので、被熱硬化面に二条の並行した溝が横位に伸びる。溝は凹部と凸部が連続し凸部先端は尖る。

第24表 鍛冶関連遺物 観察一覧

挿図番号 図版番号	種類	残存 完/破	法量 (mm)			重量 (g)	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
			縦長	横長	厚さ				
第70図 図版22	1	炉壁	破	6.5	5.4	3.7	92.0	表とした面のみ生きた面である。左側面は生きた面の可能性がある。表面は三条溝が左から斜め下に並行して伸びている。	C地区 21-C4 II1a層上面
	2	炉壁	破	7.4	6.6	5.0	204.0	表面は真中に二条の管か溝が伸びる。管か溝なのかは破損が著しい為不明。炭片が付着しているが破損面上のため使用時のものか不明。	C地区 21-C4 SX5
	3	不明 (羽口か)	破	5.0	4.3	3.5	54.5	円筒形の形態が考えられる。表面に二条の並行した溝が横位に伸び、溝は凹部と凸部が連続し凸部先端は尖る。	C地区 21-C4 I層



第70図 鍛冶関連遺物



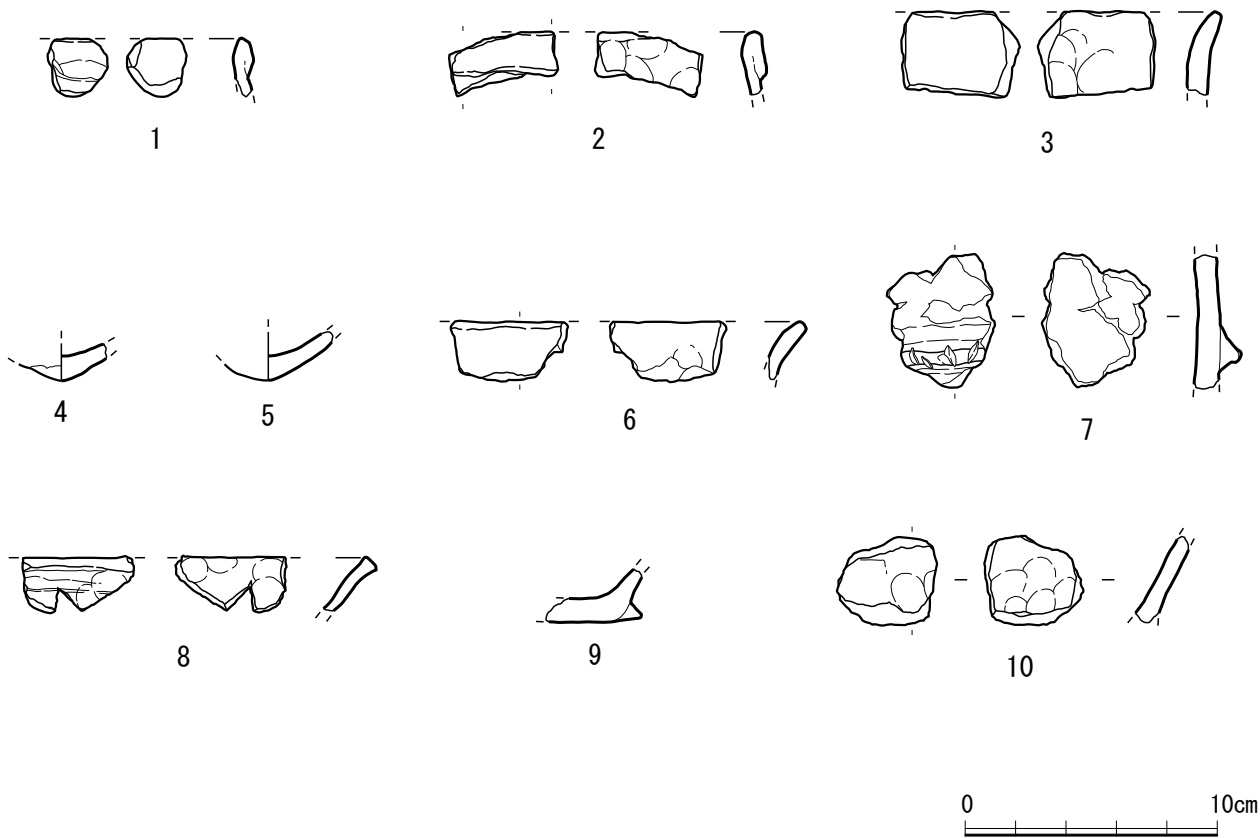
図版22 鍛冶関連遺物

土器 (第71図、図版23、第25表)

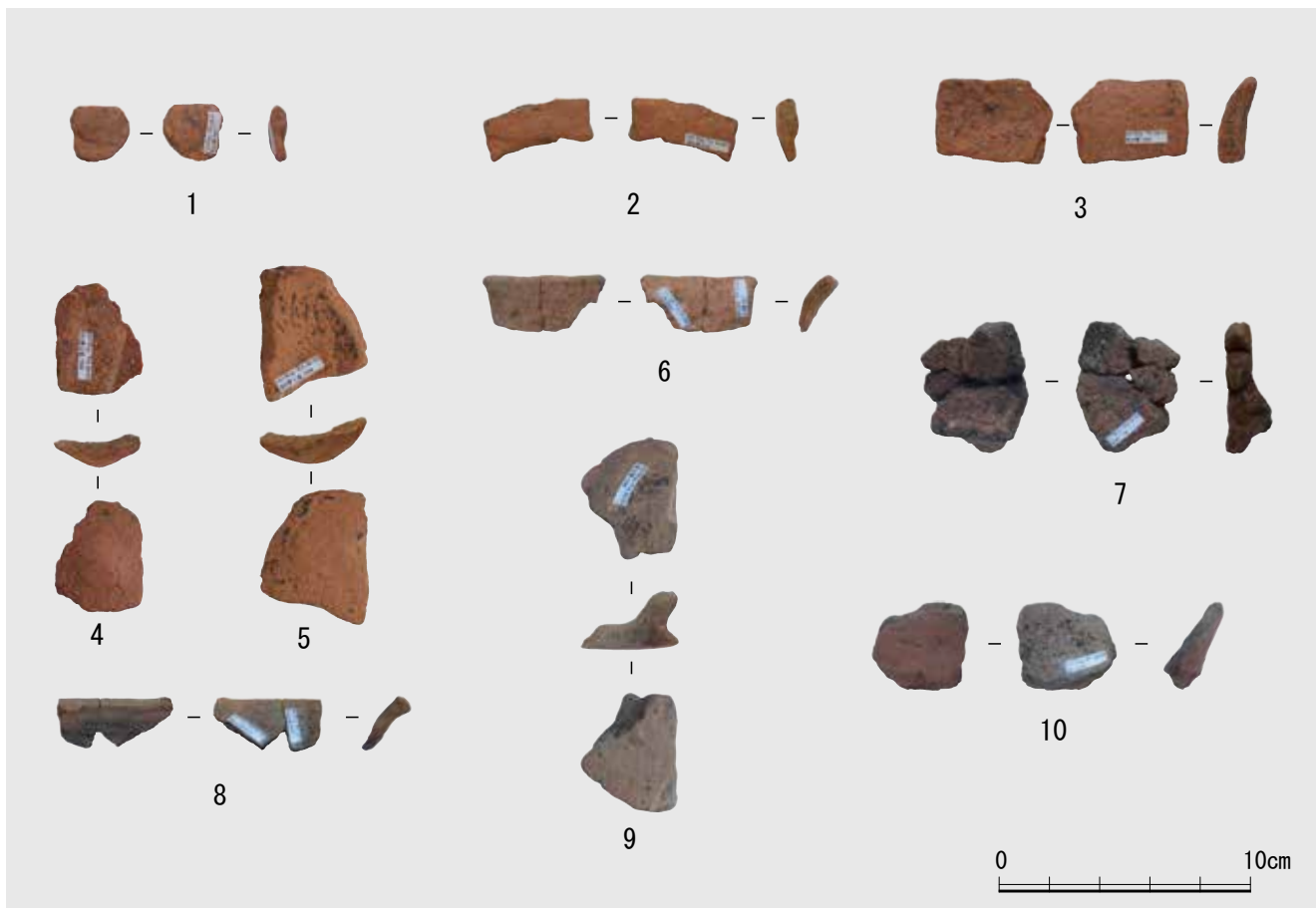
土器はA地区491点、B地区117点、C地区14点、D地区1点の総数629点が出土している。今回の調査で出土した土器は縄文後期～晩期、沖縄貝塚時代後期後半、グスク時代の3時期に収まる。A地区が主な出土地点となっているが、各時期の土器が混在した状況で出土していたことから周辺からの流れ込みと考えられる。全て小破片で推定復元可能な資料はなかった。口縁部・底部・文様などから特徴的な10点を図示した。1～5は縄文時代後期から晩期頃の土器と考えられるものである。1、2は肥厚口縁である。1は口縁を外に折り返すように肥厚させ、断面は楕円状を示す。2は粘土体を外側に折り返すように口縁部を肥厚させており断面は方形状を示す。器面には指圧痕を残っている。3は口縁を外反させ口唇が尖る。器面はざらざらとしており、胎土は砂質である。4と5は底部でやや尖った丸底となっている。6は縄文時代晩期から貝塚時代後期頃の土器と考えられるもので、口縁が外反し口唇は丸く、器面はあばた状である。7は九州から搬入されたと考えられる弥生時代中期前半～中頃の土器で、入来式、山ノ口式土器と考えられる。壺の肩部分に横位に刻突帯文を巡らしている。8～9は貝塚時代後期後半頃のくびれ平底土器である。8は口縁部で口縁が外に開き、口唇を平坦に整えている。両器面に指圧痕が認められる。9はくびれ平底で底部からの立ち上がりがくびれ、外に広がり立ち上がる。くびれ部に爪痕が残るほどの指圧痕がみられ、成型時の強調が伺える。10はくびれ平底の底部立ち上がり近くの胴部である。外側に逆八の字状に広がり立ち上がる。

第25表 土器 観察一覧

挿図番号 図版番号	部位	法量 (cm)			胎土	混和材	観察事項	時代区分	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)
		口径	器高	底径					
第71図 図版23	1	口縁部	-	(2.3)	-	砂質 白色粒	肥厚口縁。口縁部は粘土体を外側に折り返すよう肥厚させており、断面形は楕円状を成す。色調は褐色を呈する。	縄文時代晩期	A地区 26-E3 III3b層
	2	口縁部	-	(2.51)	-	砂質 白色粒	口縁は粘土体を外側に折り返すように肥厚させており、断面形は方形状を成す。色調は赤褐色を呈する。内外面ともに指圧痕が見られる。カヤウチパンタ式土器。	縄文時代晩期	A地区 26-E4 III3b層
	3	口縁部	-	(3.3)	-	砂質 金雲母粒 白色粒	口縁は外反し、口唇は尖る。色調は赤褐色を呈する。	縄文時代後期～晩期	A地区 26-E4 III3b層
	4	底部	-	(1.47)	-	砂質 赤色粒 茶色粒	やや尖底に近い丸底。色調は外面が赤褐色、内面が暗褐色を呈する。仲原式土器と考えられる。	縄文時代後期～晩期	A地区 26-E4 III3b層上面
	5	底部	-	(1.9)	-	砂質 白色粒	やや尖底に近い丸底。色調は内外面が赤褐色を呈する。	縄文時代後期～晩期	A地区 26-E4 III3b層上面
	6	口縁部	-	(2.3)	-	粘質 白色粒 褐色粒	深鉢型。口縁部は外反している。色調は薄赤褐色を呈する。器面あばた状。指圧痕が明瞭に見られる。	縄文時代晩期～ 貝塚時代後期前半	B地区 19-J10 II3層
	7	胴部	-	(5.3)	-	粘質 金雲母粒	搬入土器。壺の肩部分と考えられる。表面に横位の刻目突帯を一条巡らしている。色調は外面が暗褐色、内面が赤褐色を呈する。入来式～山ノ口式土器と考えられる。	弥生時代中期前半～中	B地区 27-A6 III層
	8	口縁部	-	(2.1)	-	細砂質 赤色粒	壺型。口縁は外に開き、口唇は平たい。色調は褐色を呈する。	貝塚時代後期後半	C地区 21-C3 地山上面
	9	底部	-	(2.1)	(3.7)	細砂質 赤色粒 黒色粒	くびれ平底。底部の立ち上がりが一旦くびれ外に広がり立ち上がる。色調は外面が赤褐色、内面が茶褐色を呈する。	貝塚時代後期後半	A地区 26-E4 III1b層
	10	胴部	-	(3.4)	-	粘質 白色粒	くびれ平底。外側に逆八の字状に広がり立ち上がる。色調は外面が赤褐色、内面が褐色を呈する。外面に指撫で痕が見られる。	貝塚時代後期後半	A地区 26-E4 SK1



第71图 土器



图版23 土器

外国産陶磁器（第72・73図、図版24・25、第26表）

外国産輸入陶磁器が182点出土しており、うち25点を図示した。種類として青磁、白磁、染付、色絵、瑠璃釉、無釉陶器が出土しており、その中でも染付が圧倒的に多い。

〈青磁〉（1）

3点出土しており、全て碗である。1は無文の直口口縁碗である。

〈白磁〉（2）

53点出土しており、全て型成形の小碗である。2は腰部に丸味を持ち、口縁は直線的に開き端反りを成す。口唇を釉剥ぎし高台は断面形が三角状を示す。18世紀から19世紀の徳化窯系と考えられる。

〈染付〉（3～19）

染付は94点出土しており、碗、皿、小碗、杯などが得られている。3～12は碗で18世紀頃の福建・広東系と考えられるものである。腰胴部にやや丸味や張を持ち口縁まで直線状に開きながら立ち上がるもので、端反りや口縁上位で外側に折るように外反させるものがある。口唇は丸味のあるものとやや尖るものがある。高台は畳付けの内外を削り出し釉剥ぎしている。3は外体面に二条の圏線とその下に団花を中心に両側に縦位置の草花文を描く。4、5は外体面に二条界線で半梅花文と寿字文を区画し下位に簡略化した蓮弁文を巡らす。6、7は外体面に草花文と腰部に弁先の無い簡略化した蓮弁文を施す。9は弁先の丸い簡略化した蓮弁文を描く。内面は口縁に幅広圏線を巡らし内底面に圏線と草花文を配する。8、10は底面に「和」、「和美」の銘を付す。11は外対面に仙芝祝寿文を施すもので、逆八の字状に開きながら立ち上がり口縁上位で外側に折曲げるよう外反させる。口唇は丸い。内面は口唇近くに幅広圏線を巡らしている。

14～16は皿である。14は胴部が弧を描くように外に広がり口縁は直口する。口唇は丸く口縁の内面に一条圏線を巡らし、見込みは一条圏線と空間を（だみ）で埋めている。「志在書中」の可能性が考えられる。18世紀頃の福建・広東系と考えられるものである。15は高台が低く、先端を外側から削り出し畳付けの釉は剥ぎ取っている。高台際に一条の圏線、高台内に二条圏線を配している。内底面に仙芝祝寿文と推察できる草花文を施す。

17、18は小碗である。外体面に二条圏線と二重線の花唐草文を描く。胴部に丸味を持ち開きながら立ち上がり、口縁は上位で外反させている。口唇は舌状となる。18世紀から19世紀頃の景德鎮窯系と考えられるものである。

19は小杯である。腰部に僅かな張を持たせ逆八の字状に開きながら立ち、口縁は上位で外反する。高台の断面は三角状を成す型成形である。外体面に唐草文を描き空間を豹皮状文が充填している。

〈色絵〉（20～22）

色絵は9点出土し、器種別には皿、小碗が得られている。20は小碗で、外体面に灰青色の顔料で草花文を描くもので、腰部に丸味があり口縁まで直線的に開きながら立ち上がり、口縁は端反り口唇は釉剥ぎしている。21は小皿で内定面に灰青色の顔料で草花文を描いている。高台は20、21共に断面形が三角状を成す型成形である。18世紀から19世紀の徳化窯系と考えられる。

〈瑠璃釉〉（23・24）

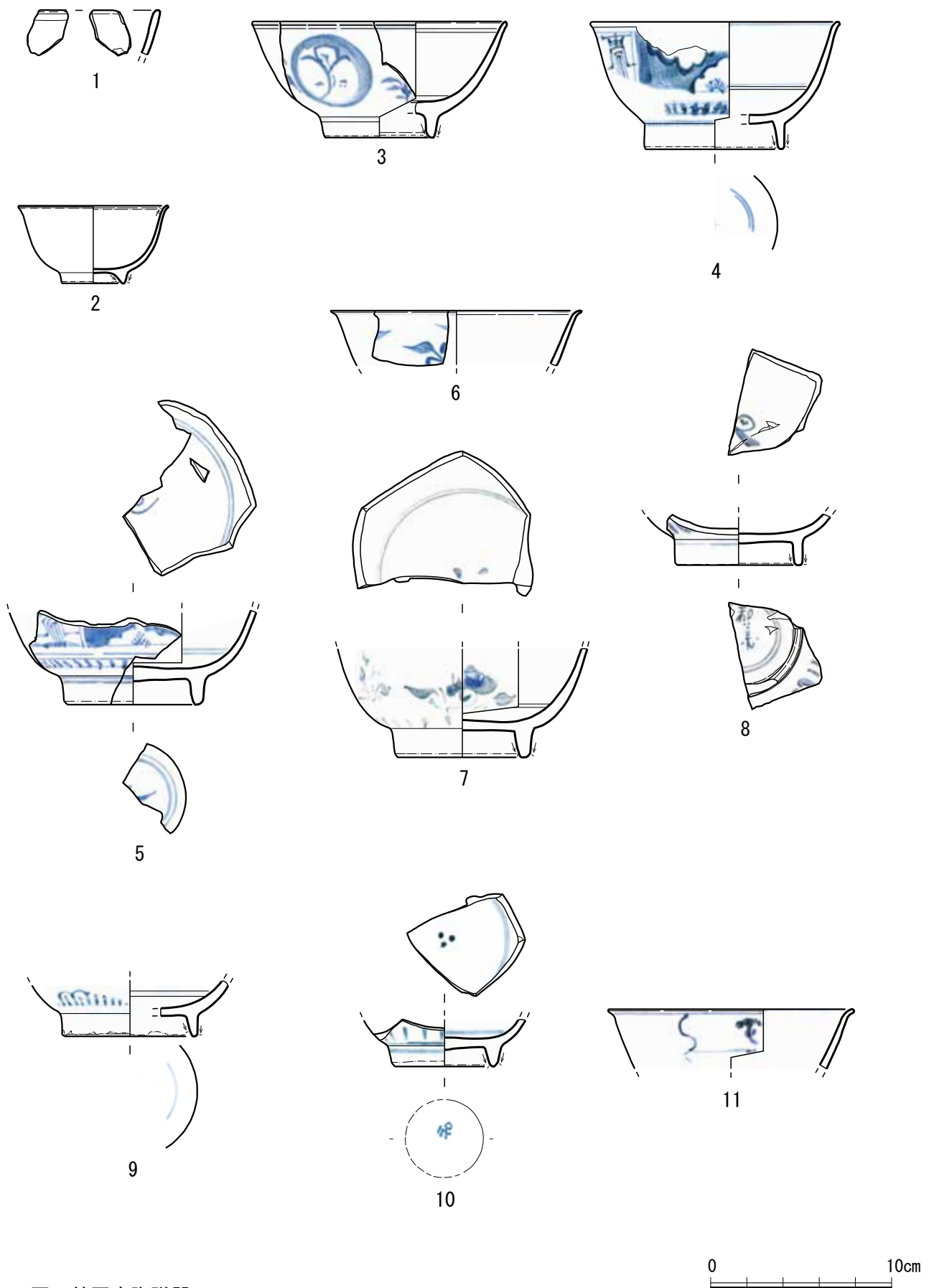
瑠璃釉は4点出土したが器種が分かるものは小杯の1点のみであった。23は小杯である。腰胴部に僅かな丸味を持ち、口縁は逆八の字に開く。口唇を釉剥ぎする。高台断面は三角形で畳付けは丸くなる型成形である。外面と高台内に瑠璃釉を施釉している。18世紀から19世紀の徳化窯系と考えられる。

〈中国産陶器〉（25）

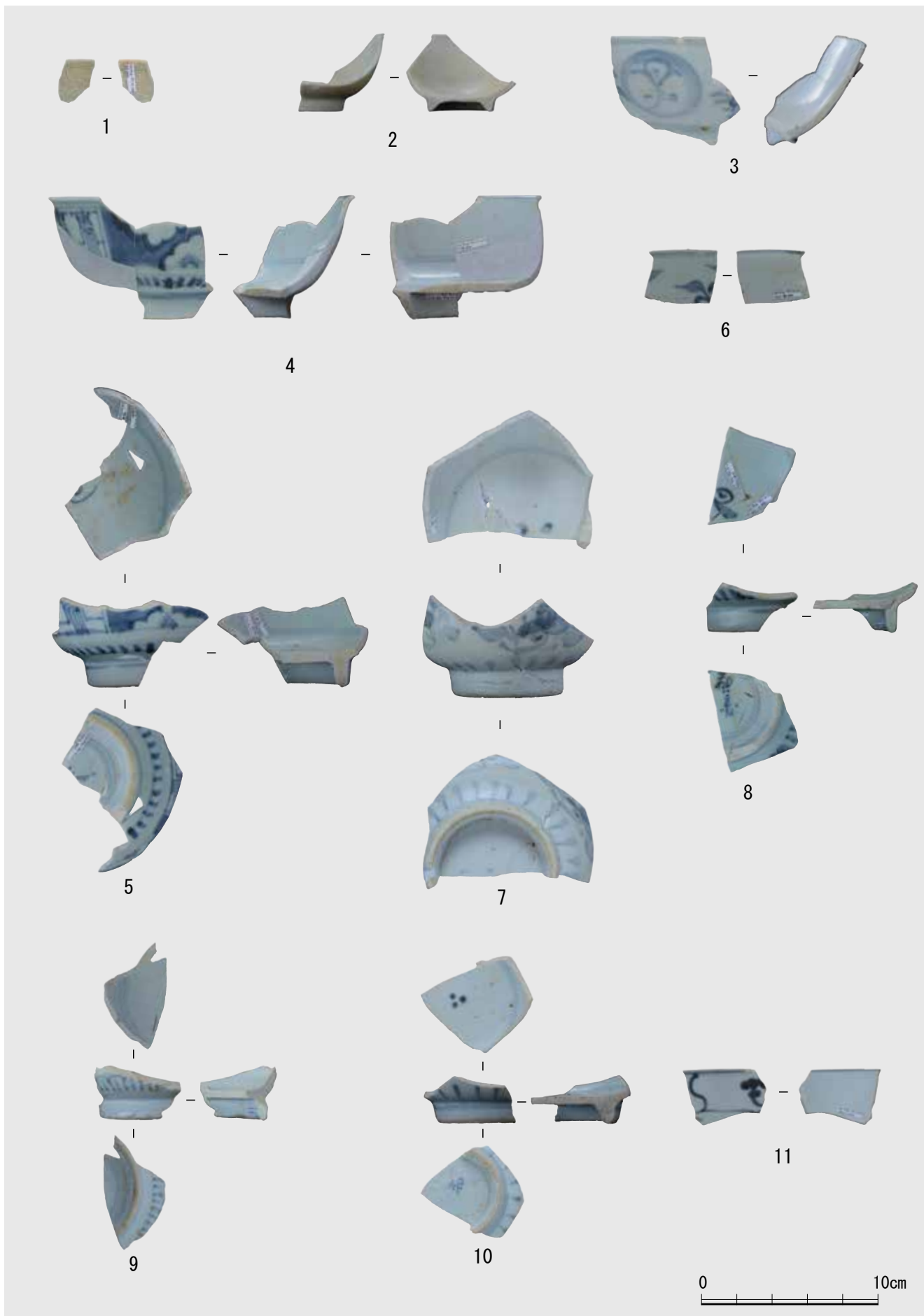
中国産の陶器が無釉陶器及び褐釉陶器の壺で19点出土している。25は無釉陶器壺である。口縁は断面が三角状に外に折り返し上面は扁平である。短頸で肩から頸部近くまでを叩き締め、頸部を撫で調整している。

第26表 外国産陶磁器 観察一覧

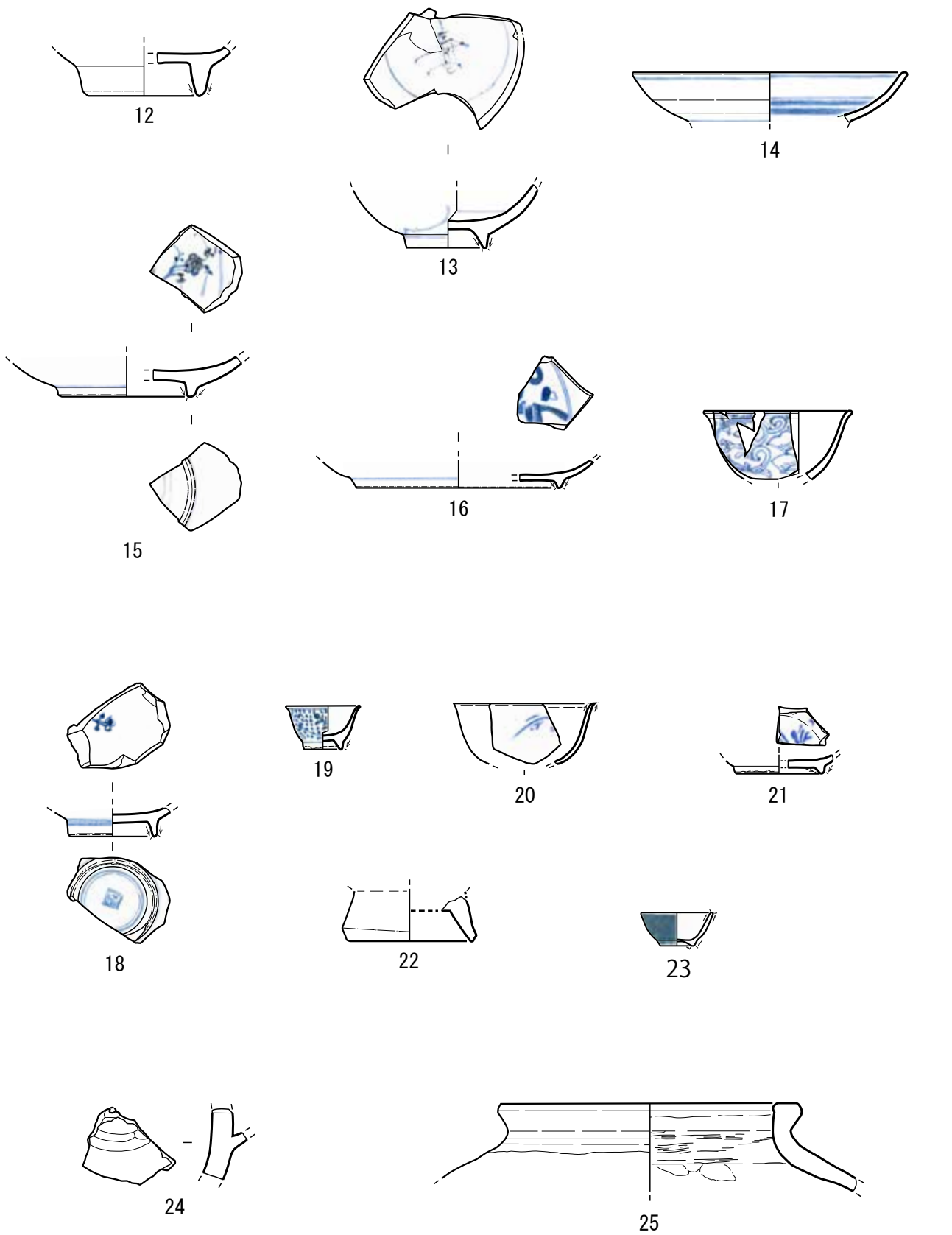
挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	法量 (cm)			軸調	素地 色・質・ 混入物	観察事項	生産年代	生産地	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
				口径	器高	底径							
第72図 図版24	1	青磁	碗	口縁部	-	(2.4)	-	オリーブ色	-	直口無文。全体的に摩滅が著しく詳細は不明。	-	-	C地区 21-C5 SD5
	2	白磁	小碗	口～底	8.5	4.3	3.5	白	白	腰部に丸味を持ち口縁まで直線的に開き立つ口縁は端反り口唇は釉剥ぎ、高台は断面形が三角状で型成形である。	18c～19c	徳化窯	B地区 19-G10 SD15 1層
	3	染付	碗	口～底	14	6.4	6	呉須の発色が薄い	白っぽい	胴部にやや丸味を持たせ口縁は直線状に開き立ち上がる。端反りである。高台は畳付けの外内を削り出し丸く整え釉剥ぎしている。外体面に団花と草花文を施し口縁上位と高台の際に二条圏線を配している。内面は口縁と内底面に二条圏線巡らす。	18c～	福建・広東	B地区 27-A10 II1b層
	4	染付	碗	口～底	13.8	7	7.6	呉須の発色がやや薄い	白っぽい	胴部は直線状に開き立ち上がり口縁上位で外に折るよう外反させている。高台は先端を内外から削り丸く整え畳付けの軸を剥ぎ取る。外体面に二条界線で区画した半梅花文と寿字文を施し下位に簡略化した蓮弁文を同じく二条の圏線で上下に挟み巡らしている。口縁上位に二条圏線、高台の際に幅広圏線、高台内に二条圏線を配している。内面は口縁に幅広圏線と胴下部に二条圏線巡らす。	18c～	福建・広東	B地区 19-J10 II層
	5	染付	碗	底部	-	(5.1)	7.2	呉須の発色は普通	灰白	高台は先端を内外から削り出し畳付けは尖る。畳付けの軸は剥ぎ取っている。外体面に二条界線で区画した半梅花文と寿字文を施し下位に簡略化した蓮弁文を同じく二条の圏線で上下に挟み巡らしている。高台際と高台内に二条圏線と和風の銘款。内面は胴下部に二条圏線、内底面に花卉。	18c	福建・広東	B地区 19-J10 II3層
	6	染付	碗	口縁部	13.8	(3.1)	-	呉須の発色はやや暗い	灰白	口縁は直線状に開き立ち上がり上位で外に折るよう外反させている。口唇は尖る。外体面に草花文、内面は口縁に幅広圏線を巡らす。	18c	福建・広東	B地区 20-G3 SD23 1層
	7	染付	碗	底部	-	(6.0)	7	呉須の発色が薄い	灰白	腰部に丸味を持たせ開きながら直線状に立ち上がる。高台は畳付けの外内を削り出し釉剥ぎする。外体面に草花文と腰部に簡略化した蓮弁文を施す。一条圏線は蓮弁文を上下から挟み配する。内底面に二条の圏線と草花文を施している。	18c	福建・広東	B地区 19-J7 SD6-2 5層
	8	染付	碗	底部	-	(2.5)	7	呉須の発色は普通	灰白	高台は方形状、畳付けは丸く、畳付けの軸は掻き取っている。腰部に簡略化した蓮弁文を配し、高台際と高台内に二条の圏線を巡らし高台内には和風の文字がみられる。内底面に花卉を描く。	18c	福建・広東	B地区 19-J7 SD6-2 1～3層
	9	染付	碗	底部	-	(2.8)	7	呉須の発色が薄い	灰白	高台は先端を内外から削り出し畳付けは三角状。畳付けの軸は掻き取っている。腰部外面に簡略化した蓮弁文を描く。高台際と高台内に一条圏線を巡らしている。内面は見込みに二条圏線が認められる。	18c	福建・広東	B地区 20-H2 SD25 2層
	10	染付	碗	底部	-	(2.6)	5.5	呉須の発色がやや薄い	白っぽい	高台は先端を内外から削り出し畳付けは三角状。畳付けの軸は掻き取っている。腰部外面に簡略化した蓮弁文を描く。高台際と高台内に一条圏線を巡らし見込みに三つ星と二条圏線が施される。	18c～	福建・広東	B地区 20-F3 SD25 3層
	11	染付	碗	口縁部	13.6	(3.3)	-	呉須の発色は普通	灰白	口縁は直線状に開き立ち上がり上位で外に折るよう外反させている。口唇は丸い。外面は口縁に一条圏線と仙芝祝寿文を施す。内面は口縁に幅広圏線を巡らしている。	18c～19c	福建・広東	B地区 20-12 3・4層
第73図 図版25	12	染付	碗	底部	-	(2.7)	6	呉須は残っていない	灰白	高台は先端を内外から削り出し畳付けは三角状。畳付けの軸は掻き取っている。腰部外面に蓮弁文を描く。高台際と高台内に一条圏線を巡らしている。内面は見込みに二条圏線が認められる。色絵か	18c	福建・広東	B地区 19-17、19-18 SX15
	13	染付	碗	底部	-	(3.1)	4.3	呉須の発色が薄い	白っぽい	高台は内外から削り出し畳付けは三角状。畳付けの軸は掻き取っている。外面に草花文、高台際と高台内に一条圏線を巡らしている。内面は見込みに一条圏線と寿の文字がみられる。型成型か	18c～	徳化窯	B地区 19-17 SX15
	14	染付	皿	口縁部	14.8	(2.6)	-	呉須の発色は普通	灰白	胴部は弧を描くように外に広がり口縁は直口である。口唇は丸く口縁の内面に一条圏線を巡らし見込みに一条圏線と空間をだみで埋めた文様を施している。「志在書中」の可能性ある。	18c	福建・広東	B地区 19-J10 II3層
	15	染付	皿	底部	-	(2.2)	7	呉須の発色は普通	灰白	高台は低く先端を外側から削り出し畳付けの軸は剥ぎ取っている。高台際と高台内に一条圏線、高台内に二条圏線を配している。内面に草花文を施す。仙芝祝寿文か	18c～19c	中国産	B地区 20-F3 SD25 3層
	16	染付	皿	底部	-	(1.3)	11	呉須の発色は普通	灰白	高台の断面形は三角状。高台際と高台内に一条圏線を施し内底面に二条圏線を巡らし見込みに二重線をだみで充填する文様を描く。型成型か	18c～19c	中国産	B地区 27-A10 II1b層
	17	染付	小碗	口縁部	8	(3.8)	-	呉須の発色は普通	灰白	腰部に丸味を持ち外に開き直線状に上がる。口縁は上位で外反させている。口唇は舌状。口縁外面に二条圏線を配し外体面に二重線で花唐草文を描いている。	18c～19c	景德鎮	B地区 10-F3 SD25 2層
	18	染付	小碗	底部	-	(1.5)	4.8	呉須の発色は普通	灰白	高台はやや方形状を成し畳付けは外側から削り出し尖る。軸を掻き取っている。高台際と高台内に二条の圏線を巡らし中に方形の銘款を配する。見込みに花卉。	18c～19c	景德鎮	B地区 27-A9 SK102 1層
	19	染付	小杯	口～底	4	2.3	2	呉須の発色は普通	白っぽい	腰部に僅かな丸味を持たせ直線状に開き立ち上がり。口縁は上位で外反する。高台の断面形は三角状を成し、外体面に唐草文を描き空間を豹皮状文が充填する。口縁上位と高台の際に一条圏線を配している。型成形。	18c	中国産	B地区 20-H2 II3層
	20	色絵	皿	底部	-	(3.3)	5.1	水色の顔料	白	高台は断面形が三角状で型成形である。見込みに水色の顔料で草花文を描いている。	18c～19c	徳化窯	B地区 19-18、27-A6 1層
	21	色絵	小碗	口縁部	7.6	(1.1)	-	水色の顔料	白	腰部に丸味を持ち口縁まで直線的に開き立つ口縁は端反り口唇は釉剥ぎ、型成形である。水色の顔料で草花文を描いている。	18c～19c	徳化窯	B地区 27-A10 1層
	22	色絵	壺・瓶	底部	-	(2.8)	6.2	-	灰白	高台は八の字に開く形態を成す。高台のみの資料で器種は不明である。高台外面に顔料の剥落痕があり色絵の可能性ある。表面に被熱痕がみられる。	-	-	B地区 27-A10 II1a層
	23	瑠璃釉	小杯	口～底	3.9	1.8	1.9	薄い	白	腰部に僅かに丸味を持たせ口縁まで真っ直ぐ立ち上がる。口縁は釉剥ぎ、高台断面形は三角畳付けは丸い。型成形である。外面と高台内に瑠璃釉を施している。	18c～19c	徳化窯	B地区 20-F3 SD25 3層
	24	瑠璃釉	不明	胴部	-	(3.9)	-	濃ゆい	白	碗の基部に半球状の部分が貼付している。残りが少ないため詳細は不明	-	-	B地区 27-A8 1層
	25	中国産 陶器	壺	口縁部	16.8	(4.8)	-	-	赤褐色 白色粒	口縁は断面形が三角状に肥厚し上面は扁平である。肩から頸部近くまで叩き締めている。頸部は撫で調整されている。無釉。	-	-	B地区 19-J8 1層



第72図 外国産陶磁器1

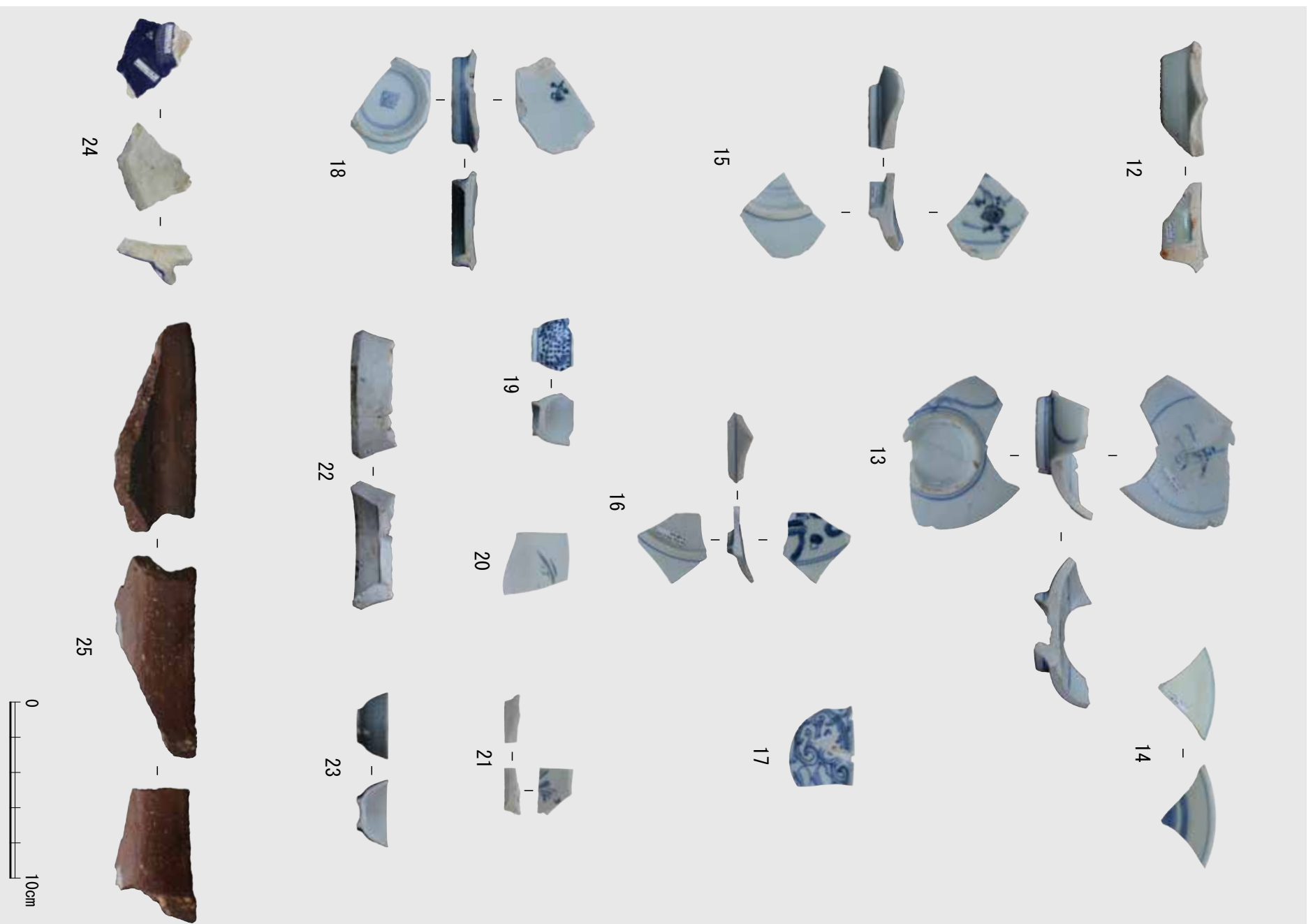


图版24 外国産陶磁器1



0 10cm

第73図 外国産陶磁器2



图版25 外国産陶磁器2

石器（第74・75図、図版26・27、第27表）

グスク時代以前の石器と思われるものである。石斧、磨石、敲石、石弾の37点出土し、うち14点を図示した。

〈石斧〉（1～5）

1～3は中型の石斧である。1は平面観が短冊に近い撥形の局部磨製石斧で、刃部平面形態は円刃、側面形態は両刃である。刃部に使用剥離痕を残している。2は基部から刃部まで残す資料である。表面は刃部を中心に基部を研磨加工している。元は大型の磨製石斧で破損後再加工した可能性もある。刃部平面形態は円刃、刃部側面観は両刃の蛤刃状である。刃先に斜めの線条使用痕が認められる。3は基部から刃部まで残す局部磨製石斧である。表裏面共に剥離痕を残し研磨加工している。刃部平面形態は直刃、刃部側面観は蛤刃状である。刃の両面に斜めの線条使用痕が認められる。4、5は小型の石斧である。4は平面観が短冊形の局部磨製石斧で、刃部の側面形態は片刃に近い両刃となっており刃部に剥離の使用痕が認められる。5は撥形の石斧の頭部資料である。器面に僅かな打割痕を残し研磨加工している。頭部上端は叩打痕を残す。

〈磨敲石〉（6～12）

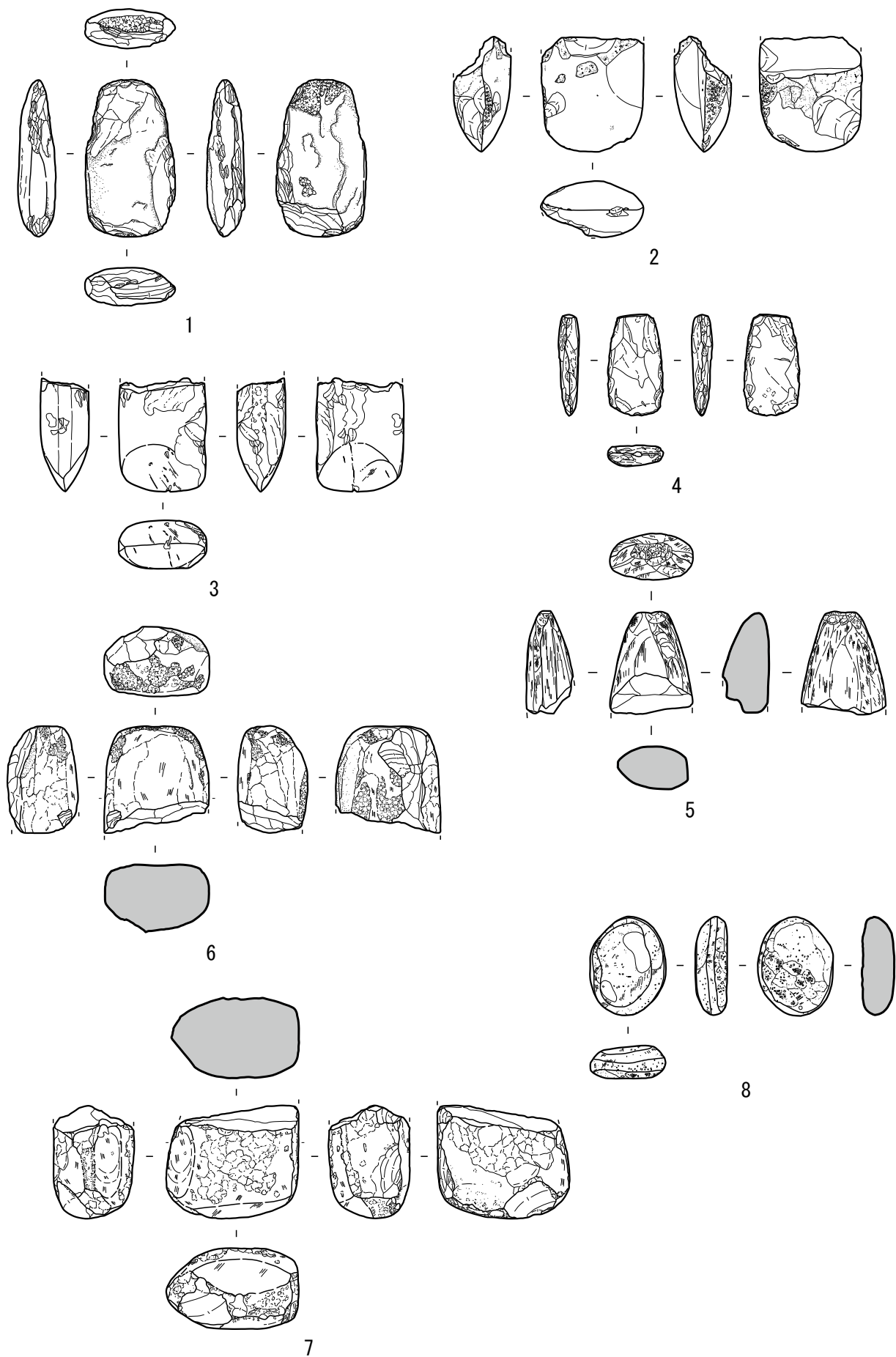
6、7は上面観が方形、基部中央に円形の窪みを持つものである。6は表裏共に上面観は隅丸方形で磨面中央が敲打により円形に窪む。側面観は楕円に近い方形である。7は表裏共に上面観は方形で基部周辺は磨面で窪みに敲打痕を残す。側面観は下方の先端が尖った楕円形となっている。短軸の上端面は方形の磨り敲打面を持つ。先端を尖らせた側を使用する、クガニ石の様な使用方法が考えられる。8～10は上面観が楕円形で自然石をあまり加工せずに使用するものである。8はサンゴ礫を利用し、表裏共に上面観は楕円形である。表面は扁平で裏面は中央に円形窪みを持ち、一方の縁に指のサイズの窪みを二箇所有する。断面は楕円形である。9は表面中央に敲打痕が認められる。10は表に磨面を認めるが主に使用した面は破損した裏面であった可能性がある。11の表面観は楕円形で中央に大きく楕円形の敲打面を持つ。石皿の様に使用したものと考えられる。使用面は主に表面のみであるが、側面の一方に磨敲面が一部残る事から、元は半月状のクガニ石だった可能性がある。12は表の磨面中央に円形の敲打面を持つ。側面の片方は磨面で弧状を成し、中央近くに円形の敲打痕が認められる。判然としないが使用面を変えて使用した可能性がある。

〈石弾〉（13・14）

13、14は敲打と磨きにより球状に加工するものである。13は砂岩製、14はサンゴ礫製である。

第27表 石器 観察一覧

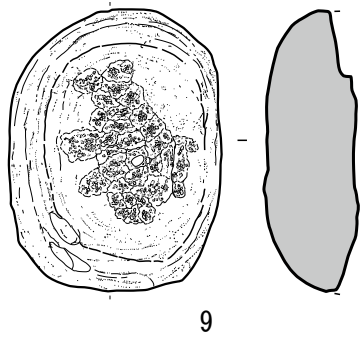
挿図番号 図版番号	器種	石質	残存 完/破	法量 (cm)			重量 (g)	観察事項	出土地 (地区、グリッド、層序or遺構)	
				縦長	横長	厚さ				
第74図 図版26	1	石斧	緑色片岩	完形	11.3	6.5	2.7	310	表面の長軸から左側、基部上部から頭部にかけて窪んだ自然面を残し剥離調整と敲打仕上げでやや抉りを成す。研磨は刃部を中心に基部、頭部の一部、左側面までを研磨加工するが長軸から右側の基部や刃部に近い側面は自然面を剥離調整し敲打調整のみでほとんど研磨されていない。表面最大幅は基部中央に持ち裏面は扁平である。裏面は打割面と敲打痕を多く残して基部は研磨されている。側面は刃部上位に最大厚を持ち、刃部に使用剥離痕を残している。	B地区 20-G3 I層
	2	石斧	緑色片岩	刃部	(8.3)	7.4	4.1	318.5	基部から刃部まで残る。研磨加工している。左側面から研磨面を一部剥離し、基部中頃には円状に敲打痕がみられる。裏面は長軸の右側面から基部の研磨面に剥離痕が認められる。元は大型の磨製石斧で破損後再加した可能性もある。刃先に斜めの線条使用痕が認められる。刃部側面観はハマグリ刀状である。	B地区 20-G2 SD25 3～5層
	3	石斧	緑色片岩	刃部	(8.2)	6.2	3.5	308	表裏共に剥離痕を残し研磨加工している。長軸右側面から基部研磨面に剥離痕や叩打痕が認められる。柄の装着の加工の可能性がある。刃の両面に斜めの線条使用痕が認められる。局部磨製石斧といえる。	B地区 20-G2 地山上面
	4	石斧	緑色片岩	完形	7.3	3.9	1.5	68	基部と頭部の表面は自然面と打割に敲打痕を多く残り一部を研磨加工している。刃部は複数回研ぎ直したのか偏刃を成す。裏面は剥離痕と叩打痕を残し研磨仕上げしている。頭部上端は自然面を残している。側面観は扁平を成し最大厚は頭部近くにある。刃部に剥離の使用痕が認められる。	B地区 19-J10 II層
	5	石斧	斑レイ岩	頭部	(5.5)	1.8	2.5	87	表面は打割痕を僅かに残り研磨加工している。裏面は全面研磨仕上げしている頭部上端には叩打痕を残している。	B地区 26-D4 III2層
	6	磨製 窪み石	角閃岩	破損	(7.7)	7.5	5	424	表裏共に上面観は隅丸方形である。基部中央に円形の窪みを持ち周辺は磨面で窪みは敲打痕を残す。側面観は楕円に近い方形。縦軸を中心に上面は敲打痕でうめ扁平である。片側に磨面の鑿を作り一方は敲打痕に仕上げている。短軸の上端面は台形状の敲打面を持つ。	B地区 27-A10 II1a層
	7	磨製 窪み石	砂岩	破損	(9.5)	8	5.9	663.5	表裏共に上面観は方形である。基部中央付近に円形の窪みを持ち周辺は磨面で窪みは敲打痕を残す。側面観は下方の先端が尖った楕円形。側面の片方は自然の折れ面である。もう一方は縦軸を中心に片側に磨面の鑿を作り一方は敲打面に仕上げている。短軸の上端面は方形の磨り敲打面を持つ。先端を尖らせた側面を使用する、くがに石の様な使用方法が考えられる。	B地区 19-J8 SK98
	8	磨石	サンゴ礫	完形	7.1	5.4	2.3	67	表裏共に上面観は楕円形である。裏面は中央に円形窪みを持ち一方の縁に指のサイズの窪みを二箇所有する。側面観は楕円形、平面の窪みのない表めんは扁平で磨き上げている。	B地区 19-J8 I層
第75図 図版27	9	窪み石	砂岩	完形	14.9	11.2	5	1181	自然礫を利用している。表中央に敲打痕が認められる。裏面は煤状の黒色付着物が認められる。	B地区 19-J7 SD6
	10	磨石	砂岩	半裁不明	10.8	14	2.5	525	自然礫を利用している。表に磨面を認める。砥石か。	B地区 20-13 SD23 1層
	11	石皿 磨石	砂岩	完形	15.3	12	7	2100	表面は楕円形、中央に大きく楕円形の敲打面を持つ。石皿の様に使ったのか、使用面は主に表面のみであるが、側面の一方に磨製面が一部残る事から。元は半月状のクガニ石だった可能性がある。	B地区 19-J7 SD6
	12	石皿 窪み石	細粒砂岩	完形	11.6	9.6	3	674	表裏共に上面観は三角形、中央に大きく円形の敲打面を持つ。表の周辺は磨面である。側面の片方は磨面で弧状を成し中央に近くに円形の敲打痕が認められる。側面形は方形。	B地区 20-G2 SD25 6層
	13	石弾	砂岩	完形	4.6	4.6	3.9	99	敲打と磨きにより球状に加工している。	B地区 19-J7 SD6
	14	石弾	サンゴ礫	完形	4	3.2	3.2	39	敲打と磨きにより球状に加工している。	B地区 20-12 SD25



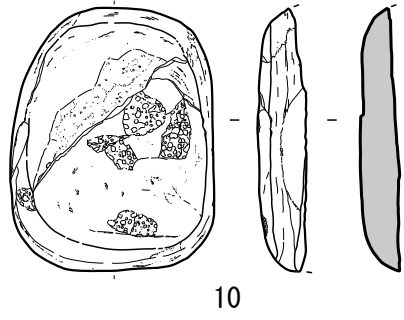
第74图 石器1



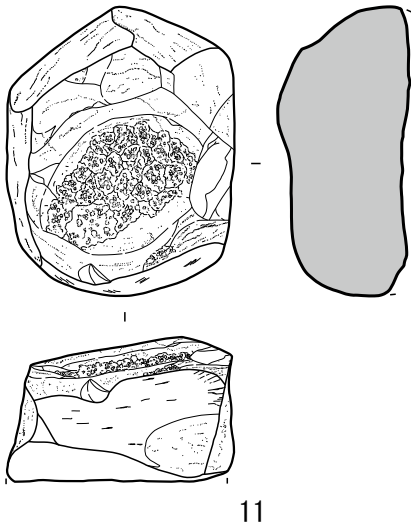
图版26 石器1



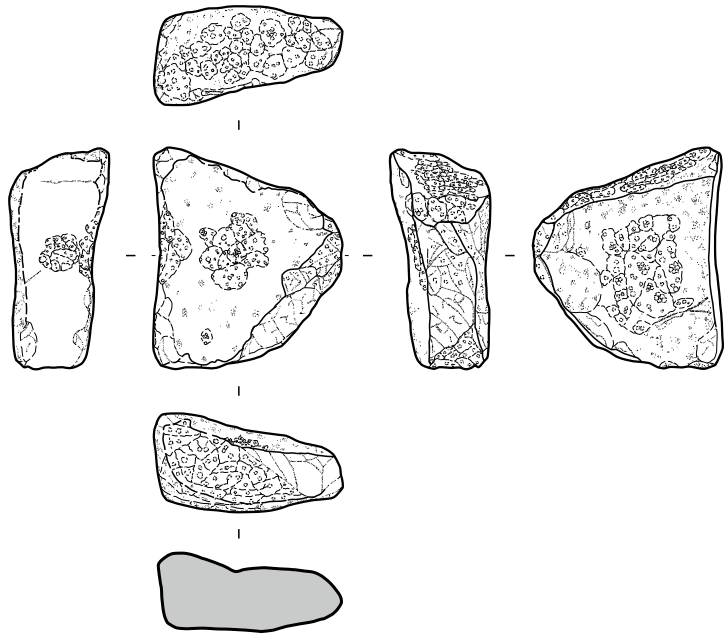
9



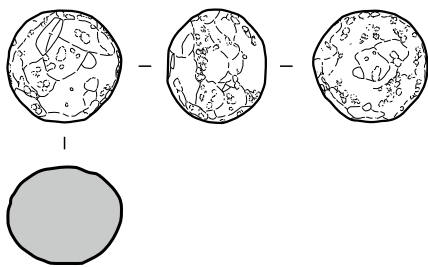
10



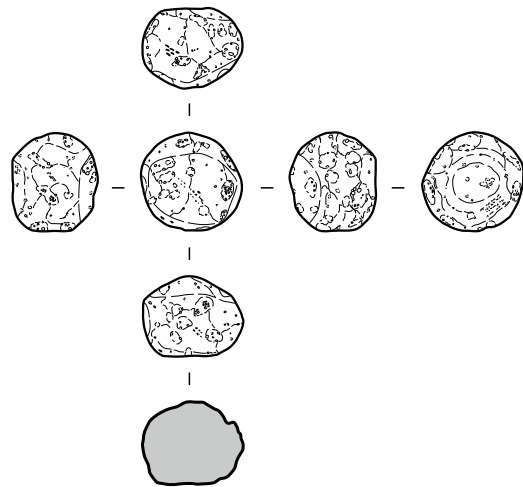
11



12



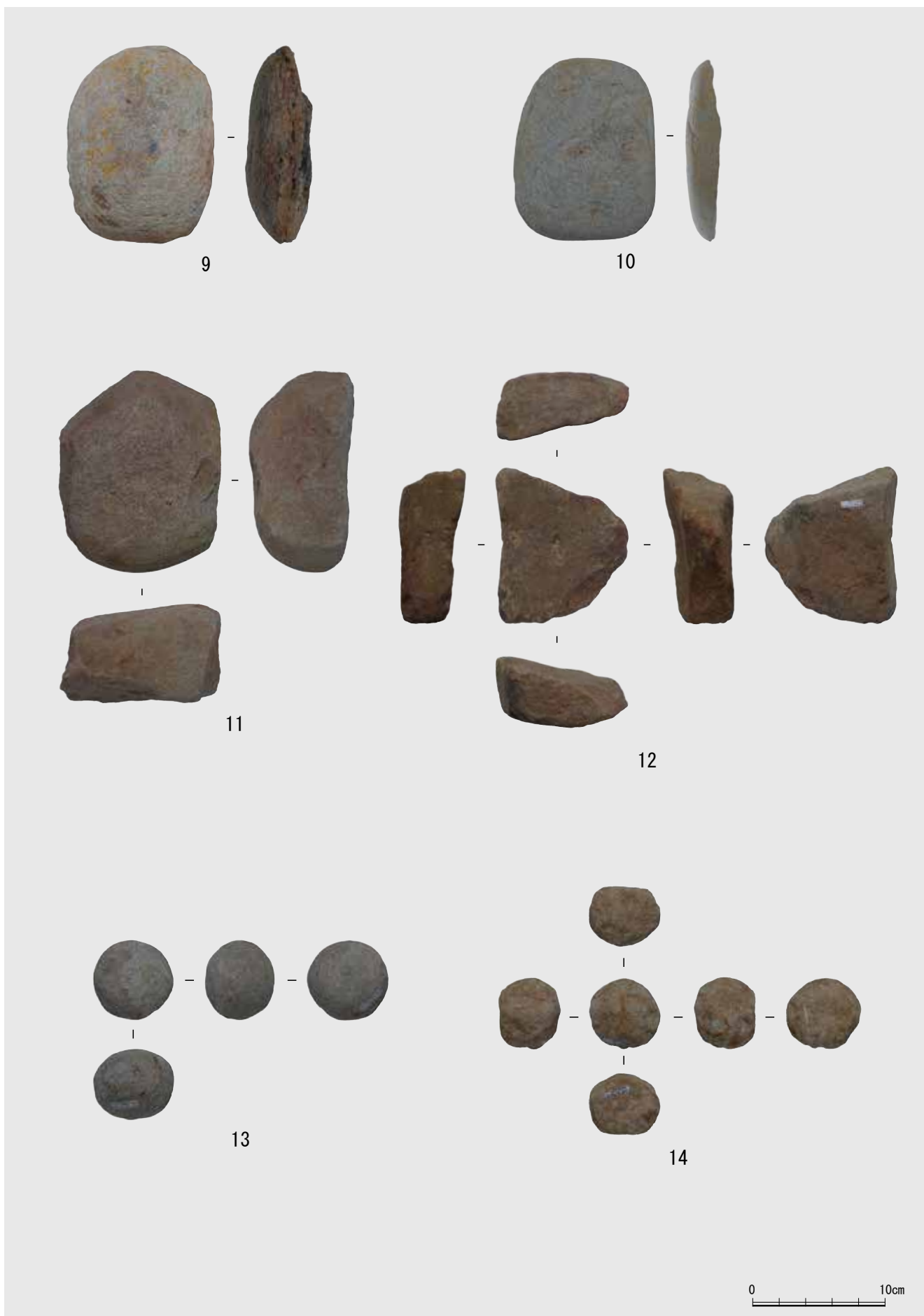
13



14

第75图 石器2





图版27 石器2

第5節 自然遺物

平安山ヌ上集落跡・下勢頭集落跡出土の脊椎動物遺体

菅原広史（浦添市教育委員会）

1. 資料について

本節では、調査で出土した動物骨について種同定等に基づく分析の結果を記載と出土状況の特徴をまとめ、本遺跡における動物利用の様相に言及する。

動物骨は、平安山ヌ上集落にあたるA地区・B地区・C地区、下勢頭集落跡にあたるD地区の各地区から出土が確認され、全部で821点を数えた。これらはいずれも現地での発掘作業中に目視で出土を確認し、取り上げた資料である。各地区の遺物包含層および遺構内から出土しており、グリッドまたは遺構ごとに層位別一括で取り上げ、取り上げ単位ごとに出土番号を付している。最も多くの動物骨が出土しているのはB地区で、中でもSD38・SK56・SK72・B地区1b層からの出土が比較的多く、次いでD地区1層からも一定数出土している。各層序の年代観を踏まえると、これらの資料は主に近代を中心とした時期の資料であることが窺われ、両集落における生活の一端を反映している資料と考えられる。

2. 分析方法

分析は種同定、計測、観察を行い、結果を一覧にまとめた（第29表）。種同定は現生標本との形態比較による方法を基本とし、現生標本は筆者が所蔵するものを用いたほか、各種図版等を適宜参照した。同定対象としたのは、哺乳類の長管骨では骨幹が一周残存するものと基本とし、椎骨や扁平骨などについても外周が残存するあるいは形態の過半が残存するものを対象とし、微細破片は対象外とした。次に同定された資料の一部については骨長計測の対象とし、デジタルノギスを用いて計測を行った。対象とした資料は、計測位置についてはDrisch1976に従った。同定作業と並行して肉眼による骨の表面の観察を行い、骨に付された傷痕等の有無を主眼として進めた。種同定結果に基づき、同定標本数（NISP）の集計（第30表）および最小個体数（MNI）を算出した（第31表）。MNIの算出に際しては、調査区・グリッド・層序・遺構などの別による区分はせず、全体を一括している。

3. 分析の結果

（1）種同定について

同定の結果、821点出土した脊椎動物遺体のうち303点が対象となり、魚類2群・鳥類1群・哺乳類7群の分類群が得られ、その大半が哺乳類で占められる結果となった。

・魚類、鳥類

魚類は、ハタ科・ベラ科および種不明が各1点ずつ同定され、鳥類はニワトリの四肢骨が3点出土したほか詳細な分類不明の四肢骨6点が同定された。対象外とした資料中にも含まれていることは見てとれるが、いずれにせよ、動物骨全体の中で両群は微少な出土状況である。

・哺乳類

哺乳類はネコ・イヌ・ウマ・イノシシ・ブタ・ウシ・ヤギが同定され、最も多くを数えたのはブタ、次いでヤギとなり、それ以外のネコ・イヌ・ウマは各1点、イノシシは2点、ウシは5点といずれも少量であった。

本資料全体で最も多く同定された分類群はブタである。脳頭蓋の緻密質が厚く頭蓋同士の関節面が広い点、下顎骨の歯列が口腔側に捻れる点、四肢骨の形状が骨長に対して骨幹幅が太くなる点、骨質が脆弱である点などの形質的特徴はリュウキュウイノシシの標本よりブタの標本に近く、形態的に明瞭にブタであると判断してよいものとした資料が多くを占める。沖縄諸島の中近世の遺跡から出土する資料では、形態のみではイノシシかブタかを明確に判別できないことも多い中で、本資料では、全体にブタと判断できる

資料が多い点が特徴であると言え、家畜化の進行が進んでいることが示唆される。また、遊離歯や欠損により形態が明瞭でない資料については、イノシシ/ブタと判断を保留して記載しているが、概ねブタになるであろうと感ぜられる。一方、2点のみながらリュウキュウイノシシの現生標本に近似する資料については、イノシシとして区別して記載した。

ヤギは下顎骨や遊離歯・四肢骨などが、それほど数が多くはないものの、B地区SK54やD地区シーリ周辺でまとまって出土している。下顎に未萌出の歯がみられる点、骨端が未癒合の四肢骨などが含まれる点などから、未成年の個体が一定数含まれることが窺われる。

哺乳類は総じて完存する資料は遊離歯などの一部のみで、大半が欠損した状態である。破片で対象外とした資料も、多くは哺乳類のものであるとみられる。

(2) 遺構内の出土状況について

SK72内で検出された動物骨は、完存する部位はほとんど無い状態である。基本的には、頭蓋・椎骨・四肢骨など全身に及ぶ主要な部位が同定されてはいるものの、一部に同定されなかった部位もある。残存する部位は前述したブタとしての形態的特徴を有することから、本遺構内から出土しているのはブタのみと考えられ、また部位重複も見られない。遺構内での検出状況(図版28)も踏まえると、1個体分が土坑内に埋められたものと考えられ、SK72はブタ埋納遺構であるとの判断が追認される。四肢骨端や椎骨などの関節もほとんどが未癒合である点、上下の顎骨に乳臼歯が残存し、第二後臼歯が未萌出である点などを勘案すると0.5～1歳前後の個体であると考えられる。なお、ほとんどが破片であるため一覧表への記載はしていないが、肋骨および椎骨も多数残存しているほか、部位未詳の破片も採取されている。なお、SK72から出土した上腕骨について年代測定等の分析を行っており、詳細は第四章第1節を参照いただきたい。

SD38では、ブタが少なくとも2個体が検出されている。SK72に比べると同定される部位が少ないことや、溝状形状も溝状であることなどから、SK72のような埋納の可能性は考えにくいものの、他の遺構に比べて出土する骨の量が多いことから、人為的に埋められたことが想定される。

SK56も同様に、周囲の遺構に比べ出土数が多い点に人為的な要因が考えられるが、魚やニワトリが含まれる点でSD38との差違が認められる。SK56は方形の石組遺構で明瞭な用途をもった構築物であったことから、その覆土中から出土した動物骨は、遺構廃絶後に投棄されたものであろうと推測される。

(3) 地区別の出土状況

・ A地区

わずかながら6点が同定されており、いずれも破片資料であるものの、ブタの下顎骨・尺骨は家畜化の明瞭な形態を示しているものといえる。I層ないしIc層からの出土で、近代以降の資料である。

・ B地区

本地区から出土した動物骨はII層および遺構から出土しており、いずれも近代期に比定されると考えられる。253点が同定され、調査全体の約83%を占める。哺乳類以外の同定可能な魚類や鳥類が含まれていること、また、前述の埋納遺構や投棄が示唆される遺構が検出されていることなどから、動物遺体分析の観点からみても、多くの情報を有する調査区である。多数の遺構が検出されている地区であり、遺跡の中でもヒトの生活の中心的空间であり、動物利用に関するヒトの活動の点でも中心的である状況が窺われる。

・ C地区

部位同定可能な資料のほとんどは形態・骨質などからブタと判断した。ただし、その中で1点のみイノシシの現生標本に近い形状を持つ脛骨が残存しており、これについてはイノシシとした。その他、対象外とした破片資料中に鳥類が含まれている。I・II・遺構内からの出土で、近代期以降に比定される。

・ D地区

32点が同定された地区で、ブタ・ヤギが同定された他、わずかにイヌ・ウシが検出されている。これら

のうち29点はシーリ遺構内及びその周辺とシーリ遺構の検出された16-A4および隣接する16-A5グリッドから大半が出土している。A～C地区とは離れた地点で、異なる集落の範囲となる調査区であるが、同定に際して観察される動物骨の形態的な特徴等に差は感じられない。I層からの出土が最も多く、米軍基地造成層であることから近代から戦中までの様相を反映しているものと考えられる。

(4) 人為的切痕等について

同定された哺乳類の一部の椎骨および四肢骨に刃物による切痕と判断される傷（カットマーク＝CM）や打割痕と考えられる破面（スパイラルフラクチャー＝SF）が観察されている。また、切断されたものと判断される平滑な破面も確認された。中には複数のCMをもつものや、CMとSFが付されている資料もみられた。一方で、SK72から出土したブタにはこれらの切痕が認められず、刃物等による解体がされずに埋められたと考えられることは、埋納されたと解することを補完する所見と言えよう。

4. 考察

以上の分析、観察によって得られた所見に基づき、近代期の平安山又上集落跡および下勢頭集落跡における動物利用の様相の一端についてまとめ、考察としたい。

(1) 近代の脊椎動物遺体

本調査で出土した脊椎動物遺体は、出土層位・状況からいずれも近代に属する資料に位置づけられる。近年、沖縄では米軍基地に内に所在する近代集落の発掘調査が相次いでおり、その中で報告される脊椎動物遺体の出土状況は、近代期の集落における動物利用の様相を反映したものであると言える。特に北谷町は、桑江伊平土地区画整理事業地内で発掘調査がなされた伊礼原遺跡群や平安山原遺跡群などにより、貝塚時代から近代期までの各時期の出土資料が得られており通史的な変遷を窺うことのできる貴重な地域である。ただし、複合遺跡であるがゆえに、近代に焦点を当てようとした場合、近世資料との混在を分けることが困難であり、近代単独で比定できる脊椎動物遺体は平安山原B遺跡などの一部であることから（樋泉2015）、明確に比定することができる資料が豊富に得られた点で、本調査成果は重要な意義を有する。

分析の結果得られた分類群についてNISPによる組成をみると、その大半がブタによって占められ、ウシやヤギなどの家畜、魚類や鳥類などがそれぞれ少数ずつ占めることが特徴と捉えられる。MNIは少数であるため留意を要するが、ブタを最優占群として、ヤギがそれに次ぐという傾向は同様である。また、A～C地区およびD地区の間でも出土傾向に大きな差は認められない。そのため、平安山又上集落および下勢頭集落においては家畜、特にブタを主とする飼養を中心とする動物利用がなされていた様相が窺われる。

比較として同じ近代資料を主体とする2008～2009・2011年度に調査された平安山原B遺跡のII層の出土組成をみると、イノシシ/ブタが80%超を占め、その他の家畜が少数で、魚骨がごく少ないというパターンが報告されており（樋泉2015）、本資料が類似傾向を示していることが窺われる。海浜部に立地しながらも魚類利用が少ない点が共通することからは、近代における動物利用相を示唆するものであろう。

また、同報告の中で樋泉は伊礼原D遺跡・伊礼原E遺跡の近世以降の資料の組成パターンとも基本は類似するとしている一方、伊礼原E遺跡近世～近代資料ではイノシシ類の部位組成が顎骨に偏在し、平安山原B遺跡近代資料では四肢骨が卓越するという差異を指摘している。本遺跡ではイノシシ/ブタ類の顎骨（遊離歯を含む）がNISP=72、MNI=8に対し、四肢骨がNISP=100、MNI=7と算出されることから、いずれかに偏在するとは言い難いと考えられ、両者に相違する状況であると言える。遺跡としての特徴の違いか、あるいは集落内における空間的な点による相違であるのかなど、さらに検討すべき事項が残るが、近代の資料として他の地域や年代との比較に有用な資料として位置づけられよう。

(2) 埋納遺構について

SK72で検出されたブタは、1個体が埋納されたものであると考えられる。近代集落におけるブタは食料

資源として飼育されるもので、本遺跡においては動物遺体の出土組成の大半をブタが占める点や、フール遺構が検出されていることから明瞭であろう。しかしながら、未解体で埋められている状態からは、食糧残滓とは考え難く、それ以外の何らかの事情によるものと考えられる。近隣の千原遺跡でも、同様にブタ1個体が解剖学的原位置を保った状態で検出されており埋納であると報告されている（北谷町教育委員会2018）。ただし、共伴する遺物などが無いこともあり、これらがどのような意図のもとになされたものであるかはまだ明確にはされていない。

沖縄の民俗事例などではブタは「魔除け」の意味を有することがあり、これに関連する儀礼的な意義を有する埋納と考えることは可能性の一つである。例えば、沖縄本島の近世墓にはブタの頭蓋骨が埋納されている遺構が稀に検出されることがあり（菅原2013）、近隣では山川原古墓群などに調査事例がみられる（北谷町教育委員会2001）。これは墓大工による墓儀礼として埋納されたものと民俗学から指摘されるが、（玉木1996）ブタの持つ魔除けの意義に由来するものであろう。また、近代集落では普天間古集落（宜野湾市）でブタの頭蓋骨が一ヵ所で集中的に出土した事例に対し、「シマクサラシ」の痕跡ではないかとの言及がされている（菅原2019）。このようにブタ骨の出土に儀礼的な意義が解釈された事例からすると、SK72でブタが検出された状況についても儀礼的な意味を有する可能性が考えられるのである。

5. まとめ

本分析で得られた近代に比定される脊椎動物遺体の組成からは、ブタを主体とする家畜飼養を中心とした平安山ヌ上集落遺跡および下勢頭集落における動物利用の一端に言及することができた。しかしながら、本調査は集落の一部の調査である点については留意しておく必要はあろう。

近年、沖縄では近代集落の発掘調査・報告が相次いでおり、近代沖縄の動物利用を考察するための資料が集成されつつある。本調査の資料が、その一つとして資することになれば幸いである。

<主な引用・参考文献>

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2017『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書1—普天間古集落遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第74集
- 菅原広史2019「コラム4 近世～近代の人々の暮らしと動物の関わり」『掘り出された戦前の沖縄 企画展示図録』沖縄県立埋蔵文化財センター編
- 菅原広史2018「千原遺跡出土の脊椎動物遺体」『千原遺跡—沖縄西海岸道路北谷拡幅建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査事業（平成25年度）—』北谷町教育委員会
- 菅原広史2013「近世墓から出土する脊椎動物遺体」『琉球近世墓の考古学—発表報告編—』沖縄考古学会編
- 玉木順彦1996「民俗学からみた伊祖の入れ御拝領墓」『伊祖の入れ御拝領墓—マンション建設に伴う近世墓の発掘調査—』浦添市教育委員会 浦添市文化財調査報告書第24集
- 北谷町教育委員会2018『千原遺跡—沖縄西海岸道路北谷拡幅建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査事業（平成25年度）—』北谷町文化財調査報告書第42集
- 北谷町教育委員会2001『山川原古墓群（2）—瑞慶覧（11）倉庫建設に係る文化財発掘調査報告—』北谷町文化財調査報告書第20集
- 樋泉岳二2015「平安山原B遺跡から採集された脊椎動物遺体」『平安山原B遺跡—桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成20・21・23年度）—』北谷町教育委員会 北谷町文化財調査報告書第37集
- 樋泉岳二2014「伊礼原遺跡（国指定外）2007・2008・2012年度調査で採集された脊椎動物遺体（付．伊礼原A遺跡2008年度調査で採集された脊椎動物遺体）」『伊礼原遺跡（国指定外）・伊礼原A遺跡—桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成19・20・24年度）—』北谷町教育委員会
- 樋泉岳二2010「伊礼原E遺跡出土の脊椎動物遺体」『伊礼原E遺跡—桑江伊平土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査（平成16・17年度）—』北谷町教育委員会 北谷町文化財調査報告書第31集

第28表 平安山又上集落跡、下勢頭集落跡 脊椎動物遺体の分類群一覧

硬骨魚綱	OSTEICHTHYES	
ハタ科	<i>Serranidae</i>	
ベラ科	<i>Labridae</i>	
鳥綱	AVES	
ニワトリ	<i>Gallus galus</i>	
哺乳綱	MAMMALIA	
ウマ	<i>Equus feres</i>	
ネコ	<i>Felis catus</i>	
イヌ	<i>Canis familiaris</i>	
イノシシ/ブタ	<i>Sus scrofa ver. domesticus</i>	
ウシ	<i>Bos taurus</i>	
ヤギ	<i>Capra hircus</i>	

第29表-1 平安山又上集落跡、下勢頭集落跡出土の脊椎動物遺体一覧

p: 近位端、ps: 近位側骨幹、S: 骨幹、sd: 遠位側骨幹、d: 遠位端
 (): 骨端未癒合脱落、(): 骨端未癒合残存
 []: 未癒合で脱落した骨端、[]: 骨端癒合中
 歯列詳細 下線部: 残存歯、(): 未萌出、(): 萌出中

No.	出土地点				分類群	部位	左右	残存状況	計測		CM/SF	顎骨の歯列詳細・所見等
	地区	グリッド	遺構等	層位					位置	値 (mm)		
944	B	19	G10	SK56	2	ハタ科	腹椎	—	縦径	7.4		
942	B	19	G10	SK56	1	ベラ科	前上顎骨	R	—	—		
707	B	19	I10	SD13	上	真骨類 (不可)	尾椎	—	縦径	11.4		
944	B	19	G10	SK56	2	ニワトリ	鳥口骨	R	(p) ~ (d)	—		幼鳥
934	B	20	G1	SK54	1	ニワトリ	尺骨	L	s ~ d	—		
993	B	27	A7	SK90	1	ニワトリ	大腿骨	R	完存	GL	69.4	
934	B	20	G1	SK54	1	鳥類	上腕骨	L	sd	—		
512	B	20	H1	—	1	鳥類	上腕骨	R	p	—		幼鳥
863	B	19	J8	SD38	1	鳥類	大腿骨	L	s	—		
1105	B	19	I8	SK95	2	鳥類	脛骨	L	ps	—		
903	B	20	I1	SK42	1	鳥類	長管骨	不明	s	—		
1102	B	19	H10	SK5	2	鳥類	長管骨	不明	s	—		
510	B	19	J7	—	1	ネコ	上腕骨	R	ps ~ s	—		
29	A	26	D5	SX3	1	ウマ	P/M	R	歯冠破片	—		
1166	D	16	A5	—	I	イヌ	橈骨	R	s	—		
1166	D	16	A5	—	I	イノシシ	尺骨	L	滑車切痕	—		
303	C	21	C5	—	II3a	イノシシ	脛骨	R	d	Bd	19.5	CM多数
866	B	19	J8	SD38	1	ブタ	頭蓋骨	L	頭頂骨	—		
1059	B	19	I10	SP77	1	ブタ	頭蓋骨	L	前頭眼窩周辺+頭頂+側頭関節結節・頬骨突起	—		
546	B	20	G3	—	1	ブタ	頭蓋骨	L	前頭骨	—		
976	B	19	I6	SK72	1	ブタ	頭蓋骨	LR	前頭・頭頂・後頭・側頭骨	—		
616	B	19	J10	II	3	ブタ	頭蓋骨	R	頭頂骨	—		
616	B	19	J10	II	3	ブタ	頭蓋骨	R	側頭骨関節結節	—		
840	B	19	J8	SD28	下	ブタ	頭蓋骨	R	頭頂骨	—		
944	B	19	G10	SK56	2	ブタ	頭蓋骨	R	頸静脈突起	—		
1060	B	19	I10	SP78	1	ブタ	頭蓋骨	R	後頭額	—		
992	B	27	A7・A8	SK90	1	ブタ	頭蓋骨	不明	破片	—		焼け
455	C	21	C4	SQ24	—	ブタ	頭蓋骨	不明	破片	—		
942	B	19	G10	SK56	1	ブタ	頭蓋骨	—	前頭・頭頂・後頭骨	—		
1011	B	19	J9	SK97	2	ブタ	頭蓋骨	—	頭頂骨+後頭骨	—		
869	B	19	J8	SD38	2	ブタ	頭蓋骨	L	切歯骨	—		I123
1163	D	16	A5	—	1	ブタ	頭蓋骨	R	前頭骨	—		
976	B	19	I6	SK72	1	ブタ	側頭骨	L	岩様	—		
976	B	19	I6	SK72	1	ブタ	側頭骨	R	岩様	—		
1163	D	16	A5	—	1	ブタ	側頭骨	R	関節結節	—		
864	B	19	J8	SD38	1	ブタ	上顎骨	L	上顎骨	第5表参照		第5表参照
943	B	19	G10	SK56	2	ブタ	上顎骨	L	上顎骨	第5表参照		第5表参照
976	B	19	I6	SK72	1	ブタ	上顎骨	L	上顎骨	第5表参照		第5表参照
1011	B	19	J9	SK97	2	ブタ	上顎骨	L	上顎骨	第5表参照		第5表参照
1058	B	19	I10	SP77	1	ブタ	上顎骨	L	歯槽	第5表参照		第5表参照
869	B	19	J8	SD38	2	ブタ	上顎骨	R	上顎骨	第5表参照		第5表参照
865	B	19	J8	SD38	1	ブタ	上顎骨	R	上顎骨	第5表参照		第5表参照
976	B	19	I6	SK72	1	ブタ	上顎骨	R	上顎骨	第5表参照		第5表参照
677	B	27	A7	SD6	上	ブタ	下顎骨	L	下顎体	—		歯列残存なし
690	B	27	A7	SD6-2	上	ブタ	下顎骨	L	下顎体	第5表参照		第5表参照
1088	B	19	J8	SP151	I	ブタ	下顎骨	L	下顎角	—		歯列残存なし
1237	D	16	A4	シーリ内	—	ブタ	下顎骨	L	下顎体~下顎角	第5表参照		第5表参照
976	B	19	I6	SK72	1	ブタ	下顎骨	LR	吻合部~下顎角	第5表参照		第5表参照
867	B	19	J8	SD38	I	ブタ	下顎骨	LR	吻合部~下顎体	第5表参照		第5表参照
863	B	19	J8	SD38	I	ブタ	下顎骨	LR	吻合部~下顎体	第5表参照		第5表参照
942	B	19	G10	SK56	1	ブタ	下顎骨	LR	吻合部	—		歯列残存なし
1182	D	16	A4	—	I	ブタ	下顎骨	LR	吻合部~下顎角	第5表参照		第5表参照
5	A	26	D5	—	攪乱	ブタ	下顎骨	R	下顎体	第5表参照		第5表参照
671	B	27	A10	II	1b	ブタ	下顎骨	R	吻合部~下顎体	第5表参照		第5表参照
942	B	19	G10	SK56	1	ブタ	下顎骨	R	下顎体	第5表参照		第5表参照
942	B	19	G10	SK56	I	ブタ	下顎骨	R	吻合部~下顎体	第5表参照		第5表参照
1175	D	16	A5	—	I	ブタ	下顎骨	R	下顎角	—		切断
1190	D	16	A4・A5	—	I	ブタ	M ₁	R	歯根	—		1182の下顎骨と同一
976	B	19	I6	SK72	1	ブタ	環椎	—	半存	—		
410	C	21	B5	SK10	1	ブタ	肩甲骨	L	肩甲骨基部	—		CM

第29表-2 平安山又上集落跡、下勢頭集落跡出土の脊椎動物遺体一覧

p: 近位端、ps: 近位側骨幹、S: 骨幹、sd: 遠位側骨幹、d: 遠位端
 (): 骨端未癒合脱落、(): 骨端未癒合残存
 []: 未癒合で脱落した骨端、[]: 骨端癒合中
 歯列詳細 下線部: 残存歯、(): 未萌出、(): 萌出中

No.	出土地点				分類群	部位	左右	残存状況	計測		CM/SF	顎骨の歯列詳細・所見等	
	地区	グリッド	遺構等	層位					位置	値(mm)			
574	B	27	A8	II	1b	フタ	肩甲骨	R	肩甲骨基部	—	—		
781	B	20	H2	SD25	上	フタ	肩甲骨	R	関節窩～肩甲骨基部	—	—		
978	B	19	I6	SK72	1	フタ	肩甲骨	R	(関節窩)～肩甲骨基部	SLC	19.5		
979	B	19	I6	SK72	1	フタ	肩甲骨	L	(関節窩)～肩甲骨基部	SLC	19.5		
671	B	27	A10	II	1b	フタ	上腕骨	L	ps～sd	SD	19.4	CM	
637	B	27	H9	II	1b	フタ	上腕骨	L	sd	—	—		
728	B	20	H1	SD22	1	フタ	上腕骨	L	sd～(d)	—	—	SF	
672	B	19	J7	SD6	上	フタ	上腕骨	L	ps～sd	SD	15.1		
690	B	27	A7	SD6-2	上	フタ	上腕骨	L	ps～sd	SD	16.6		
977	B	19	I6	SK72	1	フタ	上腕骨	L	s～sd	SD	14.1		
1170	D	16	A3	—	I	フタ	上腕骨	L	s	SD	17.9		
1199	D	16	A5	—	I	フタ	上腕骨	L	(d)	—	—	切断	
567	B	27	A10	II	1a	フタ	上腕骨	R	ps～s	SD	15.2		
690	B	27	A7	SD6-2	上	フタ	上腕骨	R	(p)～sd	SD	17.3		
934	B	20	G1	SK54	1	フタ	上腕骨	R	sd	—	—	SF	
978	B	19	I6	SK72	1	フタ	上腕骨	R	ps～sd	SD	14.4		
487	C	21	C4・C5	SX11-1	6	フタ	上腕骨	R	sd	—	—	CM	
1181	D	16	A4	—	I	フタ	上腕骨	R	(d)	—	—		
843	B	19	J10	SD28	上	フタ	橈骨	L	p～s	Bp SD	26.1 18.9		
978	B	19	I6	SK72	1	フタ	橈骨	L	p～s	SD	14.4		
637	B	27	A9	II	1b	フタ	橈骨	R	s	SD	18.0		
774	B	20	H3	SD23	1	フタ	橈骨	R	p～s	Bp	24.9		
812	B	20	F3	SD25	下	フタ	橈骨	R	[p]～s	Bp SD	27.8 19.7		
690	B	27	A7	SD6-2	上	フタ	橈骨	R	ps	—	—		
977	B	19	I6	SK72	1	フタ	橈骨	R	p～s	—	—		
1101	B	27	A10	SP178	1	フタ	橈骨	R	(p)～ps	—	—	SF	
1193	D	16	A5	—	I	フタ	橈骨	R	(d)	—	—	CM	
12	A	26	D4	—	Ic	フタ	尺骨	L	s	—	—	CM	
670	B	27	A9	II	1b	フタ	尺骨	L	s	—	—		
843	B	19	J10	SD28	上	フタ	尺骨	L	滑車切痕～s	DPA	34.3		
863	B	19	J8	SD38	1	フタ	尺骨	L	滑車切痕	—	—	CM	
942	B	19	G10	SK56	1	フタ	尺骨	L	(d)	—	—		
977	B	19	I6	SK72	1	フタ	尺骨	L	滑車切痕～s	—	—		
1183	D	16	A5	—	I	フタ	尺骨	L	滑車切痕～s	—	—		
13	A	26	E4	—	Ic	フタ	尺骨	R	滑車切痕	—	—		
863	B	19	J8	SD38	1	フタ	尺骨	R	滑車切痕	—	—		
978	B	19	I6	SK72	1	フタ	尺骨	R	ps～s	—	—		
993	B	27	A7・A8	SK90	1	フタ	尺骨	R	(肘頭)～s	DPA SDO	33.2 27.5	CM	年代測定試料
864	B	19	J8	SD38	1	フタ	Mc-III	L	p	—	—		
863	B	19	J8	SD38	I	フタ	Mc-III	L	p	Bp	14.8		
264	C	21	C3	II	1a	フタ	Mc-III	R	p	Bp	16.3		
976	B	19	I6	SK72	1	フタ	Mc-IV	L	p～s	—	—		
869	B	19	J8	SD38	2	フタ	Mc-IV	R	p～(d)	Bp B 残存長	15.0 13.1 53.0		
690	B	27	A7	SD6-2	上	フタ	Mc-IV	R	p～(d)	Bp B 残存長	14.9 11.8 46.6		
976	B	19	I6	SK72	1	フタ	Mc-V	L	p～s	—	—		
1041	B	27	A9	SK109	3	フタ	Mc-V	R	p～sd	—	—		
654	B	27	A10	II	1a	フタ	Mc/Mt	不明	p	—	—	近位端欠損	
863	B	19	J8	SD38	1	フタ	Mc/Mt	不明	[d]	—	—		
633	B	27	A9	II	1b	フタ	Mc/Mt III/IV	不明	(d)	—	—		
980	B	19	I6	SK72	1	フタ	寛骨	L	腸骨	—	—		
980	B	19	I6	SK72	1	フタ	寛骨	L	寛骨臼～坐骨	—	—		
1223	D	16	A5	SB3	2	フタ	寛骨	L	腸骨	—	—	CM	
876	B	19	I7	SD6	上面	フタ	寛骨	R	坐骨	—	—		
980	B	19	I6	SK72	1	フタ	寛骨	R	腸骨	—	—		
993	B	27	A8	SK90	1	フタ	寛骨	R	恥骨	—	—		
1193	D	16	A5	—	I	フタ	寛骨	R	寛骨臼	—	—		
982	B	19	I6	SK72	1	フタ	大腿骨	L	ps～sd	SD	15.5		
1126	B	19	J10	石敷き	—	フタ	大腿骨	L	sd	—	—		
173	C	21	D4	—	I	フタ	大腿骨	L	sd	—	—		
1166	D	16	A5	—	I	フタ	大腿骨	L	ps	—	—		
575	B	27	A9	II	1b上	フタ	大腿骨	R	ps～sd	SD	10.0		
740	B	20	G3	SD23	1	フタ	大腿骨	R	(p)～(d)	SD Bd	19.0 40.9		
864	B	19	J8	SD38	1	フタ	大腿骨	R	sd	—	—		
677	B	27	A7	SD6	上	フタ	大腿骨	R	[p]	—	—		
980	B	19	I6	SK72	1	フタ	大腿骨	R	(p)～sd	SD	15.2	年代測定試料	
503	B	20	H1	—	1	フタ	大腿骨	R	ps	—	—	CM、SF	
1197	D	16	A5	—	I	フタ	大腿骨	R	sd	—	—	CM	
794	B	20	I2	SD25	下	フタ	脛骨	L	ps～s	—	—	CM	
816	B	20	H3	SD26	1	フタ	脛骨	L	ps～sd	SD	16.5		
871	B	19	J8	SD38	1	フタ	脛骨	L	ps～(d)	SD	19.5		
935	B	20	G1	SK54	2	フタ	脛骨	L	ps	—	—		
981	B	19	I6	SK72	1	フタ	脛骨	L	ps～sd	SD	14.5		
322	C	21	C4	III	1a	フタ	脛骨	L	sd	—	—		
633	B	27	A9	II	1b	フタ	脛骨	R	ps	—	—	CM	
869	B	19	J8	SD38	2	フタ	脛骨	R	ps～(d)	SD	19.2		
982	B	19	I6	SK72	1	フタ	脛骨	R	ps～sd	SD	14.3		
1108	B	19	I7	SX15	—	フタ	脛骨	R	ps	—	—		
1219	D	16	A5	II	2a	フタ	脛骨	R	s	—	—	CM、切断	

第29表-3 平安山又上集落跡、下勢頭集落跡出土の脊椎動物遺体一覧

p: 近位端、ps: 近位側骨幹、S: 骨幹、sd: 遠位側骨幹、d: 遠位端
 (): 骨端未癒合脱落、(): 骨端未癒合残存
 []: 未癒合で脱落した骨端、[]: 骨端癒合中
 歯列詳細 下線部: 残存歯、(): 未萌出、(): 萌出中

No.	出土地点				分類群	部位	左右	残存状況	計測		CM/SF	顎骨の歯列詳細・所見等	
	地区	グリッド	遺構等	層位					位置	値(mm)			
496	B	26	A6・7	1	ブタ	腓骨	不明	sd	—	—			
1130	B	19	J10	1	ブタ	距骨	L	概ね残存	—	—	切断		
517	B	27	I7	1	ブタ	距骨	L	概ね残存	—	—			
982	B	19	I6	1	ブタ	距骨	R	概ね残存	GL 1	35.0			
480	C	21	C5	—	ブタ	距骨	R	概ね残存	—	—			
976	B	19	I6	1	ブタ	踵骨	L	s ~ d	—	—			
944	B	19	G10	2	ブタ	踵骨	R	(踵) ~ d	—	—			
982	B	19	I6	1	ブタ	踵骨	R	s ~ d	—	—			
981	B	27	I6	1	ブタ	Mt III	R	p ~ s	—	—			
993	B	27	A7・A8	1	ブタ	Mt III	R	p ~ (d)	Bp B 残存長	14.1 11.5 49.8			
670	B	27	A9	II	1b	ブタ	Mt IV	L	p ~ (d)	B 残存長	12.6 59.1		
981	B	27	I6	1	ブタ	Mt IV	R	p ~ s	Bp	14.5			
1101	B	27	A10	SP178	1	ブタ	Mt V	R	p ~ (d)	—	—		
981	B	19	I6	1	ブタ	基節骨	不明	(p) ~ s	—	—			
975	B	19	I6	1	ブタ	基節骨	不明	(p) ~ d	—	—			
981	B	19	I6	1	ブタ	中節骨	不明	(p) ~ d	—	—			
636	B	20	H3	SD23	1	ブタ	中節骨	不明	[p] ~ d	—	—		
982	B	19	I6	1	ブタ	不明	不明	破片	—	—			
982	B	19	I6	1	ブタ	不明	不明	破片	—	—			
982	B	19	I6	1	ブタ	不明	不明	破片	—	—			
677	B	27	A7	SD6	上	イノシシ/ブタ	P↑	R	咬合面欠損	—	—		
864	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	P*	L	歯冠	—	—		
864	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	P*	L	歯冠	—	—		
1011	B	19	J9	SK97	2	イノシシ/ブタ	P*	L	歯根欠損	—	—		
864	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	M*	L	歯冠	—	—	第5表参照	
869	B	19	J8	SD38	2	イノシシ/ブタ	M*	L	歯根一部欠損	—	—	第5表参照	
993	B	27	A7・A8	SK90	1	イノシシ/ブタ	下顎骨	R	下顎体	—	—	第5表参照	第5表参照
564	B	19	J10	II	1a上面	イノシシ/ブタ	I ₁	L	歯冠	—	—		
867	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	I ₁	L	歯冠	—	—		
863	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	I ₁	L	歯冠	—	—		
863	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	I ₁	R	歯冠	—	—		
1027	B	27	A9	SK100	1	イノシシ/ブタ	I ₁	R	歯冠	—	—		
867	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	I ₁	L	歯冠	—	—		
863	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	I ₁	L	歯冠	—	—		
863	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	I ₁	L	歯冠	—	—		未萌出/萌出中
863	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	I ₁	L	歯冠	—	—		未萌出/萌出中
863	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	i ₁	L	ほぼ完存	—	—		
706	B	20	I1	SD13	上	イノシシ/ブタ	I ₁	R	歯冠	—	—		
867	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	I ₁	R	歯冠	—	—		
867	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	C↓	L	歯冠	—	—		オス
863	B	19	J8	SD38	I	イノシシ/ブタ	C↓	L	歯冠	—	—		メス
942	B	19	G10	SK56	1	イノシシ/ブタ	C↓	L	歯冠	—	—		オス
1182	D	16	A4	—	1	イノシシ/ブタ	C (下顎)	L	歯冠	—	—		
867	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	C↓	R	歯冠	—	—		オス
942	B	19	G10	SK56	1	イノシシ/ブタ	C↓	R	歯冠	—	—		オス
562	B	19	J8	攪乱	—	イノシシ/ブタ	C↓	不明	破片	—	—		
867	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	P ₁	R	概ね残存	—	—		
863	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	P ₁	R	概ね残存	—	—		
637	B	27	A9	II	1b	イノシシ/ブタ	P ₁	L	歯根一部欠損	—	—		
867	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	P ₁	R	概ね残存	—	—		
867	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	P ₁	R	概ね残存	—	—		
690	B	27	A7	SD6-2	上	イノシシ/ブタ	m ₁	L	ほぼ完存	—	—	第5表参照	
863	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	M ₁	L	ほぼ完存	—	—	第5表参照	
677	B	27	A7	SD6	上	イノシシ/ブタ	M ₁	L	歯根一部欠損	—	—		
496	B	26	A6・7	—	1	イノシシ/ブタ	M ₁	L	歯冠	—	—		
867	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	M ₁	R	歯冠	—	—	第5表参照	
1027	B	27	A9	SK100	1	イノシシ/ブタ	M ₁	R	歯冠	—	—	第5表参照	
677	B	27	A7	SD6	上	イノシシ/ブタ	M ₁	L	歯冠	—	—	第5表参照	
870	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	M ₁	R	ほぼ完存	—	—	第5表参照	
863	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	M ₁	R	歯根一部欠損	—	—	第5表参照	
1027	B	27	A9	SK100	1	イノシシ/ブタ	M ₁	R	歯冠	—	—	第5表参照	未萌出/萌出中
1096	B	27	A9	SP167	1	イノシシ/ブタ	M ₁	R	歯冠	—	—	第5表参照	
768	B	20	G2	SD25	上	イノシシ/ブタ	M ₁	L	歯冠一部欠損	—	—		
870	B	19	J8	SD38	1	イノシシ/ブタ	M ₁	R	歯冠	—	—	第5表参照	歯根未形成
1088	B	19	J8	SP151	1	イノシシ/ブタ	M ₁	R	歯冠	—	—		歯冠形成中
1193	D	16	A5	—	1	イノシシ/ブタ	上腕骨	L	s	—	—	CM多数	
1029	B	27	A7	SK101	1	イノシシ/ブタ	大腿骨	L	[p]	—	—		幼獣
992	B	27	A7・A8	SK90	1	イノシシ/ブタ	腓骨	不明	s	—	—		
1193	D	16	A5	—	1	イノシシ/ブタ	Mt III	L	p	Bp	13.0		
847	B	19	J10	SD28	上	ウシ	肩甲骨	L	破片	—	—		
849	B	19	J10	SD28	上	ウシ	上腕骨	R	s ~ d	SD	38.9	CM, SF, 切断	
815	B	20	G2	SD25	下	ウシ	脛骨	R	s	SD	40.1		
574	B	27	A8	—	II 1b	ウシ	Mc/Mt	L	s	—	—	SF	
637	B	27	A9	—	II 1b	ウシ	中節骨	不明	完存	GL	37.8		
887	B	19	I10	SK34	1	ウシ/ウマ	胸椎	—	椎体	—	—		
1239	D	16	A4	シリー周リ	—	ヤギ	M*	L	歯冠	—	—		
1239	D	16	A4	シリー周リ	—	ヤギ	M*	L	歯冠	—	—		萌出中
1166	B	19	I8	SX15	—	ヤギ	下顎骨	L	下顎体	—	—	第5表参照	第5表参照
1239	D	16	A4	シリー周リ	—	ヤギ	下顎骨	L	下顎体~下顎枝	—	—		
1169	D	8	J4	—	I	ヤギ	下顎骨	L	下顎体	—	—	第5表参照	第5表参照
676	B	19	I7	SD6	上	ヤギ	下顎骨	R	下顎体	—	—	第5表参照	第5表参照
935	B	20	G1	SK54	2	ヤギ	下顎骨	R	下顎体	—	—	第5表参照	第5表参照

第29表-4 平安山又上集落跡、下勢頭集落跡出土の脊椎動物遺体一覧

p: 近位端、ps: 近位側骨幹、S: 骨幹、sd: 遠位側骨幹、d: 遠位端
 (): 骨端未癒合脱落、(): 骨端未癒合残存
 []: 未癒合で脱落した骨端、[]: 骨端癒合中
 歯列詳細 下線部: 残存歯、(): 未萌出、(): 萌出中

No.	出土地点				分類群	部位	左右	残存状況	計測		CM/SF	顎骨の歯列詳細・所見等	
	地区	グリッド	遺構等	層位					位置	値(mm)			
1239	D	16	A4	シーリ周り	—	ヤギ	下顎骨	R	下顎体～下顎枝	第5表参照		年代測定試料、第5表参照	
1239	D	16	A4	シーリ周り	—	ヤギ	i	L	歯冠	—	—		
1239	D	16	A4	シーリ周り	—	ヤギ	i	R	歯冠	—	—		
111	A	26	D4	SD2	—	ヤギ	M _L /2	L	歯冠	第5表参照			
886	B	19	I10	SK34	1	ヤギ	上腕骨	R	d	—	—		
935	B	20	G1	SK54	2	ヤギ	上腕骨	R	(p) ~ (d)	SD	9.0		
1166	D	16	A5	—	I	ヤギ	上腕骨	R	s ~ d	Bd	23.4	CM	
603	B	20	G1	II	3	ヤギ	尺骨	R	肘頭～滑車切痕	DPA SDO	17.9 15.2		
936	B	20	G1	SK54	2	ヤギ	尺骨	R	(肘頭) ~ s	—	—		
935	B	20	G1	SK54	2	ヤギ	Mc	L	(p) ~ (d)	—	—		
935	B	20	G1	SK54	2	ヤギ	Mc	R	(p) ~ (d)	—	—		
672	B	19	J7	SD6	上	ヤギ	寛骨	L	寛骨臼～坐骨	—	—		
935	B	20	G1	SK54	2	ヤギ	大腿骨	R	(p) ~ (d)	SD	8.9		
935	B	20	G1	SK54	2	ヤギ	脛骨	R	(p) ~ (d)	SD	8.8		
622	B	27	A10	II	1b	ヤギ	Mc/Mt	不明	s ~ sd	SD	8.3	幼獣	
991	B	27	A7・A8	SK90	1	ヤギ	Mc/Mt	不明	s	—	—		
935	B	20	G1	SK54	2	哺乳類	胸椎	—	棘突起	—	—	CM	焼け
1092	B	27	A8	SP156	1	哺乳類	腰椎	—	椎体～関節突起	—	—		椎体前後関節面未癒合脱落
671	B	27	A10	II	1b	哺乳類	椎骨	—	関節突起	—	—	CM	
665	B	27	A10	II	1b	哺乳類	椎骨	—	関節突起	—	—		
942	B	19	G10	SK58	1	哺乳類	椎骨	—	関節突起	—	—		
942	B	19	G10	SK58	1	哺乳類	椎骨	—	関節突起	—	—		
942	B	19	G10	SK58	1	哺乳類	椎骨	—	棘突起	—	—		
1108	B	19	I7	SX15	—	哺乳類	椎骨	—	椎体	—	—		椎体前後関節面未癒合脱落
1197	D	16	A5	—	I	哺乳類	椎骨	—	棘突起	—	—	切断	
944	B	19	G10	SK56	2	哺乳類	尺骨	L	s	—	—		
616	B	19	J10	II	3	哺乳類	寛骨	不明	坐骨	—	—		
496	B	26	A6・7	—	1	哺乳類	脛骨	R	s	—	—		
602	B	19	G10	II	3	哺乳類	長管骨	不明	s	—	—		
693	B	19	J7	SD6-2	下	哺乳類	長管骨	不明	s	—	—		
934	B	20	G1	SK54	1	哺乳類	長管骨	不明	s	—	—		
934	B	20	G1	SK54	1	哺乳類	長管骨	不明	s	—	—		
507	B	19	J7	—	1	哺乳類	長管骨	不明	s	—	—		
374	C	21	C5	SD19	1	哺乳類	長管骨	不明	s	—	—		
672	B	19	J7	SD6	上	哺乳類	肋骨	L	p	—	—		
942	B	19	G10	SK56	1	哺乳類	肋骨	L	p	—	—	CM	
732	B	20	H3	SD23	1	哺乳類	肋骨	R	p ~ s	—	—	CM	
672	B	19	J7	SD6	上	哺乳類	肋骨	R	p	—	—		
1040	B	27	A9	SK109	2	哺乳類	肋骨	R	p	—	—		
574	B	19	J7	—	1	哺乳類	肋骨	R	s	—	—		
17	A	26	E5	—	I c	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
637	B	27	A9	II	1b	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
637	B	27	A9	II	1b	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
637	B	27	A9	II	1b	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
637	B	27	A9	II	1b	哺乳類	肋骨	不明	d	—	—		
713	B	19	I10	SD13	1	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
710	B	19	I10	SD13	1	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
710	B	19	I10	SD13	1	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
816	B	20	H3	SD26	1	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
832	B	27	A10	SD27	1	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
863	B	19	J8	SD38	1	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
863	B	19	J8	SD38	1	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
672	B	19	J7	SD6	上	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
672	B	19	J7	SD6	上	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
672	B	19	J7	SD6	上	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
672	B	19	J7	SD6	上	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
672	B	19	J7	SD6	上	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
672	B	19	J7	SD6	上	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
672	B	19	J7	SD6	上	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
1038	B	27	A9	SK109	1	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
1043	B	27	A9	SK112	—	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
1043	B	27	A9	SK112	—	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
942	B	19	G10	SK56	1	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
942	B	19	G10	SK56	1	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
942	B	19	G10	SK56	1	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
942	B	19	G10	SK56	1	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
944	B	19	G10	SK56	2	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
944	B	19	G10	SK56	2	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
1101	B	27	A10	SP178	1	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
1120	B	19	J7	SX16	—	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
637	B	27	A10	II	1b	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—	切断	骨質が粗くフタか?
234	C	21	C5	II	1b	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
216	C	21	C5	—	確	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
1172	D	16	A5	—	I	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—		
1180	D	8	J4	—	1	哺乳類	肋骨	不明	s	—	—	CM	
1045	B	27	A10	SK114	1	保留	四肢骨	不明	骨端	—	—		コウモリ?

第30表 平安山又上集落跡、下勢頭集落跡出土脊椎動物遺体集計表

分類群	部位	A 1C	A SD 2	A SX 3	A 機乱	B 1	B II 1a	B II 1b	B II 3	B SD 6	B SD 6-2	B SD 13	B SD 22	B SD 23	B SD 25	B SD 26	B SD 27	B SD 28	B SD 38	B SK 34	B SK 42	B SK 54	B SK 56	B SK 58	B SK 72	B SK 90	B SK 95	B SK 97	B SK 100		
ハタ科	腹椎																						1								
ペテ科	前上顎骨																							/ 1							
真骨類	尾椎										1																				
ニワトリ	鳥口骨																						/ 1								
	尺骨																						1 /								
	大腿骨																										/ 1				
鳥類	上腕骨					/ 1																	1 /								
	大腿骨																			1 /											
	脛骨																											1 /			
	長管骨																					1									
ネコ	上腕骨					/ 1																									
ウマ	P/M			/ 1																											
イヌ	橈骨																														
イノシシ	尺骨																														
	脛骨																														
ブタ	頭蓋骨					1 /			/ 2										1 2 /				1 / 2		2 / 2	1		1 / 1			
	上顎骨																		1 / 2				1 /		1 / 1			1 /			
	下顎骨			/ 1			/ 1		1 /	1 /									2 / 2				1 / 3		1 / 1						
	M ₁																														
	環椎																														
	肩甲骨							/ 1							/ 1											1		1 / 1			
	上腕骨						/ 1	2 /		1 /	1 / 1	1 /										/ 1			1 / 1						
	橈骨						/ 1			/ 1				/ 1	/ 1				1							1 / 1					
	尺骨	1 / 1					1 /											1	1 / 1				1 /		1 / 1	/ 1					
	Mc III																						2 /								
	Mc IV										/ 1												/ 1			1 /					
	Mc V																									1 /					
	Mc/Mt						1	1															1								
	寛骨									/ 1																2 / 1	/ 1				
	大腿骨				/ 1			/ 1		/ 1				/ 1						/ 1						1 / 1					
	脛骨						/ 1							1 /	1 /					1 / 1		1 /			1 / 1						
	腓骨				1																										
	距骨				1 /																										
	踵骨																							/ 1		1 / 1					
	Mt III																									/ 1	/ 1				
	Mt IV						1 /																			/ 1					
	Mt V																														
	基節骨																										2				
	中節骨												1														1				
	不明																											3			
イノシシ/ブタ	P (上顎)									/ 1																					
	P ⁺																						1 /								
	P ⁺																							1 /					1		
	M ⁺																						2 /								
	下顎骨																											/ 1			
	I ₁						1 /																			2 / 1				/ 1	
	I ₂												/ 1													3 / 1					
	i ₁																								1 /						
	C (下顎)																									2 / 1			1 / 1		
	P ₁																									/ 2					
	P ₂							1 /																		/ 2					
	m ₁									1 /																					
	M ₁					1 /				1 /															1 / 1					/ 1	
	M ₂									1 /																/ 2				/ 1	
	M ₃													1 /												/ 1					
	上腕骨																														
	大腿骨																														
	腓骨																												1		
	Mt III																														
ウシ	肩甲骨																														
	上腕骨																										1 /				
	脛骨														/ 1																
	Mc/Mt							1 /																							
	中節骨							1																							
ウシ/ウマ	胸椎																														
ヤギ	M ⁺																									1					
	M ⁺																														
	下顎骨										/ 1															/ 1					
	i																														
	M ₁ /i		1 /																												
	上腕骨																									/ 1					
	尺骨								/ 1																	/ 1					
	Mc																									1 / 1					
	寛骨									1 /																					
	大腿骨																									/ 1					
	脛骨																									/ 1					
	Mc/Mt							1																							
哺乳類	胸椎																								1						
	尺骨																									1 /					
	寛骨								1																						
	脛骨					/ 1																									
	長管骨					1			1		1														2						
	椎骨							2																							

第31表 哺乳類の顎骨及び遊離歯の詳細

下線部：残存歯、()：未萌出、< >：萌出中

No.	分類群	部位	LR	残存歯の状況	遺構	計測値 (mm)					
						M1L	M1B	M2L	M2B	M3L	M3B
864	ブタ	上顎骨	L	$P^2P^3P^4M^1$	SD38	14.7	10.8	—	—	—	—
943	ブタ	上顎骨	L	$P^4M^1M^2$	SK56	14.9	12.4	18.9	14.5	—	—
976	ブタ	上顎骨	L	$m^1m^2m^3M^1 (M^2)$	SK72	14.3	11.2	—	—	—	—
1011	ブタ	上顎骨	L	$P^3P^4M^1M^2$	SK97	—	11.3	—	—	—	—
1058	ブタ	上顎骨	L	M	SP77	—	—	—	—	—	—
869	ブタ	上顎骨	R	$P^4M^1M^2$	SD38	14.6	10.5	18.9	14.0	—	—
865	ブタ	上顎骨	R	M^2	SD38	—	—	—	—	—	—
976	ブタ	上顎骨	R	$m^2 (P^2) m^3M^1 (M^2)$	SK72	14.4	11.4	—	—	—	—
690	ブタ	下顎骨	L	$M_1 (M_2)$	SD6-2	17.0	10.3	—	—	—	—
1237	ブタ	下顎骨	L	$P_3P_4M_1M_2 (M_3)$	シーリ内	16.1	10.1	19.6	11.9	—	—
976	ブタ	下顎骨	L	$\langle I_1 \rangle I_2 I_3 C m_1 m_2 m_3 M_1 (M_2)$	SK72	14.1	9.0	14.0	8.9	—	—
			R	$\langle I_1 \rangle I_2 I_3 \langle C \rangle m_1 m_2 m_3 M_1 (M_2)$	—	—	—	—	—	—	—
867	ブタ	下顎骨	L	$I_1 P_2 P_3 P_4 M_1 M_2$	SD38	13.7	9.6	18.1	12.5	—	—
			R	I_1	—	—	—	—	—	—	—
863	ブタ	下顎骨	L	$I_1 I_2 I_3 P_2 P_3 P_4 M_1$	SD38	14.8	9.0	—	—	—	—
			R	$I_1 I_2 I_3 CP (2) P_3 P_4 M_1$	—	—	—	—	—	—	—
1182	ブタ	下顎骨	L	$I_1 I_2 I_3 C$	—	—	—	—	—	—	—
			R	$I_1 I_2 I_3 CP_2 P_3 P_4 M_1 M_2$	—	—	—	—	—	—	—
5	ブタ	下顎骨	R	$M_1 M_2 (M_3)$	—	—	—	—	—	—	
671	ブタ	下顎骨	R	$I_1 I_2 I_3 CP_1$	—	—	—	—	—	—	
942	ブタ	下顎骨	R	$P_4 M_1 M_2$	SK56	—	—	—	—	—	—
942	ブタ	下顎骨	R	$I_1 I_2 I_3 (P_2) M_1 M_2$	SK56	—	—	—	—	—	—
864	イノシシ/ブタ	M^2	L		SD38	19.0	14.0	—	—	—	—
869	イノシシ/ブタ	M^2	L		SD38	18.6	14.5	—	—	—	—
993	イノシシ/ブタ	下顎骨	R	$M_1/2$	SK90	—	—	—	—	—	—
690	イノシシ/ブタ	m_3	L		SD6-2	18.7	8.7	—	—	—	—
863	イノシシ/ブタ	M_1	L		SD38	14.7	9.0	—	—	—	—
867	イノシシ/ブタ	M_1	R		SD38	14.1	9.6	—	—	—	—
1027	イノシシ/ブタ	M_1	R		SK100	15.6	10.1	—	—	—	—
677	イノシシ/ブタ	M_2	L		SD6	—	—	19.2	12.3	—	—
870	イノシシ/ブタ	M_2	R		SD38	—	—	18.1	12.6	—	—
863	イノシシ/ブタ	M_2	R		SD38	—	—	18.0	11.7	—	—
1027	イノシシ/ブタ	M_2	R		SK100	—	—	20.8	13.5	—	—
1096	イノシシ/ブタ	M_2	R		SP167	—	—	18.3	12.6	—	—
870	イノシシ/ブタ	M_3	R		SD38	—	—	—	—	30.6	13.7
1166	ヤギ	下顎骨	L	$m_3 M_1 M_2 M_3$	SX15	—	—	—	—	—	—
1169	ヤギ	下顎骨	L	$P_3 P_4 M_1 M_2 M_3$	—	9.1	6.8	12.8	7.6	19.5	6.9
676	ヤギ	下顎骨	R	$P_2 P_3 P_4 M_1$	SD6	—	—	—	—	—	—
935	ヤギ	下顎骨	R	$m_1 m_2 m_3 M_1$	SK54	—	—	—	—	—	—
1239	ヤギ	下顎骨	R	$m_1 m_2 m_3 M_1 \langle M_2 \rangle$	シーリ周り	—	—	—	—	—	—
111	ヤギ	$M_1/2$	L		SD2	12.7	7.6	—	—	—	—

第32表 分類群別出土状況

	NSP					MNI
	A区	B区	C区	D区	計	
魚類		3			3	1
鳥類		9			9	1
ブタ (イノシン/ブタを含む)	3	167	7	20	197	8
ウシ		5			5	1
ヤギ	1	14		8	23	3
その他哺乳類	2	55	5	4	66	4
調査区 計	6	253	12	32	303	18



図版28 脊椎動物遺体 (SK72出土ブタ)

貝類遺体

1. 数量

今回集計した貝類の総算出個体数は、巻貝が21科69種、二枚貝が15科35種で2,052個であった(第33表)。最も個体数が多かったのはコゲツノブエ(類)で670個、次いでマガキガイ190個、ハナビラダカラ168個、ヌノメガイ85個、ハナマルユキ66個となっている。この5種で個体数の57%を占め、残り43%を104種の貝で占める。

	科	種	算出個体数
巻貝	21	69	1525
二枚貝	15	35	527
総算出個体数			2052

2. 生息域別個体数

今回の調査で確認された貝類の分類学的位置と生息場所を黒住耐二氏の生息域場所類型註12を基準に第34、35、36表に示した。総算出個体数2,052個のうち、生息域別に分類できたものは1,959個となっており、Ⅰ域(外海・サンゴ礁域)が881個(45%)、Ⅱ域(内湾・転石域)が405個(21%)、Ⅲ域(河川干潟・マングローブ域)が673個(34%)であった。

Ⅰ域ではⅠ-2-cに生息する貝が最も多く34%で、主な貝はマガキガイとクモガイであった。次いでⅠ-1-aに生息する貝が31%で、主な貝はハナビラダカラとキイロダカラであった。

Ⅱ域ではⅡ-1-cに生息する貝が最も多く52%で、主な貝はマスオガイとリュウキュウマスオガイ。次いでⅡ-2-cに生息する貝が45%で、主な貝はヌノメガイとリュウキュウサルボウであった。

Ⅲ域ではⅢ-1-cに生息する貝のみであった。貝種はコゲツノブエ(類)※である。

※風化が著しく判別が難しいものも含めて「コゲツノブエ(類)」と表記した。

3. 出土地区別の集計

貝類が出土した地区別の集計については第37表に記載した。

特記としては今回得られたコゲツノブエ(類)670個中646個はB地区(H31平山・下B27・A9SK94 1層ナンバリング番号(0998)から一括で得られたものである。

第34表 貝類遺体の分類学的位置と生態場所類型

貝類遺体の分類学的位置 (巻貝)				貝類遺体の分類学的位置 (二枚貝)			
和名	学名	生息域	サンプル番号	和名	学名	生息域	サンプル番号
軟体動物部門	Molluscs			軟体動物部門	Molluscs		
腹足綱	Gastropoda			腹足綱	Gastropoda		
ユキノカサガイ科	Lottiidae			フネガイ科	Arcaidae		
リュウキュウウノアシ	Patelloida saccharina (Linnaeus, 1758)	I-1-a	1	ベニエガイ	Barbatia (Ustularca) fusca (Bruguere, 1789)	I-2-a	1
ニシキウズガイ科	Trochidae			クロミノエガイ	Barbatia (Ustularca) cruciata (Philippi, 1849)	II-2-b	2
ニシキウズガイ	Trochus maculatus Linnaeus, 1758	I-2-a	2	リュウキュウサルボウ	Anadara antiquata (Linnaeus, 1758)	II-2-c	3
ギンタカハマ	Tectus pyramis (Born, 1778)	I-4-a	3	イガイ科	Mytilidae		
サラサバテイラ	Tectus niloticus (Linnaeus, 1767)	I-4-a	4	ウグイスガイ科	Pteridae		
サザエ科	Tubinidae			ミドリアネリ	Pinca tadata maculata (Gould, 1850)	I-1-a	4
チョウセンサザエ	Turbo (Marmorostoma) argyrostomus Linnaeus, 1758	I-3-a	5	イタヤガイ科	Pectinidae		
コシダカサザエ	Turbo (Marmorostoma) stenogyrus Fischer, 1873	I-2-a	6	リュウキュウウオウギ	Comptopallium radula (Linnaeus, 1758)	II-2-c	6
カンギク	Turbo (Lunella) coronatus coronatus (Gmelin, 1791)	II-1-b	7	ウミギク科	Spondyliidae		
オオウラウズガイ	Astraliun rhodostoma (Lamarck, 1822)	I-2-a	8	メンガイ (類)	Spondyus squamosus Schreibers, 1793	I-2-a	7
ヤコウガイ	Turbo (Turbo) marmoratus Linnaeus, 1758	I-4-a	9	カキ上科	-		
アマオブネガイ科	Neritidae			カキ類	-		8
マルアマオブネ	Nerita (Theliostyla) squamulata La Guillou, 1841	I-1-b	10	ツキガイ科	Lucinidae		
オニノツノガイ科	Cerithiidae			クラツキガイ	Codakia Paytenorum (Iredale, 1937)	II-2-c	9
クワノミカニモリ	Clypeomorur petrosa chemnitziana (Pilsbry, 1901)	I-1-a	11	ヒメツキガイ	Epicodakia bella (Conrad, 1837)	I-2-c	10
コガツノフエ	Cerithium corallium Kiener, 1841	III-1-c	12	チヂミウノハナ	Wallucina strata (Tokunaga, 1906)	I-2-c	11
オニノツノガイ	Cerithium nodulosum Bruguere, 1792	I-4-b	13	キクザルガイ科	Chamidae		
コオニノツノガイ	Cerithium columa Sowerby, 1834	I-2-a	14	キクザルガイ (類)	Chama japonica Lamarck, 1819	I-2-a	12
ソデボラ科	Strombidae			ザルガイ科	Cardiidae		
ネジマキガイ	Strombus (Gibberulus) gibberulus gibbosus Roding, 1798	II-1-c	15	リュウキュウザル	Regozara flavum (Linnaeus, 1758)	II-2-c	13
ムカンタモトガイ	Strombus (Canarium) mutabilis Swainson, 1821	I-2-c	16	コウガイ	Fragum umedo (Linnaeus, 1758)	II-2-c	14
フトスジムカンタモト	Strombus (Canarium) labiatus (Roding, 1798)	II-2-c	17	シャコガイ科	Tridacnidae		
イボソデガイ	Strombus (Lentigo) lentiginosus Linnaeus, 1758	II-2-c	18	ヒメジャコ	Tridacna crocea Lamarck, 1819	I-2-a	15
マガキガイ	Strombus (Conomurex) luhuanus Linnaeus, 1758	I-2-c	19	シラナミガイ	Tridacna maxima (Roding, 1798)	I-2-a	16
スイジガイ	Lambis (Harpago) chiragra (Linnaeus, 1758)	I-2-c	20	シャゴウガイ	Hippopus hippopus (Linnaeus, 1758)	I-2-c	17
クモガイ	Lambis lambis (Linnaeus, 1758)	I-2-c	21	ヒレジャコ	Tridacna squamosa Lamarck, 1819	I-2-a	18
タカラガイ科	Cypraeidae			バカガイ科	Mastridae		
カモシダカラ	Cypraea (Erosaria) helvola helvola (Linnaeus, 1758)	I-2-b	22	リュウキュウバカガイ	Mastra maculata Gmelin, 1791	II-2-c	19
キイロダカラ	Cypraea (Erosaria) moneta Linnaeus, 1758	I-1-a	23	アリソガイ	Coelomatra antiquata (Spengler, 1802)	III-1-c	20
ハナヒダカラ	Cypraea (Erosaria) annulus Linnaeus, 1758	I-1-a	24	チドリマスオガイ科	Mesodesmatidae		
ハナマルユキ	Cypraea (Erosaria) caputserpentis caputserpentis Linnaeus, 1758	I-3-a	25	イソハマグリ	Atactodea striata (Gmelin, 1791)	I-1-c	21
ナツモドキ	Cypraea (Erosaria) erronea erronea Linnaeus, 1758	I-2-b	26	ナミノコマスオ	Davilia plana (Hanley, 1843)	I-1-c	22
コモンダカラ	Cypraea (Erosaria) erosa Linnaeus, 1758	I-2-b	27	ニッコウガイ科	Tellinidae		
ヒメシダカラ	Cypraea (Lyncina) lynx Linnaeus, 1758	I-2-b	28	リュウキュウシラトリ	Quidnapagus palatum (Iredale, 1929)	II-1-c	23
タルダカラ	Cypraea (Talparia) talpa Linnaeus, 1758	I-2-a	29	サメザラ	Scutarcopogia scobinata (Linnaeus, 1758)	I-2-c	24
ホシダカラ	Cypraea (Cypraea) tigris Linnaeus, 1758	I-2-b	30	シオサザナミガイ科	Psammobidae		
ホシキヌタ	Cypraea (Lyncina) vitellus Linnaeus, 1758	I-2-a	31	リュウキュウマスオ	Asaphis violascens (Forskall, 1775)	II-1-c	25
ヤクシマダカラ	Cypraea (Mauritia) arabica asiatica (Schilder & Schilder, 1939)	I-2-a	32	マスオガイ	Psammotaea elongata (Lamarck, 1818)	II-1-c	26
タマガイ科	Naticidae			マルスダレガイ科	Veneridae		
ネズミガイ	Mammilla simiae (Deshayes, 1838)	I-2-c	33	スノメガイ	Periglypta puerpera (Linnaeus, 1771)	II-2-c	27
リスガイ	Mammilla melanostoma (Gmelin, 1791)	I-2-c	34	アラヌノメガイ	Periglypta reticulata (Linnaeus, 1758)	I-2-c	28
トミガイ	Polinices namilla (Linnaeus, 1758)	I-2-c	35	アラスジケンガイ	Gastrarium tumidum (Roding, 1798)	III-1-c	29
ヘソアキトミガイ	Polinices Flemingianus (Recluz, 1844)	I-2-c	36	ホリスジナミガイ	Gastrarium pectinatum (Linnaeus, 1758)	II-1-c	30
フジツガイ科	Ranellidae			オノノカガミガイ	Bonartemis histrio hisorio (Gmelin, 1971)	II-2-c	31
サマボラ	Cymatium (Monoplex) aquatile (Reeve, 1844)	I-4-a	37	ユウカグハマグリ	Pitar citrinus (Lamarck, 1818)	II-2-c	32
ミツカドボラ	Cymatium (Monoplex) nicobaricum (Roding, 1798)	I-2-a	38	リュウキュウアサリ	Tapes literatus (Linnaeus, 1758)	II-2-c	33
シオボラ	Cymatium (Gutturium) muricinum (Roding, 1798)	I-2-a	39	ヒメアサリ	Ruditapes variegatus (Sowerby, 1852)	II-1-c	34
ホラガイ	Charonia Tritonis (Linnaeus, 1758)	I-4-a	40	ハマグリ (類)	Meretrix lusoria (Roding, 1798)	II-2-c	35
オキニシ科	Bursidae						
オキニシ	Bursa bufonia dunkeri Kira, 1962	I-3-a	41				
アッキガイ科	Muricidae						
ムラサキイガイ	Drupa (Drupa) morum morum Roding, 1798	I-3-a	42				
ツノテツイシ	Mancinella hippocastanus. (Linnaeus, 1758)	I-1-a	43				
ツノレイ	Manathais tuberosa (Roding, 1789)	I-3-a	44				
テツイシイダマン		I-1-a	45				
ムシロガイ科	Nassariidae						
イボコフバイ	Nassarius coronatus (Bruguere, 1789)	II-1-c	46				
エソバイ科	Buccinidae						
シマベッコフバイ	Japeuthria C ingulata (Reeve, 1847)	II-1-b	47				
イトマキボラ科	Fasciolaridae						
イトマキボラ	Pleuroploca trapezium trapezium (Linnaeus, 1758)	I-2-a	48				
ツノマダガイモドキ	Latirus amplustris (Dillwyn, 1817)	I-2-b	49				
フデガイ科	Mitridae						
チョウセンフデ	Mitra mitra Linnaeus, 1758	I-2-c	50				
ツクシガイ科	Costellariidae						
ミノムシガイ	Vexillum balteolatum (Reeve, 1844)	II-2-c	51				
オニコブシガイ科	Turbinellidae						
オニコブシガイ	Vasum ceramicum (Linnaeus, 1758)	I-3-a	52				
オニコブシガイ	Vasum turbinellum (Linnaeus, 1758)	I-2-a	53				
イモガイ科	Conidae						
マダライモ	Conus (Virroconus) ebraeus Linnaeus, 1758	I-1-a	54				
ゴマツ	Conus (Punctuloc) pulicarius Hwass in Bruguere, 1792	I-2-c	55				
クロミナン	Conus (Conus) bandanus Hwass in Bruguere, 1792	I-2-c	56				
サヤガイモ	Conus (Virroconus) miliaris Hwass in Bruguere, 1792	I-1-a	57				
ヒラマキモ	Conus (Dauciconus) planorbis Born, 1778	I-2-c	58				
ヤナギシボリイモ	Conus (Rhizoconus) miles Linnaeus, 1758	I-3-a	59				
サラサミナン	Conus (Rhizoconus) capitaneus Linnaeus, 1758	I-4-c	60				
イタチイモ	Conus (Rhizoconus) mustelinus Hwass in Bruguere, 1792	I-4-c	61				
キヌカツイモ	Conus (Virgiconus) flavidus Lamarck, 1810	I-2-a	62				
イボシマイモガイ	Conus (Virgiconus) lividus Hwass in Bruguere, 1792	I-2-a	63				
アンボンクローズメ (類)	Conus (Lithoconus) liititeratus Linnaeus, 1758	I-2-c	64				
ニシキミナン	Conus (strioconus) striatus Linnaeus, 1758	I-2-c	65				
アジロイモ	Conus (Darioconus) pennaceus Born, 1778	II-2-c	66				
タケノコガイ科	Terebridae						
ベニタケ	Subula dimidiata (Linnaeus, 1758)	I-4-c	67				
ナツメガイ科	Bullidae						
ナツメガイ	Bulla ventricosa Gould, 1859	I-2-c	68				
アフリカマイマイ科	Family Achatina						
アフリカマイマイ	Achatina (Liaachntuna) fulica Bowdich, 1822	V	69				

生息場所類型	
I	外海・サンゴ礁域
II	内湾・転石域
III	河川干潟・マングローブ域
IV	淡水域
V	陸域
VI	その他
0	潮間帯上部 (Iではノッチ・IIではマングローブ)
1	潮間帯中・下部
2	亜潮間帯上縁部 (Iではイノー)
3	干瀬 (Iのみに適用)
4	礁斜面及びその下部
5	止水
6	流水
7	林内
8	林内・林縁部
9	林縁部
10	海浜部
11	打ち上げ物
12	化石
a	岩礁/岩盤
b	転石
c	礫/砂/泥部
d	植物上
e	淡水の流入する礁底

第35表 貝類遺体生息域場所別出土集計表

生息域場所	巻貝	二枚貝	合計	域別数	域別%
I-1-a	266	12	278		
I-1-b	1	0	1		
I-1-c	0	45	45		
I-2-a	36	64	100		
I-2-b	15	0	15		
I-2-c	287	10	297		
I-3-a	103	0	103		
I-4-a	25	0	25		
I-4-b	14	0	14		
I-4-c	3	0	3		
II-1-b	10	178	188	405	21%
II-1-c	33	0	33		
II-2-c	15	169	184		
III-1-c	670	3	673	673	34%
合計	1478	481	1959	1959	100%

生息域場所類型

- I 外海・サンゴ礁域
- II 内湾・転石域
- III 河川干潟・マングローブ域
- IV 淡水域
- V 陸域
- VI その他

- 0 潮間帯上部（Iではノッチ・IIではマングローブ）
- 1 潮間帯中・下部
- 2 亜潮間帯上縁部（Iではイノー）
- 3 干瀬（Iのみに適用）
- 4 礁斜面及びその下部
- 5 止水
- 6 流水
- 7 林内
- 8 林内・林縁部
- 9 林縁部
- 10 海浜部
- 11 打ち上げ物
- 12 化石

- a 岩礁/岩盤
- b 転石
- c 礫/砂/泥部
- d 植物上
- e 淡水の流入する礫底

第36表 貝類遺体生息域場所別出土集計表（詳細）

生息域別種出土状況（巻貝）				生息域別種出土状況（二枚貝）				
名前	生息域	種合計	合計	和名	生息域	種合計	合計	
リュウキュウウノアシ	I-1-a	1	266	ホソスジヒバリ	I-1-a	12	12	
クワノミカニモリ	I-1-a	16		ミドリアオリ	I-1-a	0		
キイロダカラ	I-1-a	46		イソハマグリ	I-1-c	45	45	
ハナヒラダカラ	I-1-a	168		ナミノコマスオ	I-1-c	0		
ツノテツレイシガイ	I-1-a	2		ベニエガイ	I-2-a	64	64	
マダライモ	I-1-a	19		メンガイ（類）	I-2-a	0		
サヤガタイモ	I-1-a	13		キクザルガイ（類）	I-2-a	0		
テツレイシガイダマシ	I-1-a	1		ヒメジャコ	I-2-a	0		
マルアマオブネ	I-1-b	1		1	シラナミ	I-2-a		0
オオウラウズガイ	I-2-a	1		ヒレジャコ	I-2-a	0		
ニシキウズガイ	I-2-a	6	36	ヒメツキガイ	I-2-c	10	10	
コシダカサザエ	I-2-a	3		シャッコウ	I-2-c	0		
コオニツノガイ	I-2-a	2		サメザラ	I-2-c	0		
タルダカラ	I-2-a	2		アラヌノメガイ	I-2-c	0		
ホシキヌタ	I-2-a	5		リュウキュウシラトリ	II-1-c	178		178
ヤクシマダカラ	I-2-a	0		リュウキュウマスオガイ	II-1-c	0		
ミツカドボラ	I-2-a	2		マスオガイ	II-1-c	0		
シオボラ	I-2-a	4		ホソスジイナミガイ	II-1-c	0		
イトマキボラ	I-2-a	3		ヒメアサリ	II-1-c	0		
コオニコブシガイ	I-2-a	3		クロミノエガイ	II-2-b	0	0	
キヌカツギイモ	I-2-a	1	15	リュウキュウサルボウ	II-2-c	169	169	
イボシマイモガイ	I-2-a	4		リュウキュウオウギ	II-2-c	0		
カモンダカラ	I-2-b	2		ウラツキガイ	II-2-c	0		
ナツメモドキ	I-2-b	5		リュウキュウザルガイ	II-2-c	0		
コモンダカラ	I-2-b	1		カワラガイ	II-2-c	0		
ヒメホシダカラ	I-2-b	1		ヌノメガイ	II-2-c	0		
ホシダカラ	I-2-b	4		オイノカガミガイ	II-2-c	0		
ツノマタガイモドキ	I-2-b	2		ユウカゲハマグリ	II-2-c	0		
ムカシタモトガイ	I-2-c	26		リュウキュウアサリ	II-2-c	0		
マガキガイ	I-2-c	190		ハマグリ	II-2-c	0		
スイジガイ	I-2-c	1	リュウキュウバカガイ	II-2-c	0	3		
クモガイ	I-2-c	43	アリソガイ	III-1-c	3			
ネズミガイ	I-2-c	1	アラスジケマンガイ	III-1-c	0			
リスガイ	I-2-c	1	287	合計		481		
トミガイ	I-2-c	1						
ヘソアキトミガイ	I-2-c	7						
チョウセンフデ	I-2-c	2						
ゴマフ任	I-2-c	6						
クロミナシ	I-2-c	2						
ヒラマキイモガイ	I-2-c	1						
アンボンクロザメ（類）	I-2-c	1						
ニシキミナシ	I-2-c	3						
ナツメガイ	I-2-c	2						
チョウセンサザエ	I-3-a	17	103					
ハナマルユキ	I-3-a	66						
オキニシ	I-3-a	7						
ムラサキレイシガイ	I-3-a	1						
ツノレイシ	I-3-a	3						
オニコブシガイ	I-3-a	3						
ヤナギンボリイモ	I-3-a	6						
ギンタカハマ	I-4-a	5		25				
サラサバテイラ	I-4-a	13						
ヤコウガイ	I-4-a	0						
サツマボラ	I-4-a	7						
ホラガイ	I-4-a	0						
オニツノガイ	I-4-b	14	14					
サラサミナシガイ	I-4-c	1	3					
イタチイモ	I-4-c	1						
ベニタケ	I-4-c	1						
カンギク	II-1-b	8	10					
シマベッコウバイ	II-1-b	2						
ネジマガキガイ	II-1-c	30	33					
イボヨウバイ	II-1-c	3						
フトスジムカシタモト	II-2-c	4						
オハダロガイ	II-2-c	3	15					
イボソデガイ	II-2-c	3						
ミノムシガイ	II-2-c	2						
アジロイモ	II-2-c	3						
コゲツノブエ	III-1-c	670		670				
アフリカマイマイ科	V	0	0					
合計			1478					

第37表 貝類遺体地区別出土集計表

和名	地区別出土状況 (巻貝)					合計	和名	地区別出土状況 (二枚貝)					合計
	A	B	C	D				A	B	C	D		
ユキノカサガイ科 (不明)					0	フネガイ科 (不明)	2	1	1		4		
リュウキュウウノアシ			1		1	ベニエガイ	0	10	1		11		
ニシキウズガイ科 (不明)		1			1	クロミノエガイ	0				0		
ニシキウズガイ	1	5			6	リュウキュウサルボウ	3	50	1		54		
ギンタカハマ	0	5			5	イガイ科 (不明)		1			1		
サラサバテイラ	0	10	3		13	ホソスジヒバリ		4	2		6		
サザエ科 (不明)					0	ウグイスガイ科 (不明)		1			1		
チョウセンサザエ	0	11	3		14	ミドリアオリ		5	1		6		
コシダカサザエ	0	3	0		3	イタヤガイ科 (不明)					0		
カンギク	1	7			8	リュウキュウオウギ					0		
オオウラウズガイ	1	0			1	ウミギクガイ科 (不明)		28	2	1	31		
ヤコウガイ	0	0			0	メンガイ (類)					0		
アマオブネガイ科 (不明)					0	カキ上科 (不明)					0		
マルアマオブネ	0	1			1	カキ類					0		
オニノツノガイ科 (不明)			1		1	ツキガイ科 (不明)					0		
クワノミカニモリ	0	14	2		16	ウラツキガイ	2		4		6		
コゲツノブエ	0	670			670	ヒメツキガイ		3			3		
オニノツノガイ	1	9	3	1	14	チヂミウメノハナガイ		4	2		6		
コオニノツノガイ		2			2	キクザルガイ科 (不明)					0		
ソデボラ科 (不明)		3	4		7	キクザルガイ (類)		5			5		
ネジマガキガイ	1	23	6		30	ザルガイ科 (不明)					0		
ムカシタモトガイ		20	6		26	リュウキュウザルガイ		6		1	7		
フトスジムカシタモト		2	2		4	カワラガイ		4	1	1	6		
オハグロガイ		3			3	シャコガイ科 (不明)				1	1		
イボソデガイ		3			3	ヒメジャコ	2	6	1		9		
マガキガイ	10	143	37		190	シラナミ	1	30	2		33		
スイジガイ		1			1	シャッコウ					0		
クモガイ	1	40	2		43	ヒレジャコ		5	1		6		
タカラガイ科 (不明)	2	2			4	バカガイ科 (不明)					0		
カモンダカラ			2		2	リュウキュウバカガイ		1			1		
キイロダカラ	2	16	28		46	アリソガイ	1				1		
ハナヒラダカラ	4	76	88		168	チドリマスオガイ科 (不明)					0		
ハナマルユキ	3	13	49	1	66	イソハマグリ	3	16	25		44		
ナツメモドキ	1	1	3		5	ナミノコマスオ		1			1		
カモンダカラ		1			1	ニッコウガイ科 (不明)		1			1		
ヒメホシダカラ			1		1	リュウキュウシラトリ	1	33	3		37		
タルダカラ		1	1		2	サメザラ		2			2		
ホシダカラ		2	2		4	シオサザナミガイ科 (不明)					0		
ホシキヌタ	1	4			5	リュウキュウマスオガイ	2	59			61		
ヤクシマダカラ					0	マスオガイ	9	49	3		61		
タマガイ科 (不明)		1			1	マルスダレガイ科 (不明)		1			1		
ネズミガイ			1		1	ヌノメガイ		77	2	6	85		
リスガイ		1			1	アラヌノメガイ		4	1		5		
トミガイ		1			1	アラスジケマンガイ	1	0	1		2		
ヘソアキトミガイ	2	3	2		7	ホソスジイナミガイ	1	8	6	1	16		
フジツガイ科 (不明)		2			2	オイノカガミガイ		4			4		
サツマボラ	2	5			7	ユウカゲハマグリ		1	1		2		
ミツカドボラ		2			2	リュウキュウアサリ	1				1		
シオボラ		4			4	ヒメアサリ		3			3		
ホラガイ					0	ハマグリ		3			3		
オキニシ科 (不明)		0			0	合計	29	426	61	11	527		
オキニシ		7			7								
アキガイ科 (不明)					0								
ムラサキレイシガイ		1			1								
ツノテツレイシガイ		1		1	2								
ツノレイ		1	2		3								
テツレイシガイダマシ		1			1								
ムシロガイ科 (不明)					0								
イボヨウバイ		2	1		3								
エソバイ科 (不明)		2			2								
シマベッコウバイ		2			2								
イトマキボラ科 (不明)					0								
イトマキボラ		1	2		3								
ツノマタガイモドキ		1	1		2								
フデガイ科 (不明)					0								
チョウセンフデ		2			2								
ツクシガイ科 (不明)					0								
ミノムシガイ		2			2								
オニコブシガイ科 (不明)					0								
オニコブシガイ		1	2		3								
コオニコブシガイ		3			3								
イモガイ科 (不明)	1	24	6		31								
マダライモ	1	18			19								
ゴマワ仔		1	5		6								
クロミナシ		2			2								
サヤガタイモ		11	2		13								
ヒラマキイモガイ		0	1		1								
ヤナギシボリイモ	1	5			6								
サラサミナシガイ		1			1								
イタチイモ		0	1		1								
キヌカツギイモ		1			1								
イボシマイモガイ		2	2		4								
アンボンクロザメ (類)		1			1								
ニシキミナシ		2	1		3								
アジロイモ			3		3								
タケノコガイ科 (不明)					0								
ベニタケ		0	1		1								
ナツメガイ科 (不明)					0								
ナツメガイ		1	1		2								
アフリカマイマイ科 (不明)		0			0								
アフリカマイマイ科 (不明)			1		1								
巻貝不明			-		0								
合計	36	1207	279	3	1525								

第IV章 理化学分析

第1節 平安山ヌ上集落・下勢頭集落跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

北谷町米軍嘉手納基地内に所在する平安山ヌ上集落・下勢頭集落跡の発掘調査で採取された土壌等の試料を用いて、遺跡の年代観、植物資源利用に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、微細物分析を実施する。

1. 試料

土壌試料は、カテナ31遺跡のA地区の各遺構・各層より47点(No. 1～47)、B地区より2点(No. 50, 51)、C地区より1点(No. 52)の、土壌50点である。各試料の詳細は、結果とともに表に示す。微細物分析は、主に炭化種実や炭化材などの微細な遺物の抽出同定を実施し、植物利用や周辺植生に関する資料を作成する。また、抽出した炭化材などを用いて、放射性炭素年代測定13点を実施する。

骨試料は、No. 1239、No. 0980、No. 0993の3点について、放射性炭素年代測定を実施する。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

分析試料はAMS法で実施する。炭化材、炭化種実は、試料表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理:AAA)。濃度はHCl、NaOH共に最大1mol/Lである。一方、試料が脆弱で1mol/Lでは試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度のNaOHの状態での処理を終え(AaAと記す)、更に試料の損耗が激しいと判断された場合は塩酸処理で止める(HClと記す)。

ごく微量(数mgを下回る)な試料は、年代測定に必要なグラファイト(1mg)が回収できない可能性があるため、AAA処理を行っていない。各試料の前処理に関しては、結果表に記す。

骨は前処理としてコラーゲン抽出(CoEx)を行う。表面を物理的に洗浄した試料を0.2Mの水酸化ナトリウムに浸して、着色が無くなるまで液を交換し、フミン酸等を除去する。中性になるまで超純水で洗浄したあと、凍結乾燥させ、粉碎する。試料を透析膜に入れて1Mの塩酸を加え、加熱することによって骨の主成分であるリン酸カルシウムを除去する。透析膜内の内容物を遠心分離機で濃集したあと、超純水で加熱・洗浄する。試料を濾過した後、濾液を凍結乾燥させコラーゲンを得る。

精製された試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver and Polach, 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用

いるソフトウェアは、OxCal4.4(Bronk, 2009)、較正曲線はIntCal20(Reimer et al., 2020)である。

(2) 微細物分析

試料400～1000gを常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(約20回)。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料(炭化物主体)と水に沈んだ試料(砂礫主体)を、粒径別に常温乾燥させる。

水洗・乾燥後の炭化物主体試料・砂礫主体試料を、大きな粒径から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実遺体の他、主に4mm以上の炭化材、動物遺存体、土器片などの遺物をピンセットで抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本や中山ほか(2010)、鈴木ほか(2018)等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。動物遺存体は個数、炭化材と土器片は重量と最大径、炭化材主体、砂礫主体、植物片は重量を一覧表に併記する。

分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れて保管する。他抽出物と残渣も容器に入れて保管する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を第38表、第76図に示す。試料の測定年代(補正年代)は、A地区 SP17b(No. 9)が 2405 ± 30 yrBP、A地区 SP18(No. 10)が 825 ± 25 yrBP、A地区 SP22 1層(No. 13)が 1155 ± 30 yrBP、A地区 SP24 1層(No. 15)が 1160 ± 25 yrBP、A地区 SK1 3層(No. 18)が 1175 ± 30 yrBP、A地区 SK2 5層(No. 25)が 1185 ± 25 yrBP、A地区 SK3 2層(No. 29)が 1620 ± 30 yrBP、A地区 SK4 4層(No. 34)が 1250 ± 30 yrBP、A地区 SX3 4層(No. 40)が 125 ± 30 yrBP、A地区 III1a層(No. 41)が 135 ± 15 yrBP、A地区 III3b層(No. 46)が 3290 ± 20 yrBP、B地区 SP86 1層(No. 50)が 120 ± 15 yrBP、B地区 SL1(No. 51)が 110 ± 15 yrBP、No. 1239が 120 ± 20 yrBP、No. 0980が 170 ± 20 yrBP、No. 0993が 195 ± 20 yrBPの値を示す。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。暦年較正年代は、測定誤差を 2σ として計算させた結果、A地区 SP17b(No. 9)がcalBC 733～399、A地区 SP18(No. 10)がcalAD 1175～1271、A地区 SP22 1層(No. 13)がcalAD 772～980、A地区 SP24 1層(No. 15)がcalAD 772～979、A地区 SK1 3層(No. 18)がcalAD 772～972、A地区 SK2 5層(No. 25)がcalAD 771～950、A地区 SK3 2層(No. 29)がcalAD 407～540、A地区 SK4 4層(No. 34)がcalAD 675～878、A地区 SX3 4層(No. 40)がcalAD 1675～1942、A地区 III1a層(No. 41)がcalAD 1678～1942、A地区 III3b層(No. 46)がcalBC 1613～1509、B地区 SP86 1層(No. 50)がcalAD 1687～1925、B地区 SL1(No. 51)がcalAD 1691～1920、No. 1239がcalAD 1685～1929、No. 0980がcalAD 1663～1950+、No. 0993がcalAD 1659～1950+である。

(2) 微細物分析

結果を第39表に示す。また、炭化種実各分類群の写真を図版29に示して同定根拠とする。

全50試料37.6kgを洗い出した結果、草本3分類群(コムギ、イネ科、クマツヅラ)6個の炭化種実が同定された。A地区 SK2 3層(No. 23)より確認された不明種実片1個は同定ができなかったが、ヤンバルアカメガシワの種子の可能性がある。その他、A地区 III2a層(No. 43)より不明炭化物4個、各試料より炭化材48.9g(最大2.6cm)、炭化材主体29.3g、巻貝類13個、椎骨1個、歯3個、ウニ類棘9個、岩片・土粒主体1.10kg、土器片7個48.5g(最大5.4cm)、非炭化植物片1.1g、草本4分類群(キンバイザサ?、ヒゴクサ節、カヤツリグサ科(ヒメクグ属?)、シマキケマン)4個の非炭化種実が確認された。なお、非炭化植物片・種実は後代の混入と判断されるため、考察より除外する。

栽培植物は、穀類のコムギがB地区19-H10 SP8b 1層(No. 50)より4個0.03g確認され、完形穎果は長さ4.57mm、幅4.13mm、厚さ2.57mmを測る。

第38表-1 放射性炭素年代測定結果(1)

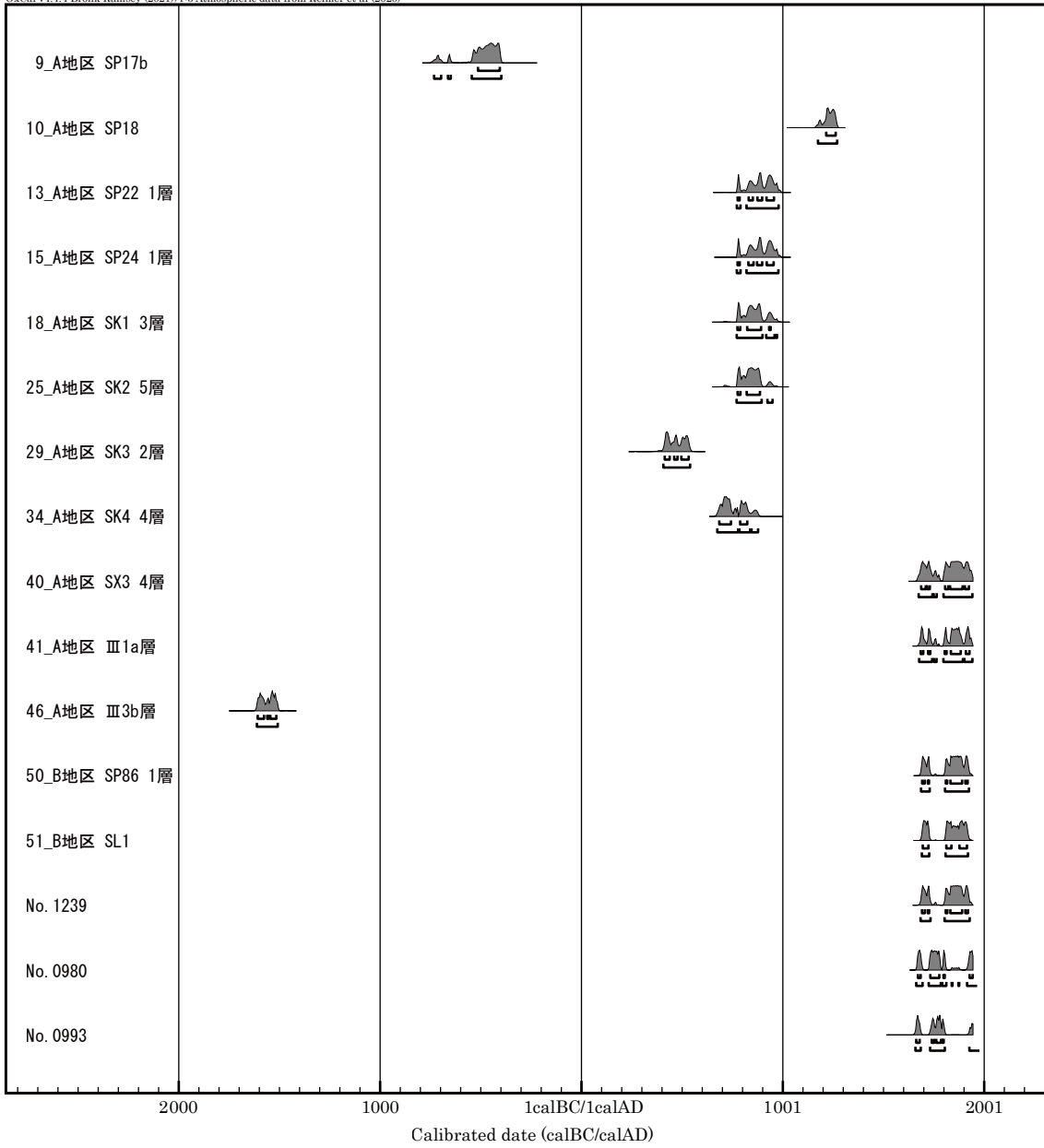
試料名	性状	分析方法	測定年代 yrBP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用	暦年較正年代				Code No.				
						年代値			確率	pal-	YU-			
						σ	cal BC	cal AD						
9_A地区 SP17b	炭化材(多数)	AaA	2405±30	-33.72±0.42	2403±29	σ	cal BC	515 - cal BC	406	2464 - 2355	calBP	68.3	13755	YU- 14738
						2σ	cal BC	733 - cal BC	698	2682 - 2647	calBP	6.3		
							cal BC	664 - cal BC	650	2613 - 2599	calBP	3.1		
							cal BC	546 - cal BC	399	2495 - 2348	calBP	86.1		
10_A地区 SP18	炭化材(多数)	AAA	825±25	-15.41±0.4	823±27	σ	cal AD	1216 - cal AD	1263	734 - 687	calBP	68.3	13756	YU- 14739
						2σ	cal AD	1175 - cal AD	1271	775 - 679	calBP	95.4		
13_A地区 SP22 1層	炭化材(多数)	AAA	1155±30	-35.13±0.45	1156±28	σ	cal AD	776 - cal AD	786	1174 - 1164	calBP	7.4	13757	YU- 14740
							cal AD	831 - cal AD	852	1119 - 1098	calBP	12.1		
							cal AD	875 - cal AD	898	1075 - 1052	calBP	19.7		
							cal AD	920 - cal AD	957	1030 - 993	calBP	29.0		
						2σ	cal AD	772 - cal AD	791	1178 - 1159	calBP	9.6		
							cal AD	820 - cal AD	980	1130 - 970	calBP	85.9		
15_A地区 SP24 1層	炭化材(多数)	AAA	1160±25	-33.42±0.41	1158±27	σ	cal AD	776 - cal AD	787	1174 - 1163	calBP	8.0	13758	YU- 14741
							cal AD	830 - cal AD	855	1120 - 1095	calBP	14.8		
							cal AD	873 - cal AD	898	1077 - 1052	calBP	20.2		
							cal AD	921 - cal AD	955	1029 - 995	calBP	25.3		
						2σ	cal AD	772 - cal AD	791	1178 - 1159	calBP	10.2		
							cal AD	820 - cal AD	979	1130 - 971	calBP	85.2		
18_A地区 SK1 3層	炭化材(多数)	AAA	1175±30	-30.06±0.43	1174±28	σ	cal AD	775 - cal AD	789	1175 - 1161	calBP	11.2	13759	YU- 14742
							cal AD	824 - cal AD	893	1126 - 1057	calBP	53.2		
							cal AD	933 - cal AD	940	1017 - 1010	calBP	3.8		
						2σ	cal AD	772 - cal AD	900	1178 - 1050	calBP	80.0		
							cal AD	918 - cal AD	960	1032 - 990	calBP	14.8		
							cal AD	967 - cal AD	972	983 - 978	calBP	0.7		
25_A地区 SK2 5層	炭化材(多数)	AaA	1185±25	-30.56±0.35	1187±27	σ	cal AD	776 - cal AD	790	1174 - 1160	calBP	11.5	13760	YU- 14743
							cal AD	821 - cal AD	887	1129 - 1063	calBP	56.8		
						2σ	cal AD	771 - cal AD	896	1179 - 1054	calBP	90.1		
							cal AD	924 - cal AD	950	1026 - 1000	calBP	5.3		
29_A地区 SK3 2層	炭化材(多数)	AaA	1620±30	-31.2±0.47	1621±28	σ	cal AD	414 - cal AD	439	1536 - 1511	calBP	24.2	13761	YU- 14744
							cal AD	461 - cal AD	478	1489 - 1472	calBP	13.8		
							cal AD	497 - cal AD	533	1453 - 1417	calBP	30.3		
						2σ	cal AD	407 - cal AD	540	1543 - 1410	calBP	95.4		
34_A地区 SK4 4層	炭化材(多数)	AAA	1250±30	-33.15±0.34	1248±28	σ	cal AD	685 - cal AD	743	1265 - 1207	calBP	45.4	13762	YU- 14745
							cal AD	789 - cal AD	824	1161 - 1126	calBP	22.9		
						2σ	cal AD	675 - cal AD	779	1275 - 1171	calBP	59.1		
							cal AD	785 - cal AD	838	1165 - 1112	calBP	27.9		
40_A地区 SX3 4層	炭化材(多数)	無処理	125±30	-31.55±0.37	126±31	σ	cal AD	1688 - cal AD	1711	262 - 239	calBP	11.2	13763	YU- 14746
							cal AD	1718 - cal AD	1731	232 - 219	calBP	6.3		
							cal AD	1807 - cal AD	1823	143 - 127	calBP	7.6		
							cal AD	1831 - cal AD	1894	119 - 56	calBP	33.0		
							cal AD	1905 - cal AD	1925	45 - 25	calBP	10.2		
						2σ	cal AD	1675 - cal AD	1744	275 - 206	calBP	26.8		
41_A地区 III 1a層	炭化材(多数)	HCl	135±15	-28.69±0.24	136±16	σ	cal AD	1685 - cal AD	1698	265 - 252	calBP	8.9	13773	PDL- 45980
							cal AD	1722 - cal AD	1733	228 - 217	calBP	7.1		
							cal AD	1805 - cal AD	1814	145 - 136	calBP	5.9		
							cal AD	1835 - cal AD	1884	115 - 66	calBP	34.2		
							cal AD	1910 - cal AD	1928	40 - 22	calBP	12.2		
						2σ	cal AD	1678 - cal AD	1742	272 - 208	calBP	25.2		
46_A地区 III 3b層	炭化材(多数)	HCl	3290±20	-26.92±0.25	3291±19	σ	cal BC	1609 - cal BC	1577	3558 - 3526	calBP	30.4	13774	PDL- 45981
							cal BC	1561 - cal BC	1554	3510 - 3503	calBP	5.6		
							cal BC	1546 - cal BC	1516	3495 - 3465	calBP	32.3		
						2σ	cal BC	1613 - cal BC	1509	3562 - 3458	calBP	95.4		

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
- 2) yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) AAAは酸-アルカリ-酸処理、AaAはアルカリの濃度を薄くした処理、HClは塩酸処理、CoExはコラーゲン抽出処理を示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal4.4を使用。
- 6) 暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 7) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。

第38表-2 放射性炭素年代測定結果(2)

試料名	性状	分析方法	測定年代 yrBP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用	暦年較正年代			Code No.		
						年代値		確率	pal-	PDL-	
50_B地区 SP86 1層	炭化材(マツ)	AAA	120±15	-29.96±0.14	121±16	σ	cal AD 1693 - cal AD 1705	257 - 245			calBP 8.5
							cal AD 1721 - cal AD 1727	229 - 223	calBP 4.1		
							cal AD 1810 - cal AD 1817	140 - 133	calBP 4.5		
							cal AD 1833 - cal AD 1891	117 - 59	calBP 42.9		
							cal AD 1907 - cal AD 1919	43 - 31	calBP 8.3		
							cal AD 1687 - cal AD 1730	263 - 220	calBP 23.1		
							cal AD 1806 - cal AD 1925	144 - 25	calBP 72.4		
							cal AD 1696 - cal AD 1724	254 - 226	calBP 21.6		
							cal AD 1813 - cal AD 1838	137 - 112	calBP 19.0		
							cal AD 1878 - cal AD 1915	72 - 35	calBP 27.7		
51_B地区 SL1	炭化材(マツ)	AAA	110±15	-33.17±0.20	110±17	σ	cal AD 1691 - cal AD 1728	259 - 222	calBP 24.4	13776	45983
							cal AD 1809 - cal AD 1920	141 - 30	calBP 71.0		
							cal AD 1691 - cal AD 1728	259 - 222	calBP 24.4		
							cal AD 1809 - cal AD 1920	141 - 30	calBP 71.0		
No. 1239 獣骨 ヤギ 下顎骨(左) 出土地 (D地区 16-A4 シーリ)	獣骨 ブタ 上腕骨(右)	CoEX	120±20	-23.44±0.11	122±18	σ	cal AD 1692 - cal AD 1706	258 - 244	calBP 9.0	13836	46034
							cal AD 1720 - cal AD 1727	230 - 223	calBP 4.5		
							cal AD 1810 - cal AD 1818	140 - 132	calBP 4.9		
							cal AD 1833 - cal AD 1891	117 - 59	calBP 41.2		
							cal AD 1907 - cal AD 1920	43 - 30	calBP 8.7		
							cal AD 1685 - cal AD 1734	265 - 216	calBP 24.1		
							cal AD 1804 - cal AD 1929	146 - 21	calBP 71.3		
							cal AD 1672 - cal AD 1685	278 - 265	calBP 11.6		
							cal AD 1733 - cal AD 1778	217 - 172	calBP 38.4		
							cal AD 1799 - cal AD 1805	151 - 145	calBP 5.0		
No. 0980 獣骨 ブタ 上腕骨(右) 出土地 (B地区 19-I6 SK72 1層)	獣骨 ブタ 尺骨(右)	CoEX	170±20	-20.58±0.16	170±18	σ	cal AD 1928 - cal AD 1944	22 - 6	calBP 13.2	13837	46035
							cal AD 1663 - cal AD 1695	287 - 255	calBP 18.3		
							cal AD 1725 - cal AD 1785	225 - 165	calBP 44.7		
							cal AD 1792 - cal AD 1813	158 - 137	calBP 10.0		
							cal AD 1839 - cal AD 1843	111 - 107	calBP 0.4		
							cal AD 1873 - cal AD 1877	77 - 73	calBP 0.4		
							cal AD 1916 - cal AD 1950+	34 - -	calBP 21.6		
							cal AD 1663 - cal AD 1680	287 - 270	calBP 19.6		
							cal AD 1740 - cal AD 1753	210 - 197	calBP 13.5		
							cal AD 1763 - cal AD 1786	187 - 164	calBP 28.1		
No. 0993 獣骨 ブタ 尺骨(右) 出土地 (B地区 27-A7・A8 SK90 1層)	獣骨 ブタ 尺骨(右)	CoEX	195±20	-21.62±0.26	193±19	σ	cal AD 1793 - cal AD 1800	157 - 150	calBP 7.1	13838	46036
							cal AD 1659 - cal AD 1686	291 - 264	calBP 22.3		
							cal AD 1732 - cal AD 1805	218 - 145	calBP 59.7		
							cal AD 1927 - cal AD 1950+	23 - -	calBP 13.5		
							cal AD 1663 - cal AD 1680	287 - 270	calBP 19.6		
							cal AD 1740 - cal AD 1753	210 - 197	calBP 13.5		

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
- 2) yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) AAAは酸-アルカリ-酸処理、AaAはアルカリの濃度を薄くした処理、HClは塩酸処理、CoExはコラーゲン抽出処理を示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal4.4を使用。
- 6) 暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 7) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。



第76図 暦年較正結果

第39表-3 微細物分析結果(3)

分類群・部位・状態・粒径	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	50	51	52	備考
	カテナ31 A地区 SX3 1層	カテナ31 A地区 SX3 2層	カテナ31 A地区 SX3 3層	カテナ31 A地区 SX3 4層	カテナ31 A地区 III 1 a 層	カテナ31 A地区 III 1 b 層	カテナ31 A地区 III 2 a 層	カテナ31 A地区 III 2 b 層	カテナ31 A地区 III 3 a 層	カテナ31 A地区 III 3 b 層	カテナ31 A地区 III 3 c 層	カテナ31 B地区 SP8 b 1層	カテナ31 B地区 19-J10 SL1 炭化物層	カテナ31 C地区 21-C3 焼土面	
炭化種実															
コムギ															
穎果	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	(個), 0.01g, 長さ4.57, 幅4.13, 厚さ2.57mm
	完形未満	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	(個), 0.02g
イネ科	穎果	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	長さ1.26, 幅1.52, 厚さ0.44, 胚長0.56mm
クマツヅラ	果実	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	(個)
不明(ヤンバルアカメガシラ?)	種子?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(個)
不明炭化物	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(個)
炭化材	破片	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	(個)
		6.11	-	3.69	5.55	-	-	-	4.46	-	-	16.17	27.63	26.45	最大径(mm)
	>8mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.07	2.57	14.62	乾重(g)
	8-4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.06	10.01	4.26	乾重(g)
	4-2mm	0.02	-	0.01	0.01	-	-	-	0.00	-	-	0.25	13.40	2.93	乾重(g)
	2-1mm	0.01	0.02	-	0.00	0.02	0.03	-	-	-	-	0.26	12.87	4.40	乾重(g)
	1-0.5mm	-	0.00	-	-	0.01	0.03	-	0.00	-	-	0.12	7.07	2.38	乾重(g)
巻貝類	殻	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	5	(個)
動物遺存体	椎骨	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	(個)
	歯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	(個)
	棘	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	8	(個)
岩石・土粒主体															
	>8mm	-	-	-	-	-	-	-	-	8.12	7.58	-	4.29	60.37	乾重(g)
	8-4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	12.04	11.84	-	9.46	50.91	乾重(g)
	4-2mm	7.68	8.04	2.26	6.14	6.54	10.36	15.07	9.61	11.04	11.84	11.04	6.11	51.61	乾重(g)
	2-1mm	1.87	6.18	1.45	3.16	2.24	6.15	4.54	4.63	6.64	8.93	9.04	6.55	49.56	乾重(g)
	1-0.5mm	2.11	2.19	0.46	4.73	2.46	4.78	3.86	1.65	2.17	0.39	7.88	6.23	19.65	乾重(g)
		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	43.52	乾重(g)
		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	(個)
		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	54.09	最大径(mm)
非炭化種実															
キンバイザサ?	種子	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	混入の可能性
ヒゴクサ節	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(個), 食痕
カヤツリグサ科(ヒメクグ属?)	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(個)
シマキケマン	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(個)
植物片		0.04	0.00	-	-	0.01	0.13	0.10	-	-	-	-	-	0.10	乾重(g), 混入の可能性
分析量		900	900	800	900	600	800	800	600	700	800	1000	1000	600	乾重(g)

栽培植物を除いた分類群は、イネ科がA地区 SK1 4層 (No. 19) より1個0.001g未満と、クマツヅラがA地区 III1 b層 (No. 42) より1個0.001g未満の計2個が確認された。イネ科の穎果は、長さ1.26mm、幅1.52mm、厚さ0.44mm、胚長0.56mmを測る。

4. 考察

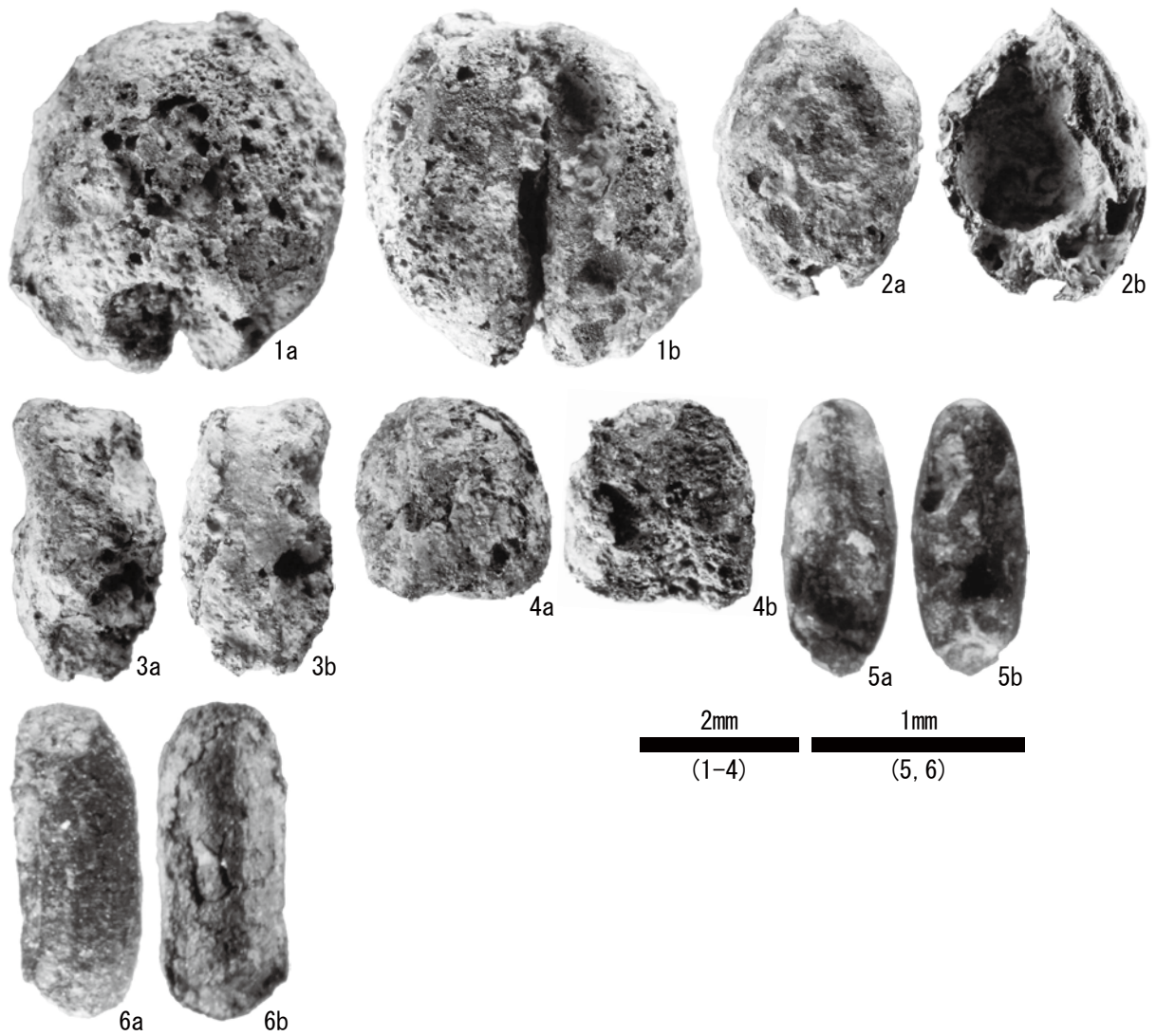
各遺構の年代観について見ると、放射性炭素年代測定を実施した結果からは、概ね2400年前以前 (No. 9、46)、1200年前前後 (No. 10 ~ 34)、120年前前後 (No. 40、41、50、51、No1239、No. 0980、No. 0993) に分類された。よって、これらが各遺構の堆積年代を示している可能性がある。ただし、2400年前以前については、古い炭化材が混入した可能性も考えられるため、追証することが望まれる。

一方、土壌試料50点を対象とした微細物分析・炭化種実同定の結果、炭化種実、炭化材、巻貝類、椎骨、歯、ウニ類棘、土器片が検出され、当時の生活残渣に由来する可能性がある。

炭化種実は、栽培植物のコムギが確認された。B地区 19-H10 SP8 b 1層より確認された穀類のコムギは、近辺で栽培されていたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食糧と示唆され、火を受け炭化したとみなされる。栽培植物を除いた分類群は、草本は、A地区 SK1 4層よりイネ科と、III1 b層よりクマツヅラが確認された。調査区周辺の明るく開けた、やや乾いた草地に生育していたと考えられ、火を受けたとみなされる。

引用文献

- Bronk, R. C., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑 (2010年改訂版). 東北大学出版会, 678p.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62, 1-33..
- Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of ¹⁴C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2018, 草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる734種 増補改訂一. ネイチャーウォッチングガイドブック, 誠文堂新光社, 303p.



1. コムギ 穎果 (50;カテナ31 B地区 19-H10 SP8 b 1層)
2. コムギ 穎果 (50;カテナ31 B地区 19-H10 SP8 b 1層)
3. コムギ 穎果 (50;カテナ31 B地区 19-H10 SP8 b 1層)
4. コムギ 穎果 (50;カテナ31 B地区 19-H10 SP8 b 1層)
5. イネ科 穎果 (19;カテナ31 A地区 SK1 4層)
6. クマツヅラ 果実 (42;カテナ31 A地区 III1 b層)

図版29 種実遺体

第2節 出土位牌の保存処理報告

なおラボ 安座間奈緒

1. はじめに

保存処理対象の遺物はB地区SK95及びSK98から出土した位牌一式で、素材は木質である。SK98出土の位牌は容器3箱に分割して保管され、SK95出土の位牌は1箱には土ごと密封された状態で搬入された。遺物はある程度湿気を含んでおり、出土後、木材・漆膜の反りや剥離が進行していた。位牌の木胎部分は腐食によりほとんどが失われ、表面の漆膜や木片のみが残存していた。土ごと密封された遺物は、土に張り付いた状態で検出された漆膜であった。

戒名などの文字が記されているが、土砂の付着や埋蔵中の破損などに解読が困難で、破片も散逸している。現状の把握と遺物情報の維持に努めるため、保存処理を実施した。

2. 観察

遺物はほとんど原形を維持しておらず、漆膜も破損が著しく断片化していた。特に位牌札は漆膜のみの残存であるため紙のように薄く、脆弱化している。亀裂が無数に見られるため接触には細心の注意が必要である。

漆膜は乾燥によって大きく反り返り、表面に記されている戒名などの文字も漆膜の変形に伴って金泥の剥落が見られた。

・位牌札は2枚重ねになっていると判断した。1枚目は表に艶無しの朱漆(大半は金泥で戒名を記載)、裏に茶色漆(一部に死去年記載)を塗布。2枚目は表に艶ありの朱漆、裏に黒漆が塗布されていた。2枚目裏面の黒漆には一部、朱漆で文字もしくは文様が描かれている。

(第40表に詳細記載)

・位牌の台座等のもと思われる顔料膜もあり、表面には金泥もしくは金箔で蓮華文が描かれていた。(No. 14, 16)

・鉄製及び青銅製の釘も数点確認でき、木質が付着していた。位牌の部材かは不明である。

3. 自然科学分析

遺物の素材及び顔料等を特定するため、樹種同定と塗膜薄片作製観察を行った。さらに、有機化合物としての特性を調査する手法である赤外分光分析(フーリエ変換赤外線吸収スペクトル法, FT-IR)を実施し、漆の可能性について検討する。

試料はNo. 07位牌札から採取された塗膜片1点である。樹種同定用の試料はNo.なしの木片を対象とした。

1) 樹種同定

剃刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の切片を作成する。ガムクロラールで封入、光学顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。材組織の特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

(結果)

木材は乾燥による変形等のため保存状態が悪く、3断面の状態が悪い。詳細な組織が観察できなかつたため、スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) —ヒノキ属 (*Chamaecyparis*) とする。軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急である。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は不明瞭、放射組織は単列で、5～10細胞高である。(図版30)

2) 塗膜剥片作製観察

漆の塗膜片を合成樹脂で包埋し、塗膜の断面が出るようにダイヤモンドカッターで切断し、切断面を研磨する。研磨面をスライドガラスに接着し、反対側も切断と研磨を行ってプレパラートとする。プレパラートを生物顕微鏡、実体顕微鏡、マイクروسコープ、偏光顕微鏡等で塗膜断面の構造・混和物等について観察する。

〈結果〉

観察の結果、木胎部の上に0.2～0.3mmで下地が作られている。シルト粒程度の鉱物が散在することから、砥粉を用いた下地と思われる。その上に赤漆が0.1～0.2mm程度で塗られている。漆は不透明な何らかの顔料(ベンガラ?)で着色され、赤褐色を呈す。その上に褐色の生漆?が0.05mm程度の厚さで塗られている。このような3層構造のため、結果的に中間層の赤漆の色が表面で見えている。(図版30)

3) 赤外分光分析

微量採取した試料をダイヤモンドエクスプレスにより加圧成型した後、顕微FT-IR装置(サーモエレクトロン(株)製Nicolet Avatar 370, Nicolet Centaurus)を利用し、測定を実施した。なお、赤外線吸収スペクトルの測定は、作成した試料を鏡下で観察しながら測定位置を絞り込み、アパーチャでマスキングした後、透過法で測定した。得られたスペクトルはベースライン補正などのデータ処理を施した後、吸光度(ABS)で表示している。測定条件及び各種補正処理の詳細については、FT-IRスペクトルと共に図中に併記した。

〈結果〉

FT-IRスペクトルを第77図に示す。なお、図中には比較資料として漆の実測スペクトルを併記している。

塗膜片の赤外線吸収特性は、 3400cm^{-1} 付近の幅広い吸収帯のほか、 2930cm^{-1} , 2860cm^{-1} , 1710cm^{-1} , 1590cm^{-1} , 1460cm^{-1} , 1040cm^{-1} 付近の強い吸収帯や 1440cm^{-1} , 1370cm^{-1} , 1270cm^{-1} , 1210cm^{-1} , 1080cm^{-1} 付近の吸収帯によって特徴付けられる。一方、比較資料の漆の赤外線吸収特性は 3400cm^{-1} および 2930cm^{-1} , 2860cm^{-1} 付近の吸収に加えて、 2000cm^{-1} 以下における 1720cm^{-1} (カルボニル基), 1610cm^{-1} (糖タンパク), 1460cm^{-1} (活性メチレン基), 1280cm^{-1} (フェノール), 1080cm^{-1} (ゴム質)付近の吸収によって特徴付けられる。

塗膜片の赤外線吸収特性には、漆に見られる 3400cm^{-1} および 2930cm^{-1} , 2860cm^{-1} の吸収と 2000cm^{-1} 以下における 1720cm^{-1} (カルボニル基), 1610cm^{-1} (糖タンパク), 1460cm^{-1} (活性メチレン基), 1080cm^{-1} (ゴム質)の吸収が確認されるなど漆の特徴が看取される。塗膜片が漆である可能性が伺える一方、 1270cm^{-1} (フェノール)の吸収が弱いことに加えて、 1040cm^{-1} 付近には珪酸塩鉱物に伴うSi-O伸縮振動が見られるとともに、 1600cm^{-1} 付近および 1400cm^{-1} 付近の谷埋め状の吸収から炭化物の吸収特性を検出している可能性も伺えるなど、漆のスペクトルパターンとの一致性に乏しい。

塗膜片の吸収特性は、漆であることを否定するものではないが、漆であることを積極的に支持するまでには至らない。確証を得るためには、今後、熱分解ガスクロマトグラフィー質量分析(Py-GC/MS)によってウルシオール等に代表される漆成分の熱分解生成物を判断材料とし、検証する必要がある。(第77図)

4) 考察

木胎部は保存状態が悪く、スギもしくはヒノキ属のいずれかと思われるが、詳細は不明である。塗位牌は、ヒノキなどの針葉樹に漆を塗ったものが多いので、材質的には調和的である。これらの樹木は沖縄県内には生育しないので、搬入品の可能性が高い。漆は、砥粉による下地の上に赤漆が塗られ、最後に生漆で仕上げられている。このような構造は、量産品において一般的に用いられる漆塗りの技法である。

4. 保存処理工程

1) 処理前作業

処理前写真を撮影し、詳細な観察記録を実施した。

2) 洗浄作業

水洗作業を行なった。漆膜が薄く摩擦で破損するため、湿らせた漆膜表面の汚れは竹串や筆で分離し、綿布で吸わせて除去した。台座装飾の顔料膜（No.14, 16）は位牌札と同様に朱色が施されているが、水洗で色落ちが見られたため漆は使用されていないと考えられる。そのため水洗は最低限にとどめ、顔料の色調を維持することを優先した。

洗浄後、位牌札が反ることを防ぐため、蒸気をあてて柔軟な状態にし、漆膜の上にシリコンゴムを置いて乾燥させた。

3) 強化処理

脆弱化した遺物を強化し、形状を維持するためにトレハロース（株式会社林原製）による強化処理を行なった。

漆膜の裏面にトレハロース20%水溶液を塗布し、浸透させた後にドライヤーで加熱濃縮させた。直後に風乾により急冷し、寸法安定を図った。トレハロース塗布→加熱濃縮→風乾の手順は2回実施してトレハロースを定着させた。

4) 裏打ち・接合作業

漆膜は非常に薄く、強化処理を施しても接触の度に折損する。そのため裏打ち作業を行なった。2液混合型エポキシ樹脂（コニシ株式会社製）をエタノールで希釈し、遺物裏面に塗布して不織布を密着させた。可逆性の検証のため、加熱して漆膜から不織布を除去する作業も確認した。遺物に損傷なく取り外すことができたため、漆膜すべてに不織布の裏打ちを実施した。

接合作業も同様の手法で実施した。

5) 剥ぎ取り作業

土に密着した漆膜は、現状では土に接している面の観察ができないため剥ぎ取り作業を行なった。水で漆膜を湿らせ、メスや竹串で土より一度分離させた。湿らせた状態で典具帳紙に表面を密着させ、慎重に剥ぎ取った。裏面は朱色の顔料で文字か文様が描かれているがほとんどが剥落している。

剥ぎ取った漆膜は水洗し、でんぷん糊を使用して不織布の裏打ち作業を実施した。土ごと取り上げられた漆膜はその他のものより薄く、脆弱化している。そのためエポキシ樹脂では接着力が強く、取り外しが不可能と考えたため、でんぷん糊を使用した。

現状では土に密着していた面が表となって観察できる状態であり、検出された状態から反転している。

5. まとめ

処理後の遺物は写真撮影を行なって作業を終了した。接合できなかった漆膜の破片や木片についても強化処理までを終えている。漆膜は和紙を裏打ちしたことで取り扱いが容易になった。乾燥による変形や破片の散逸も防げると考える。

自然科学分析結果では、位牌の木胎はスギもしくはヒノキ属でいずれも針葉樹であることがわかった。位牌札の塗料は漆であると断言はできないが、技法は一般的な漆塗りの工程であるため、漆である可能性が高い。褐色の顔料や装飾文様の顔料は分析を実施していないため、不明である。

位牌の詳細について

接合作業の結果、戒名が確認できた位牌札は7枚、接合不可だが7枚のいずれかと同一個体と考えられる破片が1点、位牌中央の「歸元」記載の札が1枚である。記載の無い札もあったと推定されることから、この位牌は最小でも12枚（上6枚、下6枚）と中央1枚で構成されていたと考えられる。接合できなかった破片が複数あることから、12枚以上で総数は不明である。裏面に死去年が記載された札は1枚で「昭和十四年」銘が確認できる。その他の札の死去年は剥落した可能性もある。（詳細は第40表に記載）

蓮華文が描かれた塗膜片は台座のものと考えられる。背景の朱色は漆では無く、その他の顔料で塗布されている。蓮華文は墨、もしくは漆で描かれて金箔が張り付けられている。

木質が付着した鉄釘及び青銅製の釘は、位牌のものかは不明である。位牌を臨時で木箱等に納めたと仮定すると、別遺物のものという可能性もある。その他にも木片や金箔片が多数確認できる。

遺物の保管について

遺物の保管環境については、文字の剥落や漆膜の変形を防ぐために温湿度の変化が緩やかな場所が適切である。高湿度の場所では吸湿により遺物の劣化が進行する為、避ける必要がある。遺物は長年の埋蔵環境から露出され、急激な環境変化を経験している。そのため今後の環境次第ではカビの発生や保存処理で使用した薬剤の劣化、虫損などが想定される。必要以上に密閉することも避けた方が良い。保存処理を実施しても劣化を完全に抑制することはできないため、定期的な観察により遺物の状態を把握することが必要である。

参考・引用文献

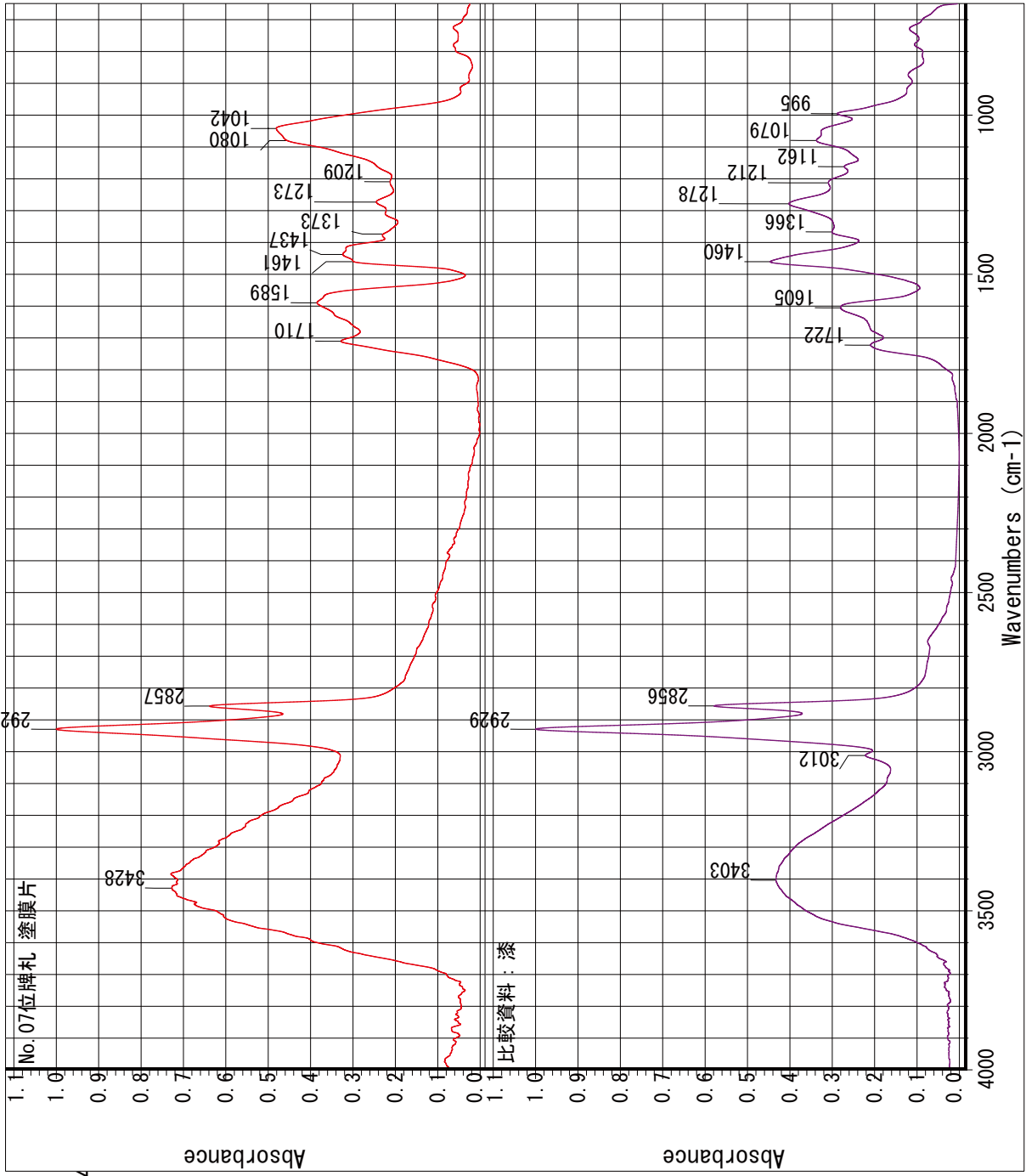
- 伊藤幸司, 2020 『トレハロースを用いた文化財保存の研究と実践』 三恵社
- 平敷令治, 1995 『沖縄の祖先祭祀』 第一書房
- 波平エリ子, 2010 『トートーメーの民俗学講座—沖縄の門中と位牌祭祀』 ボーダーインク
- 青山奈緒, 2018 「中城御殿跡出土位牌の保存処理」 『首里城研究20』 首里城研究会
- 林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.
- 農商務省山林局編, 1912, 木材ノ工藝的利用. 日本山林會, 1312p.
- Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- 山田富貴子, 1986, 赤外線吸収スペクトル法, 機器分析のてびき第1集. 化学同人, 1-18.

第40表 位牌札一覧

処理No.	1枚目			2枚目			備考
	表 (朱色/艶なし)	接合 No.	裏 (褐色)	表 (朱色/艶あり)	接合 No.	裏 (黒色)	
1	善道妙禿信女	2, 10		△		土ごと一括で取り上げ 対応ナンバーは不明	
2	夏山宗林信士	6, 19		○			
2	春●壽通信士	13					
2	・・士?						
3	瑞祥宗珍信士		昭和十四年己卯 旧八月二日宗珍死去				
4	冬月宗涼信士			○			
5	春山宗良信士						
6			○	○			
6				○	10		
6				△	18, 21		
7	○		○	○			
8	△		○	○	19		
9	○						
10	原室妙性・・		△				
11	○	18, 20					
12	歸元		—	—			中央札
15			○	○			
15				○			
17				○	21, 23		
18				△			
19	○	22	△				
20	△	22	△				
21				△			
22	△			△			
最小数	12		6	11			

※最小数に中央札 (No.12) は含まない

凡例	○・・・残存率1枚あり △・・・残存率 1 / 2 以下
----	---------------------------------



測定情報
 サンプルスキャン回数: 64
 バックグラウンドスキャン回数: 64
 分解能: 4.000
 サンプルゲイン: 8.0
 ミラー速度: 1.8988

光学系の構成
 検出器: MCT/A
 ビームスプリッタ: KBr
 光源: IR

備考
 ダイヤモンドエクスペレス成型
 顕微透過法
 可変アパーチャ使用
 ベースライン補正
 スムージング処理
 Y軸正規化

第77図 FT-IRスペクトル

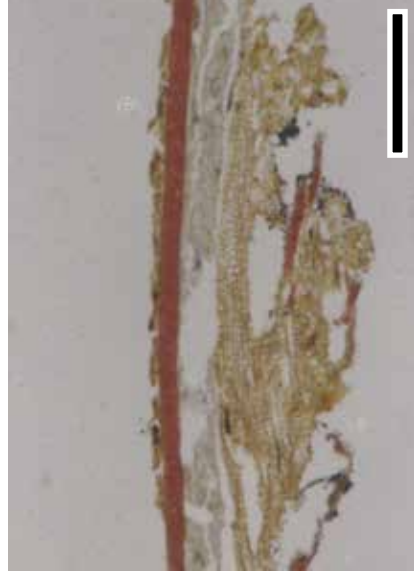


1. スギ-ヒノキ属

a:木口 b:柃目 c:板目
スケールは100 μ m



漆薄片(透過光)



漆薄片(落射光)

スケールは100 μ m

図30 木材・漆薄片



SK98 位牌出土状況



SK95 位牌出土状況

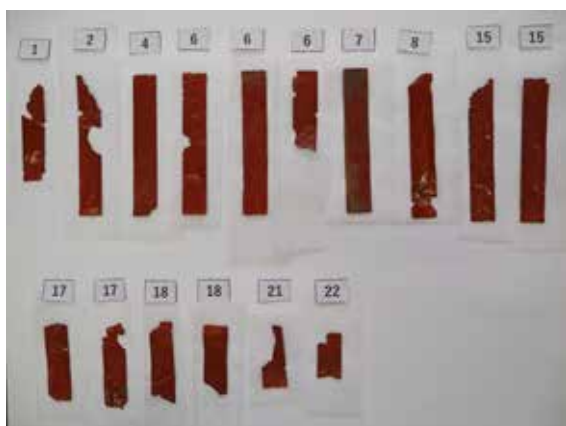
図版31 位牌出土状況



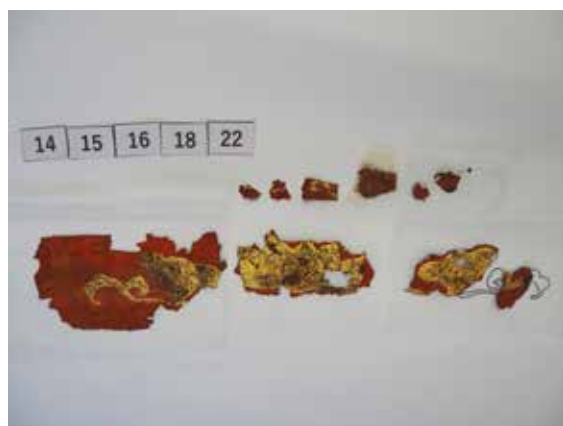
位牌札1 (表：文字あり)



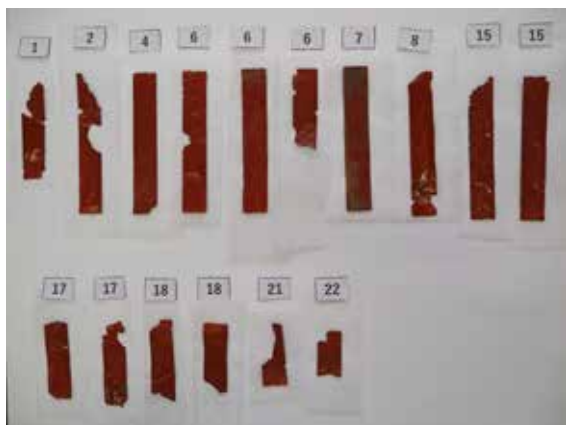
位牌札1 (裏)



位牌札2 (表)



台座装飾



位牌札1No.3 (表：瑞祥宗珍信士)



位牌札1No.3 (裏：昭和十四年巳卯旧八月二日宗珍死去)



位牌札1No.2 (表：夏山宗林信士)



位牌札1No.5 (表：春山宗良信士)

図版32 保存処理後の位牌



出土遺物保存処理前状況



出土遺物保存処理前状況



位牌札の重なり状況



観察記録作業



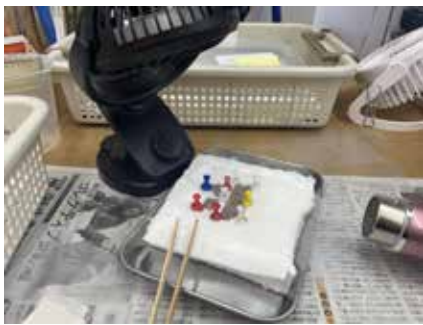
洗浄作業



2次洗浄作業



トレスハロース塗布作業



トレスハロース風乾作業



裏打ち作業



位牌札保存処理完了状況



装飾の保存処理前



装飾の接合作業

図版33 保存処理作業工程

第V章 総括

本調査を実施した在沖米軍嘉手納飛行場内の第1ゲート周辺と基地内道路沿いである4調査区は、A～C地区（平安山ヌ上集落跡）、D地区（下勢頭集落跡）である。前者の集落跡は1945年まで北谷村役場が所在し、字浜川に帰属した旧集落の平安山ヌ上屋取集落の中央付近、後者は分散した民家から構成される散村的集落の下勢頭屋取集落に属する屋敷跡である。

以下、平安山ヌ上集落跡、下勢頭集落跡の調査成果について整理し概観する。

層序 本遺跡の層序は、Ⅰ～Ⅲ層、地山に4大別される。第Ⅰ層は1945年の米軍上陸後から現在までである。第4表に示すように、占領後に行われた整地活動・整備による造成層の平坦地化の様相は、A地区ではⅠc・Ⅰd層、B・D地区ではⅠ2層、C地区は地山に類する国頭マージと思われる造成土となり、当時の表土を動かし均したもの、屋敷に伴う構築物を壊し均したもの、構築物を覆土したものがある。

また、現在のアスファルト敷設道路下位の路盤材には、第8図に見える基地整備による道路のものと思われるものも看取される。A地区に多く見られる埋設管には、陶製管が使用されているものがあり戦後の早い時期のものとも推察される。

第Ⅱ層は近代・近世に伴う土層で、米軍に占領される直前まで存続していた旧集落に伴う造成・堆積土層、及び旧集落と関連した畑等の耕作土層である。本層の時期の下限は、米軍上陸前後の砲爆撃による火災と考えられる焼土（B地区Ⅱ1a層、C地区SB1）が確認されたことから1945年のアジア・太平洋戦争中であることが判明し、上限は不明であるが、出土遺物でグスク時代まで遡るものがなかったことから近世までとした。

第Ⅲ層はA、B、C地区で確認された。谷地（迫地）地形であったところに堆積したと考えられ、土色、土質、混入物等の様相から水の影響を受けたと考えられ数枚に細分できる。細分された層の上面ではピットや土坑が検出された。遺物は、グスク時代及び貝塚時代の土器や石器が出土し、近世以降の遺物は出土していない。

平安山ヌ上集落（A・B・C地区）

各地区は図版34に示すようにA地区は、平安山ヌ上屋取集落西側の耕作域、B地区は、平安山ヌ上屋取集落の中央付近にあたり、C地区は平安山ヌ上屋取集落に所在していた北谷尋常小学校の敷地にあたる。

近代、近世の遺構

A地区 A地区で検出された溝状遺構（SD1、SD2、SD2-1）は畑に伴うものと考えられ、試掘調査のTP4で検出された溝は同遺構の一部であることが判明した。遺物は、戦前の時期が主体をなし、近世まで遡るものがなかったことから近代の時期と判断した。

B・C地区 平安山ヌ上屋取集落の中央付近であるB地区で確認された遺構は、近世から近代の時期で、下限が戦前（1945年）となるものが主体を占める。B調査区は区画1～8、道1に分けられると想定している（第24図参照）。主な遺構としてはピット、土坑、方形石組み遺構、石列遺構、井戸、溝跡、道跡、炉跡など集落に関連するもの、集落に附随する耕作地に関連する溝跡などがある。道跡は集落内を南北に通るケンドー（県道）と称された道と判断され集落内の十字路よりやや南側となる。図版34・36の比較からB地区で検出された道跡西側は新城、稲嶺、蕎麦屋運天小、酒屋〔酒屋新城（サカヤアラグシクとも称した）〕、御願根、東側はニーケー島袋、喜舎場小にあたりと考えられる。

C地区で確認された遺構は、近世から近代の時期で下限が戦前の遺構が主体を占める。前述の十字路北東側の一角に所在した北谷尋常小学校の敷地にあたり、同地区西側では大型の建物または施設の遺構群（礎石、集積遺構、石列遺構、石敷き遺構）、同遺構群東側ではピット、土坑、方形石組遺構、井戸、溝状遺構が確認された。

B地区：区画1～7の遺構 集落内を通る道とその沿道となるB地区東側（区画1～7）で検出される遺構面はⅡ1b層上面となっており、1945年の米軍による沖縄本島上陸前後の砲爆撃による火災の痕跡と判

断した焼土（Ⅱ1a層）が道跡の西側（SK63、SK114）で確認され、Ⅱ2層は区画1とした石列（SR7、SR9）に囲まれた範囲、区画2とした溝状遺構（SD23、SD26）に囲まれた範囲で看取される堆積状況から、屋敷を構築する際の盛土・造成の役割を担っていたと考えられる。

溝跡 第25図に示す溝跡は、区画1（SD26）、区画3（SD15、SD16）、区画4（SD22）、区画6（SD10、SD12、SD28）、道1（SD23、SD24、SD25、SD30、）である。溝跡は、道跡と判断したものも含めて軸が一定方向に延びる状況で検出していることから、集落の屋敷の区画などを示すものと考えられる。道1と区画した範囲内で溝幅の狭いSD30は轍の可能性もあるものと思われる。

道跡 道跡は、排水溝と考えられる溝跡（SD25、SD23）に挟まれた空間である。道1と示した区画1・2と区画3・4・5（第24・40図参照）の間で検出され、その最大幅は約5mとなるが、後述する近代の時期に作り変えられたと考えられる石列（SR8）と溝跡（SD23）で見る道幅は約5.7mとなる。

道の縁に設けられていたと考えられる溝には、新旧関係が見られ、西側の溝（SD25）が埋まった後に石列（SR8）が配置されており、道路面にはイシグー（細かい石灰岩粒）が敷かれ固く締まっていた。同溝跡では、近代遺物がメインに出土していたが、それとともに近世に位置づけられる沖縄産灰釉陶器灰釉碗も一定量出土した。東側の溝跡（SD23）からは近代の遺物とともに現代の遺物が出土した。このことから道は近世から使用され、近代の時期に一度作り変えられ米軍に占領される直前まで使用されていたと考えられる。

第8図①、②や各種資料等の検討から、この道跡は、ケンドー（県道）と称された1907（明治40）年に街道の改修工事が北谷間切北部^{（註13）}まで完成した道と判断した。この改修工事は、「北谷間切」が「北谷村」に改称されることとなった沖縄県及び島嶼町村制〔1908（明治41）年〕により、国の負担から県が直接道路改修を行うようになって整備が進んでおり、1915（大正4）年に那覇から今帰仁までのルートが開通し、1920（大正9）年に指定県道となっている。別名「国頭街道」とも称される。

首里王府と間切りを繋ぐ近世の宿道のルートは、『沖縄県歴史の道調査報告書一 国頭・中頭方西海道』^{（註2）}において、本町内では現在の国道58号と同じように海沿いを北上するルートが「国体道路入口」あたりから内陸側にルートを変え、嘉手納飛行場内道路の方向へ変わる想定が示されている。今回の調査では、近世の宿道の痕跡は確認されていない。

建物跡 区画7（第34図参照）で屋敷跡に関連する柱穴・ピットなどを元に建物プランを想定した建物1は、検出時に短い溝跡が方形の区画を示すように確認されているが、複数の柱穴が重複しているものであったことから掘立柱建物跡を想定し、建物プランで示す3つの空間は、連続した建物や立て替えの可能性もあるが沖縄の伝統的な母屋と見る1つの建物と想定した。図版34・36の比較から「御願根（ウガンニー）」と考えられる。

炉跡 炉跡（SL1）は、区画5で1基確認された。壁・床面ともに被熱による硬化が見られ、壁面に炭が付着し床面には炭層が堆積していた。同炉跡に見られる新旧関係は溝跡（SD28）の上位にあることから同溝跡より新しい。

方形石組遺構 方形石組遺構は、水を溜めて使用する機能が考えられるものが4基〔SK54（区画3）、SK56（区画4）、SK90・97（区画7）〕が検出された。いずれも地山を掘り込んで造られている。SK54は長軸方向の南側に段を有する。

石列遺構 石列遺構は、区画4で2基（SR5、SK57）確認された。石列遺構（SR5）は、本来は数段石が積まれていたものと考えられ、水場のエリアとして井戸（SE2）、方形石組遺構（SK56、SK57）の間を区画していたものと想定される。この水場エリアを区画する石列遺構（SR5、SK57）は溝跡（SD22東側）の上位に構築されていることから同溝跡埋没後に構築されている。同石列遺構より古い溝跡（SD22東側）埋没の様相は石灰岩が充填されている。

井戸 井戸（SE2）は、区画4で確認され方形石組遺構（SK56、SK57）、石列遺構（SR5、SK57）と水場を想定できる。本調査で確認された井戸2基（B地区1基、C地区1基）のうちの1基である。井戸の壁面は、石の面を丁寧に成形した石灰岩を布積みで積み上げている。段ごとに横目地が通っている。

『平安山ヌ上誌』によると、地域で最初の井戸は「屋取ガー」である。1910（明治43）年に掘削が始まり完成は翌年のようである。屋取の人々が労役を提供して掘削した井戸によって地下水が確認されたことで、地域では井戸が次々に掘削されたという。このことから井戸（SE2）は、明治43年以降に造られたものとする。地域には11基の井戸が掘られておりその深さは19.5m～22.5mであったという。図版34の比較と『平安山ヌ上誌』に記載されている「カーの分布と利用」から同井戸は「稲嶺ヌカー」と判断される。「カーの分布と利用」に示される井戸の深さは18メートル、10世帯〔稲嶺、伊佐川、新城、スバヤー運天小、酒屋新城、伊集小、金城、東新城、亀新城、喜舎場小（図版36参照）〕が利用していたという。

土坑 土坑は、①地下室或いは家財道具を隠したと考えられるもの、②屋敷に関連すると考えられるものに大別される。①の土坑（SK98）には坑壁面が迫り出し、天井の様な形態を有していたと見られるⅢ層の様相から（第35図参照）、地化室の可能性を示す痕跡と捉えられる。土坑（SK95、SK98）では第Ⅳ章2節で述べる位牌が出土している。

区画8の遺構 集落内を通る道沿いの屋敷群西側となる区画8では、屋敷跡、土坑、溝跡が確認された。遺構はⅡ3層上面で掘り込まれている。西側で確認された耕作土層（Ⅱ3層）の時期は、遺物の観察から近代と判断したが、Ⅱ1・2層より若干古い様相を示していたことから近世まで下る可能性があり、Ⅱ3層上面で検出された建物を構成するピット群やブタ埋葬遺構（SK72）、溝跡（SD6）等が検出され、土層と遺構面、同ピット群から出土した遺物の様相から、畑として利用していたが、後に屋敷として利用したことが看取される。

溝跡 溝跡（SD6）は、屋敷の区画としての機能が考えられる。溝幅が3.5mと他の屋敷の区画として想定した溝跡よりも幅広い。溝内は2から3条の溝に分けられることから屋敷の区画、且つA地区の溝状遺構（SD1、SD2-1、SD2-2）と同様な耕作に伴う溝跡も兼ねていると判断した。

建物跡 建物2（区画8：第37・38図参照）である。建物2は、柱穴の並びはやや不揃いで、4辺の長さに差異もあるが2.6mから3mの正方形に近いプランを想定した。

土坑（SK72）：ブタ埋葬遺構 土坑（SK72）で出土したブタは、0.5～1歳前後の1個体分が解剖学的位置関係を保って検出されており、第Ⅲ章5節で述べたように、切痕が認められないことから解体されずに土坑内に埋められた状態であることが追認された。第Ⅳ章Ⅰ節（第38表）に示す同ブタの上腕骨（資料No. 0980）による放射性炭素年代測定結果は、幅広い数値を示している。平安山ヌ上屋取集落の形成について『平安山ヌ上誌』では、最初に勢理客姓（1740年と想定）、次に新城姓（1765年を想定）、禰覇姓（1823年を想定）と考えられている。同表1で示す 2σ calAD1725–calAD1785（暦年較正年代で示す確率44.7）の結果は、屋取集落の形成時期を示す可能性を有するものの1つとして見ることもできると考える。

C地区の遺構 同地区では第1遺構面（Ⅱ1a層上面）、第2遺構面（Ⅱ1b層上面）、第3遺構面（Ⅱ2層上面）が近代の時期（第42図参照）、Ⅱ1層下に堆積している耕作土層（Ⅱ3層）で確認された遺構は耕作に伴うものと考えられる。Ⅱ3層での遺構面は、第4遺構面（Ⅱ3b層上面）、第5遺構面（Ⅱ3c層上面）（第47図参照）である。

同地区西側で確認された遺構群〔礎石（SS）、集積遺構（SQ）、石列遺構（SR）、石敷き遺構（SF）〕は学校校舎跡と想定した。同遺構群に見られるⅡ1a、Ⅱ1b層の堆積範囲は、部分的で転圧・締め固めされ周辺に類似する土壌が存在しないことから建設時の造成土と判断した。Ⅱ1a層の上面には米軍上陸前後の砲爆撃による火災と考えられる焼土（SB1）を確認していることから、同層の上限は1945（昭和20）年、下限は学校が建設された1902（明治35）年であると位置づけ、2面の遺構面があることから学校の存続期間内に建て替えられていることが判明した。Ⅱ2層（耕作土層）は2枚（a、b）に細分される。Ⅱ2a層は米軍による整地活動によって動かされた土層の可能性はあるが、遺物の出土量が少なく判別できなかったためⅡ層にまとめた。上面ではピットが10基確認されている。

同地区東側では、溝状遺構（SD18・19）を境に東側に堆積するⅡ3層（耕作土層）は4枚（a、b、c、d）に細分され、学校建設に伴う造成土層（Ⅱ1層）の下に堆積しており下限は1902年と判断され、上限は遺

物の観察から近代若しくは近世末と考えられる。Ⅱ3a層は白色砂の堆積が確認されたことから旧地表面となっていた可能性を有する。

建物跡 第1遺構面（Ⅱ1a層上面）で学校校舎跡と想定した遺構群のうち、建物3は6m×7.5mの総柱の礎石建物が想定され、礎石の間隔は2m間隔となる。第2遺構面（Ⅱ1b層上面）で検出された建物4は8m×5.8mの空間を3つ以上持つ間取りが想定される。

井戸 建物3・4の東側で井戸（SE1）が確認された。井戸の壁面は、石の面を丁寧に成形した石灰岩を相方積みで積み上げている。積み方は隙間なく目地が通らない丁寧な造りに加え、面石の角度を整える積み方が看取される。方形石組遺構が隣接する。

『平安山ヌ上誌』に記載されている「カーの分布と利用」から同井戸は「学校ヌカー」と判断される。「カーの分布と利用」に示される井戸の深さは21メートル、10世帯〔学校、校長住宅、名嘉原小（第36図参照）〕が利用していたという。

方形石組遺構 方形石組遺構（SK6、SK7）が井戸（SE1）の南隣で確認されていることから水場の機能が考えられ、溝状遺構（SD5）との関連が想定される。

溝状遺構、土坑 溝状遺構（SD5）は、大部分が破壊された状態で確認された。切石が配置されモルタル（又はセメント）が全面に塗布されている。SK6、SK7に排水する溝であることが想定される。試掘調査TP24で確認された遺構である。Ⅱ3c層では畑の区画と考えられる大型の溝状遺構が確認された。Ⅱ3b層上面で土坑3基（SQ25、SQ26、SQ27）を検出した。

下勢頭集落跡（D地区）

D地区は、分散した民家から構成される散村的集落の下勢頭屋取集落に属し、同集落の西端にあたる屋敷地である。当地の現況は森林地となっており、中央分部から北側及び西側に向けて急勾配の地形をなし、東西及び北側にかけては最大4mの標高差がある。周辺の地形は大きく改変されており、比較的平坦な南側は、基地内道路に面し、北側と東側、南側の大部分は戦後の基地建設・整備に伴う大規模な工事によって削平されており近代以前の堆積は残っておらず地山であった。

層序は、集落に伴う造成土層（Ⅱ1・2層）、耕作土層（Ⅱ3層）が確認され、Ⅱ1層は森林周辺で確認できた層、Ⅱ2層は森林内で確認されa・b層に細分でき、盛土の役割も担っている。Ⅱ1a層上面は遺構面となっている。Ⅱ2層（a～d）の堆積状況から、緩やかな斜面地であった当地を盛土によって平坦にし、屋敷を構築したことが看取される。同層上面は、屋敷に伴う遺構面となる。遺物の観察から近代と判断した。

D地区の遺構

当地区で確認された遺構は、近世から近代の時期で下限が戦前の遺構が主体を占める。森林として残っていた標高の高い平坦な中央部には、フル、シーリが破壊されずに良好な状態で残っており、埋め甕、ピット、土坑、焼土面、溝状遺構などが確認された。同地区西側から南側にかけて検出された溝状遺構（SD7、33、41など）や土坑（SK15）は耕作土層（Ⅱ3層）で検出した溝状遺構（SD7、33、41など）や土坑（SK15）は遺構の向きが屋敷跡に伴う遺構と合わないことから、近世或いは近代でも古い時期と考えた。第35・36図の比較から「金源河小（カニージンカグラー）」の屋敷と判断され、1945年8月の基地整備状況から屋敷北西側が残存している様子は現況と調和的である。

フル（ウワーフル） 第Ⅲ章3節で、所属時期を「近代から米軍占領直前までの時期と捉えておきたい。」としたフル2基とシーリは連結している。フル1の東隣に連結して造られているフル2は、フル1の左（東）壁が仕切りとなるように連結して造られており、フル1よりも石材の成形が粗いことから、フル1よりも後に造り加えられた可能性が考えられる。

シーリ 同遺構は、シーリ1の西隣に連結して造られている。地山を掘込み、壁面はやや雑に面取りした石灰岩を野面積みで積みあげている。壁面、床面にはモルタル（又はセメント）を塗布する。長軸の南側に段を有する。

フルに連結して構築されている同遺構も近代から米軍占領直前までの時期と捉えておきたい。

焼土面、ピット 焼土面 (SB3)、ピット (SP51、SP52) がフルの東側で確認された。焼土面 (SB3) は浅く掘り込んだ土坑状となっており、浅く掘り込まれた底面で2基のピット (SP51、SP52) が確認された。焼土面 (SB3) の北側に見られる土坑状に配置されている様相から、台所の竈の機能が想定できる。フル、シーリと同遺構面の検出であることから近代から米軍占領直前までの時期と考えられる。

埋め甕 埋め甕は、台所の竈の機能が想定される焼土面 (SB3) の西隣に地面を浅く掘り込んだ窪みに沖縄産無釉陶器甕が埋土で固定されていた。

溝状遺構 調査区西側のⅡ1層上面で検出した溝状遺構 (SD8、SD32、SD34) は、周辺の地形に沿って傾斜しながら南東方向から北西方向へと続いていることが確認され、同遺構東側に展開する屋敷地に沿って延びていることから屋敷の区画の機能が想定できる。時期は、屋敷に伴う溝と想定できることから、近代から米軍占領直前までの時期と考えられる。溝状遺構 (SD7) はⅡ3層下位の地山上面で確認され溝状遺構 (SD33) と連続性があることから、1つの大型の溝の可能性も考えられる。溝内で、さらに2から3条の溝に分けられることからA地区の溝状遺構 (SD1、SD2、SD2-1) と同様な耕作に伴う遺構である判断した。時期はⅡ3層よりさらに下位で確認されていることから近世の時期が考えられる。

B・C・D地区の方形石組遺構について

方形石組遺構には、①水を溜めて使用する機能が考えられるもの、②水肥を生産する肥溜めである「シーリ」がある。①はB地区で4基 [SK54 (区画3)、SK56 (区画4)、SK90・97 (区画7)]、C地区で2基 (SK6・7)、②はD地区で検出された便所と豚の飼育機能を併せ持つ「フル(ウワーフル)」の排水溝と繋がるものである。

①・②ともに地山を掘り込んで造られており、坑の壁面の造り方を見ると、石組を施すもの、サンゴ砂利と石灰岩礫を混ぜ固めた後にモルタル (又はセメント) を塗布するものがある。石組を施すものには、モルタル (又はセメント) が塗布されているが、全面と隙間に施すものがある。石組に利用される石灰岩には切石、粗い面取を施すものなどがあり、石材の組み方を大別すると、積み上げるもの、大型で扁平な切石を立位に設置するものがある。床面は、礫敷、扁平な切石を床面に敷くもの、地床がある。

遺物 第Ⅲ章4節で述べたように総数20,037点の遺物が確認された。おおむね先史時代から近現代までの資料が見受けられ、主体となる時期は近代となっており近世から戦前 (1945年) まで存在した平安山又上屋取集落跡、下勢頭屋取集落跡であることを鑑みると出土様相は合致する。特に集落中央付近の沿道で屋敷が建ち並んでいたB地区で出土量が多い。出土品の種別は、沖縄産陶器、本土産磁器、銭貨、指輪、簪、煙管、硯、円盤状製品、歯ブラシ、ガラス板、基石、石製品 (石盤、砥石、石臼)、貝製品、瓦、鍛冶関連遺物、土器 (縄文後期～晩期、沖縄貝塚時代後期後半の2時期に収まる)、外国産陶磁器 (青磁、白磁、染付、色絵、瑠璃釉、無釉陶器)、石器 (石斧、磨石、敲石、石弾)、位牌などがあり自然遺物には脊椎動物遺体、貝類遺体が確認されている (第5表参照)。

沖縄産陶器には多様な種類が見られるが、集落内出土にそぐわない蔵骨器である厨子甕が出土している。

瓦質土器の馬蹄形焜炉は、喜友名貝塚タイプと称されるもので本町の平安山A遺跡や喜友名貝塚・喜友名グスク、湧田古窯群Ⅳで類似する資料が確認されており、在地 (湧田系) の可能性が高いものと考えられている。

本土産磁器の中で産地をおおよそ判断できるものとしては、砥部、瀬戸、美濃系、肥前系などが見られた。数的には、砥部、瀬戸美濃系が大部分を占める。

銭貨は寛永通宝 (古寛永、新寛永)、背面にモンゴル文字 (戸部寶泉局) がみられる清朝の成豊通宝、中国銭と考えられる不明銭、日本近代銭、和銭の無文銭、1904年発行の銅貨であるフィリピン近代銭が得られた。

陶磁器や瓦を素材に、円形に打割成形した円盤状製品には沖縄産施釉陶器、本土産瀬戸・美濃、本土産近代磁器、明朝系赤瓦、近世ヤマト平瓦が利用されている。

ガラス製品には、化粧品の瓶、薬瓶、飲料用瓶、調味料瓶、インク瓶、ランプシェードやランプの火舎など多種多様な製品が出土した。遺構内出土のガラス製一升瓶は、陽刻された文字から「野田醤油株式会社」の製品であることが判明した。

貝製品には法螺貝の法具やマガキガイ製の独楽などの民俗事例のある近現代の製品が目につくが、二枚

貝や巻貝に粗孔を穿った有孔製品も出土している。

自然遺物

貝類遺体 貝類の総算出个体数は2,052個であった。最も個体数が多かったのはコゲノツノブエ（類）、次いでマガキガイ、ハナビラアダカラ、ヌノメガイ、ハナマルユキとなっており、この5種で個体数の57%を占め、残り43%を104種の貝で占める。最も個体数が多かったのはコゲノツノブエ（類）670個中646個はB地区のSK94から一括で得られたものである。

脊椎動物遺体 自然遺物（脊椎動物遺体）の分析では、第IV章1節で述べるように、主に近代を中心とした時期の資料であることが窺われ、集落における生活の一端を反映していると考えられる。

脊椎動物遺体は、近代に属する資料に位置づけられ、平安山又上屋取集落・下勢頭屋取集落において、家畜、特にブタを主とする飼養を中心とする動物利用がなされていた様相などが看取される成果が得られている。

出土した脊椎動物遺体（動物骨）は、魚類（ハタ科、ベラ科）、鳥類（ニワトリ）、哺乳類（ネコ、イヌ、ウマ、イノシシ、ブタ、ウシ、ヤギ）で、大半がブタによって占められ、ウシやヤギなどの家畜、魚類や鳥類などがそれぞれ少数ずつ占める特徴は、本町内の平安山原B遺跡の出土パターン（II層）の類似傾向を示していることが示されている。

A地区出土の資料は、近代以降でブタの下顎骨・尺骨は家畜化の明瞭な形態を示している。B地区、II層及び遺構出土のものは、いずれも近代期以降に比定されると考えられる。C地区出土資料は、ほとんどはブタであるが、1点のみイノシシが出土。分析対象外とした資料中に鳥類がふくまれている。D地区では、シーリ遺構内及びその周辺、同遺構が検出されたグリッド及び隣接する16-A5グリッドから大半が出土している。動物骨の形態的な特徴についてはA～C地区出土との比較に差異は感じられていない。I層からの出土のものが最も多く、米軍基地造成層であることから近代から戦中までの様相を反映しているものと考えられる。

SK95及びSK98から出土した位牌 第IV章2節で述べるように、出土した位牌一式について保存処理・自然化学分析を行った結果は、樹種同定による位牌の木胎はスギもしくはヒノキ属でいずれも針葉樹であることが判明している。位牌札の塗料は漆であると断言はできないが、技法は一般的な漆塗の工程であるため漆である可能性が高い。褐色の顔料や台座装飾のものと考えられる顔料膜については不明である。

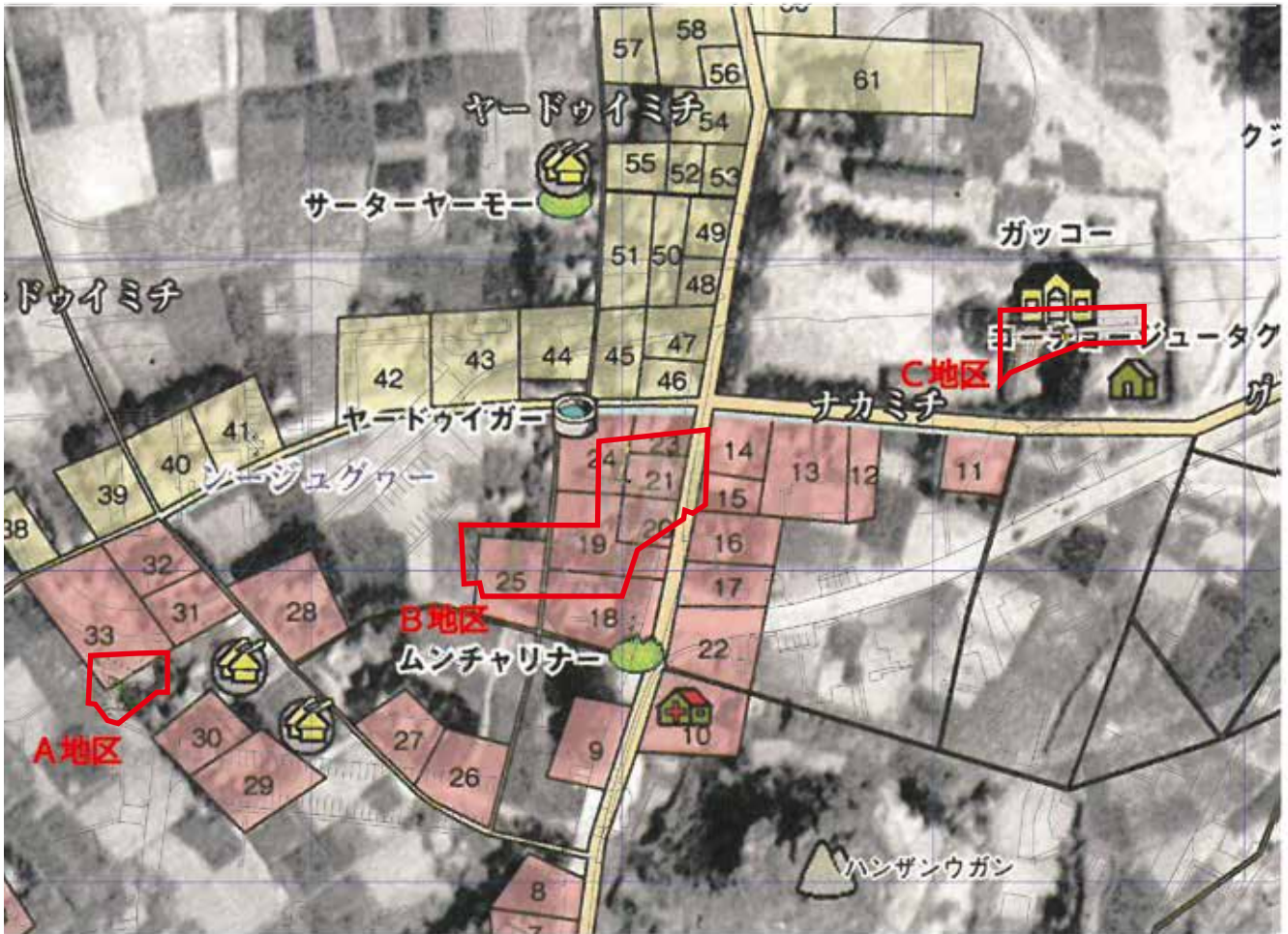
位牌は、最小でも12枚（上6枚、下6枚）と中央1枚（「歸元」記載）で構成されていたと考えられるが、総数は不明である。戒名が確認できた位牌札は7枚、接合可能だが7枚のいずれかと同一個体と考えられる破片が1点である。

蓮華文が描かれた塗膜は台座のものと考えられて、顔料膜に施されている背景の朱色は、水洗いで色落ちがみられたことから漆は使用されていないと考えられ、その他の顔料で塗布されている。描かれた蓮華文は墨、もしくは漆で描かれ金箔が張り付けられている。木質が付着した鉄釘及び青銅釘は、位牌のものかは不明である。

A・B・C地区で確認されたIII層

第III章第2節で述べるように、III層は貝塚時代からグスク時代相当の時期と考えられる。A地区では調査区南西側に確認されており、同地区では3枚（III1～3層）に大別され、III1層はa、bに、III3層はa、b、cに細分され、グスク土器、平底・くびれ平底土器と時代の違う土器が混在した状況で出土している。B地区では調査区中央の南側に確認され、貝塚時代前期・後期の土器、C地区では調査区西側で確認され、土器は小破片が数点出土した。

A地区のIII層に見られる堆積の様相や、違う時代の土器が混在した状況からIII層は周辺に存在するであろう時代の違う遺跡の土砂が流れ込んで堆積した土層と判断した。III2層、III3層の上面でピット、土坑が確認されているが違う時代の土器が混在している状況のため時期を決定することができなかったが、時代が新しいものであるグスク土器を根拠にグスク時代の遺構面と捉えた。第IV章第1節で述べる放射性炭年代測定の結果から2,405±30yrBPから825±25yrBPの年代観が得られている。



図版34 平安山又上屋取集落（1945年）と調査区（A・B・C地区）の比較 「北谷町の地名」より抜粋加筆



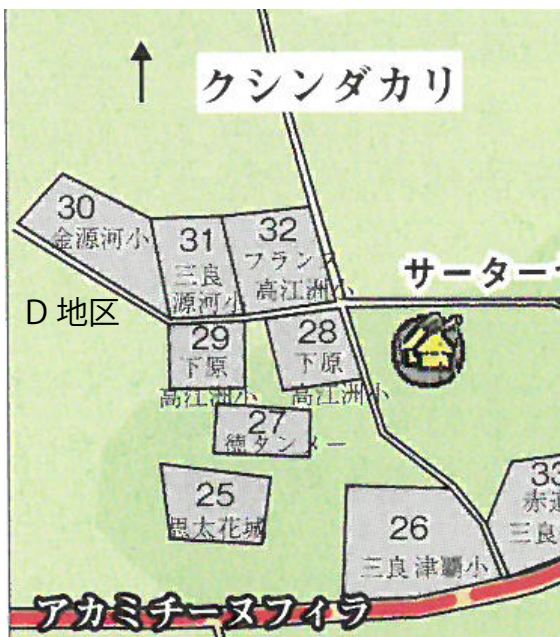
図版35 下勢頭屋取集落の西端から平安山又上屋取集落と調査区D地区の比較 「北谷町の地名」より抜粋加筆



「北谷町の地名」より抜粋



沖縄県公文書館所蔵資料より抜粋し加筆



「北谷町の地名」より抜粋



沖縄県公文書館所蔵資料より抜粋し加筆

図版36 屋敷（屋号）分布と1945年8月の基地整備状況
（写真と調査区の位置関係は誤差がある。）

参考文献

- 註1：旧字上勢頭郷友会 1997『上勢頭誌 上巻 通史編（I）』
- 註2：北谷町平安山ヌ郷友会 2010『平安山ヌ上誌』
- 註3：註1に同じ
- 註4：沖縄県教育委員会 1985『沖縄県歴史の道調査報告書 -国頭・中頭方西海道（I）・弁ヶ嶽参詣道』
- 註5：波平エリ子 2010『トートーメーの民俗学講座 -沖縄の門中と位牌祭祀-』ボーダーインク
- 註6：石井龍太 2020『ものがたる近世琉球 -喫煙・園芸・豚飼育の考古学-』吉川弘文館
- 註7：萩原左人 2009「肉食の民俗誌」『日本の民俗』12 吉川弘文館
- 註8：沖縄県教育委員会 1999『喜友名貝塚・喜友名グスク -宜野湾北中城線（伊佐～普天間道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書（I）-』沖縄県文化財調査報告書第134集
- 註9：沖縄県教育委員会 1999『湧田古窯跡（IV） -県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査-』沖縄県文化財調査報告書第136集
- 註10：北谷町教育委員会 2016『平安山A遺跡 -桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成19・21・22・23年度-』北谷町文化財調査報告書第38集
- 註11：上原静 2004「考古学から見た沖縄諸島の遊戯史」『グスク文化を考える -世界遺産国際シンポジウム〈東アジアの城郭遺跡を比較して〉の記録-』沖縄県今帰仁村教育委員会編
- 註12：黒住耐二 2008「伊礼原D遺跡から出土した貝類遺体」『伊礼原D遺跡』北谷町文化財調査報告書第37集
- 註13：北谷町教育委員会 2005『北谷町史 第一巻 附録』

報告書抄録

ふりがな	はんじゃぬういーしゅうらくあと・しちやしーどうしゅうらくあと							
書名	平安山ヌ上集落跡・下勢頭集落跡							
副書名	嘉手納(31)・(2)・(3) 保安施設文化財発掘調査							
巻次	-							
シリーズ名	北谷町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第47集							
編集者名	山城安生・天久朝海・比嘉優子・比嘉尚樹・宮里牧・安座間奈緒・菅原広史・パリノサーヴェイ(株)							
編集機関	沖縄県北谷町教育委員会							
所在地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3159							
発行年月日	2022年(令和4年)3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ' / "	° / ' / "			
はんじゃぬういー 平安山ヌ上 しゅうらくあと 集落跡	沖縄県 北谷町 字浜川 小字平安山上原	473260	56	26° 19' 53"	127° 45' 16"	20190427 ～ 20200331	4,477	施設整備に伴う記録 保存調査
しちやしーどうしゅうらくあと 下勢頭集落跡	沖縄県 北谷町 字下勢頭 小字田名嘉地原	473260	57	26° 19' 58"	127° 45' 31"			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平安山ヌ上 集落跡	集落跡	グスク時代 近世 近代		ピット、土坑、溝 状遺構、石組遺構、 屋敷跡、井戸、道 跡、その他遺構		土器、沖縄産陶器、本土産 陶磁器、外国産陶磁器、銭貨、 簪、指輪・指貫、煙管、硯、 円盤状製品、基石、歯ブラシ、 ガラス製品、貝製品、石製品、 瓦、鍛冶関連遺物、位牌な ど		
下勢頭集落跡	集落跡	近代		土坑、溝状遺構、 石組遺構、家畜小 屋、屋敷跡、その 他遺構				
要約	<p>本報告は、嘉手納飛行場内における保安施設整備計画に伴って行われた発掘調査をまとめたものである。平安山ヌ上集落跡では主に戦前の屋敷跡や学校跡、道跡などが検出された。その中には、井戸や地下室と思われる特異な遺構とともに位牌などの通常残らないような遺物が出土した。また、グスク時代以前の土器や石器が出土する遺物包含層が確認され、それとともにピット、土坑などの遺構が検出された。下勢頭集落跡では、戦前の屋敷跡となっており、沖縄県特有の便所と豚小屋が一体となったフル(ウワーフル)が良好な状態で残っていた。今回の調査により、米軍接收によって姿を消した平安山ヌ上集落及び下勢頭集落内の屋敷の配置や道跡など集落の様相が垣間見え、これまでの民俗調査や地籍図、写真記録等と調査結果が符合することが判明した。本遺跡のみならず、沖縄県の近世・近代の集落を検討するうえで、良好な成果といえる。</p>							

北谷町文化財調査報告書 第 47 集

はんじゃぬういー

しちやしーどぅ

平安山又上集落跡・下勢頭集落跡

— 嘉手納 (31) ・ (2) ・ (3) 保安施設文化財発掘調査 —

編 集 : 北 谷 町 教 育 委 員 会

発行年 : 2022 年 (令和 4 年) 年 3 月
〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江 226 番地
TEL 098 - 936 - 3159

印 刷 : 株式会社 東洋企画印刷
〒901-0306 沖縄県糸満市西崎町4-21-5
TEL 098 - 995 - 4444
